早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

ラオス競漕祭における「伝統」と「スポーツ」の関係：ヴィエンチャンの事例から

A Relationship between Tradition and Sports in Boat Racing Festival in Laos: The Case Study in Vientiane

２０１５年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

橋本　彩

HASHIMOTO, Sayaka

研究指導教員：　蔵持　不三也　教授

目　　次

目次 ---------- 1
凡例 ---------- 3
ラオス地図 ---------- 4

はじめに ---------- 5
0. 問題意識 ---------- 6

第１章　先行研究 ---------- 8
1-1. 競漕祭の先行研究 ---------- 9
1-2. ラオスに関する競漕祭の先行研究 ---------- 13
1-2-1. ラオスの競漕祭 ---------- 13
1-2-2. ヴィエンチャンの競漕祭---------- 15
1-3. 本稿の目的・視座 ---------- 20
1-4. 研究方法および本稿に使用する資史料 ---------- 21
1-5. 本稿の構成 ---------- 22

第２章　調査地ヴィエンチャンの概略 ---------- 24
2-1. 歴史的背景 ---------- 25
2-1-1. ラーンサーン王国 ---------- 25
2-1-2. フランス人の入植 ---------- 26
2-2. 地理的環境 ---------- 28
2-3. 文化的背景：12 の慣習「ヒート・シップソーン」 ---------- 29
2-4. 宗教 ---------- 30
2-4-1. 競漕祭をとりまく精霊祭祀：舟の精霊 ---------- 30

第３章　フランス植民地時代(1893 年から 1945 年) ---------- 32
3-1. ラオス・ナショナリズムの萌芽：ラオス刷新運動 ---------- 33
3-2. ヴィエンチャンにおけるラオス刷新運動 ---------- 34
3-2-1.《ラオ・ニャイ》新聞におけるヴィエンチャン競漕祭 ---------- 35
3-2-2. ラオス刷新運動期のスポーツ ---------- 38
3-2-3. ラオス刷新運動期における競漕祭とスポーツの関係 ---------- 41
3-3. 考察：ラオス刷新運動期の競漕祭における「伝統」と「スポーツ」 ---------- 43

第４章　ラオス王国独立後の競漕祭(1953 年から 1965 年) ---------- 46
4-1. アルシャンボーが記録した儀礼の分析（1953 年） ---------- 47
4-2. 儀礼における文言（守護霊の召喚）の分析 ---------- 57
4-3. 考察：ラオス王国独立後の競漕祭と「スポーツ」の関係性---------- 61

第５章　内戦下の競漕祭（1965 年から 1974 年） ---------- 62
5-1.《サート・ラオ》新聞における競漕祭 ---------- 64
5-2.「伝統」と「スポーツ」の接近 ---------- 70
5-3. 王族の参列による競漕祭の拡大 ---------- 72
5-4. 考察：「伝統スポーツ」という概念の登場 ---------- 75

第６章　ラオス人民民主共和国の成立からラオス観光年まで（1975 年から 1999 年）--- 78
6-1. 社会主義政権樹立直後の競漕祭をとりまく情勢 ---------- 80
6-2.《ヴィエンチャン・マイ》新聞から読み解く競漕祭 ---------- 81
6-2-1. 競漕祭：「団結力」を高めるための「水上の団体スポーツ」 ---------- 81
6-2-2. 国家スポーツ競技会の競漕種目 ---------- 86
6-2-3. ラオス―タイ友好競漕祭 ---------- 88
6-2-4. 競漕祭における「伝統」 ---------- 94
6-2-4-1. ティー・サーン・ナム・ノーン ---------- 100
6-2-5. 考察：社会主義政権樹立後の競漕祭における「伝統」と「スポーツ」 ---- 104

第７章　21 世紀のワット・チャン競漕祭：伝統論争とそのゆくえ ---------- 106
7-1. 2000 年のカテゴリー分化に関する伝統論争 ---------- 107
7-2. 競漕祭における舟の規定：舟に集約される「伝統」の形 ---------- 115
7-3. 伝統舟とフア・スード（スポーツ舟）の分布 ---------- 120
7-4. 競漕祭に付随する儀礼 ---------- 124
7-4-1. シーカイ村の儀礼 ---------- 125
7-4-2. シーターン・タイ村の儀礼 ---------- 126
7-4-3. 水を開く儀礼：プート・ナム(peut nam) ---------- 128
7-5. 考察：21 世紀の競漕祭における「伝統」と「スポーツ」 ---------- 129

おわりに ---------- 133
引用・参考文献 ---------- 140
巻末地図 ---------- 149
巻末資料 ---------- 152
謝辞 ---------- 184

凡 例

１．「ラオス Laos」はラオ語では「ラオ Lao」と発音されるが、一般名称として定着している国名および国民名は「ラオス」および「ラオス人」と表記する。ただし、言語名および民族名は「ラオ語」および「ラオ人」と表記するが、民族固有の文化という文脈においては「ラオ族」と表記する場合もある。

２．本稿におけるラオ語のカタカナ表記は以下の方針に依っている。

・ラオ語人名、地名は原則としてラオ語の発音に依拠する。ただし、すでに慣例となっている表記がある場合にはそれに従う。

・有気音と無気音について、カタカナ表記上の区別はしない。

・末子音としてのng音は「ン」と表記する。

・長母音は現地の発音に沿い、省略する場合がある。

３．初出に限り、ラオ語のカタカナ表記とともにローマ字表記を付す。

４．ラオスの行政区分は、クウェーン(khueang)を「県」、ムアン(muang)を「郡」、バーン(ban) を「村」と表記する。

５．現在のヴィエンチャン市は、ラオス人民民主共和国建国後の行政区分の中で 1989 年までヴィエンチャン県の一部であったが、1989 年以降はヴィエンチャン県から分離し、９つの郡を含むヴィエンチャン特別市になった。現在は「ヴィエンチャン市」と呼ぶことが一般的であるため、本稿では混乱を避け、現在のヴィエンチャン市に属する地域に関しては全て「ヴィエンチャン市」と表記する。

ラオス地図

CHINA
中華人民共和国
ボーンサリー県
ベトナム社会主義共和国
ミャンマー連邦共和国
ルアンナムター県
ボケオ県
ウドムサイ県
ルアンパバーン県
フアパーン県
ルアンパバーン
シェンクアン県
ラオス人民民主共和国
サヤブリー県
ヴィエンチャン県
パークサン
ボリカムサイ県
ヴィエンチャン
ノンカーイ
メコン河
カムアーン県
サワナケート県
サワンナケート
タイ王国
サラワン県
セコン県
ウボンラチャタニー
チャムパーサック
アッタプー県
チャムパーサック県
カンボジア王国
0
100
200
300 km

はじめに

０．問題意識

旧暦11月の満月を迎え、雨季が明ける出安居の時期、ラオス人民民主共和国（以下、ラオスと記す）では伝統的な年中行事として競漕祭がおこなわれる。この年中行事は、ラオスを統一したラーンサーン王国の都が、北部ルアンパバーンから現在の首都であるヴィエンチャンへ遷都した1560年より連綿と続けられてきたという言説があるほど、ラオ人の誇りある伝統行事として認識されている。この伝統行事であるヴィエンチャンの競漕祭に、1990年代後半から2000年にかけて「伝統」をめぐる論争が持ち上がった。競漕祭は、主に競漕祭前におこなわれる儀礼、そして満月を迎えた翌日におこなわれる競漕で構成されているが、「伝統」をめぐる論争は後者の競漕に「スポーツ」的要素が色濃く入ってきたため、「祭り」の伝統が損なわれていることに対する反発として持ち上がった。筆者が調査に入った2007年、伝統の保持を訴える参加者が競漕祭の「伝統」を阻害する要素について語るとき、多くの場合使われる言葉は「タイ」そして「スポーツ」という言葉であった。ラオスと隣国タイの関係については、ラオスの言語ナショナリズム研究を行なった矢野順子の研究に詳しい[矢野 2013]。1893年にラオスがフランスの植民地となった時代以降、「ラオス国民」という意識を醸成する過程においてラオ語の形成は重要な位置を占めており、ラオ語の形成は常にタイ語からの言語的独立を念頭にすすめられてきた歴史がある。競漕祭においても、「競漕」という表現のラオ語スワン・フア(suang heua)とタイ語のケーン・フア(kheng heua)の違いに執着をみせるなど、矢野が明らかにしたようなタイ語への対抗意識が見られる。また、「伝統」の対抗軸として語られる「タイ」という言葉には、ラオスの舟の形状に悪影響を及ぼした諸悪の根源といった意味合いが込められて語られる。しかしながら、ヴィエンチャンの競漕祭に参加する同じラオス国民、同じヴィエンチャン市民であっても、居住地域の立地的条件ならびに歴史背景により、国境線で分断された国としての「タイ」に対する心情、語りは一様ではなかった。

「タイ」と同様に、ラオスの伝統を阻害するものとして語られる「スポーツ」という言葉は、競漕祭のカテゴリー分けに深く関係している。現在、出安居翌日にヴィエンチャンでおこなわれる競漕祭の競漕は、男性による「フア・パペニー（heua paphenii:伝統舟)」、「フア・スード heua sud」、そして女性による「フア・メニン（heua mening:女性の舟）」の３つにカテゴリー分けされている。「フア・スード」の「スード」という用語はF１レースなどで使われる「フォーミュラ」という意味であるため、「フア・スード」はレースに特化した舟、すなわちスポーツ用に作られた舟と認識されており、カテゴリーの正式名称としては「フア・スード」であるものの、一般的には「スポーツ」を表すラオ語「キッラー(kila)」を舟に冠して、「フア・キッラー（heua kila:スポーツ舟）」という名称が用いられている。この「スポーツ舟」というカテゴリーは、従来「男性」と「女性」を分けるカテゴリーしか存在しなかったヴィエンチャン競漕祭において、2000年に初めて設けられたカテゴリーである。上述の通り、1990年代後半から2000年にかけて起こった伝統をめ

ぐる論争の帰結が男性カテゴリーの分化であり、カテゴリー名からも推測できる通り、「伝統」を阻害するものとして「伝統舟」から切り離されたカテゴリーが、「スポーツ」を冠する「スポーツ舟」であるため、競漕祭を担う村人たちが「伝統」を語る際、歓迎されないものとして語る代表的な用語が「スポーツ」なのである。

しかしながら、「伝統」を阻害するものとして語られる「タイ」や「スポーツ」がある一方、伝統論争における「伝統」は何によって担保されたのか、という疑問も同時にわいてくる。「伝統舟」カテゴリーの規定に記されることとなった舟の形状だけが伝統を担保するものであったのだろうか。伝統に関する議論において、「ヴィエンチャン競漕祭の伝統は何をもって伝統といえるのか」ということについて、舟の形状以外のことは多く語られなかった。それは、ラオ人の慣習として古来より伝わる「ヒート・コーン・パペニー(hiit khong paphenii:伝統的慣習)「ヒート・シップソーン (hiit sipsong:12の慣習)」の中に競漕祭が含まれており、特に「伝統」に疑問を差し挟む余地がないと考えるためであるかもしれない。また、競漕におけるレースの公平性に主眼が置かれた伝統論争は、あくまでも公平性の担保が目的であったため、「伝統」が舟の形状に集約され、「スポーツ舟」とカテゴリーを別にする結論が出た以上、さらに論争をこじれさせる必要がなかったとも言える。しかしながら、競漕祭は競漕だけに特化された祭りではない。競漕祭を構成するもう１つの要素、「儀礼」も「伝統」を担保する重要な位置を占めているといえる。1950年代にラオス競漕祭について詳細な研究を行なったシャルル・アルシャンボー［La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel 1972］は、競漕であるレースについてはほとんど言及せず、儀礼に特化した研究を行なっているほど、かつての競漕祭に儀礼は欠かせない要素であった。アルシャンボーの問題点は、儀礼研究に特化しすぎたために、競漕そのものに関わる漕ぎ手や舟に対する調査が欠落していた点にあり、当時の知識人にとって重要であった儀礼が、当時の舟の漕ぎ手たちにとっても重要であったのかについては不明である。現在、アルシャンボーが記録した儀礼はほぼ消失しているが、消失した儀礼に関して漕ぎ手たちが「伝統」を問わないのは何故なのだろうか。現在の舟の漕ぎ手たちが重要と考える儀礼と、かつての儀礼との間にはどのような断絶、もしくは差異があるのか、儀礼の変容を追うこともまた、現在の競漕祭を支える漕ぎ手たちが考える「伝統」を明らかにする上で重要であろう。

第 1 章

先行研究

１－１．競漕祭の先行研究

競渡もしくは競舟を含んだ祭礼は様々な名称のもと、東アジアから東南アジアに広くおこなわれている。その総称を本稿では競漕祭として扱う。競漕祭に関する研究は、主に19世紀後半から20世紀にかけて行なわれ、競漕祭の由来や機能的意味、神話・伝説との連続性、宗教性、象徴性などを明らかにする個別研究[Aijmer 1964、Eberhard 1968、Archaimbault 1972、君島 1977など]、ならびにそれら個別研究を基に、共通要素の類型化を試みると同時に分布図を作成する研究[海野 1980]、更に分布を把握した上で文化史研究へと展開する研究がある[寒川 1981、清水 1983]。地域別に見てみると、文献資料が５世紀頃より確認されている中国に関する研究が最も多く、次いで日本、東南アジア大陸部（ベトナム、カンボジア、タイ、ビルマ、ラオス）となっている。龍舟を用いる競漕について中国を中心に日本との比較研究をおこなった黄は、龍舟競漕の機能は雨乞い、豊穣祈願、水神祭、水死者の鎮魂、逐疫攘災、屈原の救済の６つとし、船に装飾、象徴される龍の意義についても、（１）雨神で雨を齎らす呪力を有す、（２）龍神（水神）で多産を齎らす呪力を有す、（３）水神で水を司る呪力を有す、（４）水世界の主で水死者を司る呪力を有す、（５）海龍王で逐疫攘災の呪力を有す、（６）江を翻す呪力を有す、という６つの特徴をあげている[黄 1982:30]。他の地域についても、同じような機能が競漕にこめられていると言えるが、競漕祭に関する多くの個別研究を扱った寒川恒夫や清水純の研究から、日本の沖縄においては豊漁祈願の機能が、そして東南アジアにおいては排水・減水を促す機能、王が儀礼に参加し、なにがしかの役目を果たすことで王国における王の権威を安定させる機能が認められている[寒川 1981、清水 1983]。民俗学者や文化人類学者による競漕祭の研究は、21世紀に入ると極端に少なくなるのだが、その理由の一端を1957年から1958年にかけておこなわれた東南アジア稲作民族文化綜合調査団の第１次調査（タイ、カンボジア、ラオス）団長として参加していた松本信広の「ああいう行事（プノンペンの水祭りにおける競漕）はもと竜の角逐にかたどる宗教行事ですけれども、今日はスポーツになっているんでしょうね」[東南アジア稲作民族文化綜合調査座談会 1959:126( )内筆者加筆]という言葉にみることができるかもしれない。松本は東南アジアの競漕にも着目し、銅鼓の舟の絵と競渡の関わりに言及した論考[松本 1954(1978)]を発表している著名な文化人類学者だが、この発言が何を根拠に述べられたものであるかは不明であるし、単なる印象を述べたに過ぎないとも言える。ただし、プノンペンの水祭りに見られる儀礼について言及した寒川は、その論考において「ここには簡略化された今日の形ではなく、19世紀後半に行なわれた伝統的方法を記すことにする」[寒川 1981:446]と断りを入れたのち、エヴェレーヌ・ポレ＝マスペロ(Éveline Porée-Maspero)の報告を参考に儀礼を記述していることから、松本が訪れた1957年の時点においても儀礼が見えづらくなっていたことは想像され、そうした状況が上述のような松本の発言に繋がったとも言える。いずれにしても、20世紀末より21世紀にかけて提出された競漕祭に関する論考が、「スポーツ」という視点をもった研究

者たち、主にはスポーツ人類学者、スポーツ史家たちによってなされたことは示唆的である[1]。

1998年11月発行の『体育の科学』第48巻第11号にて組まれた特集「民族スポーツと身体技法～日本の競漕～」には、競漕祭の変容に目を向けた初期の論考として、スポーツ人類学者６名の論考が掲載されている。その中でも本稿の関心である「伝統」と「スポーツ」の境界という視点をもった波照間永子と熊野晃三による２本の論考について検討していく。「糸満のハーレー～伝統漕法の伝承と変容～」と題する論考において、波照間は伝統漕法とその変容を論じている。沖縄・糸満において伝統漕法が重視される理由は、糸満ハーレーが「航海の安全と豊漁」を祈願する祭祀であることと関係している。沖縄の歌謡や伝承には、神女と船を同一視する意識や、鳥を神女の化身とみるものがあり、鳥・船・神女は象徴として一体となりうるとの考えがある。波照間はその考えをもとに、ハーレーでは船の舳側に羽を広げた隼（ヘンサー）を描き、漕ぎ手自身の身体をもって羽の動きを模倣することで船と鳥の一体化を具象化し、さらに船・鳥と神女の一体化が図られることで、神女の加護を受けると同時に、漕ぎ手自らが霊力そのものとなり、航海の安全を保障しようと願ったのではないかと述べている。よって、鳥・船・神女の一体化を象徴する重要な媒介である漕ぎ手の身体技法（漕法）は、ハーレーにおいて重要な位置をしめると考えられる。しかしながら、波照間が調査をおこなった1996年時点で、その漕法はかつての「ヘンサー漕ぎ」からスピード重視の「ピッチ漕法」へと変化しており、その状況を捉えて波照間は「祭祀としての色彩が薄れ、単純にスピードを競う近代スポーツ化の傾向が著しい」と述べる[波照間 1998:875]。こうした傾向を現地の行事委員会も危惧し、糸満ハーレーを構成している「転覆バーレー」「上イバーレー」「青年バーレー」「御願バーレー」の4つの内、「御願バーレー」のみ、昭和60年より漕ぎ手を海人に限定し、勝敗の得点化を廃止した。現在「御願バーレー」は「模範バーレー」と呼ばれ、伝統的・模範的な漕法を残した競漕種目として披露されており、行事委員会は「ヘンサー漕ぎ」を市の無形文化財に申請し記録・保存していく意向をしめしている。波照間はこの状況を踏まえ、次のように論考を締めくくる。

> 伝統スポーツは本来の目的を忘れ、力やスピードを競う近代スポーツ化の傾向にある。糸満ハーレーもその傾向は著しい。しかし「御願バーレー」の非得点化

[1] 2000年以降に発表された競漕祭に関する論考はスポーツ人類学者、スポーツ史家に限られたものではない。本文において参考にした黄は、2002年に観光開発の視点から台湾、沖縄、長崎のドラゴンボートレースの現状を分析した論考を発表している[黄 2002]。また、2010年には鈴木が中国貴州省苗族の龍船節について祭祀と世界観の変容を論じている[鈴木 2010]。しかし、鈴木論文の骨子となる現地調査は1983年と1985年に行なわれていることを考慮すると、2000年以降の文化人類学者における競漕祭研究はごく僅かと言っても差し支えないと思われる。

による「模範バーレー」の考案といった対策をとることで、伝統保存継承のありかたを模索している。[波照間 1998:875]

こうした波照間の論考は、糸満のハーレーがスピード化へと進む過程で、漕法が鳥を模した動きの美しさを競うことからスピードを競うことに傾倒し、「ヘンサー漕ぎ」から「ピッチ漕法」へと変化したこと、さらにその変化に対する対抗措置として伝統的な漕法を模範演技として保存する方向へ進んだことを明らかにしている。しかし、なぜスピードを競う近代スポーツ化へ糸満ハーレーは向かっていったのか、なぜ近代スポーツ化という現象に対抗するかたちで伝統の再帰化が図られるのかについて論拠を示していない[2]。また、なぜ伝統の再帰化は「御願バーレー」のみに見られ、伝統の再帰が図られた後もなぜ「転覆バーレー」「上イバーレー」「青年バーレー」は糸満ハーレーにおいて重要な構成要素となりえるのかといった点について言及していない。

これに対し熊野は「長崎のペーロン〜競技と伝統の間」において、競技化に伴う競漕、船型、漕法の変容について、歴史的変遷を踏まえつつ、具体的に記述している。特に船型の変遷に関しては、江戸期から明治、大正、昭和を経て現在の船型へと至った経緯を示し、昭和に入って以降、特に高速化を図る工夫が為されてきた変遷を詳述している。それによれば、長崎におけるペーロンの催しは、かつては地域色の強い行事であり、いくつかの地区が集まり、合同で大会をおこなう程度の規模でしかなかったが、1977年に全県的な大規模大会が開催されて以降、地域的な多様性は減少し、画一化・標準化への道を辿り始めたという。県下最大の大会と位置づけられる長崎ペーロン選手権大会で採用された規約は、県内各地のペーロン行事の概略を決定する傾向にあるため、この大会がどのように展開されるかによって、船型や漕法、競漕距離に大きな影響を与える。実際、この大会が外海ではなく、波の穏やかな長崎港内で行なわれることから、その環境下に適した船型や漕法が採用されると共に、港内事情によって競漕距離が短縮されたことで、レースの高速化が進み、その傾向が周辺地域の競漕へと及んでいるというのだ。そしてレース高速化に伴う漕法に関して言えば、かつてはよく見られたストローク主体の「ペーロンらしい漕法」から「ピッチ漕法」とへ変化しつつあるとしている。

熊野の論考は、競漕、船型、漕法について歴史的な変遷を具体的に示した点で評価されるが、題名に含めた「伝統」について、誰が何を「伝統」とみなすのか、当該地域の人びとが「伝統」を重視する傾向はあるのか、また、「競技化」をもたらした社会的要因はどのようなもので、「競技化」するペーロン大会は歓迎されないものであるのか、といった点については言及されていない。

波照間や熊野の論考で言及されなかった点について言及した研究としては、高津勝の「和船競漕の社会史 −玉江浦の「おしくらごう」−」[2006]がある。高津は、日本の体育・スポーツ史研究が従来、欧米の「近代化」や「合理化」を基準にして発展の遅速や質を論じる

[2] この点については、高津[2003:39]も言及している。

傾向にあったことを指摘し、日本のスポーツ史を民衆の主体的な営みに即して再構成する必要があると説いた。その民衆の主体的な営みを具体的に描くための研究として、民俗競技の研究が新たな意義を持つとし、その研究対象の１つに山口県萩市玉江浦でおこなわれている和船競漕「おしくらごう」をとりあげている[高津 2003]。「和船競漕の社会史」において、高津は以下の3つの問題意識から、考察を試みると述べている。

1) 日本の競技文化史を総体的に明らかにするには、柳田国男の「我国在来の運動競技は、殆ど其全部が此種祭の日の催しに始まつて居る」という見解を引取り、祭礼と結びついた在来の運動競技の歴史を、民俗的競技と近代スポーツ両者の関係や相互作用を含めながら、社会との関連において明らかにすることが必要である。
2) 競技文化に対する支配層の規制はどのようなものであり、それに対して民衆はどのような対応を示すのか、民俗的競技の内包する非日常的雰囲気や逸脱の契機、祝祭のもつ非構造・反構造的性格とはいかなるもので、それは日常の構造や社会的基盤とどうかかわるのか、民俗的な競技文化はどのように伝統化され、あるいは歴史のなかに埋もれていくのかといった点を明らかにするため、社会の支配的構造や権力関係も視野に入れ、担い手である民衆の主体的な営みを基軸にして分析・叙述される必要がある。
3) 民俗的競技を歴史的に再構成する際には、個別・具体的な検証を介してリアルな認識を得ることが必要である。[高津 2006:102]

高津は1)と3)の問題意識をもとに、和船競漕「おしくらごう」が萩市玉江浦の社会とどのように関連し、歴史的な変遷を遂げてきたのか個別・具体的に分析している。その結果、「おしくらごう」の競技形態の違いから〈1〉寛政期の河口での競漕、〈2〉嘉永期の河口から海へむかう競漕、〈3〉明治中・後期の沖合から港にむかう競漕、〈4〉大正中期の港口と沖合の往復競漕、〈5〉大正末から昭和初期の制度化、と５つの時期に区分すると同時に、玉江浦の漁業組織、出漁船数、船の構造、出漁海域、漁獲高などの分析から、時期区分が沿岸漁業、遠海漁業、遠洋漁業と変化する漁業形態にほぼ一致することを明らかにした。

1）の問題意識に含まれた民俗的競技と近代スポーツ両者の関係や相互作用という点について、高津は「競技化」という言葉を用いながら、大正中期から昭和初期の変化に言及している。「おしくらごう」の第一の競技的展開は、「おしくらごう」が地元の萩中学校の短艇部に影響を及ぼして競漕を活性化させた結果、短艇部が観衆の目を意識し、自分たちの競漕形態を往復レースに変化させた時に始まる。そして、今度は逆に、この変化が「おしくらごう」の競漕形態へと影響を及ぼし、往復競漕へ転換させたところにある。往復競漕の採用によって、選手は沖に浮かべられた浮標を効率的に旋廻する技術が新たに求められた。その変化は、「おしくらごう」がより競技的な性格を強める原因となったと高津は指摘する[ibid.184]。また、大正５年の大会を報告する新聞記事に、競漕で１位になった

船の競漕タイムが初めて掲載されたのも、「おしくらごう」が陸上競技などと同様、見る者にとって記録に挑戦する競技、すなわち一種のスポーツとして注目され始めた事実を示しているとする[ibid.184-185]。第２の展開は、競漕専用船の導入にある。どの時点で競漕専用を導入したのか、確定するのは難しいとしながらも、歴史的分析から大正中期から昭和初期にかけて出現したとしている[ibid.193-194]。高津の「競技化」に関する分析は、大正中期から昭和初期に現れた往復競漕の採用に伴う新たな漕法技術の獲得、競漕タイムに対する関心の高まり、競漕専用船の導入、そして優勝者に贈られる賞品が従来の酒に加えて「優勝旗」授与へ変化した点にまとめられる。2)の問題意識について高津は、ヴィクター・ターナーの「リミナリティ」や「コムニタス」概念を用いて、明治中・後期に記述された「おしくらごう」に関する新聞記事を分析すると共に、エドマンド・リーチの「非日常的時間」の概念を援用しながら、弁天祭り[3]および「おしくらごう」に立ち現れる非日常的な時間や空間を考察している。しかしながら、高津がターナーのいう自然発生的なコムニタスの出現を論じる際に参照した新聞記事は、主に明治32年（1899）5月24日と明治35年(1902年)5月23日の《防長新聞》2紙のみであるため、他の歴史的資料を総合して論じてはいるものの、その論拠は機弱と言える。また、日常的秩序・構造から反構造への移行に関しても、いくつかの象徴的行為を介して進行したと述べるものの、その象徴的行為とされる行為は果たして象徴的なのか、という根拠も曖昧さを残している。ターナーが現地調査における自らの聞き取りや参与観察から分析したのに対し、高津の分析は果敢な挑戦として評価できるものの、歴史資料からの分析という点で実証の限界もみられる。最後に、本稿の関心に近い「民俗的な競技文化はどのように伝統化されるのか」という問題意識については、高津自身も最後に述べている通り、未完な部分として残されている。

１－２．ラオスに関する競漕祭の先行研究

１－２－１．ラオスの競漕祭

現在のラオスの地における競漕祭は、少なくともフランス人が入植する1893年以前より行なわれていたことが、1866年から1868年にかけて実施されたメコン川調査団の調査報告書に描かれている[Delaporte and Garnier 1998:128-129,168,174]。

こうしたラオスの地で古くからおこなわれている競漕祭の儀礼について、ラオスの北部ルアンパバーン、中部ヴィエンチャン、南部チャムパーサックの比較研究をおこなったフランス人学者シャルル・アルシャンボー(Charles Archaimbault)は、その研究成果を1972

[3] 旧暦４月中旬の２日間行なわれる祭りで、弁天宮には、女神・弁財天（インドの河神）と航海・海上安全の守護神である市杵島姫神が祀られている。弁天祭は女神を迎え、なごませ、交歓し、送り返す祭りであり、そのハイライトに競漕をおこなう。祭りは航海と漁の安全を祈願し、豊漁を予祝するものである。

年に『ラオスにおける舟競漕：ある文化複合（La course de progues au Laos ：un complex culturel)』(126頁)にまとめ、出版している。

この研究の中で、アルシャンボーは北部、中部、南部の３ヵ所における競漕祭に共通する要素を、土地の守護霊であるナーガと舟の結びつきに見出している。水と深く結びつくナーガは、川の水を司る精霊と考えられており、季節の変わり目にナーガが循環することによって、稲作に適した水量が確保され、豊穣がもたらされるとしている。特に雨季明けの際には、その排水機能を助けるため、メコン川の支流から本流へ向けて競漕を行うことでナーガの進行を促し、川の水量を下げ、コントロールしているというのだ。また、かつて王国が栄えていた地域においては、現在消失してしまった競漕儀礼があり、それを各地の年代記、土地の人々の記憶をたどりながら再構築してみると、そこには王国の支配権や王の権威の確立をめざす諸機能が複合して存在していたとも分析している。

彼の研究に対する書評を多くの研究者が行なっているが、記述の整合性について多少の批判はあるものの[Porée-Maspero 1974; Davies 1975]、彼の緻密で詳細な研究は競漕祭の研究としても、東南アジアの研究としても概ね高い評価を受けている[Izikowitz 1975; Dessaint 1975 ;Woodward 1975; 山本 1976]。それら書評の中から、本稿と関係のある批判を取り上げることとする。カンボジアの競漕祭(水祭り)に関して研究をおこなっているカンボジア研究家のポレ＝マスペロ[1974]、ならびに南中国から東南アジアにかけての競舟儀礼の分布との関連において日本の競舟を考察した東南アジア史研究家である山本達郎[1976]は、ともに当時の競漕祭を支えていた漕ぎ手と舟に関する説明がなされていないとを指摘している。これらの視点が扱われていないことにより、どのような重要性が研究において欠落しているのかを両者共に明らかにしていないが、当時の競漕祭に対する研究関心が舟の象徴性に向いていたことに少なからず関連しているものと思われる。両者の指摘は、本稿において競漕祭の「伝統」を検討する上で重要な指摘となる。「伝統」が「連続性と非連続性の2つを共に合わせもつ解釈のプロセス」［ハンドラー＆リネキン 1996 :126］であるとするならば、アルシャンボーが競漕祭の調査をおこなった1950年代前半に存在していたラオス王国と、1975年に社会主義国へと変化した現在のラオスとの間をつなぎ、どのような解釈のプロセスを経てきたのかを探る手がかりとして、漕ぎ手や舟が重要な要素となりえるからである。特にアルシャンボーは競漕祭の分析をする際、その情報の多くを王族や当時の知識階層の人たちから得ており、その多くが政治体制の変化により国外へ逃れている事実を考えると、舟を漕いでいた村人や漕ぎ手の視点が欠けていることは、現代との繋がりを探る上で情報不足と言える。漕ぎ手や祭りに参加していた人たちの視点が欠落している点をタイ研究者であるヒラム・ウッドワード・ジュニア(Hiram Woodward Jr)は次のように述べている。

> アルシャンボー氏は文献学的調査に優れているが、民俗誌的な記述に少々欠ける側面がある。この点において、少なからず、彼の分析が上からの目線でなされ

ているように感じさせる（このことは、彼の分析が不正確だというものではない）。日常生活を営む人、すなわち祭りに参加している人々が儀礼や祭りに対し、実際にどのように考えているのかという情報が更に加えられていると、なお素晴らしい。［Woodward Jr.1975］

アルシャンボーは競漕祭以外にもラオス文化に関する研究を多くなしているが、その殆どが儀礼研究である。儀礼分析をする際に必要なインフォーマントが誰であるのかを考えたとき、当時の競漕祭の状況下において、実際の舟の漕ぎ手はインフォーマントとしてあまり必要ではなかったのだろうか。しかしながら、彼の論考を注意深く読むと、インフォーマントに漕ぎ手がいないわけではないことが分かる。漕ぎ手も彼の分析を下支えする情報を与えていたのだ。ただし、アルシャンボーの視線は常に儀礼に注がれていたため、漕ぎ手が競漕祭をどのように捉えていたかについての記述には及ばなかったようである。

１－２－２．ヴィエンチャンの競漕祭

アルシャンボーが記述したヴィエンチャン競漕祭の儀礼について、ポレ＝マスペロのみがシャムの影響に言及した彼の分析を疑問視しているが、それとは別の問題として、ヴィエンチャンの競漕祭および競漕祭に付随する儀礼は、フランス植民地時代以前より存在していたのか、という疑問が浮上する。２章１節で扱うヴィエンチャンの歴史からも分かるように、ヴィエンチャンはラオス北部のルアンパバーンや南のチャムパーサックのような、フランス人が入植する以前から王族が存在していた街とは異なり、1860年代にフランス人がヴィエンチャンを訪れた際には廃墟となっていた街である。廃墟であった理由は、1827年にヴィエンチャン王であったアヌヴォンが、シャムの支配から独立を目指して反乱を起こしたものの敗北し、1827年から28年にかけて２度にわたってシャムに徹底的に破壊されたためである。1899年にフランス官吏の現地長官事務所がヴィエンチャンに建てられる以前の1893年の時点で、ヴィエンチャンにラオ人の家はほとんど存在しなかっ[Askew,Logan and Long 2007:80]。

アルシャンボーが記述した儀礼の詳細については４章１節で扱うが、彼の記述したような儀礼がフランスの植民地となる以前よりヴィエンチャンの中心部でおこなわれ、継承されていたのだとすれば、アルシャンボーがヴィエンチャンの調査をおこなった1953年以前に競漕祭に関する記述や研究が散見されてもよいはずである。しかしながら、儀礼に関する記述は奇しくもアルシャンボーが調査に入った1953年のフランス語日刊紙《ラオ・プレス Lao Presse》[Lao Presse(8 October):8]以前においては見つけることができない。出安居の時期の競漕に言及した最も古い記録は1899年、ヴィエンチャンの中心地に比較的近い村であるシー・ターン村（巻末地図１を参照）に居住していたノルウェー人商人のピーター・ハウフ(Peter Hauff)の記述にみることができるが、どの程度の規模であったかは不

明である。ハウフは、「光の祭り（festival of lights）」とする祭りの中で以下のような光景が見られたと日記に書き記している[4]。

ヴィエンチャン．３日前、素敵な祭りがあった。夕暮れ時、僧侶たちは太鼓を鳴らし始めた。この日の午後早くに舟競漕が川でおこなわれ、金や赤の舳先をもつ長い舟が現在は浮かべられたままである。 僧侶たちは舟をつなぎ合わせ、竹で足場をつくることに勤しんでおり、それはまるで調理油を入れた大きなフライパンのための土台のようである。すぐのち、（土台の）下から大きな火が音をたてておこり、パンから火が枠にひろがって行った。暗闇が川を覆い始めた頃、多くの舟が川岸を離れ、鈴を鳴らしたり太鼓を叩いたりしている。素晴らしい光の祭りの始まりである。メコン川の上から下まで「火の舟」が送り出されている。蛇のような火の鎖が川を渡って行く。[Asmussen 1997:154]

日付は明記されていないものの、「光の祭り」に記された短文の内容に鑑みると、彼は出安居の祝いを目撃したと推測できる。1902年7月から11月にかけてヴィエンチャンに滞在していた、フランス人中尉ジョゼフ・シュヴァリエ(Joseph Chevallier)の1902年10月23日の記述に、同じような描写がみられるからである。シュヴァリエは、ハウフが記述したような「光の祭り」に言及しているが、舟競漕についての記述はない[Chevallier 1995:201-202]。シュヴァリエが舟競漕について関心を持っていなかったかというと、そうではないことが10月より以前の7月15日の記述に見ることができる。1902年7月14日のフランス革命記念日にヴィエンチャンにおいて記念日を祝う催しが行われており、その催しで行なわれたゲームとしてシュヴァリエは舟競漕を記述しているのである[5]。

３艘の大きな競漕用の舟がある。長く、信じられないほど細く、舳先と艫がせりあがり、金色の美しい装飾がなされている。30人から40人の漕ぎ手がそろったリズミカルな動きで舟を滑らせるようにハイスピードで水の上を走らせる。

歌い手が前に立ち、鐘で速度を示し、調整する。いくぶん耳障りなかけ声はその為である。どうやら漕ぎ手を興奮させると同時に、正しい方向を教えているらしい。これら3艘の舟は我々の方へ向かって進み寄り、突然川におじぎをするような形をとる。2列に並んだ漕ぎ手が幻想的な水鳥のようにリズミカルに（櫂を）上げたり下げたりしている様は、巨大なオオバン鳥が川の水面を破壊しているかのようであり、黄色い川に羽を打ちつけ、黒い羽の先端を水に浸しているようである。

---

[4] ハウフによれば、1899年初頭に彼とHans Faesch がヴィエンチャンに到着した当時、ヴィエンチャンにはフランスの現地長官であるモラン(Morin)と彼のアシスタントであるVatal の２名しか白人はいなかった。[Asmussen 1997:134]

[5] ゲームはボートレースの他、競馬とレスリングが行なわれた[Chevallier 1995:177-181]

彼らは閃光のごとく我々の方へ漕ぎ寄り、更に素晴らしい動きで方向を転換し、メコン川の真中に旗を立て、再度方向を転換し、大佐の前に戻ってくるのである。[Chevallier 1995:178]

ある種の情熱をもって舟競漕を記述しているシュヴァリエは、1902年10月23日の「光の祭り」で舟競漕を記述していない。とすれば、舟競漕があったにせよ、7月14日でおこなわれたものよりも目を引く規模ではなかったと想像される[6]。こうした状況から、アルシャンボーが記述したヴィエンチャンの競漕祭は、フランス植民地政府主導のもとに行なわれた1940年代の文化復興政策期に創られたのではないか、という仮説が立てられる[7]。また、アルシャンボーのヴィエンチャンの記述を詳細に再検討してみると、仮説を補強するいくつかの点も見えてくる。競漕祭研究におけるアルシャンボーの調査は、彼がラオス滞在中のほとんどを過ごしたチャムパーサックが最長で、1951年から55年にかけて行なわれており、次いでルアンパバーンでは1953年8月と55年11月の２回、ヴィエンチャンでは1953年10月に１回調査を行なっている。当然、長期調査を実行したチャムパーサックの記述がもっとも多く、研究全体のおよそ半分を占めている。チャムパーサックの調査において、彼はチャムパーサック王国の子孫であるブン・ウム公(Bun Oum)をはじめ、比較的高位の人たち、および儀礼に直接関係している祭司、霊媒師、寺の僧侶のインタビューが多くみられ、その詳細は微に入るもので、疑問を差し挟む余地はない。ルアンパバーンの競漕祭に関する調査は２回のみであるが、儀礼に関係の深い地域の郡長や僧侶長、王室の舟を漕いでいた元チーフ、宮殿の人、儀礼の対象となる祠の祭司がインフォーマントとして具体的に挙げられ、誰に何を聞き取ったのか詳細を示し、分析をおこなっている[Archaimbault 1972: 14,15,18,23]。しかしながら、本稿で扱うヴィエンチャンにおいては、文中において「数人のインフォーマント」[Archaimbault 1972:33]と記しているものの、具体的にどのようなインフォーマントであったかについては詳細を記していない。インフォーマントとして具体的に挙げられているのは プヴォン・ピムマーソン(Phouvong Phimmasone)[8]ただ１人で

[6] ヴィエンチャンから南に400キロ下ったカムアンのヒンブン川においても1900年7月14日のフランス革命記念日でボートレースが行なわれており、フランス人が入植する以前から各地で行なわれていたボートレースに注目し、革命記念日の祝いの余興の一つとして取り入れていたことが分かる。504頁に掲載されている1900年7月14日に行なわれた革命記念日のプログラム詳細の中には1902年のヴィエンチャンと同じく競馬などの余興が含まれている[Raquez 2000:503-509]。

[7] 1937年に発表されたMarie-Daniel Faure “Trois fêtes Laotiennes a Vientiane”(*Bulletin des Amis du Laos, 1re année, No1. Juillet 1937,* pp.21-43)において取り上げられた祭りは、「収穫期の祭ブン・クン・カオ」「大生経祭ブン・パヴェート」「ロケット祭」であった。

[8] ピムマーソンはEFEOのラオ人研究者で、ポール・レヴィ(Paul Lévy)の調査協力者でもあった。2000年の秋に研究者仲間であるジョルジュ・コンドミナス(Georges Condominas)ならびにイブ・グディノー(Yves Goudineau)と鼎談をしたアルシャンボーは、その対談の中で、彼がラオスへ渡った頃のラオスに関する文化研究の状態を「ポール・レヴィによるヴィエンチャンの水牛供犠と年占いに関する研究を除けば、ラオスの伝統について、まともな研究は存在しなかった」と述べ

ある。しかもそのピムマーソンがアルシャンボーに与えた情報は、「ヴィエンチャンの最後の王アヌの時代には、砂州のナーガに対する供えものを２艘の王室の舟が運んでおり、１艘は王を代表して男性が漕ぎ、もう１艘は女王を代表して女性が漕いでいた。競漕では、２艘の舟のオープニングレースは、スピードを競うと共に吉兆を占う要素も帯びていた。女王の舟が勝つと、その年は繁栄し、負けた場合は緊縮の年と考えられていた」。そして「王国の繁栄が自動的に確約されるように女王の舟を勝たせるように操作した」というものである[Archaimbault 1972:34]。このピムマーソンの説について、アルシャンボーはピムマーソンを素晴らしいインフォーマントと評しつつ、「これらの儀礼が行われていたアヌ王の治世は、おおよそ1824年ぐらいであるから、証言の不確実性を強調するまでもないだろう」と自らも述べている[Archaimbault 1972:34]。それにも関わらず、アルシャンボーは「しかしながら、吉兆を占う２艘の王室の舟が競漕を行っていた事はおそらく本当であろう。わたしたちはどんな結論を描く事ができるだろうか？」と、シャムに関する多くの歴史資料を駆使して半ば強引に分析を進め、ラオス北部や南部の競漕祭にはみられない女性の存在が、ヴィエンチャンの競漕祭にみられる点を次のように締めくくる。

> 今日、滑稽な競漕に重要な女性の特性が見られるのは、シャムの文化変容を表した複合的な儀礼の残存であることを現しているのではないだろうか。
> ［Archaimbault 1972:36］

この点に関して、ポレ＝マスペロは書評において、アルシャンボーは1824年頃のヴィエンチャンにおける男女の競漕儀礼が、シャムの影響であることは疑いないとしているが、その根拠となる1594年アユタヤ朝の類似儀礼よりも古い男女の競漕に関するクメール文字の記録が、1380年に残されていると指摘している。メコン川流域の歴史がモン＝クメールの歴史と深く繋がっていることを考慮すれば、1594年よりも古い記録がない上に、17世紀末にアユタヤを訪れたヨーロッパ人旅行者の記録にも、そうした儀礼に関する記述がみられない事実から、シャムの影響とするよりは、カンボジアのコンポン・チャム県の様々な場所で王と王女の競漕に関連する男女の競漕が14世紀に行われていたと記録のあるクメールの影響を考慮すべきではないかと批判している［Porée-Maspero 1974:203-204］。

アルシャンボーは1953年に実施した自身の調査と、65年にフランス極東学院（以下EFEOと記す）の研究者ジャック・ルモワヌ(Jacques Lemoine)がおこなった調査の情報を合わせてヴィエンチャン競漕祭を記述しているが、祭りの儀礼分析に際しては、北部ルアンパバーンの儀礼を参考にしながらも[9]、ヴィエンチャンの歴史的背景についてはEFEO所蔵の写本

ている[Condominas and Goudineau 2001]。そのポール・レヴィの研究を手伝ったのがピムマーソンであり、レヴィはピムマーソンの妹と結婚している。レヴィは３章で扱っているラオス刷新運動期にカンファレンスを主催し、ラオスの仏教について論文を書くなど、フランス人の中心人物であった[Creak 2010:42]。

[9] 「この水祭りの様々な儀礼について北部を参考に考えてみる」［Archaimbault 1975 :32］

『ウランカタート(Urangkatat)』と、『プン・ターン・テーン・サーン・コー・ムアン・シーサッタナーガ (Pun tang teng sang ko Muang Sisattanaga:ヴィエンチャン年代記)』を参考にしている。アルシャンボーの研究は、ルモワヌがアルシャンボーの評伝の中で書き記しているような態度に貫かれていた。

> タイ研究においてセデスの弟子であった彼は、テキストから非常に厳正に証明を引き出すセデスの方法と同様に、儀礼に関しても1つの膨大なテキストであると考え、テキストから証明を導き出すのと同様の厳格さをもって儀礼全体を分析し、テキストと儀礼を結びつけた分析へと発展させていた。彼の民族誌学的な方法は、テープレコーダーが出現する前の時代において、その利点に負けずとも劣らないほどの緻密さをもったものであった。辛抱強く精力と時間をかけて、ひとつももらさないように儀礼の詳細を書き取る作業を続けたのである。[Lemoine 2001:172]

ヴィエンチャン競漕祭の儀礼におけるアルシャンボーの記述は見事な詳細さをもってなされており、現在の競漕祭を読み解く上でも大きなヒントを与えてくれている。また、競漕祭研究におけるヴィエンチャンの儀礼分析は、上述の姿勢に貫かれ、素晴らしい研究と言えるのだが、１点、本稿との関わりで指摘したいのは、先にも述べた通り、彼の記述からはヴィエンチャン競漕祭が行なわれてきた年月については何も見えてこない点である。彼が分析に使用した『ウランカタート』と『ヴィエンチャン年代記』は伝説もしくは神話の類であり、そこから年代を確定できる史料とは言い難い。

また、他の２地域の分析に比べ、ヴィエンチャンの分析はアルシャンボーの研究姿勢とは異なり、多少強引な点が、女性の分析のみならず、以下のヴィエンチャン競漕祭の書き出しにもみられる。

> 16世紀セーターティラート王統治の首都。18世紀の初頭、独立王国の中心であったヴィエンチャンでは、競漕祭は第9月ホー・カオ・パダップ・ディン（大地を飾る米袋祭、祖霊慰撫祭）あるいは、第10月（シェンクアン村において）と第11月に行われていた。第9月あるいは第10月に行われていた競漕祭は、フランス＝タイ戦争の折に完全に消滅した。ヴィエンチャンの12の儀礼に関する概略的な文献にも描写が無いこと、ならびに私たちがこの対象について集めた情報が矛盾しているという問題を孕んでいるため、この競漕祭の概略を描くことさえも不可能である。そのため、私たちは現存している第11月の競漕祭に関してのみを研究することにする [Archaimbault 1972:26]

フランス＝タイ戦争の年代については、ヴィエンチャンよりも前の章で扱われたルアンパバーンの章に、「第９月のおおよその儀礼は1940年に勃発したフランス＝タイ戦争の際

に消失した」[Archaimbault 1972:13]と同様の記述があることから、1940年のことと思われるが、この書き出しは余りにもルアンパバーンの事例を踏襲しすぎている。アルシャンボーが書き出しの部分で参考にしている文献「12の儀礼」は、ルアンパバーンの事例を分析する際にも参照している写本「12の儀礼と14の伝統(Les douze rites et les quatorze traditions)」[10]と同様のものであると思われるが、ルアンパバーンの分析の際に引用したこの写本については、「ルアンパバーンの慣習や伝統について収集したテキスト」と説明し、出典をフランス極東学院所蔵の写本cahier I、p.79と明記するほど明確な説明をしているにもかかわらず、ヴィエンチャンの「12の儀礼に関する概略的な文献」については、何を元にしたのか全く触れていない。それどころか、アルシャンボー自身も述べている通り、「消失した」と思われる第９月あるいは第10月に行われていたヴィエンチャンの競漕祭に関する情報は矛盾を孕んでいたため、競漕祭の概略を描くことさえ不可能だったのである。それにもかかわらず、アルシャンボーがヴィエンチャンにおいて、「競漕祭は第９月ホー・カオ・パダップ・ディン（大地を飾る米袋祭、祖霊慰撫祭）あるいは、第10月（シェンクアン村において）と第11月に行われていた」と断定的に記述した根拠は何であったのだろうか。

以上の書き出し、ならびにヴィエンチャンの歴史的背景に鑑みると、ヴィエンチャンの競漕祭およびその儀礼の存在にはいささかの疑問が残り、先に立てた仮説が真実味を帯びてくるのである。４章では、更にアルシャンボーの儀礼の記述を詳細に分析しながら、その仮説について検証していく。

１－３．本稿の目的・視座

ここで、上述してきた先行研究から引き出される本稿における目的をまとめ、提示したい。本稿では、ラオス・ヴィエンチャンの競漕祭が、社会との相互作用の中でどのような歴史的変容を経て現在の状況に至っているのかを明らかにすることで、「伝統スポーツ」[11]の多様性

---

[10] ここではフランス語の写本名が引用されているため、フランス語を翻訳すると「12 の儀礼と 14 の伝統」となるが、ラオ語で伝わる言い方は「ヒート 12 コーン 14」であるため、アルシャンボーの引用文献以外は「ヒート 12」を「12 の慣習」として引用している。またこのような写本の研究は1914年よりEFEOのメンバーであるルイ・フィノによってルアンパバーンで始められた。その成果はLouis Finot 1917 “Recherches sur la littérature laotienne”, *Bulletin de l’École française d’Extrême-Orient(BEFEO) 17/5* :1-219 にある。 また、フィノの研究を補完する調査をアルシャンボーと同時にラオスEFEOに派遣されたラフォンが1959年に行なっており、その成果はLafont, Pierre-Bernard 1965 “Inventaire des manuscrits des pagodes du Laos”、BEFEO 52/2:429-545. に掲載されている。

[11] 本稿において、現地の人々の定義とは別の文脈で述べる「伝統スポーツ」は、ケンドール・ブランチャードの「競争的であり、肉体的であり、また遊戯や娯楽のような要素を持っているが、プロの形態は制限された形で持つかあるいはいっさい持たず、実践はより地域的であり、いわゆる近代スポーツよりもはるかに強く儀礼としての含みを持ち合わせている」形態の活動という解釈を定義とする。[ブランチャード 1995:6]

について例証すると共に、ヴィエンチャン地域における競漕祭の個別性をラオスの他地域とのつながりも含め、明らかにしていくことを目的としている。

社会との相互作用を分析・考察するにあたり、重要なキーワードとなるのが、競漕祭における「伝統」の在り方と「スポーツ」との関係である。「スポーツ」の視点をもった波照間、熊野、そして高津によってなされた競漕祭に関する論考で本稿と関連して残された課題は以下の６点であり、この２つのキーワードに集約することができる。

１）「近代スポーツ化」ならびに「伝統再帰」が起きた原因は何か

２）「伝統再帰」がなされた後も、競漕祭の中の１つのカテゴリーのみに再帰化が図られ、他のカテゴリーが続行された理由は何か。

３）競漕祭における「伝統」は誰が何を「伝統」とみなしているのか

４）当該地域の人びとが競漕祭を「伝統」とみなしているのであれば、その「伝統」を重視する傾向はあるのか

５）「競技化」する競漕祭は当該地域の人びとにとって歓迎されるものであるのか

６）民俗的な競技文化はどのように伝統化されるのか

また、当該地域の人がどのように伝統行事の中で「スポーツ」を語るのかについても、以上の６点をふまえて分析し、明らかにしていきたい。

ヴィエンチャン地域における競漕祭の個別性を提示する点においては、アルシャンボーの研究の再検討が必要となる。彼の研究はラオスの比較研究を目指したものであったため、ルアンパバーン、ヴィエンチャン、チャムパーサックの３地域が共通した文化体系をもつかのように分析されているが、フランス人入植時に王が在住していたルアンパバーンやチャムパーサック地域と、廃墟であったヴィエンチャンでは、伝統の継承自体に差異があるとともに、フランスが与えた地域文化への影響度合いも異なる。ヴィエンチャンの記述において、アルシャンボーの分析が多少強引に導かれている原因をヴィエンチャンの歴史背景から探ることで、ヴィエンチャンの個別性を導き出し、提示することができるだろう。また、アルシャンボーの研究に欠けている競漕祭を下支えする漕ぎ手の視点、そして競漕祭を構成する一要素である舟およびレースに着目することで、ヴィエンチャン地域の中における地域の個別性も導き出せるはずである。

１－４．研究方法および本稿に使用する資史料

本稿では、1893年に始まるフランス植民地時代から調査を実施した2009年までを考察の対象とする。

３章から６章においては、主に新聞資料を用いる。フランス植民地時代の新聞としてはラオ語初の新聞である《ラオ・ニャイ（大ラオス）(Lao Nhay)》、1950年代から60年代にかけてはフランス語日刊紙《ラオ・プレス（Lao Presse)》、1965年以降社会主義政権の樹立まではラオ語日刊紙《サート・ラオ（ラオス国民）(Sat Lao)》、そして社会主義政権樹

立後の1975年以降は、ラオ語日刊紙《ヴィエンチャン・マイ（新しいヴィエンチャン）(Vientiane Mai)》を用いて分析する。これら新聞資料は、ラオス国立図書館やオーストラリア国立図書館、コーネル大学図書館（米国）、アジア経済研究所図書館（日本）所蔵のものである。

７章のデータは、2004年（8月から9月にかけての1ヶ月半）、2005年10月（3週間）の予備調査を経て、2006年5月から2007年12月にラオスの首都ヴィエンチャンに滞在しながら、事前調査で集めた競漕祭参加村の村落リストに従い、ヴィエンチャン市情報文化局およびヴィエンチャン県情報文化局のカウンターパートと共に調査許可を取得後、村をひとつひとつ訪ね、質問表を元に調査をおこなったものに基づいている。村により、質問調査に協力してくれる人数は異なったが、多くの場合、村の相談役にあたるネオホームの老人たちが質問に答えてくれた。

質問表の調査後、後追い調査が必要と思われたハートサイフォン郡の３村（ターパ村、シーターン・タイ村、ホーム・タイ村）ならびにシーコッタボン郡の２村（シーカイ村、ウップムン村）、シーサッタナーク郡（チョムチェーン村）では、村主催の競漕祭や儀礼を中心に参与観察をおこなった。また、上記の村以外の各地でおこなわれる競漕祭にはなるべく直接赴き、競漕祭に関する書類の収集および参与観察をおこなった。2007年末に帰国後も、補足調査（2008年10月の1ヶ月間、2009年12月の2週間）を2回おこなっている。７章はフィールドワークの調査結果に加え、新聞資料《ヴィエンチャン・マイ》、《ヴィエンチャン・タイムズ（Vientiane Times)》、《カオ・キッラー（スポーツニュース）(Khao Kila)》、《パサソン（国民）(Pasason)》、雑誌《ワッタナタム（文化）(Vathanatham)》も用いる。

１－５．本稿の構成

本稿は、ヴィエンチャンのワット・チャン競漕祭の歴史的変容における「伝統」と「スポーツ」の関係性を考察するものである。

「はじめに」では、調査時における現地の状況から感じた問題意識を示し、第１章では競漕祭の先行研究をまとめるとともに、本稿の目的を示す。続く第２章で調査地の概要を示したあと、第３章から第７章にかけて時代を区分し、競漕祭の変容における「伝統」と「スポーツ」の関係について、比較的多くの情報を拾える新聞媒体を中心に考察をおこなう。そして「おわりに」が同章の考察および結論となる。

第３章は、フランス人が入植した1893年から第二次世界大戦終了時の1945年を対象としている。フランス植民地時のヴィエンチャンの状況について歴史的背景を概括し、現在のヴィエンチャン競漕祭として最大規模のワット・チャン競漕祭が初めて文献上に現われた、《ラオ・ニャイ》新聞の記事を中心に当時の競漕祭の様子を考察する。

第４章は、ラオス王国が独立を果たした1953年から内戦が激化していく1965年を対象としている。1972年に出版された『ラオスにおける舟競漕：ある文化複合』の著者アルシャンボーが調査をおこなった、1950年代の時代背景を概括したのち、彼が記録したヴィエンチャンの儀礼について再検討をおこなう。「スポーツ」に関する考察においては、フランス語日刊紙である《ラオ・プレス》を参考に考察する。

第５章は、内戦が激化した1965年からラオス王国政府最後の年となる74年をまで対象としている。この時期、「伝統スポーツ」という言葉が生まれていることから、《サート・ラオ》新聞の競漕祭に関する記述を中心に、「伝統」と「スポーツ」の表現に着目し、両者の関係性について考察を行なう。

第６章は、ラオス人民民主共和国が成立した1975年からラオスが諸外国に門戸を開き、経済的にも変化をしていった90年代を対象としている。社会主義政権に移行後も、競漕祭は新体制に不可欠な団結力を醸成する場として継続された。1970年代後半から80年代にかけて、競漕祭における競漕は「水上の団体スポーツ」であるという政府見解が繰り返し唱えられた結果、「スポーツ」としての色合いを深めていく。そして、1985年から開催された国家スポーツ競技会において、競漕が種目として組み込まれると、なおさらスポーツとして側面を強めていった。こうした競漕祭に対し、観光年を迎えた1999年には、伝統回帰の動きがみられるようになる。「スポーツ」との接合、そして「伝統」への回帰がみられるこの時代について、ラオ語日刊紙《ヴィエンチャン・マイ》新聞を中心に考察する。

第７章は、観光年の後半2000年から調査をおこなった2009年までを対象としている。2000年には舟の伝統をめぐる論争が参加者の間で交わされ、競漕祭のカテゴリーが「伝統舟」と「スポーツ舟」に分化されるに至る。メコン川流域とナムグム川流域の論争は競漕祭の「伝統」とは何かを巡るものであったが、論争の結果は、舟の形状に集約されるに留まった。伝統とは舟の形状の問題であったのか、スポーツと伝統は阻害しあうものであるのか、聞取り調査の結果を交え、第６章と同じく《ヴィエンチャン・マイ》新聞を参考にしながら考察する。そして、本稿全体を総括するかたちで、「おわりに」において考察の結論を述べる。

第２章

調査地ヴィエンチャンの概略

２－１．歴史的背景

現在の首都ヴィエンチャンの歴史は、1893 年 10 月 3 日にフランスとシャムの条約によってヴィエンチャンがフランスに帰属する地と決められ、1900 年 4 月 19 日にポール・ドゥメ(Paul Doumer)インドシナ総督が、ヴィエンチャンを行政上の首都と定めた時から実質始まったと言って良い[12]。ヴィエンチャンの歴史はラーンサーン王国が存在していた 16 世紀にさかのぼるが、現在のヴィエンチャン市の境界が定められたのは、条約によってメコン川左岸が右岸より切り離され、フランスの手に渡った 1893 年である。本節では、フランス人が入植する以前の歴史ならびにフランス人入植時の歴史について概括し、次章以降の理解につなげるものとする。

２－１－１．ラーンサーン王国

14 世紀初頭、メコン川中流域に首長を中心に据えたムアンと呼ばれるラオ人の「くに」が幾つも存在していたと考えられており、それら諸ムアンを軍事的に制圧し、ルアンパバーンを都とするラーンサーン王国がファーグム王によって建設された。しかし、ファーグム王に関する事績は伝説的であり、明確な史実は判明していない[飯島 1996:15-16]。ファーグムの建国をラーンサーン王国樹立と考えれば、王国はその後ベトナムの侵略を受けるなど、不安定な時期も続いたが、ポーティサーラート王、セーターティラート王の時代に勢力が伸張した。1560 年、セーターティラート王はビルマの侵略を避けるために都をヴィエンチャンへ遷都させ、ヴィエンチャンの礎を築いたが、1571 年セーターティラート王の死後[13]、王位継承争いが続いて王国は衰退し、ビルマの侵略を受けるままとなる。1637 年にスリニャウォンサーが王位に就くと、安定を取り戻し、芸術や仏教が隆盛し、交易活動も盛んな黄金時代が続いたが、1694 年に王が崩御すると、再び王位継承争いの混乱と侵略が続き、ラーンサーン王国はヴィエンチャンとルアンパバーン、チャムパーサックの３つの王国に分裂した。これら全ての王国は、1770 年代末、シャムの属国となっている[Stuart-Fox 1997:12-13]。

1804 年にヴィエンチャンの王位に就いたアヌ王は、彼が育ったバンコクの影響を色濃く受けたヴィエンチャンの繁栄を創り出し、チャムパーサックの支配権も手に入れて勢力を増した[飯島 1999:347]。1827 年、アヌ王はシャムに反旗を翻し、ヴィエンチャンとチャムパーサックの両地からコーラート高原（現在の東北タイ地域）に軍を進め、ナコーンラーチャシーマーを一時占領するが、シャムの討伐軍に敗れ、後に捕えられバンコクで処刑された[ibid.348]。アヌ王の軍事行動の結果、バンコクのラーマ３世王は追討軍に対してヴ

---

12 ドゥメがヴィエンチャンを行政上の首都と定める以前の 1895 年にフランス人の現地長官であるブロシュがヴィエンチャンに居住していた。[Reinach 1901:273]。

13 セーターティラート王がいずれの地で崩御したかについて、明確には判明しておらず、ラオス史における一つの謎となっている。[Sturat-Fox 1998:82]

ィエンチャンの徹底的な破壊（物理的な街の破壊とアイデンティティの破壊）を命じ、街や寺は焼き払われ、ヴィエンチャン王国の推定人口 10 万から 15 万のほとんどが中部シャムの領地へと強制移住させられた。1830 年代および 1840 年代にヴィエンチャン平野はシャム軍の奇襲を繰り返し受けたことにより、さらに人口が減少し、ヴィエンチャンは草木に覆われた廃墟となった[Askew,Logan and Long 2007:68-71][14]。

２－１－２．フランス人の入植

ヴィエンチャンの地にフランス人が登場したのは、インドシナの植民地化にフランスが乗り出していた 1860 年代である。1867 年 3 月、メコン川の通商路開拓を目的としたドゥダール・ドゥ・ラグレ(Doudart de Lagréé)率いるメコン川調査団のルイ・ドゥ・カルネ(Louis de Carné)は、かつてのヴィエンチャン王国の首都が草木に覆われた廃墟となっているのを見て、「消滅した国の歴史を復興しようとするならば、砂漠の砂もしくは森の土に埋もれた廃墟を探訪することを恐れてはいけない」と表現するほど街は荒廃し、人跡もなかった[Askew,Logan and Long 2007:16][15]。

ラグレ率いる調査団がヴィエンチャンの荒廃を目の当たりにした 1867 年から、93 年にフランス・シャム条約が結ばれるまで、フランス人がかつてのヴィエンチャン王国に対して正式な統制を布くことはなく、その間の 1870 年代にヴィエンチャンの街は再度、ホー族による破壊行為を受けている[ibid.73]。

1893 年 10 月 3 日にフランス・シャム条約が締結されると、メコン川両岸にまたがり広がっていたラオ人の地域は、メコン川を国境線として分断され、左岸地域がフランス領となり、ここにフランス領「ラオス」が創り出された。1899 年に「ラオス」は、コーチシナ、アンナン、トンキン、カンボジアに次ぐ第５の「国」としてフランス領インドシナ連邦に編入され、フランス植民地省管轄となり、フランス共和国を代表する総督の統轄下におかれることとなる[飯島 1999:354]。また、同時に国内行政・司法の最高責任者として総督を代行するフランス人現地長官が最初はサワンナケートに派遣されたが、翌 1900 年に首都と定められたヴィエンチャンへ移動した[ibid.354-355]。グラント・エヴァンス(Grant Evans)は、フランスが首都にヴィエンチャンを選んだことに関して、新しいフランスの行政司令部は、かつての首都の威光にあやかろうと慎重に選んだのだとしている[Evans 2002:69]。実際、フランスはヴィエンチャン王国最後の王であるアヌ王の宮殿があった跡地にフラン

---

14 シャムの将軍 Mom Chao Thap は、ヴィエンチャンを野生動物に返し、雑草と水以外には何も残さないようにというシャムのラーマ三世王の命令を遂行するよう任された Seniborirak 軍隊の一人であったが、破壊する前のヴィエンチャンの街は賞賛せずにいられないほど繁栄した街だったと記録している[Ngaosyvathn M&P 1989:55]。

15 カルネは「ラオ人の大部分は根絶やしにされ、国外追放され、彼らの首都はローマ軍に破壊されたエルサレムのようになった」とも述べており、同様に Dommen も「シャム人は、第２次ポエニ戦争後、ローマ人がカルタゴを破壊したように、強引で無分別な政策を試み、ヴィエンチャンを破壊した」と記している[Ngaosyvathn M&P 1989:55]。

ス人現地長官の住居を建てており、こうした建築物は政治機構が以前とは変わり、誰がいま政治的権勢をふるっているのかを伝えていた。また、フランスがヴィエンチャンを選択したもう１つの理由は、廃墟であるこの街には、北部ルアンパバーンのように伝統ある王国機構が残っておらず、社会的にも物質的にも相対的に何も残っていなかったことも関係していたようである[Askew,Logan and Long 2007:79]。人口に関しても、フランス＝シャム条約が締結された 1893 年時点で、ヴィエンチャンにラオス人の家はほとんどなく[ibid.80]、街の中心近くには 1896 年の時点で 1,388 人しか居住していない状況であったことから[Sayarath 2005:48]、まさに「新たな植民地の首都はいま人家のまばらな墓場の上に立ち上がった」のであった[Askew,Logan and Long 2007:11]。

フランス人統治下の「ラオス」は 10 の県（プロヴィンス）に分けられ、フランス人現地官の管理下におかれた。長官の居住区であるヴィエンチャンは、ヴィエンチャン県の４つの郡（ムアン）の内のひとつであった[ibid.77]。王国機構の残るルアンパバーン県は、王の名誉ならびに儀礼上の特権をともなう統治権が認められ、貴族の支配組織が維持された[飯島 1999:355]。

フランスは条約締結以降、ヴィエンチャンの人口を増やすためにシャムの領地へ強制移住させられたラオ人たちに対してヴィエンチャンへの帰還を奨励し、それを受けて 1897 年および 98 年の乾季に、数百のラオ人家族がヴィエンチャンへ戻った。だが、フランスが彼らの住居の世話を十分に行なえなかったため、彼らは再びシャムの領地へと戻ってしまった[Askew,Logan and Long 2007:80]。フランスは少しずつ街を整備し始めたが、1902 年においてもヴィエンチャンは 100 棟あるかないかのラオ人の小屋といくつかの中国人商店、そして廃墟のままの仏塔があるだけの村程度の規模だったようである[ibid.82]。それでも 1930 年代までには廃墟から小さなのんびりとした植民地の政治的都市にまで成長し、人口も順調に増えていった。しかし、その人口増加のほとんどは、植民地行政官や貿易商、小売業として移住してきたベトナム人に支えられており、中国人商人の増加も組み合わさって、むしろラオ人のヴィエンチャンにおける人口は第２次世界大戦期まで少数に留まっていた［ibid.102-103]。人口比を表すかのように、街の同心円的な空間配置も社会的な力関係を象徴しており、フランス人が中心で、その外側に中国人とベトナム人の地域があり、周辺部にラオ人がいた。ラオ人の村落社会は、実質的にフランス人とほとんど接点のない環境にあったといえる[Stuart-Fox 1997:44]。1940 年代に入ってもなお、ヴィエンチャンは本質的にフランス人とベトナム人の街であった[ibid.54]。

このような状況は、フランスがラオスを統治するにあたり、財政的な問題の解決策として手っ取り早く人口を増やすためにベトナム人の移住を推進していたことに加え、ラオ人官僚の育成よりもベトナム人を現地人官僚として採用したことに起因している。フランスは、ラオ人はだまされやすく、他へ依存しやすいため、率先力をもってきつい仕事をこなすことには向かないと考えており、このことがフランスをベトナム人登用へと向かわせていた[ibid.42]。そのことと関連して、フランスはラオスでの教育振興に消極的であったた

め、1900年代前半を通してラオ人で教育を受けた人数は非常に限られており、1930年時点でも、ラオス全体の初等教育1年から6年の全生徒数5853名中、ラオ人は2396名、最終学年の6年生では171名中90名となり、ラオ人で初等学校修了試験に合格できたのはわずかに15名であった。そして中等教育に至っては、同年のラオ人学生は5名に満たなかった[矢野 2013:65]。中等教育修了後、大学までの道を考えるラオ人はハノイの高等教育機関へ行く必要があったこともあり、植民地時代を通してフランス本国への留学まで果たすことができたのは、ルアンパバーン王族のペッサラート・ラタナヴォンサ公(Phetsarath Ratanavongsa)やスワナ・プーマ公(Souvanna Phouma)、後の国王サヴァン・ワッタナー公(Savang Vatthana:在位1959–75年) など、ごく一部の特権階級に限られていた。こうした状況にあったラオスにおいては、他の東南アジア諸国でみられたような、バイリンガルのエリートが大衆的広がりをもったナショナリズム運動を先導していくという現象は、植民地期においてみられなかった[ibid.66]。

しかしながら、1930 年代末からのシャムによる失地回復を掲げた「大タイ主義」政策がラオスへ及んでくることに危機感をもったフランスは、ラオス人のアイデンティティを醸成するため、政策の転換を迫られる。1938年にシャムの首相に就任したピブーンは、翌1939年6月24日に民族名と国名を一致させるため、国名を「シャム」から「タイ」へと変更し、同時に国民と国籍の名称も「タイ」とすることを定めた。タイ国籍の保持者はその出自がどうあれ「タイ人」と呼ばれることとなる[ibid.66]。「大タイ主義」を掲げるピブーンは、第２次世界大戦下の 1940 年 6 月にフランスがドイツに降伏すると、これを好機ととらえ、フランスに対して 1904 年と 1907 年のフランス・シャム条約時に失ったルアンパバーンとチャムパーサックのメコン川西岸の返還を要求していく。1940年11月には、ついにタイとフランスの間に武力衝突が勃発し、翌1941年5月には日本の仲介により東京条約が締結され[矢野 2013:67]、ラオスの領土に関しては、返還を要求していた失地の回復に成功した。フランスは、さらなる領土拡大を目指すピブーンの「大タイ主義」政策に対抗するため、タイとは異なる、ラオス独自の伝統文化の復興に力を入れる「ラオス刷新運動」を繰り広げていく。

歴史はこれ以降、各章の年代に応じて章の始めに概括することとする。

２－２．地理的環境

フランスによって領域が確定された「ラオス」は、その国境を北は中国、東はベトナム、南はカンボジア、西はタイ、そして北西はミャンマーと接する東南アジア唯一の内陸国であり、国土面積は23万6800平方キロメートル、国土の90%を山岳部と高原が占めている。国土はヴィエンチャン市と16の県に行政区が分けられ、2005年時点で562万100人（内、男性280万人、女性282万1000人）の人々が暮らしている[National Statistics Bureau

2005:1][16]。南北に長く伸びるラオスのほとんどはモンスーン気候に属し、季節は雨季と乾季に大別される。

ラオスは多民族国家であるが、実際の民族数は明確になっていない。2009 年の政府発表によると、49 民族が認識されていることになるが[18]、この数は流動的で確定的なものではなく、ラオス政府の国勢調査時期によって民族数が異なっている。1985 年の国勢調査では、民族数が公的に決定されておらず、調査員たちは 800 以上もの自称による民族名を記録してきたという[安井 2003:173、中田 2004:17]。また、研究者による分類数も異なり、1959 年から 99 年までの間でみれば、1967 年にアメリカ政府出版局から出版された『ラオス地域便覧(Area Handbook for Laos)』に掲載されている 36 民族から 1999 年のローラン・シャゼー(Laurent Chazee)による調査分類の 132 民族までと幅広い[Schliesinger 2003:73-113]。ラオスでは、民族名とは異なり、居住地域の高低によって民族を 3 つに分ける呼称が 1950 年代より 2009 年まで使われていた。この 3 つのカテゴリーとは、ラオ・ルム（低地ラオ)、ラオ・トゥン（中腹ラオ)、ラオ・スーン(高地ラオ)である。ラオ・ルムとは低地や河川流域の平野に住む人々のことで、多数民族のラオ族をはじめとするタイ系の諸族であり、ラオ・トゥンとは山地の中腹に住むモン・クメール諸族の人、そしてラオ・スーンは高地山頂近くに住むモンやヤオなど、中国南部から移住してきた諸族を指している[安井 2003、中田 2004]。この 3 つの分類カテゴリーは現在、公的な使用が禁止されているが、人々の日常の会話には現在でも使われている。

本稿で対象となるヴィエンチャン市に居住するラオ人は、メコン川の恩恵を受けた肥沃な土地で、古くから野菜栽培やもち米の天水田耕作を営んでいるが、他の地よりも農業開発が早く進んだことにより、灌漑水田耕作も同時に行なっている。2008 年時点のヴィエンチャン市の天水田面積は 3 万 9280 ヘクタール、灌漑水田面積は 2 万 1049 ヘクタールとなっており、生産量は 1 ヘクタール当たり天水田が 4.10 トン、灌漑水田が 4.74 トンであった[Ministry of Planning and Investment 2009:40-41]。

２－３．文化的背景：12 の慣習「ヒート・シップソーン」

ラオスにおける主要民族であるラオ族には、先祖代々より伝えられてきたとされる「ヒート・コーン」そして「ヒート・シップソーン」という言葉がある。「ヒート」はサンスクリット語の caritra(ຈາຣິຕຣະ)、パーリ語の caritta(ຈາຣິຕຕະ)から派生した言葉で、「連綿と行われてきた」との意味から、社会が好んで受け入れ、代々行われてきた慣習や伝統という意味を含む。「コーン」は、人が遵守すべき行動を規定する法律と似ており、伝統

[16]http://nsc.gov.la/index.php?option=com_content&view=article&id=18&Itemid=19&lang=en (2014 年 10 月 9 日閲覧)より“Population Census 2005”(PDF)をダウンロード。正式な国勢調査が 2005 年以降実施されていないため、2005 年のデータを引用。2005 年時点では、行政区に「サイソムブーン特別区」が存在していたが、2006 年に解体された。

[18] 園江氏のご教示による。

的な規範をさす[Bouasisawat 2001:6]。「ヒート・シップソーン」は、「シップソーン」が数字の 12 であることから、ラオの伝統的慣習として、旧暦 1 月より 12 月までの各月におこなうべき年中行事を指し示す言葉である。「ヒート・シップソーン（以下、12 の慣習と記す）」の起源は、14 世紀に成立したラーンサーン王国にまでさかのぼると考えられており[星野 1996:244][19]、それゆえ、ラオ族の独自性を示すものとみなされている[Bouasisawat 2001:2]。12 の慣習によれば、僧侶が３ヶ月間の修行期間である安居を終えて出安居の儀礼をおこなうオーク・パンサー祭（オークは出る、パンサーは安居。以下、出安居祭と記す）、ならびにその夜に川へ灯籠のようなものを流す「ライ・フア・ファイ（火舟流し）」と共に、競漕祭は旧暦第 11 月の行事にあたり、ラオス全国各地でおこなわれる年中行事である。首都ヴィエンチャンの競漕祭は街の中心部に位置するチャンタブリー郡のワット・チャン（ワットは寺）正面がレースのゴール地点となることから、通称「ワット・チャン競漕祭」と呼ばれ、出安居祭の翌日に毎年開催されている。調査時の 2007 年時点において、チャンタブリー郡とヴィエンチャン市スポーツ局が競漕祭の管理運営を行なっており、25m ほどの丸木舟に 45 人から 55 人の漕ぎ手が乗り、メコン川の上流から下流に向けて 1 キロの距離を２艘ずつ競漕してゆく。競漕は 2000 年より、女子舟、男子伝統舟、男子スポーツ舟の 3 つのカテゴリーに分けられ、行なわれている。

２－４．宗教

ラオスでは、14 世紀半ばにカンボジア経由で招来したスリランカ系の上座仏教が信奉されると共に、ピー(phi)とよばれる土着の精霊に対する祭祀が行なわれている。上座仏教は、戒律を遵守すること、ならびに出家による自己救済を本義としている。人々は三宝（仏法僧）に帰依し、功徳を積むための喜捨をすることで、来世でのより良き再生を願う。男子は生涯のうち、一度は出家し仏門に入るのが良いこととされている。精霊祭祀は、集落や区画を守護する精霊の祠を建てて精霊を祀り、災いをもたらす悪霊を退けて、境界内の住民や家畜の守護を祈願する。

２－４－１．競漕祭をとりまく精霊祭祀：舟の精霊

ラオ人の信仰の１つとして高い木には精霊ピーが宿ると考えられており、特に競漕舟に利用されるような木には女性の精霊が住むとされ、ヴィエンチャン周辺地域の舟の名前は多くの場合、女性の敬称である「ナーン」をつけて、例えば「ナーン・ケオ・ホントーン[20]」

---

[19] 2000 年にラオス文化情報相から出版された『ラオスの歴史』によれば、ヒート 12 の内容はファーグム王よりも以前の時代からあったと思われるが、ファーグム王時代のラーンサーン期からスリニャウォンサー王時代を通して内容に変更が加えられた部分があると思われる[Pavasatlao 2000:266-267]。

[20] ケオ・ホントーンが名前。直訳すれば、輝く金の白鳥という意味になる。

などと呼ばれている。

舟の木を伐り出す儀礼について、S 村の老人（男性、60 代）は、「舟を新しく作る時には、山に入ってまずは適当な木を探し、その木の前でお伺いを立てるんだよ。私たちの村の舟の木として村に来て頂けませんか、とね。それからそこで一晩明かし、夢の中でお告げがあって、村に行ってもいいとなれば木の精霊に対する儀礼をおこなってから伐り出して村に持ち帰るんだ。儀礼は木の精霊の要望に応じて鳥を捧げたり、豚を捧げたり。名前も夢の中で告げられれば、その名前を舟につけるんだ。」と話す。

こうして村に運ばれて舟となった木に対して、最初の競漕祭に参加する直前に村人たちは舟木の精霊を祀る進水儀礼をおこなう。村によって舟に供えるものは異なるが、共通してみられるのは香水やおしろい、口紅、新しい布、くし、鏡など女性の精霊が着飾るための供え物となっている。儀礼の中心はバーシー(Baci)と呼ばれる儀式である。通常バーシーは結婚や出産、家を新築した時など何かの節目にあたる時に人々が集り幸福や繁栄を祈願する儀礼であるが、競漕祭のバーシーでは漕ぎ手を含む村人が舟の周りに集り、モー・ポーン(Mo phon)と呼ばれる祈祷師を囲み、村の幸福や繁栄を祈ったのちに競漕祭での勝利や漕ぎ手の安全を祈り、綿糸を互いの腕や舟に巻き付けたり、漕ぎ手が線香を舟に捧げたりする。また、舟の精霊を祀ったホー（ho 祠）にもモー・チャム(Mo Cham)と呼ばれる祭司が捧げものをし、勝利や安全を祈願する。村によっては、バーシーの前に僧侶に対して喜捨をおこない、食事を提供した後、仏教式の祝福を僧侶から受けるために、ナム・モン（Nam mon）という僧侶が祈りを捧げた水を舟や自分たちに振りかけてもらう。

［写真 2 舟の進水前のバーシー儀礼］

第 3 章

フランス植民地時代
（1893 年から 1945 年）

第２章１節の歴史で概括したように、シャムによる壊滅的な破壊を経験したヴィエンチャンの街は、フランス人の入植後に、フランスによって再生されたといえる。それ以前のヴィエンチャンにおいて、競漕祭が行なわれていたことを証明することは困難であるが、フランス人入植後についてもまた、明確な資料を見つけることが困難な状況にある。ヴィエンチャン競漕祭とおぼしき最も初期の記述は、第１章３節２項において既述した通り、1899 年のノルウェー人商人ピーター・ハウフの短い記述のみである。1902 年にヴィエンチャンに滞在していたフランス人中尉シュヴァリエ（前出）の出安居に関する日記には、ハウフよりも詳細なライ・フア・ファイを示す「光の祭り」についての記述があるにもかかわらず、競漕に関する記述はまったく見られない。競漕という意味ではむしろ、同年 7 月のフランス革命記念日においておこなわれた競漕が詳述されている。

以上のことから考えうるのは、フランス人入植時において廃墟であったヴィエンチャンに残る極めて少数のラオ人たちによって、非常に小規模の競漕がおこなわれていた可能性は否定できないとしても、現在のようなワット・チャンを基点とする競漕が行なわれていた可能性は非常に低いということである。本章では、ワット・チャンを基点とする競漕が初めて明確に記された 1940 年代の競漕祭について述べ、最初期のヴィエンチャン競漕祭について考察していく。

３−１．ラオス・ナショナリズムの萌芽：ラオス刷新運動

フランス人入植の歴史で前述したように、1900 年初頭のフランス・シャム条約によって、フランスに奪われた土地の失地回復を目指していたピブーンは、第２次世界大戦中の 1940 年 6 月に、フランスがドイツに降伏したことを契機として、フランスに失地の回復を要求した。その結果、フランスとタイとの間で武力衝突が勃発したが、翌 1941 年 5 月、日本の介入によって東京条約が締結され、チャムパーサックとルアンパバーンの西岸、カンボジアの北西部の大部分がタイに引き渡されることで決着をみた。しかし、条約によってタイに引き渡されたルアンパバーンの西岸地域には、ルアンパバーン王家の価値あるチーク保護林があったため、その領地がタイに渡ったことは王家にとって大きな損失であったと同時に、フランスでさえも領地を守る力を有さないと知る大きな出来事でもあった。フランスは権威失墜を回復させるため、更にはルアンパバーンの王をなだめるため、ヴィエンチャン以北をルアンパバーン国王の支配下へ併合し、王国をフランスの保護国として正式に定めた[Stuart-Fox 1997:54]。

この時期、フランスは「大タイ主義」のラオスへの浸透を防ぎ、ラオスを植民地として維持していくため、「ラオス刷新運動」と呼ばれる文教政策を実施し、フランスの保護のもとにタイとは異なる「ラオス人」としてのアイデンティティの構築に乗り出している[矢野 2010:37, 2013:68]。運動の発信装置となったのは、1941 年 1 月に創刊されたラオ語初の新聞《ラオ・ニャイ（大ラオス)》であった。《ラオ・ニャイ》新聞は、月２回の発行で、国

内各地のニュース、世界情勢、スポーツ、ラオスの歴史や言語、文学に関する記事が掲載されており、当初はフランス語とラオ語の２言語であったが、1943 年１月に *Le Nouveau Laos* というフランス語紙が創刊された後は、ラオ語のみの発行となった[ibid.68-69]。ラオス刷新運動は、第１に文化的なものであったため、ラオス人のアイデンティティやプライドを刺激するための手段として、ラオスの文学、演劇、音楽、踊りが賞賛された。更にはラオスの歴史や伝統を甦らせると共に[Stuart-Fox 1997:55]、スポーツにも力が注がれた。それは、フランス本土で展開されていたヴィシー政権の「伝統の復興」と「青年・スポーツ運動」が、植民地インドシナにおいても、1940 年 7 月に総督に就任したドゥクーによって展開されたことと深く関わっている[21]。

３－２．ヴィエンチャンにおけるラオス刷新運動

王族が在住しているルアンパバーンやチャムパーサックとは異なり、フランス人入植時に廃墟であったヴィエンチャンの伝統復興は、ヴィシー政権の政策以前より始まっていた。中でもセーターティラート王の統治期にさかのぼるタートルアンやワット・プラ・ケオ、そしてアヌ王時代に建てられたワット・シーサケットの修復には特別な関心が払われ[Ivarsson 2008:118]、1920 年代より着手されていた。タートルアンの最初の修復はピエール・モラン(Pierre Morin)によって 1900 年になされたが、まったくひどいものと酷評される修復であったため、1929 年から 35 年にかけて EFEO の建築家レオン・フォンベルトゥー(Léon Fombertaux)によって再度修復がおこなわれた[Askew,Logan and Long 2007:93]。また、ワット・シーサケットの修復も 1922 年から 23 年、1927 年から 31 年の 2 回にわたっておこなわれている[ibid.95]。これら遺跡の修復は、遺跡に対するフランスの科学的かつ審美的な興味関心によってなされただけではなく[ibid.94]、1940 年代に展開されたラオス刷新運動期におけるフランスの目論みと同様のもので、かつて繁栄を誇っていたヴィエンチャン王国の輝かしい過去を想起させる象徴をラオス人に与え、ヴィエンチャンを復興させると同時に、その復興はフランスの庇護の元に叶えられたのだというメッセージを伝えるものでもあった[Ivarsson 2008:118-119, Askew,Logan and Long 2007:94-96]。タートルアンやワット・シーサケットの修復が行なわれた 1920 年代から 30 年代とラオス刷新運動期とでは、ヴィエンチャン中心部に居住するラオス人の人口比率が異なるため、その当時の修復はラオス人のアイデンティティを喚起するというよりも、フランスの正統性を強固にし、ヴィエンチャンの街の復興を目指したものであったが、その目的は、図らずも 1940 年代のラオス刷新運動に繋がるものとなったと言える。２つの修復に続くワット・プラ・ケオの修復が、ラオス刷新運動における最大の伝統復興として象徴的な存在となったから

---

21 ベトナムやカンボジアにおけるこれらヴィシー政権の政策は、日本が提唱する「大東亜共栄圏」の思想にインドシナ人が取り込まれることを懸念し、「植民地愛国主義」を醸成するためのものであったが、ラオスにおいてはその懸念がタイの「大タイ主義」に対抗する措置であった[難波 1998:60-61][Jennings 2004:615-617]。

である。その落成式は、1942年3月18日に「ヴィエンチャン王」の異名をもち[Evans 2009:19, Toye 1968:60]、３つの遺跡修復に関わっていたラオス刷新運動期のラオス人キーパーソンであるルアンパバーン王族のペッサラート公や、インドシナ総督のジャン・ドゥクー(Jean Decoux)が参列して盛大に祝われた[Askew,Logan and Long 2007:96]。

３－２－１．《ラオ・ニャイ》新聞におけるヴィエンチャン競漕祭

ヴィエンチャンの競漕祭についても、現在と同じ場所であるワット・チャンを中心に初めて行なわれたことが、1941年10月15日の《ラオ・ニャイ》紙に掲載されている。記事の中心はラオス刷新運動期を通して奨励された国家を賛美するような歌やスピーチに占められており、競漕に関する内容は非常に限られたものとなっているが、現在に続くワット・チャン競漕祭について、この記事より以前にこれ以上詳細な記述が見られないこと、ならびに、ラオス刷新運動の中心的な存在である《ラオ・ニャイ》紙の紙面において、《ラオ・ニャイ》紙が「この祭りの運営に深く関わっている」と記述していることから、祭りの全体像を描くため、全文を以下に引用する。ただし、参照できた現存するラオ語資料の文字印刷が潰れてしまっており、判読困難な箇所が多いため、内容がほぼ同じと思われる同日のフランス語の記事を引用する。

水祭り（ラオ語の記事の見出しは「競漕祭」）

ヴィエンチャンにおいて今年の出安居の水祭りは非常に多くの観衆の中で祝われ、熱狂的であった。ラオ・ニャイとその仲間たちはこれらの祭りの運営に深く関わり、彼ら自身も祭りの成功を喜んでいる。

祭りの数日前、ラオ・ニャイによって祭りの詳細なプログラムが印刷され、配られた。また、10月5日の夕方には、我々の勇敢な同胞によってあらかじめプログラムの内容が知らされていた。驚くべきは我々の声の大きな話し手であった。祭りは10月5日の午後9時に始まった。話し手はワット・チャンの仏塔の屋根の上からの大きな声でスピーチやジョーク、詩や歌を群衆に聞かせ、群衆は驚き、楽しんだ。

最初に私たちの友人であり、祭りの責任者でもあるペーン(Pheng)氏が行なった祭りの開始を告げる詩的なスピーチは大成功をおさめた。

その後すぐに、幻想的なろうそくの火や歌が流れる中で火が灯された筏が川の方へゆっくり押し出された。

そしてチャオ・チャンサモーン(Chao Chansamone)氏が「マイク」の方へやってきた。彼は彼が作詩したシーパンドーンの歌を歌い、その歌は群衆がしつこく要求するほどの大成功をおさめ、何度も繰り返された。今度は映画の時間である。

話し手は観衆をスクリーンの前に集め、集まった観客は映画を見終わった後に驚いていた。

合唱も驚きであった。我々の青年合唱団が初めて公衆の面前に登場し、「愛国ラオ」という歌を歌い、素晴らしい成功をおさめた。少年少女は、観客が彼らを解放するまで母国ラオスの讃歌を何度も繰り返さなくてはならなかった。

翌日の午後、競漕に参加する舟がやってきた。その中にはナーガの頭と尻尾を持つピア寺の舟も含まれていた。競漕が始まった。川岸に位置し、観衆を見下ろしながら、我々の話し手は次から次へと続くレースの中継をし、漕ぎ手を鼓舞し、結果を伝えていた。

16時頃の2つのレースの間に、ヴィエンチャン郡長であるノー（No）氏がマイクの前で興味深い素晴らしいスピーチを行なった。

その後、我々の友人であり、素晴らしいラオ・ニャイの協力者であるカタイ(Katay)がマイクを掴んだ。彼の話はとても情熱的で雄弁であったので、人々はレースを忘れてしまうほどであった。もし彼自身が突然話し手に変身したとしたら、競漕を開始する合図や敵手をやじる声に彼のスピーチが中断されることはなかっただろう。なんと甘美で家庭的なラオスの祭りであろう。彼は彼が中断したところからスピーチを再開した。

今度は音楽である。若者たちはマイクの周りに集まり、我々の楽団の指揮者であるプーコーン(Phoukong)の合図で新しい歌「Appel aux Lao」が始まる。素晴らしい成功であった。観衆はこの歌を繰り返し要求した。競漕が最後のレースになる傍らで我々はこの歌を何度も聞いた。

観客が喜んだのは、チャンサモーン氏が長い演説の中でも冗談を言い、最後にとても味わい深い歌でしめたことであった。

しかし何が起きているのだ？ラオ・ニャイは何かを忘れているのでは？話し手は探した。彼は観衆の誰かがクロン(Kruong)氏を連れてきてくれたら、チャムチャムのグラスをあげる約束をした。少しの後、友人であるクロン氏が私たちの方へやってきた。

それでは有名な歌手であるチャンパ(Champa)を紹介しよう！彼は観衆の中におり、我々は彼が現われるのを望んだ。話し手は彼を求めた。すると突然、チャンパが姿を表し、マイクを引き寄せ、マイクをもって走り出し、素晴らしい声を披露し、成功をおさめた。

そして、最後のレースとその成果を表彰する時がきた。4つのカップ（トロフィー）が次々と贈られた。ヴィエンチャン市現地長官のカップがチョムチェーン村の舟に贈られた。市長のカップがシーターン・タイ村の舟に贈られ、ラオ・ニャイのカップはホーム村の舟、ラオ人官吏会のカップはシーターン・ヌア村の舟に贈られた。ラオ・ニャイは今年、ホーム村にカップが渡るだろうと宣言しており

（その通りになったのだが）、ホーム村は今後（カップの数を）更に数を増やすことだろう。

夜が来て、パーティーは終わった。しかし人々は疲れていない。話し手の周りに人々は集まり、容赦なく歌を要求する。そして歌を流す。しかしそれもまだ十分ではなかったらしく、人々は夜の９時に再び集まってラオスの新しい歌を繰り返し要求したが、今回は無駄であった。

1941 年の水祭りの成功は、我々の話し手によるところが大きい。そのヴァン・クーニェム(Van Couyghem)氏と彼の協力者たちに心から感謝する。

このヴィエンチャンにおける出安居祭り（競漕祭を含む）の様子は、1942 年 3 月 15 日の『カムソーンとシーサムット』と題する連載小説の中にも取り上げられている。これは 1941 年 3 月から開始されたもので、「新しいラオス」を創り、国家意識を育て、ラオスという国の領域をひとつに束ねるという目的のもとに展開されたものである[Ivarsson 2008:160]。小説はカムソーンとシーサムットというラオス人少年の２人が、ラオス各地を旅していく中で、それぞれの地における街や自然、農産物の知識を懸命に学び、獲得していくという内容であるが、ラオ・ニャイの読者たちはその彼らの目を通して自分たちの住む国を知り、国の形を知っていく[Ivarsson 2008:160]。この小説は、著者がラオスの学校で使用される教科書「ラオスの歴史／年代記」の著者の１人でもある、ブランチャード・ドゥ・ラ・ブロス（Blanchard de la Brosse）であったところからして、国家意識を醸成する目的をもっていたことが窺える。そうした目的をもつ小説の中で、ヴィエンチャンに関する話題の１つが出安居祭りだったのは、《ラオ・ニャイ》紙が創刊初年度にあたる 1941 年の出安居祭りにいかに力を注いでいたかを推し量れると同時に、「新しいラオス」を形づくるヴィエンチャンを代表するものとしての出安居祭りであったことがわかる。出安居祭り全体がフランスの伝統復興政策のもとに創られたものであるのか否かを確定するのは難しいが、既述したように、ヴィエンチャンの街が入植時に廃墟であり、ラオ人の人口がごく僅かであったこと、1900 年にヴィエンチャンが行政上の首都と定められた後も出安居祭に関する記述がほとんど存在しないことを考慮すると、ラオス刷新運動期に展開された「新しいラオス」の一環として創造されたのではないかという疑問も否定できないのではないだろうか。

このことと直接的には関係していないが、競漕祭を含む出安居祭りが 1940 年以前のヴィエンチャンにおいて、ラオ人の伝統的文化として目立った存在ではなかったのではないかという疑問につながるマリー＝ダニエル・フォール(Marie-Daniel Faure)の研究がある。フォールは 1937 年 7 月に出版された会誌《ラオスの友（Bulletin des Amis du Laos)》において、「ヴィエンチャンにおけるラオ族の 3 つの祭り」と題する論考を発表しているが［Faure 1937:21-43]、その 3 つの祭りとは「収穫期の祭り：ブン・クン・カオ（米祭り)」、「ブン・パヴェート（大生経祭)」、「ブン・バン・ファイ（ロケット祭り)」である。何に

注目するかは研究者の立場により異なるため、この論考で扱われなかったことが必ずしも出安居祭りが存在しなかったということを証明する訳ではない。しかし、フォールが論考を発表した会誌の母体となるラオス友の会(Société des Amis du Laos)は、ラオスの植民地官吏官であるフランス人メンバーによって 1935 年に設立された会であり、これまでの「フランス人はラオスの文化を死滅した文明の異国情緒ある残余とみなす傾向にあり、それらを組織的に保存しようとしたり、復旧もしくは残っている文化の断片の復元を試み、現代のラオスに再度接合させようとしたりしてこなかった[Christie 2001:113]」経緯に顧み、ラオスの歴史や慣習を研究し、過去の記憶が消失しないように保存することを目的としていた。そして、研究、保存された成果は研究者たちの励みになるだけでなく、将来のラオス人にとっての確固たるプライドとなり、自信につながれば良いとの考えを持っていた[Eutrope 1937:xi]。会の目的、そして会誌創刊号に掲載されたこと、ならびに 1930 年代当時の中心地がフランス人とベトナム人に占められていた状況を合わせみると、断片としての出安居祭りが 1889 年にノルウェー人商人の記録に記されていた通り存在していたにせよ、1941 年の《ラオ・ニャイ》紙で報告されたような大規模なラオ人の祭りとして存在していた可能性は限りなく低いように思われる。この疑問は次章で検討する 1953 年調査時の競漕祭の儀礼にも繋がっていく。

３－２－２．ラオス刷新運動期のスポーツ

ラオス刷新運動期には、上述したようなラオスの伝統や文化の復興という、ヴィシー政権の政策が反映された「伝統復興」が１つの核でもあったが、同時に同政権の「スポーツ活動の促進」ももう１つの核であった。本国フランスにおいてスポーツが重視された理由を、松沼美穂は次のように述べている。

> ヴィシー体制においてスポーツが重視された理由は、1940 年の敗因は共和制下の享楽と堕落によるフランス人の心身の脆弱化であり、国家の危機は国民の生物学的危機だと解釈されたことである。国家再建は国民の肉体を鍛えなおすことに始まり、新体制建設を担う健康で頑強な肉体を作りあげなければならないとされた。スポーツを通じてチーム精神、利他主義、団結心、規律などの集団行動の道徳を養い、かつ階級的政治的対立を止揚し国民統合を推進することが目指された。競技会など大規模団体行事は、体育教育、青年団体とならんで、スポーツ振興の代表的な回路だった。[松沼 2004:164][22]

インドシナにおいても本国と同じく、新体制建設を担う心身ともに健康な人材を育て、

[22] ヴィシー体制においてスポーツが重視された理由と同等の内容は、普仏戦争でフランスがプロイセンに降伏した時からフランス国内で唱えられていた。

人々を管理統制することに役立つスポーツを重視する姿勢が説かれ、その姿勢はまた、青年政策への関心と密接に結びついていた[松沼 2007:73]。こうした本国の方針はインドシナの中心地であるベトナムにおいて主に展開されたが、ラオスにおいても、公共教育部門のフランス人長官であったシャルル・ロシュ(Charles Roche)を中心に、ラオス人のヌイ・アーパイ(Nhouy Aphay)、カタイ・ドン・サソリット(Katay Don Sasorith)および彼らに動員された教養ある若いラオス人の小さなグループによる活動がみられた[Stuart-Fox 1997:55]。彼らによって組織されたスポーツ団体によるスポーツ活動は、タイへの反抗心を醸成し、フランスに対する親密な感情を強化する好機を提供するとして、ことさらに奨励された[ibid.55]。中心人物の1人であるカタイは、彼の出身地である南部の町パクセにおいて個人的にパクセスポーツ協会を創設したことに留まらず、ヴィエンチャンのラオス・サークル(Cercle Lao)の会長やラオ・スカウト会の事務局長、ラオ演劇協会、ラオ人官吏会の会長など多岐にわたる活動を行なっており、ラオス刷新運動期を代表する人物と言える[Halpern 1990:11]。そのカタイが深く関与していた《ラオ・ニャイ》紙におけるスポーツの記事は、当然のごとく新聞が創刊された1941年から話題の1つとして頻繁に取り上げられている[23]。1941年中頃のスポーツに関するコラムでは、ラオス刷新期においてスポーツと同様に奨励された詩や歌を作ることは、「あらゆる面で精神や意識の弱さを促進する」行為であるとの反感が示され、「豊かな肉体を促進する」スポーツこそが優先されるべきであると、スポーツの刷新をラオスのリーダーたちに迫る意見が説かれた[Creak 2010:88][24]。このような意見は1942年以降、更に頻繁に表現されるようになり、《ラオ・ニャイ》紙におけるスポーツの報道が増えていく。1942年に現地長官に就任したルイ・ブラセ(Louis Brassey)は、若者とスポーツ、そして刷新の連結を強調し、「ラオス復興の計画を実行するにあたっては、若者の活発な参加が必要である。全帝国の、ラオスの若者たちよ、スポーツを通して人を強くする肉体的、道徳的な規律を訓練しなければならない」と述べている[ibid.88]。こうしたスポーツ熱が加速する中、《ラオ・ニャイ》紙は外来語である「スポーツ」をどのようなラオ語で表現したのであろうか。

前述のコラムが掲載された1941年6月15日の《ラオ・ニャイ》紙では、「スポーツ」にラオ語「キッラー kila」という単語があてられている。キッラーはサンスクリット語で「遊戯、競技、冗談、愛玩」を指すkridaに語源を持ち[梵和大辞典 1979:387]、そこから派生するパーリ語 kila は「遊戯、喜戯」という意味を持つ[雲井 1997:285]。こうした語源にさかのぼる単語を使用した理由には、sportの語源が同じようにラテン語のdeportare

---

[23] 1941年の《ラオ・ニャイ》紙におけるスポーツ種目は、全てフットボール、すなわちサッカーの話題であった[Lao Nhay no.9(15 June) /no.11 (15 July) /no.12-13(15 August) /no.20(30 November)]。

[24] クリークが参照したLao Nhay 1941(15 June)10面は、彼が訳したようにも解釈できるが、「スポーツによって健康な肉体をつくることが先決であり、健康な肉体があって初めて良い声を出すことができ、歌や詩を楽しむといった行為ができるのだ」と訳すこともでき、詩や歌が全く否定されていたわけではない。

にさかのぼり、deportare は「ある場所から別の場所へ移動する」から転じて「心を塞いだ状態からそうでない状態へ移す」、すなわち「気晴らしをする、遊び」を意味することと関係があるのであろうが、なぜ「スポーツ」という単語をそのまま使用せず、「キッラー」という単語が採用されたのか。その理由は、このラオス刷新運動期にラオスではタイ語からの独立をはかるため、ラオ語における新語の確定と正書法について盛んに議論が交わされ、ラオ語の近代語化を進めようとしていたからである。ラオ語とタイ語は非常に似ており、ラオ語はタイ語の一方言といわれるほどである。実際、1895 年に『辞書とガイド―フランス語・ラオ語』をフランスで出版したジャン・エストラード(Jean Estrade)は、その本の中で「ラオ語を話すことは、シャム語を話すこととほぼ同じである。ラオ語とシャム語は非常によく似ている」と述べている[矢野 2013:86、91]。また、1904 年に『フランス語・ラオ語小辞典』を出版したマリー・ジョゼフ・キュアツ(Marie Jodeph Cuaz)は、「ラオ語はシャム語の方言か、むしろパトワ(patois 俚言)でしかない」とさえ述べており[ibid.87、92]、ラオ語をタイ語の下位においている。こうした言語的状況において、ラオ語とタイ語の差異化をはかることは、大タイ主義に対抗する手段として、タイ人とは異なるラオ人のアイデンティティを確立するための重要な問題とされた。《ラオ・ニャイ》紙においては、1942 年 10 月 15 日から約 1 年間、新語と正書法の問題が取り上げられている。翌月 11 月 15 日の「語彙の説明」という記事においては、慣れ親しんでいない語彙だとしても、言語の近代化のためには新語の使用が不可欠であることが説かれ、この日以降、毎号に新語解説のコーナーが設けられた[ibid.123]。新語の多くは、パーリ語・サンスクリット語をもとにタイで新しく作り出されたものであったため、タイ語を取り入れることに対する抵抗もみられたが[ibid.124]、1942 年 12 月 1 日付けの紙面において、新語の採用にあたって、政治・経済・社会用語についてはパーリ語・サンスクリット語から、科学技術用語についてはフランス語から借用することが決定されている[ibid.125]。こうした新語の採用、正書法に関する議論の中、1942 年 12 月 15 日付けの「ラオ語正書法についての会議」という記事には、スポーツを表す「キッラー」に関する記述がみられる。

> 我々の言葉を発展させるため、適したパーリ語・サンスクリット語やフランス語を使うべきである。他の言語を使わなければ、例えば、sport、ouvrier、agriculteur などの言葉を簡単な単語で言い表すことができない。(“kila”はパーリ語の単語なので、タイも我々も使用する) [Lao Nhay 1942(15 December):9]

このように、「キッラー」というラオ語は、ラオ語の近代語化の流れの中でヴィシー政権が促進するスポーツ活動の報道と相まって、定着していった言葉であると言える。それ以前にラオス人が「キッラー」という単語を日常会話の中で使用していたのか、使用していたとしたらどのような用法で使用していたのか、ということについて明らかにすることは困難であるが、少なくとも「キッラー」という語が「スポーツ」を意味する近代的な新

語の１つとして確定され、ラオス刷新運動期において採用されたことは上記の記事から読み取れる。また、スポーツ報道が増加した 1942 年以降の《ラオ・ニャイ》紙における「キッラー」の記事には、フットボールや自転車競技、卓球、バスケットボール、テニス、陸上、水泳といった近代スポーツ種目が掲載されていることから、「キッラー」という単語は、1940 年代の《ラオ・ニャイ》紙を通して、近代スポーツ種目を想起させる語になったとさえ言えるのではないだろうか。

３－２－３．ラオス刷新運動期における競漕祭とスポーツの関係

競漕祭には、《ラオ・ニャイ》紙においてスポーツとみなされる要素があったのだろうか。1941 年 10 月 15 日の記事で語られた競漕祭においては、「レース」という言葉はみられるが、直接的な表現でスポーツを表す「キッラー」という用語はみられない。むしろ、記事の大半はラオス刷新運動期に推奨された愛国心を醸成する歌が群衆の心をつかんだことを強調している。1941 年 6 月 15 日のスポーツに関するコラムにおいて、詩や歌を作ることに対する反感を示し、スポーツこそが優先されるべきであるという論調（前出）があったのに対し、競漕祭の記事が歌をとりまく舞台のように描かれたことは、1941 年時点において競漕祭における競漕が醸成すべきスポーツの対象とされながら、重点的に取り上げられてはいなかったことを示している。競漕祭はむしろ、ラオス文化の復興という点に重点がおかれ、《ラオ・ニャイ》関与のもと、愛国心を鼓舞する舞台として盛大に祝われたと言える。

しかしながら、競漕そのものがスポーツとして全くみなされていなかったかと言えば、必ずしもそうではない。インドシナのスポーツに関する雑誌《インドシナの青年スポーツ(Sports-Jeunesse d’Indochine)》に掲載された「ラオスのスポーツ活動について」と題する以下の記事から、そのあたりの事情を読み取ることができる。

> 土地も国土も広大で豊かな国であるラオスは、人口の少なさと山がちな土地のため、いまだ経済的な発展を享受していない。スポーツに関しては、この深刻で不利な状況におかれていることが災いし、小さな発展段階にも進んでおらず、インドシナ連合の他の国が既に享受しているような発展段階からはるかに遅れている。またラオ人の気質が大きな発展を促すことを妨げている。我々の友人たちは、穏やかな暮らしを愛しており、苦難や競争、勝利の喜びを経験すること、特に強靭な肉体をつくることを避けているように思える。彼らはラブソングやもの憂いケーンの子守唄のような調べが延々と続くパーティーを好んでいる。いくつかの古いスポーツ(sports anciens)である競馬やボートレース(l’aviron)、ティーキーは、全ての人が楽しめる人気のスポーツである。ティーキーはボールゲームの賭けのようなものである。(中略)テニスや卓球、サッカー、サイクリングのよう

ないくつかの近代スポーツは、この国でときどき行なわれているが、行なっている人数は非常に限られており、遅れた進化と不合理性を表している。

［*Sports-Jeunesse d' Indochine,* No. 12 (20 Mar.1942):3］（下線筆者）

少なくともラオス人以外の目から競漕を見ると、競漕は「近代スポーツ」ではないにせよ、「スポーツ」であるとみなされていたことが、この記事を書いたHoàng-Diênというベトナム人の視点によって分かるのである[25]。1941年の競漕祭の記事に登場したカタイは、スポーツ活動にも力を注いでいた人物であるが、同時に演劇や文学活動にも関与していた人物である。カタイのスピーチがいかなる内容であったかは分からないが、競漕祭の競漕をスポーツとみなし、それにことさらに力を入れていたという根拠は見当たらない。その後の《ラオ・ニャイ》紙における競漕祭の記事を見てみても、「キッラー」という単語が競漕祭の文脈において語られることはなかった。しかしながら、1942年11月1日の競漕祭の記事[Lao Nhay 1942(1 November):6]に現在の競漕祭で行なわれている舟の事前組分け制度が見られることは興味深い。1942年の競漕祭に参加した9艘の舟[26]は、まずくじ引きによって3組に分けられ、それぞれの組のレースが行なわれた後、組ごとの勝者が優勝をかけて対戦し、最終的に優勝と準優勝が決定された[27]。また、スポーツと関連するものとして、表彰の際にフランス人現地長官から、ラオス官吏養成学校における1キロ自由形水泳テストで勝者となったタオ・パオ氏に、特別賞として10ドル贈られたことも書かれている。特別賞はその他、競漕の優勝、準優勝とは別の舟に1位30ドル、2位20ドルが贈られているが、この特別賞が何に対する特別賞であり、なぜ水泳テストの勝者にまで贈られたのかについては、記事から読み取ることができない。ただし、大きな祭りや祝典の際、スポーツ行事が同時開催されるのは、ラオス伝統復興の象徴ともいうべきワット・プラ・ケオの修復記念が1942年3月に行なわれた際にラオスのテニスカップが同時開催された事実にもみることができ、この時期いかにスポーツ行事がラオスの伝統や文化を祝う祭典に結びつけられて行なわれていたかを物語るものでもある[Creak 2010:94]。

《ラオ・ニャイ》紙における競漕祭の記事は、1941年の紙面において情緒的な盛大さをもって大きく扱われたのとは異なり、1942年以降、非常に簡潔なものとなっていく。1943年ならびに44年の記事は以下のとおり、国内各地のニュースを伝える紙面のヴィエンチャン地域の欄に、小さな記事として掲載されるに留まっている[28]。

---

[25] 1920年代にラオスの地を旅したハリー・フランク(Harry A. Franck)もルアンパバーンで見た11月の競漕祭に使われる舟の説明の中で、「櫂で舟を漕ぐ-ルアンパバーンの競技スポーツ(athletic sports of Luang Prabang)」と述べている[Franck 1926:298]。

[26] 参加した舟は、クーン・トゥラコム村、シーターン・タイ村、ホーム・ヌア村、シェンクアン村、シーカイ村、ピア寺、チョムチェーン村、シーターン・ヌア村、ホーム・タイ村である。

[27] 優勝はシーターン・タイ村、準優勝はチョムチェーン村であった。

[28] 《ラオ・ニャイ》紙は1945年3月の日本による仏印処理まで全部で97号発行された[菊池1997:26]。

競漕祭

今年の競漕祭は地域の伝統的慣習に則って祝われ、楽しい祭りとなった。ラオ・ニャイも祭りに参加し、踊りや歌を（スピーカーと共に）提供した。

今年の競漕には長い舟が 11 艘参加した。ラオ・ニャイは 1 位となったチョムチェーン村の舟に銀のカップを贈ると共に、村人約 50 人をヴィエンチャンに招待し、彼らに様々な会社や事務所、発電所、印刷所、ラオスの演劇鑑賞などへ案内することを約束した。

2 位のシーターン・ヌア村には、ヴィエンチャン県知事からカップが贈られた。

[Lao Nhay 1943(1 November):3]

競漕祭

今年の競漕祭は昨年よりも多くの人々が見に集まってきた。競漕祭に参加したのは11艘であった。競漕の結果、1位となったチョムチェーンの舟には、事務局長から銀のカップと5千万の賞金が贈られた。2位のサイフォンには、ヴィエンチャン病院から銀のカップと秘密警察長であるファウ氏から3千万の賞金が贈られ、3位のシーターン・ヌアには教育省から銀のカップと特別賞として2千万、4位のホーム村にはサイゴンの医学生たちから銀のカップと特別賞1千万が贈られた。

[Lao Nhay 1944(1 October):4]

しかし、記事の大きさとは関係なく、1943 年の競漕祭の記事の文頭に「パペニー paphenii」が含まれていることは注目に値する。現在、「パペニー」は、慣習になるまで連綿と行ってきた行動を表す時に好んで使用されることから、「伝統」という意味をもつが[Bouasisawat 2001:6]、当時、パペニーが「伝統」を示していたかは定かではない。だが、文脈からは「決まった時期におこなわれる慣習」の意味で使われていたと考えることができ、ヴィエンチャンの競漕祭を報告する文頭に「今年の競漕祭は地域の伝統的慣習に則って祝われ」と記されていることは、この時期から現在と同じ「慣習に則って」という定形文句が競漕祭に定着しつつあったと推測させるものである[29]。

３－３．考察：ラオス刷新運動期の競漕祭における「伝統」と「スポーツ」

本章の最後に、フランス人が入植して以降のヴィエンチャン競漕祭の「伝統」と「スポーツ」について考察していく。前述したように、フランス人が入植した 1900 年のヴィエンチャン中心地は廃墟となっており、ラオ人の住人がほとんど存在しなかったことを考える

[29] 矢野順子氏のご教示によれば、19 世紀末にフランス人によって出版された辞書には「tradition」という語彙はなく、風習や慣習を表すフランス語「coutume」のラオ語訳は、「タム・ニアム(tham niem)」であるという。よって、「パペニー」という語も 1940 年代以降の新語である可能性がある。

と、競漕祭が 1941 年の《ラオ・ニャイ》紙で報告されたような盛大さをもってワット・チャンの前で組織的に行なわれていたとは思われない。しかしながら、1902 年 7 月 14 日のフランス革命記念日を祝う祝典において、競漕に使用する舟と同じ大きさの舟が用いられ、競漕を行なったという記録が残っていることから、中心地から少し離れた比較的人口の多い地域において、長い舟を使ってレースをする習慣はあったと思われる。特に、1941 年の競漕祭に参加し、優勝したチョムチェーン村、準優勝したシーターン・タイ村は、1883 年にヴィエンチャンを訪れたエティエンヌ・エモニエ(Étienne Aymonier)調査団員のカンボジア人２人が通過した村として記録されている。チョムチェーン村については、カンボジア人２人をヴィエンチャン中心部へ案内したガイドから別のガイドへチョムチェーン村で変えたと記録されているだけで、詳細については分からないが、シーターン村（タイは南、ヌアは北）には 30 数戸の住居があり、ラオ人が稲作を行い、塩を生産していたと記録されている[Aymonier 1895:210]。シーターン村はメコン川を挟んだ対岸の街ノーンカーイにも近いことから、ラオ人人口がある程度いたことは想像に難くない。なぜなら、ヴィエンチャンがシャムによって 1820 年代に破壊されたのち、商業的な部分は 1860 年までにメコン川の西側に集中しており、ノーンカーイはかつてのヴィエンチャンの経済的役割をほとんど担う商業都市に成長し、19 世紀末には 6,000～8,000 人の住民がいたからである[Askew,Logan and Long 2007:80-81]。フランスがメコン川を国境として 1893 年にラオスという国を制定するまで、シーターン周辺の村とノーンカーイ周辺の村は同じ生活圏にあり、慣習や文化を共有していたと言えるだろう。19 世紀末のノーンカーイを中心とした地域でどの程度の規模の競漕祭が行なわれていたのかについては明確な答えを持ち合わせないが、少なくとも廃墟である中心地に、ノーンカーイ近郊の村々が競漕祭のためだけに自主的に 20 キロ以上離れたワット・チャン前まで舟を運び、レースを行なっていた可能性は限りなく低いと思われる[30]。《ラオ・ニャイ》紙が創設された初年度の 1941 年にワット・チャン競漕祭が創られたのかという点についても、確証を提示できる資料は見つからないが、入手できた資料から考え合わせてみると、ワット・チャン前でおこなう競漕祭はフランス人入植後、かつて繁栄を誇ったとされるヴィエンチャンを想起させるものとして改めて再編された祭りであると言える。そして、競漕祭は毎年同時期に繰り返されることによって、「パペニー」すなわち「慣習」さらには「伝統」と解釈され、徐々に定着していったと考えられる。

ラオス刷新運動期における競漕祭とスポーツの関係性について最後に考察してみると、競漕祭は外部の目からみれば「スポーツ」の要素を含みつつ、「スポーツ」を表す「キッ

[30] 1896 年までヴィエンチャンの街は廃墟のままであったが、再度、地元の人々が住み始めており、再居住地は小さく、散らばっていたが、家々のグループによって成り立っていた。その当時の街中の住民は 1388 人である。居住区は地区の中心であるワット・インペン、ワット・チャンと中心から少し外れた地区のタート・カオ・シーターンのであった[Sayarath 2005:72]。このことからすると、ワット・チャンの周辺にも人は多少住んでいたことになるが、1902 年の出安居祭に競漕の記録がないことを考えると、やはり可能性は低いと思われる。

ラー」という単語が直接的に競漕祭の記事に見られることはなかった。競漕祭はむしろ、ヴィシー政権のスポーツ政策を支持し、スポーツ活動を推奨する人たちから、「あらゆる面で精神や意識の弱さを促進する」ものとして非難の対象とされたラオス人たちが、こよなく愛する歌を存分に取り入れ、愛国心を醸成する舞台であった。

第４章

ラオス王国独立後の競漕祭
（1953 年から 1965 年）

ヴィエンチャンの競漕祭に関する資料は、日本による仏印処理が行なわれた 1945 年 3 月を境に《ラオ・ニャイ》紙が発行中止となって以降、1953 年 10 月 8 日の《ラオ・プレス(Lao Presse)》新聞[31]まで管見の限り見つけることができない。1945 年から 1953 年までの間、ラオスは第２次世界大戦後の混乱期にあった。1945 年の仏印処理によってフランスがインドシナから一時的な撤退を余儀なくされると、4 月には名目的なものではあったが、日本軍の支配下にルアンパバーン王国の独立が宣言された[矢野 2013:70]。これを契機にラオス各地で抗仏独立の機運が高まりをみせ[ibid.70]、ペッサラート公をはじめとする各地の抵抗勢力は日本によって与えられた「独立」を維持するため、活動を活発化させる[ibid.71]。1945 年 9 月 15 日にはペッサラート公がラオス全土の統一と独立を宣言したが、フランスが再度ヴィエンチャンを掌握すると、ペッサラート公を含む独立運動を展開した「ラオ・イサラ」と呼ばれる勢力はタイへと亡命を図った。1946 年 8 月、フランス＝ラオスの暫定協定が結ばれると、ラオスはルアンパバーン国王であるシーサヴァン・ウォン(Sisavang Vong)のもと、ヴィエンチャン以南も含めたラオス王国として統合され、1949 年のフランス連合内における条件付きの独立を経て、1953 年 10 月 22 日のフランス＝ラオス連合友好条約調印をもってラオスの完全独立が成立した。1953 年時点におけるラオス政府の首相は、1949 年の条件付きの独立を機にタイへの亡命から帰国したラオ・イサラの穏健派であったルアンパバーン王族の一人、プーマ公である。アルシャンボーがヴィエンチャン競漕祭の調査を行ったのは、まさにこうした混乱期のひとつの終焉ともいえる完全独立が成立した 1953 年だった[Archaimabult 1972:26]。

４－１．アルシャンボーが記録した儀礼の分析(1953 年)

アルシャンボーが調査に入った 1953 年には、《ラオ・プレス》紙に競漕祭を含む祭りの詳細が掲載されている[32][Lao Presse 1953(8 October):8]。彼の本格的な調査が 1953 年に実施されたことを考えると[33]、アルシャンボーが事前調査で得た情報が新聞に掲載されるに至ったのではないかと推測できる。なぜなら、アルシャンボーが本格的な調査に入る前には必ず事前調査をある程度行なっていたということは、彼の評伝をものしたルモワヌ[34]の以

---

31 *Lao Presse:Bulletin Quotidien* は 1954 年から発行された日刊紙（土日を除く）であるが、*Khao khosanakan:Bulletin quotidien d'informations* という新聞が *Lao Presse* という副題のもと、1952 年から 1954 年まで発行されているため、ここでは統一して『ラオ・プレス(Lao Presse)』という題名を用いる。

32 研究者が本格的な調査に入った年に、調査対象となったものの概略が新聞や雑誌の記事に掲載されるという現象は、ラオスの伝統的なスポーツともみなされていたティーキーの調査にポール・レヴィが入った 1942 年にも見られる。1942 年発行の雑誌 *Sports-Jeunesse d' Indochine* にはティーキーの簡単な事実に基づく記述が見られている。[*Sports-Jeunesse d' Indochine,* No. 12 (20 Mar.1942):3]

33 Archaimbault 1972:26

34 ルモワヌは 1965 年にヴィエンチャンの競漕祭の調査を行い、その調査結果をアルシャンボーに提供している。また、1965 年当時の競漕祭の様子を撮影した映像をフランス国立科学研究セ

下の言葉に表れているからである。

> 儀礼を調査する際には、儀礼前にその主体となる社会やその場を形成し、それを実行する人々の個性、そして儀礼が行われる場所の設定や実施される行動の順番、その精神性、儀礼を司る主要な祭司について事前調査を行い、その全てを書き取り、調査帳を作成する。そして、当日には儀礼全体を追い、すでに事前調査で得た情報を元に参与観察を行う。さらに、各儀礼についての解説やコメントをしるし、儀礼自体が持つ構想の他に、その役割を超えた何かが存在しないかどうか探すのである。祭司が唱える内容についてはラオ語で記述し、その後記述したものを正確に再構成し、可能な限りその場で起きた状態を蘇らせる作業を行った。[Lemoine 2001:172]

この言を受けるように、《ラオ・プレス》紙の 1953 年 10 月 8 日の紙面には、彼が事前に知りえたであろう出安居祭りと競漕祭の儀礼を含んだプログラムが掲載されている。3 章で扱った 1941 年の《ラオ・ニャイ》紙に掲載された競漕祭は儀礼について何も記載が見られなかったが、1953 年には儀礼の概略的ではあるが詳細が掲載されているため、1941 年との比較も兼ねて 1953 年の出安居祭りを含む競漕祭のプログラムを以下に引用する。

1953年10月21、22、23日の出安居祭りならびに競漕祭　プログラム

1953年10月21日（水）
17時　ワット・オントゥに集合
18時15分
　パー・チャム・ナム・パンサー（Pha Cham Nam Phansa)」行列
　道順：ワット・オントゥ、Marechal Joffre通り、Doudard De Lagree大通り、Pavie河岸通り、Rouffiandis通り、Marechal Joffre通り、ワット・オントゥ [35]

1953年10月22日（木）
８時　ワット・オントゥにて僧侶へ喜捨

ンター(Centre National de la Recherche Scientifique)の映像図書館に残している。

[35] Marechal Joffre 通りは現在のセーターティラート通り、Doudard De Lagree 大通りはクン・ブロム通り、Pavie 河岸通りはファーグム通り、Rouffiandis 通りはマホソート通り。
1968 年の競漕祭においてはすでに通りの名前が変更されており、道順が少し変更されている。道順はワット･オントゥからセーターティラート通り､ラーンサーン通り､サムセーンタイ通り、クン・ブロム通り、セーターティラート通りに戻りワット・オントゥとなっている[Sat Lao 1968(16 September):1,10]。

９時　村ごとの寺院にて僧侶朝食

10時　ドン・チャン砂州、ター・サイ・ムイ(Tha Say Moui)、ホー・カム岸ホー・タドゥア・ハーン(Tha Deua Hane)、パサック河口、そしてター・ポー・ピアック(Tha Pho Phiak:メコン川岸)の精霊たちに奉納[36]

21時30分

灯りの灯された筏と打ち上げ花火の筏の着水

ワット・チャンにて音楽、歌、そして大衆娯楽

1953年10月23日（金）

10時　ボートレース（女性チーム）

14時　ボートレース - 決勝戦

21時　灯りの灯された筏と打ち上げ花火の筏の着水

ワット・チャンにて音楽、歌、そして大衆娯楽

[Lao Presse 1953(8 October):8](各場所については巻末地図１を参照)

既に指摘した通り、1940 年代の競漕祭に関する記事と大きく異なる点が儀礼に関する情報であるのは一目瞭然である。上述のルモワヌの言葉から窺えるように、アルシャンボーの関心は常に儀礼にあった。彼がラオスに滞在していた間、精力的におこなった調査の研究成果をみれば、その関心の中心に儀礼があったことは明らかである。アルシャンボーは、目の前で繰り広げられる仏教的な儀礼の背後に残っている精霊崇拝や土地固有の力こそを重要視していたと、2000 年秋におこなわれたコンドミナスとグディノーを交えた鼎談の中で語っている[Condominas & Goudineau 2001:9]。また、そうした儀礼はさまざまなことを含む神話や歴史と深く繋がっており、神話や歴史が一種の想像体のタンクのようなもので、「実存する現実は、神話や歴史の想像体によってのみ創造され、活用されると思う」とも述べている[ibid.9]。彼の信念を研究として結実させるためにも、神話や歴史と結びつけて分析する際に最も重要なテキストとなる儀礼について、アルシャンボーは注意深く正確に記録することを心がけていた。その姿勢はすでに第１章３節２項で引用したルモワヌの言葉にも読み取ることができるのである。

こうしたアルシャンボーの信念と研究姿勢が貫かれた競漕祭に関する研究も、当然のごとく詳細な儀礼が記録され、ヴィエンチャンに関する神話や歴史と結びつけられて競漕祭の構造が分析されている。目の前の現実に起こっている儀礼が、ラオス人の神話や歴史の

[36] Tha Say Moui は 16 世紀に暗殺されたヴィエンチャン知事に捧げられた祠で現在はインターナショナル・クリニックの近くに位置している。ホー・カムはかつて王が居住していた場所で現在の大統領官邸。ホー・タ・ドゥア・ハーンは現在のホー・カーン。パサック河口にはナーガ・インタチャックナーク(Inthachakkhunag)とパシティティサーカー神(Pasitthithisaka)およびラッタナケシ神(Rattanakesi)に捧げられた祠がある。ター・ポー・ピアックの祠はクンター村にある。[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:59]

どのような想像体として現われているのかを読み解くことに主眼を置いていた彼にとって、儀礼がいつどのように始まったのかは問題ではなかったと言えるかもしれない。しかし、前章で考察してきた通り、フランス人が入植したヴィエンチャンの状況を考えれば、ヴィエンチャンの競漕祭が 1953 年にアルシャンボーが見たような形で存在していたのか自体が疑わしいと言え、彼が観察した儀礼に及んでは、いくつかの点において更に疑問が浮かんでくるのである。本章では、現在の競漕祭では消失している儀礼について、アルシャンボーの記述および《ラオ・プレス》紙の記事をたどりながら 1950 年代の競漕祭について再検討していく。

アルシャンボーの競漕祭研究におけるヴィエンチャン競漕祭の書き出しは、第１章３節２項に見た通り、いささか疑問の残る書き出しで始まっているが、それに続くアルシャンボーが観察した 1953 年の競漕祭の主要な儀礼は次のようなものであった。観察された儀礼の全体像を描くために必要と思われる儀礼の箇所をそのまま以下に引用する。

> 第11月の上弦15日、朝9時、川沿いの２つ村の舟が前日に設けられた貴賓席の正面であるワット・チャン埠頭に接岸する。これらの舟は、郡（ムアン Muang）と県(クウェーン Khueng)全体を代表している。どこの村の舟でもこれらの役割を果たすことができる。私たちが調査を実行した1953年は、スワン・モーン村とボーオー村がこの役目を負っていた。
>
> 出発の前に、スワン・モーンの祭司が舟に対して非常に簡単な手順で舟へ供物を捧げた。なぜなら、前週に村同士で行う競漕に参加するため、すでに舟を着水させていたからである。ヴィエンチャンでは、チャオ・ムアン（郡長）である儀礼服に身を包んだ名士と街を守護しているスカンタナーガ(Sukantanaga)の祠で儀礼をおこなう祭司が漕ぎ手たちをもてなす。権限をもっているチャオ・ムアンと祭司がかつての王室の漕ぎ手(シーパイ Sipai)が着用していたものを模した赤い上着と緑色に縁どられた赤い帽子を漕ぎ手たちに渡す。楽器である太鼓と木琴は県の舟とみなされているスワン・モーン村の漕ぎ手に任せられる。この舟には儀礼の祭司（チャム）が乗る。ろうそく、バナナの葉で筒状にしたもの、花をセットにしたもの13セットを入れたカップをもつチャオ・ムアンは、郡を代表するボーオー村の舟に乗る。
>
> これらの舟は埠頭を離れて、砂州を迂回する。彼らは直接その砂州に向かうことができない。なぜなら、スワン・モーン村の守護霊が住むとされる廃墟となった桟橋の下を通らなければならないからである。一方、ボーオー村の漕ぎ手たちはこれらの迷信をものともしていない。ボーオー村の舟は、彼らが言うには、チャオ・ムアンであるコーラニョック(Koraniok)氏の注文によって作られたものであり、彼が忠実な仏教徒であるために精霊を信じておらず、この舟にも精霊は宿っていないと考えているという。そのため、舟を着水させる際にも舟への捧げも

のは行わない。彼らは村の守護霊について、村の守護霊ムン・カム(Mun Kam)は彼の息子であるタオ・マン(Tao Mang)、 タオ・テン・カム(Tao Teng Kam)、カム・ヴォン(Kam Vong)と共にナーガの国に住んでいると簡単に述べた。もし競漕に勝利したら、村の守護霊には供物を捧げなければならない。砂州では、チャオ・ムアンが祭司にカップを渡す。櫂をもった漕ぎ手たちを従えて、２人の男はかつてスカンタナーガの祠があった、現在は数本の杭を残すだけの場所に向かう。１つの杭に祭司は灯りを灯したろうそくを固定する。彼は３回跪き、顔の高さにカップを持ち上げる。彼を囲んでいる漕ぎ手たちは、櫂にもたれかかり、ナーガのために大きな雄叫びをあげる。祭司はそれから領域を守る守護霊たちを招待する文言を唱える。その守護霊の中には、シェンドーン・シェントーン(Sieng Dong-Sieng Tung)[37]の蛇精もいくつか含まれていた。この守護霊を招待する儀礼は学識者内で伝わる伝統であることを記しておく。祭司は暗唱することが不可能であるテキストを読み上げる。カーン・スワイ（Kan Svai）もしくはクン・ブロム年代記に帰する、膨大な数にのぼるナーガの（固定した）住処を暗唱することは不可能である。

ここに招待する神格の名を翻訳する：

森、山、洞窟、洞穴、水中、池、深い水の中に住むすべての守護霊（テーワダー Devata）よ。インドラ(Indra)、パーナー・ノーマラート(Pana Nommalat 地獄の判官)、４方向の守護霊(guardians)、空中そして陸上の守護神(divinities)、地獄の下層部アヴィシ(Avici)に住む守護神(protective deities)、そして宇宙の上層部に住む無数のものたちよ。南はリー・ピー(Li Phi)、西はアユタヤ、東はアンナンにおよぶ偉大なるラーンサーン王国に住むものたちよ。

クー・ヴィエン山(Ku Vien)にすむ偉大なスヴァンナナーガ(Suvannanaga)

ブア・バーン池(Bua Ban)に住むクーットタパパナーガ(Kuttotapapanaga)

ルアン山(Luong)に住むバンパタラナーガ(Banpatalanaga)

ヴォン・スック(Von Suk)のスッカラナーガ(Sukkalanaga)

プッタヴォンサ森(Puttavongsa)に住むカヤコハナーガ(Kayakohanaga)

サーク穴(Sake)に住むエーカチャックナーガ(Ekacakkhunaga)

カント池(Kante)に住むセータサイナーガ(Setthasainanaga)

（この池にはピー・スア・ナム(Phi Sua Nam)がいる。ピー・スナ・ナムは水の守護霊で、ナーガ以外のものではない)

ドン・チャン砂州に住むスカンタナーガ(Sukantanaga)

ヤイ・カム池(Yai Kam)に住むサハートサカラナーガ(Sahatsakalanaga)

---

37 シェンドーン・シェントーンとは、ルアンパバーンのことである。ルアンパバーンという名になる以前、同地はシェンドーン・シェントーンと呼ばれていた[Stuart-Fox 1997:9]

ター・ナー・ヌア(Ta Na Nua)のカンタパナーガ(Kantapanaga)
ター・ナー・タイ(Ta Na Tai)のシーティコナーガ(Sittikonaga)
コック・カム(Kok Kam)のシリヴァッタナーガ(Sirivatnaga)
シーマンカーラー支流(Simangkala)の河口に住むインタチャックナーガ(Intacakkhunaga)
（砂州の）上空にいる神テーワダー・インタシリシェムパーン(devata Intasiriciempang)
王の宝を守る神テーワダー・パラシッティサーカー(devata Palasittisakka)
女王の宝を監視するラタナクシ(Ratanakesi)
スカンタナーガ(Sukantanaga)の池に住む神テーワダー・マツナリ(devata Matsunari)
カンフィオン(Kanfiong)の南の池に住む神テーワダー・インタパンフィオン(devata Intapanfiong)
囲いをされた池に住むサーラー(Sala)
６人の神(deitiies)の息子
仏陀の胸骨を納めるタート・パノム(Tat Panom)を守護する３人の偉大なる精霊
1000人の奴隷に囲われた場所の上空を守るヴィシィタレーカー(Vicitalekka)
1000人の従者と北方を守るヴァナートサカム(Vanatsakamp)
500人の従者と東方を守護するサルターカー(Salutaka)
500人の従者と南の境界を守護するプーマパティルーカー(Pumapattilukkha)
500人の従者と西を守るポーティパティリカー(Potipattilikkha)
低い場所に住み500人の忠実な従者たちと５人の国王の広場を守るスンタトラーニ(Suntatorani)
不思議な力をもつ3人の東の守護神(deities)
チャオ・ムアン・クアー(Cao Muang Khva)の称号をもつターキラナラータ(Takkhiranarattha)
チャオ・ムアン・セン(Cao Muang Sen)の称号をもつサータサラータ(Sattasarattha)
ナム・セー(Nam Se)の南東の河口を守るチャオ・トン・クワン(Cao Tong Khvang)、もしくはナーカートゥタッヴィ(Nakatuttavi(thala)
ナンタ・カンリ(Nanta Kangli)（ナーン・カーン・ヒ Nang Kang Hi)丘に住むシーサッタナーガ(Sisattanaga)
野性猫の洞窟に住むシュスヴァナナーガ(Csuvannanaga)（ウスパナーガ Usupanaga)
コーン・カム(Khong Kam)という場所のナム・カディン(Nam Kadin)に住むサトン(Saton)という名の蛇精(nguok)の王

ナム・ムン(Nam Mun)に住むタナムンラナーガ(Tanamunlanaga)
ナム・グン(Nam Ngun)の合流点ナム・シー(Nam Si)に住むのナーガ王
チャンタブリシサッタナーガ(Cantaburisisattanaga:要するにヴィエンチャン)の領域の仏塔をを守る全ての守護神よ
私たちはあなたたちをここに招きます。
教訓と教えを聞くために参加してください！
チャムは跪いて付け加える「ボートレースの時期がやってきました。私はあなた、ナーガ王たち、テーワダー（神）、すべてを招待します。どうぞ領域に住む住民をお守りください。そして舟が転覆しませんように！」

漕ぎ手たちは、チャムが跪いて花を入れたカップと２つの小さなバナナの葉で作った三角錐のスウェイ(suei)を古い杭が残る場所に捧げている間、スカンタナーガを讃えて喜びの雄叫びをあげている。祭司とチャオ・ムアン、漕ぎ手は舟に戻る。スワン・モーンの舟は橋の下をくぐり抜けることができないので、岸辺のすべての精霊の祠に祈りを捧げなければならないチャムは舟を変え、ボーオーの舟に乗る。スワン・モーンの舟がワット・チャンに帰着し、岸に縄を掛けている間、ボーオーの舟はアメリカ大使館の正面に舟をつけた。この岸辺には、かつてチャオ・サムイ(Cao Samui)という守護霊に捧げていた祠がある。チャムはこの場所にバナナの葉で作った三角錐のスウェイを捧げ、ぶつぶつつぶやく。

「１年のこの時期がやってきました。私たちはこの場所の主であるあなたに報告しにきました。私たちをお守りください！私たちが健康でいられますように！」

それから舟は元々ラオの寺であった小さな中国寺の近くに接岸する。イチジクの木の祠（Ho Dua Van）もしくは真ん中の祠（Ho Kang）という。チャムは寺の中に入り、休むことなく、中国の神の前に火を灯したろうそくとカップをセットし、２つのスウェイをカップの近くにおいて、同じ文句をささやいた。舟は岸に沿って進み、ナム・パー・サック(Nam Pha Sak)の河口で止まった。この場所は、競漕の際のスタート地点が設定される河口の近くである。この場所には２つの祠がある。ホー・シィマンカーラー(Ho Simangkala:Sri Marigaux)とホー・ポー・ピアック(Ho Po Piek)である。チャムは両方の祠に火を灯したろうそくとバナナの葉で作った三角錐の供え物を捧げた。チャムは祠の前にしゃがみ、手を合わせて、祈りを捧げ、舟に乗り込んだ。今まではゆっくり舟を漕いでいた漕ぎ手たちは、まるで競漕をするかのようなスピードで舟を漕ぎ始めた。舟はワット・チャンの港に接岸する。祈りを捧げる儀礼は終了した。これらの儀礼は、（毎年選ばれる）郡と県を代表する村によって変化する。

[Archaimbault 1972:26-28]

以上が1953年の主要な儀礼である。この儀礼の規模を考えると、1953年以前にヴィエンチャン競漕祭の研究がアルシャンボー以前のEFEOのメンバーによって為されなかったことに加え、旅行者や植民地官吏官の記録にも記述が見られないのは不思議な現象といえる。また、この儀礼の記述には、フランス人入植以降に創られた考えられる点がいくつか存在する。

１つ目は、儀礼を担う２つの舟が、郡（ムアン Muang）と県(クウェーン Khueng)を代表しているという点である。ムアンという行政単位は、フランス人入植以前からラオスの地に存在していた自律的政治単位[増原 2011:29]のようなもので、少なくともフランスが最初にルアンパバーンを保護国にした1893年時には、すでに土着の社会政治的な構造が存在しており、ルアンパバーン王国は、ムアンとよばれる県(province)に分けられ、チャオ・ムアンと呼ばれる長によって治められていた[de Reinach 1901:493, Lebar, Hichkey and Musgrave 1964;218]。ヴィエンチャン地域においても、かつての王国の中心部はフランス人入植時に廃墟であったものの、フランス人が入植する以前の1890年には「ムアン・チャッタワー」という行政的なランク付けのもと、メコン川右岸のノーンカーイに帰属するムアンとしてシャム王国に統治されていたことが分かっている[Sayarath 2005:48]。現在の「県」を表すクウェーンという言葉が、いつ頃から使われ始めたのかについて明確な答えを持たないが、フランス人がラオス入植後にラオスを14地区の行政区分に分けた際、県を示すであろう単位をprovinceとフランス語で表し、その下の行政区分にムアン(Muoung)というラオ語の名称を使っている点に鑑みると[de Reinach 1901:286-300]、いくつかのムアンをまとめた行政区分である県に対するラオ語の名称はフランスによって制定され、クウェーンという名称が用いられた可能性が高いと思われる。マーティン・スチュアート・フォックス(Martin Stuart-Fox)も著書『ラオスの歴史』において、1904年時点のルアンパバーン王国は「幾つかのクウェーンに分けられ、それぞれ各地の有力な貴族、チャオ・クウェーンによって統治されており、チャオ・クウェーンは３人の世襲的な役人に補佐されていた」[Stuart-Fox 1997:31]というさらに彼は、「幾つかのクウェーン」のあとに括弧書きで「当初はまだムアンとして認識されていた」と説明を加えている。クウェーンという名称がラオスの地にかつて全く存在しなかったかというと、そうではないことがマイケル・ヴィッカリー(Michael Vickery)の研究に見ることができるが[Vickery 2003:14][38]、そ

[38] ヴィッカリーは1848年から1851年の間に東北タイで編纂されたと考えられる『ポンサワダーン・プー・キアオ(Phongsavadan Phu Khiao)』と題する年代記を分析している。その年代記の一節に、「世代を通じて語られてきた話によれば、ムアン・プー・キアオ(Mueang Phu Khiao)は長い間森であった。そこは王の領地であった。クウェーン・ムアン・ヴィエンチャン、ムアン・パン、バーン・カルーム(Khvaeng Mueang Vientiane, Mueang Phan, Ban Kaluem)にナイ・マーという男がいた。彼は猟師であった」[Vickery 2003:3,13-14]という記述があり、ムアンよりも大きな範囲を示す区域にクウェーンという名称が使われていたことがわかる。クウェーンという単語は、1846年にシャムで刊行された“A Dictionary of the Siamese Language”（J.Caswell編)にも見られることが増原善之さんのご教授により判明しており、19世紀のシャム王国においては、クウェーンという単位が使われていたことが推測される。

もそもフランス人入植前にラオスとしての国の形を持たなかった地に国境線を引き、ラオスの国の形を成立させたフランスによって、14地区に分けられた領域が古くからクウェーンと呼ばれる行政区分であったとは思われない。1953年までの競漕祭がラオス刷新運動期以降、どのように展開されたのかについて知ることができる文献が見当たらないため、明確な指摘はできないものの、２艘の舟が「クウェーン」と「ムアン」を代表する舟として競漕祭の儀礼を担い始めたのは、少なくともフランス人入植後、更にはラオス刷新運動期以降ではないかと推測される。

２つ目は、そのクウェーンすなわち県を代表する舟の漕ぎ手たちが着用する衣装に関する記述である。アルシャンボーは「かつての王室の漕ぎ手が着用していたものを模した、赤い上着と緑色に縁どられた赤い帽子」[Archaimbault 1972:26]と述べているが、こうした衣装は、北部および南部王室の儀礼時に実際着用されていたことが写真や絵などから確認できる[39]。だが、断絶したヴィエンチャン王国のことを指して「かつての王室の漕ぎ手」をアルシャンボーが意図しているとすれば、その連続性には無理がある。また、王室の漕ぎ手が赤い衣装を着用し舟を漕ぐのはルアンパバーンの伝統であると言える。ルアンパバーン王国の競漕祭において、王室付き兵士たちは赤い装束を身にまとい、王が乗船する御座船の右の舟を漕ぎ、王室付きの警察官たちは緑の装束を身にまとい、御座船の左の舟を漕いでいた[Hashimoto 2008:227]。また、ルアンパバーン王国の新年の祭において、プラバーン像を王室からマイ寺へ運ぶ役目を担う兵士たちも赤の装束を身につけており、王室を代表する者たちの装束に赤が用いられるのは、ルアンパバーン王国の伝統的な儀礼や行事において見られる光景である。ルアンパバーン王国の王がヴィエンチャンへ最初に赴いたのは、1941年8月にルアンパバーン王国の直轄地としてヴィエンチャンが組み込まれて以降の10月である。その時の様子を、《ラオ・ニャイ》紙は「ルアンパバーン王国とヴィエンチャン県が真に接近する時がきた」と報じている[Evans 2009:9]。1941年以前、ルアンパバーン国王の旅行は国の北部に厳しく限定されていたが、1941年以降、王はヴィエンチャンで開催される国家的な儀礼、その中でも特に王への忠誠を誓う宣誓式が行なわれるタートルアン祭りには参列していたことが分かっている[ibid.175]。忠誠宣誓式はタートルアンを建造したセーターティラート王と縁の深いワット・オントゥ[40]で行なわれていたが、その宣誓式の警護にあたる王室付きの兵士や警官たちの服装は、1969年にアメリカ人人類学者ジョエル・ハルパーン(Joel Halpern)によって撮影されたの写真では、赤と緑であった。1941年当初から、赤と緑の装束がルアンパバーン王室の伝統としてヴィエンチャンで行なわれる儀礼においても用いられていたかどうかは分からないが、ルアンパバーンの王がヴィエンチャンの儀礼に関与を深めて以降、1827年に破壊されたヴィエンチャン王国の王室がルアンパバーン王国の王室と重なり合い、競漕祭に出現する「かつて王室の漕ぎ手が着

39 多くの場合、写真や絵はモノクロであるため、色の識別まではできない。
40 セーターティラート王の治世に創られた仏像が収められている。また、ワット・オントゥの敷地内に 1931 年仏教研究所がフランスの支援により建てられている。

用していたものを模した」装束は、ヴィエンチャンの競漕祭が伝統あるものとして語られる要素を深めていったと考えられる。

３つ目は、アルシャンボーが精緻に記録した、メコン川の中ほどに位置するドン・チャン砂州で、ヴィエンチャン領域を守る守護霊たちを招待する儀礼において、祭司が述べた文言である。「この守護霊を招待する儀礼は学識者内で伝わる伝統であることを記しておく。祭司は暗唱することが不可能であるテキストを読み上げる。カーン・スワイ（Kan Svai）もしくはクン・ブロム年代記に帰する、膨大な数にのぼるナーガの住処を暗唱することは不可能である」[Archaimbault 1972:27]通り、非常に長く細かい文言となっている。ここでアルシャンボーが言及している「カーン・スワイ」とよばれる文言は、守護霊を招待する儀礼の最初の部分にあたるが、この「カーン・スワイ」もルアンパバーンの伝統であり、1975年の革命成立前まで王が列席のもとにおこなわれたワット･オントゥの宣誓儀礼で唱えられたものである[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:46]。ワット・オントゥで忠誠を誓う宣誓儀礼において唱えられた「カーン・スワイ」はルアンパバーンの伝統に則るものではあったが､全国の政府関係者が集まり､ラオス全体の一致を図ることを目的としていたため、この儀礼においては、ルアンパバーンの守護霊に加え、チャムパーサック、アッタプー、タート･パノム､そしてヴィエンチャンの全ての神も召喚される内容となっていた[ibid.47]。しかしながら、このような場に合わせた変更はありつつも、ここにも２つ目に指摘した装束に関連し、ルアンパバーン王室との関連性が見られるのである。

また、忠誠宣誓式がおこなわれるワット・オントゥが、競漕祭においても王族と関係性が深かったことは、1955年の出安居祭に、ルアンパバーン王室の皇太子であるサヴァン・ワッタナーと、皇太子の娘であるサヴィヴァン(Savivanh)皇女たちがワット・オントゥで僧侶たちに喜捨を行ない、競漕祭にも参列したことからみてとれるのである[Lao Presse 1955(3 October):4][41]。ヴィエンチャンにおけるワット・オントゥは王室との関わりが深くなる中で、出安居祭りにおいて重要な拠点となっていき、1958年以降、出安居祭の前日に行なわれるヴィエンチャン市内を巡るパー・チャム・ナム・パンサーと呼ばれる行列は、ワット・オントゥを基点にヴィエンチャン県知事主導のもと政府官吏や商人、軍や警察、一般市民が列をなして巡るものとなっていった[Lao Presse 1958(29 October):3,1959(17 October):A-1,1965(12 October):A-1][42]。

---

41 伝統的な君主制を近代的なものへと改造するため、国民が王室を目にする機会を増やすことを目的とした王室旅行 Royal tour が 1950 年代を通して行なわれており、1956 年には皇太子の国内旅行をドキュメントした The Crown Prince and the Lao People という特別冊子が制作されている。1950 年代のラオスにおけるマスメディアは限られていたため、皇太子の旅に政治家たちが同行することは、現行の政策を役人たちや国民に説明することを一つの目的としていた[Evans 2009:175]。

42 1965 年の出安居祭がおこなわれた 10 月 10 日の朝には、首相、国会議長、ヴィエンチャンの政府高官、軍、市民がワット・オントゥに集まり、僧侶の読経を聞いている[Lao Presse 1965(12 October):A-1]。『ラオ・プレス』の競漕祭に関する記事は 1961 年から 1964 年まで欠損しているため、その年代の様子は分からないが、1965 年以前にワット・オントゥに主要関係者が集ま

４－２．儀礼における文言（守護霊の召喚句）の分析

前項で引用したヴィエンチャン競漕祭時にドン・チャン砂州で唱えられた文言は、「カーン・スワイ」に続き、ヴィエンチャンを中心とした内容なっており、『サケー・テーワダー(Sakheh Thevada)』として知られているテキストに基づいている[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:46]。この『サケー・テーワダー』というテキストについてアルシャンボーは言及していない。おそらくその存在を知らなかったものと思われ、文言の中で唱えられたナーガたちの分析は、『ウランカタート』と『プン・ターン・テーン・サーン・コー・ムアン・シーサッタナーガ（ヴィエンチャン年代記)』[43]を元に行なっているが、アルシャンボーはこれら２つの引用文献よりも実際に儀礼の祭司が述べた文言(avertissement)に表されているナーガや蛇精(Nguok)のリストの方が詳細であり、基部に存在する学識ある伝統が北部ラオスよりももっとダイナミックなものであると評している[Archaimbault 1972:33]。この「学識ある伝統」ならびに「学識者内で伝わる伝統」が多分に感じとれる儀礼の文言が記されたテキスト『サケー・テーワダー』は、一体いつ頃から存在していたのであろうか。

マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナー(Mayoury and Pheuiphanh Ngaosrivathana)によれば、『サケー・テーワダー』のテキストは、1962年にカムポン・ピラヴォン（Khamphon Philavong）によって初めて出版されたという。彼の本の中で複製したテキストの内容は、かつて僧侶であったマハー・ヌアン・ウテンサークダー（Maha Nuan Uthensakda）が口伝をタイプした資料に依っている。しかし、この口伝テキストがいつ頃書かれたものであるのかははっきりとしていない。ガオスリヴァッタナーは数人の老人たちにこのテキストが書かれた時期について尋ねているが、老人たちは地元寺院の見習僧もしくは僧侶として修業していた時に初めて書き留めたと記憶しているだけだともいう。ガオスリヴァッタナーは「この祈りはおそらく口伝として代々伝わってきており、推測するに、それゆえ、過去においてはかなり広範囲で知られていたであろう」と述べているが、老人たちがどこの寺でいつ頃修業をおこなっていたかについて記述しておらず、過去がどの程度の過去であるかについては述べていない[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:44-46]。

って読経を聞くといった記事は掲載されていない。ラオスの内戦が激しくなっていった1960年代に王国政府側の関係者がワット・オントゥに集まったことは、その時期までにワット・オントゥの象徴的な重要性が認識されていたからだと思われる。また、1970年以降、停戦交渉に入る1973年の前年である1972年までヴォンサヴァン皇太子夫妻も毎年ヴィエンチャンの競漕祭に参列する際、出安居の朝にワット・オントゥで喜捨をおこなっていた。

43 「アルシャンボーは、文語的な意味としては「ムアン・シーサッタナークの創設年代記」となる「プン・ターン・テーン・コー・サーン・ムアン・シーサッタナーガ Pun tang teng ko sang Muang Sisattanaga」をヴィエンチャン年代記として間違えて参照しているが、本当のヴィエンチャン年代記は「プン・ムアン・ヴィエンチャン Phuen Muang Vientiane」という写本である」とガオスリヴァッタナーは指摘している[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:14]。

しかし、仏教と密接に関係する文献『ウランカタート』『サケー・テーワダー』、ならびにアルシャンボーがこの儀礼の文言の出典としてあげている文献の１つ『クン・ブロム年代記』に関連してひとつの関係性が見えてくる。ラオスにおける『ウランカタート』[44]の原本は、1967年にラオス宗教省に勤めていたマハー・シラー・ヴィラヴォン(Maha Sila Viravongs)[45]によって出版されているのだが[ibid.12]、そのシラー・ヴィラヴォンと『サケー・テーワダー』の元となる資料を残していたウテンサークダーは、1960年に共著で『ニターン・クン・ブロム・ラサティラート(Nithan Khun Borom Rasathirat)（クン・ブロム年代記）』を著している。この２人がラオスの仏教界においてどのような活躍をしたのかが鍵となりそうであるが、残念ながら『サケー・テーワダー』の元となる資料を残したウテンサークダーについてはほとんど分かっていない。しかしながら、もう一方のシラー・ヴィラヴォンは1930年代始めからラオス仏教界の再生に深く関与した著名な人物である。

ラオス仏教界の再生に関わる動きは1920年代からみられ、その端緒はワット・シーサケットの修復に関連していた。アヌ王によって建てられたワット・シーサケットの修復にあたって、フランスは当初、ワット・シーサケットを博物館にする計画を立てていたが、ペッサラート公を含むラオス人官吏やラオス人僧侶の反対に会い、その計画はペッサラート公たちが望む方向へと変化していった。ペッサラート公たちは、ワット・シーサケットをヴィエンチャン地域の指導的立場にある僧侶たちの住まいとし、これまで宗教儀礼や祝典のためにシャムへ出向いていたラオスの僧侶や仏教徒たちをワット・シーサケットに惹き付け、儀礼を執り行う中心地としてワット・シーサケットを復興させようと意図していたのである[Ivarsson 2008:122]。更には、バンコクの僧侶長をラオスの寺へ赴かせることによって、宗教界におけるラオス地域の重要性を象徴的に「再獲得」する目的も含まれており、こうした計画はフランス人現地官吏の賞賛を受けたほどであった[ibid.122]。

1928年のラオス仏教聖職者組織の再編、および1929年のパーリ語学校の建設[46]はラオスにおける宗教再生計画の一部となったが、更に再生を押し進めたのはヴィエンチャンに1931

---

44 『ウランカタート』は貝葉の形で寺院に保管されていたと考えられるため、1967 年以前にもテキストとして存在していたと思われる。アルシャンボーが参照している『ウランカタート』は EFEO 所蔵の写本であるが、写本が EFEO の収蔵となった年代を明記していないため、いつ頃の写本なのかについては不明である。ただし、同じ EFEO の研究員であったルイ・フィノ(Louis Finot)が 1910 年代中頃にルアンパバーンにおいて写本研究を行なっており、当時入手できるラオ語写本の一般的なリストを EFEO の機関誌である BEFEO に 1917 年に発表していることを考えると、フィノの調査によって収蔵された可能性がある。フィノは発表の中で『ウランカタート』について「仏陀の予言や輪廻、奇跡に関する編集が支離滅裂である」と述べている(Finot 1917:153)[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:12]。

45 1905 年 8 月東北タイのロイ・エット生まれ。1929 年ヴィエンチャンに図書館とパーリ語学校ができると聞き、ロイ・エットからヴィエンチャンへ移り住んでいる[Viravongs 2004:45]。

46 同時期に建設された図書館とパーリ語学校の長はペッサラート。パーリ語学校は現在のホー・カムすなわち大統領官邸の場所に建てられた[Viravongs 2004:45]。パーリ語学校では、設立後の 1 年間バンコクで修行を積んだニャー・ポー・マハー・ケオ(Nya Pho Maha Keo)がパーリ語の先生をしていたが、1 年後に高齢のため引退した。その時点でパーリ語の研究ならびに授業を行なえるほどの知識がある人物はひとりもいなかったとシラー・ヴィラヴォンは記述している

年2月に創設された仏教協会である。[Viravongs 2004:45, Ivarsson 2008:123, Ivarsson and Goscha 2007:62]。仏教協会は古いラオスの宗教に関する写本を収集・翻訳する施設であり、また、新しいテキストの編纂を行ない、新しい世代のラオス人僧侶を訓練する施設でもあった。協会の開設は、「ラオス人の知的発展にむけた新たなる時代」の幕開けとして祝福され、その初代ラオス人局長にペッサラート公が就任し、ペッサラート公の個人秘書になったのがシラー・ヴィラヴォンである[Ivarsson and Goscha 2007:62]。シラー・ヴィラヴォンは作家・翻訳家・編集者としてラオスにおける宗教研究のための多くの教科書に携わると共に、ヴィエンチャンの仏教協会が当初の目的として掲げていたラオス式の仏教の復興に深く関与した人物である[ibid.62]。

シラー・ヴィラヴォンは1931年にパーリ語学校に教師が誰もいなくなると、ペッサラート公に任じられてパーリ語学校の教師となり、その後精力的に学校で使用する教科書を編んでいる[Viravong 2004:47,49]。1930年代、シラー・ヴィラヴォンはパーリ語や仏教に関する著作を多く残しているが、パーリ語を教えるために必要なラオ語の正書法に関する議論にも積極的に参加し、1930年代から70年代始めにかけて、ラオスの文学・言語・歴史ならびに宗教実践に関する幅広い学術的な研究を発表している。彼はこれらの研究を通して、ラオスの伝統的な文化の再創造を行なうと共に、ラオス人に自らの歴史的・文化的伝統を認識させるため、過去がいかに現在を作っているのかを伝える媒介として活躍していた[Koret 1999:234]彼が、1930年以降、仏教の復興のみならず、60年に亘りラオス文化に非常に大きな影響力をもった人物と言われている所以である[Ivarsson and Goscha 2007:62]。

こうしたシラー・ヴィラヴォンの姿勢は、1930年代から40年代にかけてペッサラート公がラオス人のアイデンティティを創り出し、ラオスの歴史や文化に対する関心を復興させようとしていた動きと見事に連動している。ヴィエンチャン競漕祭がワット・チャン前で行なわれた記事も、1941年から始まったラオス刷新運動と連動して登場していることは前章で確認したが、53年の競漕祭で観察された儀礼およびアルシャンボーに「学識者内で伝わる伝統」と認識された文言が、1941年時点の競漕祭においても存在していたとするのは、はなはだ疑問である。存在を示す明確な文献を見つけることができないため、仮説の域を出ないが、1953年に見られたような儀礼は40年代以降にラオスの伝統文化の復興、ラオス人アイデンティティの確立といった活動の流れの中で、徐々に創り出された、もしくは再構成され復興されたと考えられる。繰り返しになるが、フランス人がヴィエンチャンに入植した時点の状況を考えると、知識層と考えられる人々が活躍し始めたのは、早くとも1930年代、そしてフランスが特に政策的に支援した40年代以降のことと考えられる。この年代は、ルアンパバーン王が

[Viravongs 2004:45,47]。このパーリ語学校はペッサラートとラオスサンガの僧侶長ならびにヴィエンチャン知事であったソムデット・ルーケオ・ウテンサークダー(Somdet Phra Loukeo Uthensakda)によって創設されたとの説もある(http://laoscollege.wordpress.com/about/ 2014/9/23 閲覧)。ウテンサークダーという名字は、『サケー・テーワダー』の元となる資料を残していたヌアン・ウテンサークダーと同じであるため、何かしらの関係があったものと思われるが詳細は不明である。

ヴィエンチャンへ赴き、タートルアン祭の一部としてワット・オントゥで執り行われる王への忠誠宣誓式に参列し始めた時期とも重なる上、既に指摘した通り、ワット・オントゥの宣誓式と競漕祭における漕ぎ手の装束、儀礼の文言にルアンパバーン王室との関連性が確認できるのである。

シラー・ヴィラヴォンが「ヴィエンチャン王」の異名をもつペッサラート公の右腕となり、ペッサラート公と同じくラオスの歴史や文化の復興をめざしていたことは明らかであるが、競漕祭の儀礼で述べられたヴィエンチャン領域の守護霊を召喚する文言と、シラー・ヴィラヴォンとの確固たる関係性を明らかにするのは困難である。しかしながら、儀礼の文言で言及されたナーガや蛇精の住処についての情報は、アルシャンボーも分析する際に引用している通り、その多くを『ウランカタート』に拠っている。マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーによれば、1967年にラオス国内で初めて出版された『ウランカタート』の原本はシラー・ヴィラヴォンによるものであったという[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:12]。

シラー・ヴィラヴォンはラオス刷新運動期である1941年から45年まで、フランスの手から逃れるためタイへ亡命している。これは、大タイ主義に迎合する活動の嫌疑によってフランス当局に逮捕されそうになってのことであった。この時期、彼はバンコクにあるタイ国立図書館の北・東北文学部門に職を得て[Soontravanich 2003:120]、特にラオスのヴィエンチャンとタイのチェンマイに関する伝統文学の研究に従事していた[Viravongs 2004:57]。その亡命中の1943年に『ウランカ・ニターン(タート・パノム仏塔の話)』を歌の形に書き直し、タイで発行している[ibid.59]。『ウランカタート』の正式名称は『ナンスー・ニターン・ウランカタート（仏陀の胸骨が収められた仏塔の年代記）』、別名『タート・パノム年代記』であることから[Askew,Logan and Long 2007:51, 増原 2011:87-88]、彼がまとまった本として『ウランカタート』を出版する以前の1940年代に、すでに『ウランカタート』に関する資料に接触していたことは明白である。一連のシラー・ヴィラヴォンの活動と、『サケー・テーワダー』の元となる資料を残していたヌアン・ウテンサークダーとの接点、そして『サケー・テーワダー』の名で知られる競漕祭儀礼の文言「守護神の招待」の祈りについて近年詳細な再検討をおこなった、マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーがその内容について「故意に民族統一主義を強化している」[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:44]と評していることを合わせて考えると、1940年代以降のラオス文化復興の流れの中で知識が構成され、「学識ある伝統」ならびに「学識者内で伝わる伝統」として競漕祭の中に、ヴィエンチャン領域の守護霊たちを招待する儀礼が再生もしくは創成されたものと考えることが妥当ではないだろうか。

エリック・ホブズボウムによれば、伝統の擁護ないし復活運動の現われは、連続性における断絶を示しているのであり、「昔のやり方が生きているところでは、伝統は復活したり、創り出されたりする必要はない」のである[ホブズボウム、レンジャー 2001(1983):17-18]。1827年に壊滅的な破壊を経験したヴィエンチャンは、フランス人が入植したその時点から、

常に復興されるべき街であり、ラオス人のアイデンティティを必要とする際には、ラオス人の拠り所となる「伝統文化の再生・復興」を必要としてきた。競漕祭もそうした再生・復興のシナリオの一部に組み込まれ、「ラオ族のアイデンティティならびにラオ族ゆかりの土地について考えを深める役目を担う」[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:21]『ウランカタート』が活用され、「学識ある伝統」を感じさせる文言、そしてそれになぞらえた儀礼に再生・復興が図られたと考えられるのである。そして再生された伝統は、儀礼がその地に伝わる神話や歴史と深く繋がっていると信じるアルシャンボーのような研究者によって、歴史や神話との連続性を示す解釈が加えられ、更に歴史ある「伝統」へと再生産されていく。また、マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーのようなラオスの歴史に関する深い知識をもつラオス人研究者が、時を経てアルシャンボーが観察した1953年の儀礼を再解釈し、現在こうした儀礼が正式な形で行なわれないと嘆くことによって[ibid.63-65]、かつての儀礼の正当性が高められ、歴史的な過去との連続性が揺るぎないものとなり、競漕祭の「伝統」を高めていくことになるのである。

４－３．考察：ラオス王国独立後の競漕祭と「スポーツ」の関係性

本章の最後に1950年代から60年代半ばの限られた資料をもとに、競漕祭とスポーツの関係性を考察してみる。本章で参考にした《ラオ・プレス》紙の記事において、競漕祭とスポーツの関係性はほとんど見ることができなかった。唯一、1959年10月17日に掲載された出安居祭りと競漕祭のプログラムに、「10月18日(日)9時 シーカイ地区のムアンワー寺(Muongva)にて水上スポーツ sports nautiques」との記述が見られる[Lao Presse 1959(17 October):A-2]。その後の10時から競漕の予選が行なわれる予定となっているため、水上スポーツが競漕と関わりのあることなのか、水上スポーツがなにを具体的にさしているのかは不明である[47]。シーカイ村は1953年のアルシャンボー調査においても、1965年のルモワヌの調査においても特定の精霊たちに対する儀礼をおこなう特徴ある村として注目されており、現在も彼らが注目した儀礼が変化しつつも比較的類似の形で継承されている村である。また、少なくとも1942年のワット・チャン競漕祭から参加していたことがわかっている伝統ある村とも言える[Lao Nhay 1942(1 Novembre):6]。競漕祭における伝統とスポーツという関係性において、何かしら示唆するものではあるが、詳しい検討は1960年代半ば以降を分析する次章において行なうこととする。

[47] 1959年12月12日から17日にバンコクで開催された第1回SEAP Gamesにラオスは参戦していることから、スポーツの機運が高まっていたことが何かしら関係しているのかもしれない。

第５章

内戦下の競漕祭

（1965年から1974年）

本章では、1965年以降の競漕祭について連続した記述を追うことができる《サート・ラオ（ラオス国民）Sat Lao》新聞の記事を中心に、競漕祭を考察していく。この新聞における全国各地の競漕祭に関連する記事は、1964年9月から74年12月まで見ることができるが、その間、ラオスは歴史的な激動期にあった。競漕祭の内容を考察する前にこの時期のラオス国内の情勢がいかなるものであったのか把握することとする。

1960年代は第２次世界大戦期に活発となったラオス独立運動の流れをくみ、ベトナムの独立運動を目指すベトミンと結びついたラオスのパテート・ラオが活動を活発化させ、ラオス王国内の政治が非常に不安定な状態にあった。1945年から社会主義政権樹立に至る75年まで、ラオスは30年間の内戦にあったといってよい。1953年10月にラオス王国は完全独立を果たしたものの、パテート・ラオはラオス王国が依然傀儡政権であると非難し、解放区の建設を続けていた[菊池 2003:163]。1954年のジュネーブ会議以降、ラオス国内の政治はラオス完全独立を目指す左派パテート・ラオと、パテート・ラオ勢力を取り除こうとするラオス王国政府内の右派、さらに中立派との間で激しい勢力争いが繰り広げられた。内戦に拍車をかけたのは、共産主義の拡大を阻止するため、ラオスにおける反共政権の強化を進めるアメリカ合衆国の存在であった。1955年8月にラオス・アメリカ公使館が大使館に格上げされると、ラオス王国政府への軍事支援が急速に拡大し、その年のラオス王国軍の資金は全額アメリカから支給されている[Stuart-Fox 1997:90]。

ラオス王国政府の軍や政府に対するアメリカの支援金が増加すると、ラオス人官僚の間の汚職や着服が増え、結果的にアメリカの資金援助プログラムは誤った管理と崩壊の例になってしまった[ibid.91]。こうしたアメリカのラオス介入は政治勢力の均衡を崩すこととなり、ラオス国内の政治における実質的な権力は次第にアメリカ大使館とアメリカ国際開発庁（USAID）が握ることとなる[ibid.92]。1950年代後半以降、中立派による内閣が何度か成立しては親米派の右派政権により均衡が崩され、パテート・ラオとの戦闘が繰り返される状態が続いたが、1961年から62年にかけて３派の間で停戦が取り決められ、62年6月に第２次連合政府が発足して一時的な決着をみた。しかしながら、1963年4月にキニム・ポンセーナー外相が暗殺されたことにより、中立派自体が次第に右派、左派のどちらかに吸収されていき、政治的混乱が更に続くこととなる。1965年にはパテート・ラオが占拠する北部に向けてアメリカ軍の空爆が開始され、国内の戦闘は更に激しさを増していった。1969年頃に軍事的に優位に立つようになったパテート・ラオは、王国政府に和平を呼びかけ[菊池 1996:39]、1972年にベトナム和平会談が進展するに伴い、ラオスにおいても王国政府とパテート・ラオの間で交渉が繰り返された。その結果、1973年に停戦が成立する。1964年から73年の10年間、ラオスは国家の歴史において最も激しい戦闘下におかれ、内戦による分裂と破壊によって経済発展や近代国民国家の建設という最も重要な課題はなおざりにされたといえる。1975年12月2日、ラオス国王は退位し、ラオス人民民主共和国が成立した。

５－１．《サート・ラオ》新聞における競漕祭

《サート・ラオ》新聞は1963年に政治家のインペーン・スリニャータイ（Inpaeng Sulinyathai）によって創刊された、王国政府時代に国内で最も読まれていた日刊紙であった[矢野 2013:173, Lent 1974:172]。発行部数は1970年11月24日の時点で約5000部。読者層は３章で扱った《ラオ・ニャイ》紙が一部のエリートに限られていたのに対し、《サート・ラオ》紙は比較的広範囲にわたっていたと考えられている[矢野 2013:173]。

《サート・ラオ》紙はまさに内戦が激化し始め、政治的に不安定な時期に発行されていた新聞と言えるが、競漕祭をとりまく記事は、内戦の激化とはほぼ無関係に、全国各地で競漕祭が盛んに行なわれていた様子を伝えている。《サート・ラオ》紙と発行時期が重なっている《ラオ・プレス》紙においては、「政治的不安には無頓着な国民がまじめに祭りの準備に勤しんだ」と競漕祭に関する記事を掲載し、競漕祭を見るために３キロにわたるメコン川岸に楽しみを求めて集まった民衆の様子を受けて、ヴィエンチャンの「生活は落ち着いており、人びとは幸せに暮らしている」、政局の不安と生活は別であり、祭りを楽しむ人々は活気に満ちていたと伝えている[Lao Presse 1963(12 October):A-1]。

また、この時期は、競漕祭が活況を呈し、人々の関心が深まる中で、本稿を貫くテーマである「伝統」と「スポーツ」という概念が競漕祭の記事にみられるようになっていった時期でもある。前章の終りにシーカイ村の競漕祭とスポーツ行事の接点について述べたが、《サート・ラオ》紙の1965年10月4日の記事には、10月7日から3日間おこなわれるシーカイ村の長い舟による競漕祭のことが掲載されており、その祭りの主催者はシーカイ村のスポーツ担当長（pathankila）とその管轄グループとなっている。祭りの目的自体は、シーカイ村に学校を建設するための道具や材料費を調達するためとなっており、特別にスポーツとの関係性が見られるわけではないが、主催者が村内における「スポーツ」活動をまとめるグループであったことを考えると、すでに1965年時点で競漕が「スポーツ」の1つと認識され始めていた状況を読み取ることができる[Sat Lao 1965(4 October):1,8]。

一方、同年のワット・チャン競漕祭が開催される直前の1965年10月9日に掲載された「出安居祭の歴史」と題する記事における競漕は、ラオスの歴史的な文化であるという側面が以下のように語られているものの、スポーツとの関連性には一切触れられていない。

> **競漕(kaan suang heua)**
>
> 出安居祭りには競漕がなくてはならない。競漕は舟の競争(kaan seng heua)、そして競漕に参加する舟のことを「フア・スワン(heua suang)」と呼ぶ。競漕舟の特徴は、せり上がった舳先と艫で、舟の両側には美しい模様が描かれ、１本の木から刳り貫かれた舟には20人から50人の漕ぎ手が乗ることができることにある。競漕舟の種類はメコン川沿いにある寺や村によって（様々で）、少なくとも各村が１艘ずつ舟をもっている。出安居の時期になると、競漕するために舟を水に下

ろさなければならない。競漕が行われる日は、11月の下弦1日である。いくつかの村では下弦7日か8日であったり、下弦14日に限られていたりするが、大抵は下弦1日より遅く行うことはないか、もしくは話し合いによって決まる。競漕祭はラオス人にとって大切な祭りであり、12の慣習と14の規律（hiit 12 khong 14）に規定されている。競漕祭について書かれた12の慣習によれば、11月は出安居、12月は15匹のナーガたちに捧げる競漕をおこなうと書かれている。（しかしながら）全国的におこなわれる競漕についていえば、11月下弦1日の出安居の期間に競漕することが好まれている。

[Sat Lao 1965(9 October):7-8]

文中に「12の慣習と14の規律」が引用されていることは、競漕がラオスの伝統的文化であるという語りの中に取り込まれている状況を示すものである。同年、1965年の競漕祭に関する記事には、外の目、すなわちヴィエンチャンに増加しつつあった外国人たちの視線を気にする記述が、競漕祭の「お囃子禁止令」に見られることから、この時期、競漕祭を含む出安居祭の歴史を紙面で語ることにより、再度、出安居祭りはラオスの美しい伝統文化であることを喚起させようとしていた意図もみられる。お囃子の禁止を含む競漕祭の記事は上述の「出安居祭の歴史」と同日の10月9日に掲載されているが、「出安居祭の歴史」よりも明確な意志をもって、ラオスの立場、そして外国に開かれた発展的なラオスとしてどのように立ち振る舞いたいのかを示している文章であるため、少々長いが以下に引用する。

ラオスの競漕祭(Bun suang heua lao)

ラオス王国の仏教の教えに従った出安居祭では、すべての仏教徒の他にも、多くの人が心を合わせて出安居の日に徳を積む。また出安居祭には、競漕祭のような伝統行事もある。出安居祭において人びとが話題にするほど関心が高いのは、競漕祭である。競漕祭は、村落間で勝利や名誉を競うものであり、村と村の結束や団結を示すものでもある。そして競漕の他にも、青年たちが祭りをさらに楽しく盛り上げるためのロケット祭りや競漕祭に関するお囃子の伝統を受け継ぐ機会でもある。まだ外国との交流がそれほど多くなかった時代には、変装してお囃子や即興でつくった詩を唄ったりした。人によって、思い出す様子は異なるだろう。ある人やあるグループにとってのお囃子は聞いていてとても楽しいメロディーであるであろうし、またある人やあるグループにとってのお囃子は下品で、顔が見えないくらいの変装を伴い、唄い踊るものであることもあるだろう。現在は交通の便がよくなり、村・郡の間や国の間を行き来したりするのも便利になった。違う村の人や違う国の人がわれわれのラオス王国来て、住むことが多くなった。それらの人たちは、われわれの日常生活に興味があるだけでなく、われわれラオス

の伝統等に興味をもっている。特に、様々な祭りの伝統に興味をもっている。しかしそれは、（すべての祭りに対してというわけではなく：略文）外国人が興味をもっているのは、楽しい遊びを含んだ祭りである正月祭り、ロケット祭り、競漕祭だけなのである。ラオスの遊びを含んだ楽しい伝統などに興味がある、他村や他郡、教育や文化の面で発展した色々な国を含む、よく知らないお客が来る時には、われわれラオスの運命・行く先を左右する立場にある代表者としては、娯楽や伝統などを現在に合う形に発展させ、国際機関に入れるように改善させる必要がある。ヴィエンチャン行政区の責任者は、われわれラオスの伝統的な祭りを楽しむにあたってのルールを発布し、再三指導を行なってきた。しかし、いつも規則を破る人たちがいる。例えば、ロケット祭りや競漕祭のお囃子は、卑猥な言葉を使って品がなく低俗である。聞いて楽しいものではなく、ラオスの伝統的な祭を見物しにきている外国人をひどく侮辱している。人によっては写真を撮ったり、伝統のよろしくない側面を書き伝えたりすることができるため、我々ラオス人、さらには国の名誉を傷つけることにもなる。先に述べた不名誉なことを起こさないようにするため、われわれラオス人が仏教の教えに基づいた高度な文化を持っている人と各国の人が受け取るように唄って欲しい。自分自身そして我々ラオス国の尊厳を協力し合って守るべきである。参加している人を侮辱するような行為はやめよう。今年の伝統的行事を運営する責任者としては、これらの楽しいことが好きな人びとに対して、多くの人びとが評価に値しないと考える、古くからのよろしくない事について、明確な指示を与えると共に、（これらの）考えを伝え、再度指示を下す方が良いだろう。ラオスの子供や孫が将来にわたって覚えていられるように、われわれラオス人の美しい伝統を守る人として名をあげ、様々な国が賞賛するような楽しい話題の歌を唄い、美しく着飾ろう。

[Sat Lao 1965(9 October):3]

1965年には、競漕祭においてラオスの役人と外国人の舟が競漕を行なったとの記事があり、外国人が直接競漕に参加していた様子が伺える[Sat Lao(15 October):7]。また、この年は後にアルシャンボーに情報を提供したEFEOの研究者、ジャック・ルモワヌが競漕祭を調査した年でもある。４章でも指摘した通り、研究者の調査が入る年に新聞において対象となる祭りの記述がそれ以前よりも詳細になるのは、単なる偶然とは思われない。特に上記文中にみられる「人によっては写真を撮ったり、伝統のよろしくない側面を書き伝えたりすることができるため、我々ラオス人、さらには国の名誉を傷つけることにもなる」との一文はまさにルモワヌを意識していることを表している。1965年ルモワヌは、競漕祭に関する一連の儀礼を16ミリフィルムの映像におさめ、67年には、65年に撮影した映像を19分にまとめた作品を制作している[48]。ルモワヌは競漕祭をラオスの貴重な伝統文化として関

[48] 現在はフランス国立科学研究センター（CNRS）の映像図書館に収められている。

心をもち記録をおこなったのであるが、それとは全く反対に、ラオス王国が当時守ろうとしていた名誉はルモワヌによって見事に「傷つけられた」といえる。ラオス王国が体裁を守るために危惧した卑猥なお囃子の内容は、ルモワヌからアルシャンボーへ研究資料として提供され、1972年に出版されたアルシャンボーの著書『ラオスの競漕祭：文化複合』において、全く欠けることなく、以下のように詳述されることとなる。

お嬢さんたち！どこの村の人？
ぷりぷりに膨らみきったペニスをとってごらん
しなやかなヴァギナをもつお嬢さん
お嬢さんのまばらな陰毛よ
オイルで潤してあげたいよ
おお　大きな酒壷がある、ここに来て水を注いでおくれ！
おお　彼女のヴァギナはバナナの入れ物のよう
その少女の「籠に手を」入れてみれば、（ヴァギナには）小指が入るだけ
おお　小さな穴のヴァギナよ、きつく、しまっている
おお　大事な穴だよ、なぜ奥まで広げてしまうんだい？
わたしは（このヴァギナに）愛撫をしたくないよ
おお　毛でおおわれている、この穴は毛でいっぱいだ！
大きな尻をもつ町の娘たちのあそこはすべすべ
こんなのは病気の娘のヴァギナだ：毛がヴァギナの上まで広がり、ペニスの亀頭をおおってしまう
四十八手のやり手ならそいつはチョムチェーンの男たちさ
彼らは大きな穴のヴァギナしか相手にしない
おお　ca ci co
田舎の娘は尻の持ち上げ方を知っている
ペニスを見れば、耳と目が震えてだす
おお　からすの卵のように黒い少女よ
巻き毛の少女よ
細い腰
引き締まったお尻
君は俺に夢中、俺の尻軽女
夫婦別れしたフランスの女、川岸に座っている
まるで美しい植物のよう、彼女のヴァギナは虫食いだ
君はフランス人のペニスを見たかい？君のヴァギナを捧げておあげ
君を抱いてくれますように！

かれらのあそこは固くて立っている
新品だよ、すごく良いよ

[Archaimbault 1972:29-30]

アルシャンボーはこの記述を引き受け、「競漕祭は豊穣を祝うものであるから、これらの唄は、先に引用した論文において研究されたロケット祭りを思い起こさせ、私たちを驚かせるものではない。この色彩豊かな幕間の後に、私たちはもっと慎ましやかで単調な記述を続けよう」としている[Archaimbault 1972:30]。研究者にとっては、自身の分析を補強する男女の結びつき、すなわち豊穣を願う唄であるお囃子の存在は貴重なものだったはずであるが、記録されるラオス王国にとっては、近代的な価値観にそぐわない卑猥な内容のお囃子は、「発展していない国」と位置づけられる恐れを多分に含んでいると認識していたがゆえに、「名誉を傷つけられる」ことと考えていたことが分かる。1966年以降も競漕祭のたびに他人を中傷する内容、男女を風刺するような内容をお囃子で唄ってはならないとの通達が1972年まで出されると共に、1969年と71年には「女性器や男性器を表すような行為は、ラオスの文化を損ねることになるので行ってはならない」との通達も出され[Sat Lao 1969(17 October);1,8 & 1971(17 September):1,8]、72年には新聞の１面見出しに「ヴィエンチャン市は侮辱するような表現や下品な言葉を使う競漕祭のお囃子を禁止する」との禁止姿勢が、さらに前面に打ち出されている[Sat Lao 1972(30 September):1]。こうした禁止令が繰り返し出されていることから、内戦が激化し始めた1965年から停戦交渉が締結される73年にかけて、ヴィエンチャン地域には意外にも多くの外国人が居住し[49]、競漕祭に何かしらの形で関わっていたことが窺える。実際に、1967年にはラオス人の漕ぎ手と組んだ外国人混合チーム、ラオ・イギリス、ラオ・アメリカ、ラオ・オーストラリアが競漕祭に出場しており、69年にはその様子がハルパーンによって写真に撮られている[Sat Lao 1967(18 October):1,8]。毎年の参加チーム全てが新聞の紙面に記載されているわけではないため、明確には分からないが、1967年以降72年までは、ある程度継続的に西洋人とラオ人混合チームは参加していたと思われ、ラオ・アメリカチームのひとつは、ラオスとアメリカの文化相互理解を目的として設立されたラオ・アメリカン協会(Lao American Association)のチームであったことがわかっている。ラオ・アメリカン協会発行の機関雑誌である《友好(Friendship / Mitaphap)》[50]の1970年6号には、ラオ・アメリカン協会（以

---

49 1965 年以降の正確な人口は分からないが、アメリカの莫大な援助は援助する側のアメリカ人官吏の増加を招いただけでなく、資金に群がる多くの外国人−タイ人、中国人、インド人、ヨーロッパ各地の人びとをも増加させた。1950 年代末、ラオスには 4 万人の中国人がおり、白人は 500 人のアメリカ人を含め約 6,000 人が何かしらの公的資格で滞在していた[Stuart-Fox 1997:92]。

50 ラオ・アメリカン協会自体の活動は 1960 年代初頭より開始されていたものと思われるが、機関雑誌『友好』の創刊は 1965 年 1 月である。緒言には、1965 年当時の首相であるスヴァンナ・プーマよりメッセージが寄せられ、メッセージ内にこの機関誌の創刊より数年前から協会がラオスとアメリカの友好関係を強固なものとする活動を行なってきたことが述べられている

下、LAAと記す）のメンバーと学生がチームとなって出場し、他の国際文化団体を破り、3位に入ったことが報告されている[Friendship 1970 no.6:9]。また、1972年5号の同誌には、この年の競漕祭における競漕が２つのグループ：プロフェッショナルとアマチュアに分けられて行なわれ、プロフェッショナルが33チーム、アマチュアが3チームであったことが報告されている。プロフェッショナル(paphet asiip)というのは、伝統的に競漕に参加しているラオ人だけのチームであり、アマチュア(paphet samaklin)はヴィエンチャン市の様々な団体や協会で構成されたチームのことを指している。ラオ人24人、アメリカ人11人で構成されたLAAチームはアマチュアのカテゴリーに出場し、他の２チームであるラオ・イングリッシュクラブならびにラオ・オーストラリア友好協会を破り、優勝したとの報告が雑誌に掲載されている[Friendship 1972 no.5:19-20]。その他にも、1973年には同じ仏教国であるカンボジアが友好関係を深める目的で参加しており、翌年には日本大使館のチームも参加していることから、《サート・ラオ》紙が発行されていた期間は絶えず外の目を意識した競漕祭運営をしなければならないとする運営側の建前が見られ[Sat Lao 1973(12 October):1,8 & 1974(4 October):1,8]、その建前上、まっさきに矛先が向けられたのが、卑猥な表現のお囃子や男女の生殖器を模した表現の禁止だったといえる。

しかしながら、1965年に記録されたようなお囃子の内容が、はたしてラオスの伝統的な要素であったのかについては、いささか疑問も残る。1950年代後半以降のアメリカの莫大な援助がもたらす近代化の過程に伴い、ラオスの伝統的な道徳心や文化が特に若者を中心に衰退しつつあった状況的な影響も考えられるからである[Stuart-Fox 1997:155]。「教育や文化の面で発展した色々な国」の人の目を意識しての禁止令であったものの、その卑猥な内容は、発展した国の１つであるアメリカがラオス社会に及ぼした影響も否定できないのである。

お囃子に関しては、全てが禁止されたわけではない。1965年の「出安居祭の歴史」の中には「競漕祭のお囃子」という項目があり、そこではラオ語独特の表現法である４つの言葉をテンポよく繋げた耳に心地よく響く唄が紹介されている。女性のことを唄うお囃子であっても、卑猥な表現でなければ、許容範囲であったことが以下の例からわかる。

Phai hao phai / Nava hao phai / Sao nyai kan yuu / Pen mu pen theo /
Pen neo pen san / Suu kan ka maa / Nava hao phai / Sao nyai kan yuu /
Sao phuu nan ngam / Kho tham khao dee / Kho vee kho sao / Sao ao ai bo/
Chao yuu baan dai / Yuu kai leu kai / Si vai bok dee / Chao maa tee sai/
Chao yaa si tuea / Mii phua leu bo / Phai hao phai / Phuu sao ngam thee/
Seua lee seua khao / Seua khao seua lee / Sao hee kan maa / Nava hao kheng/
Sao teng to ngam / Kho tham chao dee / Ma tee sii dai...

[Friendship 1965 no.1:1,2]。雑誌は両国の文化を英語とラオ語の２カ国語で紹介する内容となっている。

漕ぐ　ぼくらは漕ぐ 舟を漕ぐ　一緒に漕ぐ　組になって列になって漕ぐ　そうやって漕ぐ　恋人が応援に来てる（妻が応援に来てる）　漕ぐぼくらは漕ぐ　一緒に漕ぐ 見てよあの彼女、きれいだな　聞いても良いかな　ここにいても良い？　彼女、僕と結婚してくれない？　君どこの村のひと？　近いの遠いの　早く教えてよ　君どこから来たの？　嘘つかないでね　旦那はいるの？　漕ぐぼくらは漕ぐ　あの彼女見てよ、本当に奇麗だな　黒白のシャツを着てる　白黒のシャツを着てる　彼女たちも来るよ　ぼくは舟で競争する　彼女きれいに着飾っているねえ君に聞いても良い　どこから来たの？

[Sat Lao 1965(9 October):7-8]

以上のように、相手を侮辱するものではなく、口説く程度のお囃子は韻をふむラオ語の美しさを際立たせるものとして、禁止される対象ではなかった。むしろ、愛国心や建国の精神、相手を賞賛するような唄は歓迎されていたともいえる[Sat Lao 1965(9 October):7-8]。しかし、お囃子のほとんどがきわどい卑猥な表現を含むものであったため、禁止令が繰り返し出され、次第にお囃子を唄うこと自体が奨励されないものとなっていったと考えられる。現在、ワット・チャン競漕祭においてお囃子を聞くことはほとんどなく、2007年におこなった調査においても、ヴィエンチャン区域のほぼ全ての村人は「かつては唄っていた」と述べるに留まり、唄える人が誰もいない状況であった。唯一ハートサイフォン郡ティントム村の60代の男性が昔のお囃子を書き留めており、その原稿をなぞりながら唄ってくれた。それは上記に記したお囃子よりも長いものであったが、内容はとても似ており、上記のお囃子が男性から女性に対する唄であるのに対し、老人が唄ってくれた唄は女性が男性に対して唄うお囃子であった。

５－２．「伝統」と「スポーツ」の接近

1965年には、お囃子の禁止に関する「ラオスの競漕祭」と題する《サート・ラオ》紙の記事において、競漕祭が「伝統行事」であることが述べられている。また、「出安居祭の歴史」の中の「競漕」においても、ラオ族の伝統的な風習を伝える「12の慣習と14の規律」を引き合いに、競漕祭の内容を語っていることから、当時、競漕祭はラオスの伝統であるとの認識がなされていたことが確認できる[Sat Lao 1965(9 October):3,7-8]。一方、伝統や歴史に関する競漕祭の記事の中に、「スポーツ」という文言は確認できないものの、1965年の競漕祭の結果は《サート・ラオ》紙のスポーツニュース(khao kila)欄に掲載されている[Sat Lao(15 October):7]。さらにその3日後、10月18日のスポーツニュースには1965年の競漕祭審判団に対するシーカイ村のクレームが掲載されており、そこには「競漕祭委員会の人たちはスポーツ競技(kan kheng khan kila)の審判をしたことがあるのか？また、国

のスポーツ部(kom kila)から訓練を受けたことがあるのか？」というものがあることから、少なくとも参加している村にとっては、競漕が「スポーツ」の１つであるという認識であったことが確認できる。更には、クレームに対する以下の返答の中に、はっきりと競漕とスポーツの接合が見られる。

> 誰とまでは把握していないが、委員は今までに審判経験のある人であることは確かである。訓練を受けているかという質問については、訓練そのものが不可能である。なぜなら、スポーツ競漕(キッラー・スワン・フア kila suang heua)はスポーツ部が誕生する以前から委員会が長年培ってきたルールによって行われているものだからである
>
> [Sat Lao(18 October):7-8]

キッラー・スワン・フアという言葉は、まさにこの時期、クレームに対応するという形で生み出された造語であると思われる。これまで競漕祭の運営をしてきた委員会は、「スポーツ部が誕生する以前」から運営をしているのであるから、スポーツ部とは異なる独自の「長年培ってきたルール」によって運営をしているのであって、スポーツ部から訓練を受けるなど「不可能である」との主張を押し出している。この主張から推測できるのは、少なくとも1965年までのワット・チャン競漕祭の運営体制からスポーツ部門と密接な関係にあったわけではないということである。一方、シーカイ村を基点に考えてみると、村で主催する規模の競漕祭においては、1960年頃から競漕はひとつのスポーツと捉えられ始め、スポーツを管轄する部門が運営に携わるようになったものと思われる。

シーカイ村のクレームからも分かるように、スポーツ競技としての視点が競漕祭に入ってくるようになると、伝統行事としての競漕祭において変化を求められたのは、卑猥なお囃子の禁止だけでなく、競漕そのものにまつわる諸々のことであった。お囃子の禁止は国の名誉を傷つけるとの理由で上からの一方的な通達であったが、競漕にまつわる諸事は全て参加者からの声によって変化を余儀なくされているのが特徴的である。1967年には、女性の舟の漕ぎ手たちから、女性の舟にも銀のカップ(カン・グン khan ngun)を賞品に出して欲しいとの要望が上がっている[Sat Lao(17 October):2]。アルシャンボーが調査をおこなった1953年時点で女性の舟の競漕があったことは確認できるが[Archaimbault 1972:32]、要望があがった67年まで、女性の優勝チームは男性と同様に銀のカップを賞品としてもらうことがなかったのかというと、少なくとも、1964年の《サート・ラオ》紙によれば、同年優勝したターケーク村の女性チームがろうそく工場の銀のカップを受け取ったことになっている[Sat Lao　1964(27 October):8]。しかし、1967年にこうした声が上がるのは、それ以降受け取っていなかったか、もしくは新聞の記事には授与されたことになっているものの、実際には授与されていなかったことが考えられる。各村の女性の舟の漕ぎ手の声として掲載された要望は「お酒などの賞品は必要ないので、銀のカップにして欲しい。そう

すれば、漕ぎ手のやる気にもつながる。このままだと、ぬれながら舟を漕ぐ女性はいなくなってしまう。委員会はぜひ女性の舟にも銀のカップを賞品として授与することを検討してほしい[Sat Lao 1967(17 October):2]」というもので、女性の参加が男性の参加と同等の扱いを付けていなかったこと、そのことに対する不満の声をあげやすくなった当時の状況が窺える要望となっている。また、同年の競漕においては、1965年頃からたびたび問題となり、言い争いとなっていたスタートについての変更点が掲載されている[Sat Lao 1967(18 October):1,8]。このような競漕の結果にかかわる賞品、スタートの変更といった内容は、競漕祭に対する認識の一部に「スポーツ」が分ち難く入り始めたことを意味している。そして更には、競漕祭の規模が拡大すると、祭りを円滑に運営するための禁止事項やルールが増え、運営委員会の統制のもとに実施されていくようになる。

５－３．王族の参列による競漕祭の拡大

競漕祭が拡大されたのは、サヴァン・ワッタナー国王の長男であるヴォンサヴァン(Vongsavang)皇太子夫妻が、ヴィエンチャン競漕祭の大会委員長として出席しはじめた1968年のことである。それまで伝統的な長い舟での競漕しかなかった競漕祭に初めて小さい舟(heua noy)のカテゴリーが設けられ、少なくとも参加数が30を超える大規模なものとなった。なぜ1968年に皇太子夫婦が突然、競漕祭を含む出安居祭に参加することになったのかについては不明だが、出安居祭が行なわれた1968年10月頃における内戦の状況は王国政府側にとって不利になりつつあった時期である。このことに関連してハルパーンは、「とりわけ内戦が危機的な状況である時に王国政府が祭日や式典を非常に重視していることに対して、多くの欧米諸国の報道は困惑を隠せずにいた」と述べた上で[Halpern 1964:56]、特に1960年のシーサヴァン・ヴォン王の葬儀を王国政府が重視していた理由については、おそらく敵対派閥をとりこみ、団結させる意図があったのだろうとの見解を示している。そして、ここに伝統的な祭典行事を重視するラオス王国政府の独特ともいえる姿勢を見出し[ibid.56]、以下のように述べる。

> 西欧文化では、なるべく式典的なものを戦争時においては最小限に留め、勝利に向けた任務の遂行に集中する傾向がある。明確ではないとしても、ラオスにおける式典の場は確実にラオ人たちによって過大なる象徴的価値をもたされている可能性がある。当てにならない西側諸国との同盟、そして恐ろしいベトナム人と、活動的ではないにしろ明確に中国が支援している敵に直面している局面において、現実的な抵抗が無駄であることは明白であった。それゆえ、ラオス人たちは（式典の）伝統を強調することで心理的な安寧を得ており、伝統の機能がほとんど消滅しているにせよ、象徴的な価値の有効性は残っているのである。
>
> [Halpern 1964:56]（　）内筆者加筆

上記の「伝統の機能がほとんど消滅している」という見解は、仏教と王室が強固な象徴性を持っていた伝統という意味のようであるが、ハルパーンがここで「伝統」をどう捉えていたのかについては定かではない。しかし、ラオスの伝統に関する式典に象徴的価値を持たせるという王国政府の姿勢は、1968年時点においても継続されていたものと思われる。ヴォンサヴァン皇太子夫妻がヴィエンチャンの出安居祭ならびに競漕祭に参列していたのは、まさに戦局が王国政府側にとって不利になりつつあったさなかであり、またその時期に限られていることから、伝統的な祭りに王族を参列させ、祭りの盛大さを演出すると共に、毎年滞りなく伝統に従い行事をおこなうことで、現実的には不安定な状態にある政局から民衆の目をそらし、心理的な安寧を与えようとしていたのではないかと考えられる。1968年の競漕祭で優勝したチームには皇太子から優勝カップが手渡され、同年、それまでヴィエンチャン競漕祭で目にすることが無かったと思われるラオス南部の風習ティー・サーン・ナム・ノーン(tii sang nam nong 象を叩き、水を膨らませる)も行なわれている。ティー・サーン・ナム・ノーンについては、６章２節４項１で詳述するが、1968年に登場して以降、21世紀に入ると、ヴィエンチャン競漕祭の伝統を語る際は必ずといって良いほど、ティー・サーン・ナム・ノーンの存在の有無が議論に上ることとなる。

皇太子夫妻は1969年の競漕祭には参列しなかったが、1970年にはただ参列するだけではなく、ルアンパバーンから26mに及ぶ長い丸太と船大工を一緒にヴィエンチャンへ送り、皇太子の舟（heua ongmongkut）とヴィエンチャン王宮の舟（heua suang yuthii pharasavang nakhon vienaitne）を、ヴィエンチャンで製作している。舟の漕ぎ手は、ルアンパバーンの伝統的な風習と同じく、王を警護する軍人(thahan haksaa phaong)50人が乗ることが予告されていた[Sat Lao 1970(19 September):1,8]。ひとつ興味深いことは、約１ヶ月で完成した舟を着水させる際、「伝統に則りバーシー儀礼をおこなうと共に、各所に祀られている主を参拝する、もしくは、我々が代々祀ってきたラックムアン(lakmuang)であるマヘーサック(Mahesak)を参拝する」と《サート・ラオ》紙に掲載されていることである[Sat Lao 1970(10 October):1,8]。「マヘーサック」は南部チャムパーサックの守護霊であるため、ヴィエンチャンに「マヘーサック」という精霊を祀る場所はない。実際には、「ラックムアンであるマヘ―サック」と表現はされているものの、競漕前に行なわれる儀礼は、アルシャンボーが調査を行なった1953年と変わらず、ドン・チャン砂州、ター・サイ・ムイ、ホー・カム岸、ホー・タドゥア・ハーン、パサック河口、ター・ポー・ピアックの精霊たちに奉納を行なうものであった[Sat Lao 1970(16 October):1,8]。南部チャムパーサックにおける伝統「ティー・サーン・ナム・ノーン」の導入と合わせて、街を守護する精霊の総称として「マヘ―サック」という南部の代表的な守護霊の名を用いていることを考えると、この時期、競漕祭を運営する委員の中に南部チャムパーサック出身のある程度の影響力をもつ人物が含まれていたと考えられる。

1970年の競漕祭は、皇太子夫妻の参列のもと、隣国タイの舟も10艘以上が参加し、過去最多の39艘の舟が勢揃いした盛大な祭りとなり、競漕祭を無事に遂行するために警察の舟4

艘、ヘリコプター１機が出動する大規模なものとなった[Sat Lao 1970(16 October):1]。皇太子夫妻がヴィエンチャンの競漕祭に初めて参列した1968年、従来の長い舟だけではなく、小さい舟の参加も認められ、競漕は長い舟と小さい舟のカテゴリーを分けて実施された。カテゴリーを分けた競漕は、翌69年にも継続されたが、1970年は長い舟と小さい舟の全てを合わせ、カテゴリーを分けずに争われた。この年に優勝したシーカイ村の舟イーホン・タハーン・サーン(Ihong thahan sang)には、新しく設けられた皇太子の銀のカップが贈られている[Sat Lao 1970(28 September & 20 October):1,8]。

皇太子夫妻が競漕祭に参列するようになった1970年から73年は、今までになく多くの舟が参加しており、戦局が厳しいものになればなるほど、祭りはさらに盛大になっていったことが、舟の出艘数の多さからも読み取れる[51]。1972年には皇太子夫妻に加えて、46年8月に締結されたフランスとの暫定協定によって王位継承権を放棄した[Stuart-Fox 1997:66]、チャムパーサック王国の王族ブン・ウム公[52]も参列し、25の団体や個人から提供された賞品ならびに賞金は、賞金総額は120万キップ[53]以上が集まる盛況さで、42艘の舟が参加し、メコン川岸には競漕を見るために約10万人以上の人が集まったと報告されている[Sat Lao 1972(11,23 & 26 October):1,8]。そして停戦交渉がまとまった年でもあり、皇太子夫妻がヴィエンチャン競漕祭に参列した最後の年でもある1973年は、競漕に参加するための登録をした舟の数が歴史上最高の48艘となり、その中には隣国カンボジアの舟の参加も含まれていた[Sat Lao 1973(3 October):2, (10 & 12 Ocotber):1,8]。こうした状況を受け、《サート・ラオ》紙は「競漕に歴史上最多の舟が参加する理由は、メコン川沿いの伝統的な競漕祭の中でヴィエンチャンがいまだ優勢を誇っているからである」と報道している[Sat Lao 1973(10 Ocotber):1]。賞金総額も前年より大幅に増え、270万キップに上っている[Sat Lao 1973(5 Ocotber):1,8]。[54]

一方、盛大さを増すほど、運営委員会の役割も細分化されていった様子が1971年9月22日付けの《サート・ラオ》紙に見られ、祭りがどのように運営されていたのか、その一端を知ることができる委員会名になっている。掲載された委員会は「伝統委員会(anukamakaan paphenii)、来賓担当委員会、祭りイベントの場所・音楽担当委員会、フア・ファイ(heua fai)

---

[51] 1970 年と 1971 年は 39 艘、1972 年 42 艘、1973 年 48 艘。1971 年からは小さい舟のカテゴリーはなくなり、長い舟の競漕(kaan suang heua nyao)の 1 種類のみで行なわれた[Sat Lao 1971(11 September):1]。

[52] 1949 年 3 月 21 日から 1950 年 2 月 28 日まで首相を務めていた。1960 年には右派政権の首相に就任。右派の代表的人物であった。[Stuart-Fox 2001:45-46]

[53] キップはラオスの通貨単位。知りうる範囲の 1964 年のレート換算は 1 ドル 240 キップ[American Embassy,USAID,USIS 1964:74]。1964 年の円ドルの為替レートは約 360 円(http://www.fxtsys.com/study/abo_history_nen.html 2014 年 10 月 5 日閲覧)

[54] 『サート・ラオ』における競漕祭の記事は 1974 年まで見ることができるが、最後の年である 1974 年は賞金ならびに運営資金が思うように集まらなかったことが 1974 年 9 月 12 日付けの記事から読み取れる。1973 年に 200 万キップ以上が集まったのに対し、1974 年はヴィエンチャン市が競漕祭の費用を 150 万キップと決定し、内 50 万キップを政府が援助している[Sat Lao(12 September):1]。

担当委員会、花火担当委員会、ラックムアンの祠へお参りする際の音楽管理委員会、競漕時のパーム・サイ(pham sai ゴール地点)の音楽担当委員会、安居の行進をする際の音楽担当委員会、広告委員会、競漕舟のスタート担当委員会、フア・ファイと競漕のくじ引きならびに審判・賞金管理委員会など…」であるが[Sat Lao 1971(22 September):8]、この委員会の中に「スポーツ」という用語のついた委員会は存在していない。「など」となっているところを見ると、必ずしも「スポーツ」とついた委員会がなかったとは言えないが、「など」に集約されているとすれば、委員会全体の中では主要な役目を担っていなかったとも考えられる。ただし、前面に「スポーツ」との名が出ないまでも、競漕と直接関係のある委員会としてあげられた「競漕舟のスタート担当委員会」ならびに「競漕のくじ引きならびに審判・賞金管理委員会」の２つは、いずれも既に漕ぎ手側からクレームの上がった「スタート」と「審判」に関する委員会であるため、委員会の中にスポーツ関係者が含まれていた可能性は十分に考えられる。

５－４．考察：「伝統スポーツ」という概念の誕生

初めてヴィエンチャンの競漕祭に関する記事が《サート・ラオ》紙のスポーツ欄に掲載されたのは、1965年のシーカイ村のクレームに対する回答であったが、奇しくも次にスポーツ欄に掲載されたのは、委員会の記事が掲載されたのと同年の1971年であり、そのスポーツ欄には、「出安居祭における競漕祭、スポーツ競漕は年中行事における伝統的なスポーツである(kila suang heua an pen kila paphenii pachampii)」との興味深い表記が見られる[Sat Lao(7 October):2]。キッラー・スワン・フアという用語は、既に述べた通り、1965年にクレームに対応する中で登場した用語と思われるが、71年にはそのキッラー・スワン・フア、すなわち「スポーツ競漕」は「伝統」という意味を示す「パペニー」と、「スポーツ」を意味する「キッラー」を組み合わせた「キッラー・パペニー」と同義であるとの新たな解釈が示されているのである。翌1972年のルアンパバーンの競漕祭に関する記事においても「伝統スポーツ kila paphenii」という表現が採用され、「伝統スポーツは代々受け継がれてきたものであり、ラオスのスポーツの１つ(kila khong lao yang nung)である。第9月の下弦14日にルアンパバーンで行なわれる仏教行事と共に古くから伝わる伝統行事(hiit paphenii dang deum)として競漕が行なわれる」[Sat Lao 1972(2 September):2]と、伝統スポーツが何を意味するのかについて、1971年時点よりも更に詳しい説明がなされている。少なくとも《サート・ラオ》紙においては、1971年以降、特に1972年は「スポーツ」と「伝統」が相反する概念ではないことが競漕祭に関する報道に見られ、同年9月末に行なわれたハートサイフォン地区タードゥア地区の競漕祭の記事においても、競漕をスポーツの１種と述べ、「伝統に従っておこなった」とスポーツ欄で報道している[Sat Lao 1972(25 September):2]。

1972年は競漕に関する規定が細かくなった年でもある。競漕運営委員会が1972年に設けた14項目の規定は《サート・ラオ》紙に掲載され、時間の厳守、連絡員の配置、予選時の組み合わせ、競漕コースの厳守、スタート地点での行動、漕ぎ手のマナー、貴賓席前での禁止行動、競漕中の他の舟の行動規制などが説かれている[Sat Lao 1972(30 September):1,8]。

こうした規定は、皇太子夫妻の参列によってヴィエンチャン競漕祭に参加する舟の数が大幅に増えたことに対処するための方法であるが、規模が拡大したことによって、それまで以上にスポーツの運営にみられるような規定を設け、円滑な運営を進める必要性が生じた年代であるといえる。1970年代における競漕祭の盛大さは伝統行事の価値を高めると同時に、盛大さゆえの必要性から運営管理にスポーツという視点が入ることに対して、違和感もしくは問題意識を喚起するものではなかったといえる。その現れの１つとして、本章の最後にカムバン・チャンニニャヴォン(Khambang Canninyavong)が1974年に出版した、『ラオスの風俗習慣:12の慣習と14の規律 Khanop thamniam lao:Hiit sipsong le khong sipsi』の中で記述された競漕の説明を引用する。

> われわれラオスの競漕(kan suang heua)は、見に来た人を心から楽しませる昔からの伝統であり、スポーツの１つ(kila paphet nung)である。舟は、1本の木を刳り貫いたり、伐り出した木を組み合わせたりして、短い舟や長くて大きな舟、小さい舟となる。それらの舟には20人から50人、もしくはそれ以上の人が乗ることができるが、乗る人数はそれぞれの村人たちの裁量にゆだねられている。舟になる木は、大抵の場合、日光にも雨にも強いマイ・ケーン（ラワン）である。
>
> 賞を目指して競争する(khenkhan suen)競漕は、毎年11月の満月の日か11月の下弦1日に政府によって開催される（例えば、毎年出安居祭の日にワット・チャン前の岸辺で行なわれる）。このような祭りに際して政府は、われわれラオスの伝統的慣習を奨励するために管理委員会を設け、楽しいスポーツの１つである競漕がこの先も賑わいのある祭りとして継続していけるように管理する。
>
> 祭りの日は、住民たちや外国人たちが多くの場所から集まってきた舟の競漕を見に誘い合って出かける。その祭りでは、運営委員会が競漕を２つのカテゴリーに分けて行なう。短い舟(heua san)のカテゴリーが１つ、長い舟(heua nyao)のカテゴリーが１つ。そして、競漕には２つの賞があり、美しく装飾されている競漕舟(ee heua suang ngam)に対して贈られる賞が１つ、速く漕いだ舟(heua suang vai)に対して贈られる賞が１つである。（中略）安居の間の時期は農民、商人ともに田植えや作付けが終わった後で空き時間が多いので、互いに手を休めて空き時間をつくるように勧め、集まって競漕を楽しむ。これは、多くの献身的な仏教徒としての団結を表すものであり、またわれわれラオスの昔からの素晴らしい伝統でもある
>
> [Canninyavong 1974:79-80]

「12の慣習と14の規律」はこれまでも述べてきた通り、ラオ族の伝統的な行事・慣習を伝える際の核となる概念である。その『12の慣習と14の規律』と題する書物において、迷いなく「スポーツ」と「伝統」が共存しているのは、1970年代前半においては「スポーツ」は「伝統」を害するものであるという価値観が存在していなかったことを示している。むしろ、伝統でありながら、恥ずべき風習として1960年代から1970年代にかけて繰り返し禁止されたのは、外国人の目が増えたことにより、近代的価値観からは「遅れた風習」とみなされる危険性のあった女性や男性を直接的に風刺するお囃子であった。反対に「スポーツ」という概念は、チャンニニャヴォンの説明にも見られる通り、伝統的な行事に管理という近代的な合理性をもたらす要素として、歓迎されこそ忌避される存在ではなかったと考えられる。競漕祭における競漕が《サート・ラオ》紙や『ラオスの風俗習慣:12の慣習と14の規律』において、ラオスの「スポーツ」であると説明されている例をみても、伝統行事の中の競漕が1970年代前半において積極的に「スポーツ」という概念をとりこみ、「伝統」と「スポーツ」を組み合わせた「伝統スポーツ」という用語を生み出したといえる。

第６章

ラオス人民民主共和国の成立
からラオス観光年まで
（1975年から1999年）

1975年6月にはほぼ全土を制圧していたパテート・ラオは、新体制へ移行する準備を進め[菊池 2003:168]、1975年12月1～2日にヴィエンチャンで開催された全国人民代表者大会にておいて、王制の廃止とラオス人民民主共和国の樹立が宣言され、ここにラオス人民革命党による社会主義国家建設がはじまる[山田 2011:11]。

建国２ヶ月前に開催された第２期ラオス人民革命党中央執行委員会第３回総会において、「資本主義的発展段階をとおらずに直接社会主義に至る」という党の方針が確認されたが、当時はまだ「直接社会主義に至る」ための十分な基盤が整っていたわけではない[ibid.11]。そこで、党は社会主義への過渡期における２つの目標を提示し、第１に「植民地や封建制の痕跡を除去し、中央から末端まで行政権力を整え、人民主主義体制を構築すること」、第２に「旧い生産関係を改造し、新しい生産関係を構築することで人民の生活を平常にすること」とした[ibid.11]。山田はその２つの目標達成には、少なくとも克服すべき課題が建国前後のカイソーン党書記長の発言から察すると５つあったとする[ibid.11]。その５つの課題とは、第１に経済・社会基盤を整備し、衣食住という国民生活の基本を整えること、第２に全国における党支配体制の整備、第３に国家行政機関の整備、第４に戦時体制からの脱却、第５に多民族を統合し国民形成を行なうことであった。これら５つの課題を克服することは国家としての土台を作ることであり、近代国民国家建設のプロセスそのものであった[ibid.12]。

しかし、これら課題の克服は思うように進まなかった。財源がないことに加え、人材不足も深刻な問題であった。国家建設を担いうる教育を受けた優秀な人材は多くが社会主義を恐れて国外に脱出するか[55]、再教育キャンプに送られたため[56]、彼らの代わりに国家機関で要職に就いたのは山岳地帯での戦闘しか知らないパテート・ラオの幹部だったのである[ibid.12]。さらにラオスを取り巻く外部環境は厳しく、西側諸国からの援助が停止された上に、タイとの国境も封鎖されたことで、輸入に依存していたラオス国内の物不足、インフレが進行し、国民生活は大打撃を受けた。加えて1975年、76年は旱魃に見舞われて食料が不足し、国民生活は改善されるどころか悪化の一途をたどっていった[ibid.13]。

こうした状況を受け、党は社会主義化を速めるために農業の集団化や企業や工場などの国有化を急いだ。農業集団化には、集団生産によって生産性の向上を図り食糧を増産するとともに、農村への党指導強化という政治目的もあったが[山田 2011:15, Evans 1990:49-50]、集団化は富裕農民だけでなく伝統的な自営農民の反発も招き、農業集団化の目的を達成するには至らなかった。

1979年、党は生産の拡大と国民の生活改善のために政策の転換を図り、市場経済原理の一部導入を決定する。この決定により、党にとって社会主義国家建設は実質的かつ現実的

---

55 当時の人口の 10%が国外に流出した[Stuart-Fox 1997:168]

56 ほとんどの上級軍人、上級官僚は政治的な再教育のためにパテート・ラオ支配区のサムヌアへ送られた。当初、再教育プログラムはせいぜい数ヶ月の短期間のものだろうと考えられていたが、実際には、彼らは解放されず、ほかにも逮捕され、再教育キャンプへ送られる人がいたことから、難民として国外へ出る人が後を絶たなかった。

な国家目標ではなくなり、社会主義が「理想」となったことによって、先に挙げた社会主義国家建設のために克服すべき５つの課題が、手段から目標に代わった[山田 2011:15-16]。そして、その目標を達成する手段として市場経済原理をこの時期に一部導入し、経済の安定化を図ろうとした。

一方、同年におきたベトナム軍のカンボジア侵攻、それに伴う中越関係の悪化によって国際的に孤立を深めるベトナムの支持を表明していたラオスは、ベトナムと同じく国際的に孤立した状況に陥り、西側諸国にとって、ラオスは閉ざされた社会主義国となっていった[菊池 2003:169-170]。

新しい時代の幕開けとなったのは、メコン川にかかるラオス＝タイ友好橋の開通である。国際社会からの隔離と社会主義経済政策の年月の後にもたらされた「新しい時代」の到来への期待は、諸外国の政府やジャーナリスト、学者たちによって広く共有された[Iinuma 2002:70]。「新しい時代」を象徴すべく、1994年4月の橋の開通式は先例のない政治的光景で、ラオスの国家主席とタイの王が初めて並んで座り、それに加えてラオス、タイ、そして橋を供与したオーストラリアの首相が参列した[ibid.71]。

６－１．社会主義政権樹立直後の競漕祭をとりまく情勢

1975年8月22日、人民解放軍の最も人気のある50人のパテート・ラオ女性兵士が、パテート・ラオの拠点であるヴィエンサイ（サムヌア）からヴィエンチャンに象徴的な入城を果たすと、翌8月23日にはパテート・ラオによってタートルアン広場で「勝利の日」が祝われた。これは、ヴィエンチャンの街が王国政府の手からパテート・ラオの手に引き渡され、ヴィエンチャンが「解放」されたことを意味していた[Askew, Logan and Long 2007:155-156]。こうした歴史的変動期である1975年は、さすがに競漕祭はおこなわれなかったようである。競漕祭がおこなわれる季節である10月の12日は、1945年、パテート・ラオの前身ともいうべきラオ・イサラによってラオスの独立が宣言されてから30周年の記念日であったため、タートルアンにおいてヴィエンサイの共産主義指導者たちも集まり、「30年間におよぶ闘争」の終結を象徴する祝典がおこなわれている[Stuart-Fox 1997:163]。

1976年4月、経済発展を進めるために時間および資金の倹約を重視していた人民革命党は、資金も時間も浪費するだけの仏教に関する祭典は、発展を妨げる無駄なものであるとの規定を発布し、事実上禁止した[Evans 1998:58]。この条例を知ってか、マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーは、「社会主義革命後の数年間、競漕祭は定期的におこなわれなかった」[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:59]と述べているが、実際には、競漕祭は1976年から再開されている[Vientiane Mai 1976(9 October):1]。

人民革命党は、仏教の祭典を「無駄な」祭りとしてみなす一方で、タートルアン祭は「我々人民と友好国が経済的、文化的、芸術的な作品を見せる場を提供しているから」という理由で続行させ[Evans 1998:58]、競漕祭も同様に、「生産活動を促進する道具を勝者

に賞品として与える」[ibid.58]場として続行させた。しかし、競漕祭は王国時代と同じ形で続行されたわけではなかった。1974年まで継続しておこなわれていた競漕祭の儀礼は、ナーガへの言及が愚かな迷信とみなされ[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:58]、事実上禁止された。

６－２．《ヴィエンチャン・マイ》新聞から読み解く競漕祭

次に、ラオス人民民主共和国となって以降の競漕祭について、連続して競漕祭の記事を追うことができる《ヴィエンチャン・マイ（新しいヴィエンチャン）》紙を中心に分析していきたい。《ヴィエンチャン・マイ》紙は「国家が統制する新聞の１つ」であり、「政府官吏にむけたもの、かつ党・政府の関心を広めるため」の新聞である[57][Creak 2010:210]。ラオスの身体文化、スポーツ文化について研究をおこなったサイモン・クリーク(Simon Creak)は、《ヴィエンチャン・マイ》紙について、「党の方針や公的行事の記録の宝庫であり、党のレトリック、特に倫理観や政治的な正統性を作り上げていく言葉を検証するのには最適な資料」と評している[Creak 2010:210]。

1976年10月9日、政権交代後に初めておこなわれた競漕祭には男性の舟が24艘、女性の舟が8艘、全体で32艘が参加する盛況さであった[Vientiane Mai 1976(11 October):1,3]。この年の賞品は、既述の政府方針を受けた「農産物を生産するために１番便利なもの」となっている[Vientiane Mai 1976(9 October):1]。その賞品についての説明は明らかに旧体制を批判する論調で、1975年以前の競漕祭における賞品は「藪をつくるだけの無益なもの」であり、新体制の賞品は旧体制とは全く反対の「価値ある」ものであると述べている[Vientiane Mai 1976(9 October):1]。実際に贈られた「価値ある」ものを1978年の賞品を参考にみてみると、踏み鍬、打穀棒、鋤の刃、犁および犁の刃、耙、シャベル、長い柄の草刈り刃、鎌といったまさに農産物を生産するために必要な物品であった[Vientiane Mai 1978(16 October):1,2]。

６－２－１．競漕祭：「団結力」を高めるための「水上の団体スポーツ」

1977年10月29日の紙面には「競漕祭を開催する意味」と題する記事が以下の内容で掲載されている。

> 競漕祭を開催する意味の1つは、文化的側面を表現し、団結して楽しい雰囲気を作ることにある。また、競漕は私たちラオス国民のスポーツ競技の１つなのであ

57 コーネル大学ならびにオーストラリア国立図書館データベースにおける『ヴィエンチャン・マイ』資料のデータは1975年11月1日からになっているが、1976年10月9日の新聞名の下に記載された新聞号数の手前に「4年目」との記載があることから創設は1972年と思われる[Vientiane Mai 1976(9 October):1]。

る(Kan suang heua pen kan khengkhan kila paphet nung samlap pasason lao hao)。旧体制では、もともと意味のある祭りであったものを意味のないものにしてしまったり、ラオスの文化を風刺することを楽しんだりしていた。例えば、お囃子においては嘲笑しあったり、競漕祭へ行ってお互いに贅沢なものを食べて楽しんだり、酔いつぶれるまでお酒を飲んだり、利益をあげるために度を超した賭け事をしたり、といったことが競漕祭に参加する全ての意味になってしまっていた。

今年の競漕祭は古い時代とは異なり、我国が解放され、人民民主共和体制を築いて約2年経った状況の中で行なわれる。競漕祭を管理維持するために、いずれの土地でも祭りを運営する委員会が設立され、形づくられた全ての機関がさまざまな仕事を請負い、それぞれの軍が準備をすることで、新しい体制下で意味ある、本物の伝統にそった内容の祭りにする。目的は、私たちラオス人の本物の文化をみせることである。人民が結束力を持ち寄り、楽しく素晴らしい雰囲気をつくり、発展にむけた競争をするため、また「楽しんだり、贅沢なものを食べたり、お金を賭けて利益を得ようとしたり、美しくないものを生み出すきっかけを助けるような競漕祭」を排除した新しい人生をつくるための力強さを示すのである。

端的にいえば、今年の競漕祭は、私たちラオス人の美しい伝統的慣習の１つである競漕祭の復興と振興が中心となる。良い内容と良い意味を伴うことで祭りを豊かで実りあるものにすることができるのである。それ以外にも、私たちラオス人民の真の願いである清らかで純白な文化的社会を修復することが目的である。それゆえ、はっきりしていることは、私たち人民が幸せに満ち足りた新しい生活をおくれるようになる日まで、党と政府は常に国の美しい文化の保護と奨励に真剣に取り組み、案じることが国の運命の糸となる。

[Vientiane Mai 1977(29 October):1,3]

こうした政府方針を示したこの年の競漕祭には、パテート・ラオの中心人物の１人であった新政権の副首相兼教育・スポーツ・宗教大臣であるプーミ・ウォンウィチット(Phoumi Vongvichit)や、首相府大臣兼ヴィエンチャン指導部長官であるシーサワート・ケオブンパン(Sisavath Keobounphanh)、ヴィエンチャン軍隊長であるパオ・ピンパチャン(Phao Phinphachan)が参列すると共に、2,000人以上の人びとが参加している[Vientiane Mai 1977(1 November):1-2]。

ここで注目すべきは、競漕祭に対する政府方針を示すこの記事において「競漕は私たちラオス国民のスポーツ競技の１つなのである」と最初に述べている点である。ラオス人が競漕祭における競漕を「スポーツ」と見る視線は、前章の最後でも考察したとおり、すでに旧体制下においても確立し始めていたため、特別新しいものではないが、旧体制においては、政府方針として競漕を「スポーツである」と全面に押し出す論調はみられなかった。しかしながら、新体制においては、競漕をただ「スポーツ」と解釈するだけにとどまらず、

1978年の「競漕祭は祖先から好んで行なわれてきたラオス人の伝統的な祭りで、郡と郡、村と村の団結力を促進する水上のスポーツ競技である」[Vientiane Mai 1978(9 October):1]や、1980年の「古くからラオス人に好まれてきた伝統的な祭りである競漕は、水上の団体スポーツで、国を守ったり、敵の策略や破壊から治安を守ったり、生産や建設などの仕事、特に米の刈り入れ、乾季の稲作に間に合うように準備したりすることに協力したり、人々の暮らしが良い方向へ向かうようにするため、団結力を高めるものである」[Vientiane Mai 1980(15 October):1]といった文言にみられるように、競漕祭はただの伝統的な祭りなのではなく、「団結力」を促進し、高めるための「団体スポーツ」「水上スポーツ」として重要な祭りなのであるといった論調が繰り返されるようになる[58]。

1981年10月7日の紙面に発表された「1981年競漕祭計画」においては、さらにはっきりと競漕祭が「団結力」を重視した祭りであることが以下の方針に示されている。

> 競漕祭は、ラオス人が継続してきた水上の団体スポーツである。優れたものを創造する知恵をもって、手工芸や舟を漕ぐ技術を表現すれば、他の舟よりも自分の舟を速く走らせることができるだろう。９月、10月が到来した。川沿いの人たちは、場所に応じて競漕祭をたびたび開催する。旧暦の第11月になると、出安居祭りにヴィエンチャンの人々はつめかけ、そして団結力を競う競漕祭に集まる。
>
> 1. 期待される目的と内容
>
> (1) 1981年の競漕祭は、慈しみ合って団結することや、村と村、町と町、郡と郡の人びとが楽しみながら、建設・農耕・家畜飼育・畑耕作・稲作・個別小規模生産・集団米生産・今年の稲の収穫が良くなるような稲の世話の仕方・乾季の稲作の準備・乾季にさらに食べ物を作るため、成長の早い澱粉質の野菜を植えることに関する情報交換を増幅させることが目的である。
>
> (2) 今年の競漕祭は、人々が集まり団結力を高めるものである。村や町の安全を脅かし、政治、経済、新しい文化を混乱させる敵の各策略を破壊し、村や町が普段通りの安全を保てるようにする。
>
> (3) 今年の競漕祭は、慈しみ合い、団結力を高めるものである。
>
> [Vientiane Mai 1981(7 October):1,4]

新体制になって以降、繰り返し述べられてきたように、競漕祭はただ楽しく競漕をおこなう祭りであった旧体制とは全く異なり、祭りは日常の農作業の延長にあった。競漕祭の場では農産物の生産性をあげるための情報交換をおこなう「団結力」がまず求められ、そ

---

58 エバンスは新体制下において「伝統的な競技(games)を「スポーツ」へと変容させるようなことがラオス国家によってますます促進されていった」と述べており、その現象の例に競漕をあげている[Evans 1998:46]。

して、1980年以降関係が悪化していたタイという敵に立ち向かう団結力が求められたのである。新体制下においては、「団結」を表すラオ語「サッマキー Samakii」は競漕祭と切っても切り離すことのできない用語となっていく。競漕によって培われた「団結力」は、さらに党大会で決定された政策を支援し、党を支持する祭典の場で発揮するよう求められ[Vientiane Mai 1982(17 September):1]、結果、より多くの人の団結力を政府が期待してか、競漕祭は拡大の道を歩み始める。1982年の競漕祭からは旧体制の時にもみられたように、小さい舟（フア・カープ heua kap）のカテゴリーが加わると共に、青年の舟（フア・スワン・サオ・ヌム heua suang sao num）のカテゴリーが新たに設けられ、従来通りの男性女性の長い舟のカテゴリーと合わせて4つのカテゴリーで競漕がおこなわれている[Vientiane Mai 1982(5 October):1,4]。青年の舟が新たに加わった理由としては、その翌年、すわなち1983年に開催された全国青年同盟会議を意識してのものと考えられる。同年の会議では、青年の競争力の向上が決定されており[Vientiane Mai 1983(14 September):1]、それを受けてこの年の競漕祭には、ヴィエンチャン市スポーツ協会の決定により、ヴィエンチャン・スポーツ委員会の舟1艘を競漕祭に参加させている[Vientiane Mai 1983(15 October):1,4]。また、1983年にはヴィエンチャン市のさまざまな郡において青年たちの競漕祭が開催された[Vientiane Mai 1982(14 September):1 /(15 October):2]。

翌1984年は、81年に掲載された「競漕祭計画」と似たような文言で競漕祭の目的が述べられているが、後者の「団結」一辺倒の文言よりも「健康」や「競争」「楽しさ」といった言葉が含まれている。

> 競漕祭は、我々ラオス人が何世紀にもわたって継承してきた水上で競う団体スポーツである。この伝統は、芸術や文化、工芸に関する職人の際立った技術が現れている。
>
> 健康であるがゆえに、競漕舟を早く走らせることができ、競争における予測通りの勝利を得る事ができる。1984年の競漕祭は、我々ラオス人が祖先から受け継いできた美しい伝統を継承するためにおこなうものであり、楽しさをこれまで以上に感じられるよう盛り上げ、慈しみの心をこれまでと同じように継承し、人民、そして村と村、地区と地区、郡と郡の団結を密なものとするためにおこなう。競漕祭は、集団生活の実行のために、分離単独小規模生産を排除し、社会主義集団大規模生産農業を発展させるため、芸術文化、経済そして社会に関する有益なものを得る機会でもある。
>
> 今年の競漕祭は、村や町の安全を脅かし、政治、経済、新しい文化を混乱させる敵の各策略を破壊し、国民を集め、心を１つにし、結束を高めるために開催する。

今年の競漕祭は、団結力を高め、第３回党大会の決定事項を実際に実行すると共に、２つの歴史的な日である人民革命党の創設30周年とラオス人民民主共和国成立10周年を迎えるために成功させなければならない。（中略）

娯楽、踊り、お囃子は美しく良いものであること。歌やお囃子は治安維持や国家建設が進んだことで、生産が上がり、生活が良くなったという実際の状況に合った楽しいものであること。男性が女性の、女性が男性の、または組織同士をけなすような歌やお囃子は排除する。

[Vientiane Mai 1984(19 September):1,4]

「健康」「競争」「楽しさ」そして「団結」といったキーワードが見られる背景には、文書の中にも述べられている通り、第３回党大会の決定事項の１つ「文化・教育・保健・社会に関する方針と役割」という項目の中の以下の部分に関連があるようである。

時代に即した素晴らしい文化と結合した伝統文化や国の美しい芸術・文学を拡大強化し、新しい文化や社会主義の基礎を作るために、全ての人、全ての家族、全ての村、そして全ての民族の生活を日増しに明るく楽しいものとし、競争力、団結、親睦、平等、敬意、助け合いの精神を集結し、奨励する。反動的文化の残余や放置された旧体制の有害な人々を一掃し、堕落した文化、国外からの反動的な文化の浸透を防ぐ。

国民の保健レベルを上げるために、病気を防ぐための清掃活動、３つの清潔運動、母子の保護活動、国民の健康、種の拡大（家族を増やす）、人口の拡大を目的としたスポーツ体育活動、危険な病気や健康、生活、生産、闘争、仕事を害するような遅れた伝統的慣習の抑制をすることで素晴らしい結果を得る事ができる。

［ラオス人民革命党の第３回党大会文書(ラオ語) 1982:79-80］

こうして第３回党大会の決定事項を実際に実行に移した1984年の競漕祭は、1983年に各地で導入されていたフア・カープ[59]と呼ばれる舟を使った若者の競漕が、8人から12人乗りの小さい舟と13人から17人乗りの大きい舟に分けられ、丸１日をかけて競われることとなり、通常の大きい舟でおこなう競漕と合わせて競漕祭は２日にわたって開催され、フア・カープが34艘、大きい舟は男性が15艘、女性が4艘の全部で53艘の参加となり、歴史上最大級の競漕祭となった[Vientiane Mai 1984(5 & 11 October):1,4 /(16 October):2]。

また、競漕祭の期間中にはバレーボールやセパタクローといったスポーツ競技の試合が1976年から合わせておこなわれていたが[Vientiane Mai 1976(9 October):1,3 /1978(14

[59] フア・カープは舟のタイプ名であり、通常は競漕祭に参加する競漕用の舟である。1984 年は参加しやすいようにとの配慮からか三板（木造小型平底船）での参加も認めている[Vientiane Mai 1984(5 October):4]。

October):3 /1980(27 October):1,4]、1983年を境にスポーツ大会を組み合わせる傾向はますます強くなり、ボクシングやバドミントン、サッカーの試合が開催されている[Vientiane Mai 1983(15 October):1,4 /1984(16 October):2]。

６－２－２．国家スポーツ競技会の競漕種目

競漕祭にスポーツの要素を最も色濃く導入した出来事は、競漕祭で培われてきた競漕が国家スポーツ競技会の競技種目として扱われたことにあったと言える。

第１回国家スポーツ競技会(Kan kheng khan kila heng sat)[60]は1985年11月23日から12月2日まで首都ヴィエンチャンで開催され、国立競技場でおこなわれた開会式には、プーミ・ウォンウィチットが参列し、教育大臣であるブンティアム・ピッサマイ(Buntiam Phitsamai)による「国家スポーツ競技会を1985年に開催する意義と重要性」に言及する以下のような開会スピーチで幕を開けた。

> 1985年は共和国成立10周年を迎える年であるため、党、軍、ラオス人民すべてが楽しみながら競い合い、ラオス人民民主共和国成立10周年を迎えるための成果を打ち立てる場として国家スポーツ競技会は重要な役割をもっている。全民族の団結を強固なものとし、スポーツが社会主義的新しい人間の育成の場となるよう、国内におけるスポーツ活動を更に拡大・促進し、徐々に普及させ、更なる効果と利益を得られるように、このような競技会活動に力を入れることが必要である。
>
> [Vientiane Mai 1985(25 November):1,4]

大会には全国から800人（うち女性選手178人）が集まり、サッカー、バレーボール、バスケットボール、卓球、セパタクロ、国際ボクシング、射撃、自転車競技、舟競漕、陸上競技の10種目が競われており[Vientiane Mai 1985(25 November):4]、そのうちの競漕は9人乗りの舟を使用し、12艘で競われている。競漕祭で使用する舟よりは小型の舟の競漕であったが、競漕は競漕祭と全く同じ場所、すなわちワット・チャン岸において「国家レベルの競漕競技」がおこなわれたと報告されている[Vientiane Mai 1985(30 November):1]。

---

60 2008年10月25日に作製されたスポーツ局の国家スポーツ競技会に関する文書には、3年に一度の開催となっており、競技会の目的の一部には「青少年、生徒、学生にスポーツをおこなうことを推奨し、麻薬やアルコールなどを放棄させ、体を鍛え、強い完全な体をつくる事に邁進して政府の輝かしい栄誉を得られるように奨励するものである。国家スポーツ競技会は、国のために栄誉ある名声を国際舞台において得るために、全ての省庁、県などの優秀なすばらしい祝福を受けるスポーツ選手（ナックキラー nak kila）を国の代表として選出する競争の場である」と記されている[Khammang, Khunphengによって書かれた国家スポーツ委員会の文書]。

こうした国家スポーツ競技会における競漕が土台となってか、翌年1986年のヴィエンチャンの競漕祭には、11月に開催される人民革命党第４回党大会を盛り上げるという名目のもと、ヴィエンチャン以外にもルアンパバーン、ボリカムサイ、カムワン、サワンナケート、サラワン県から競漕専門のスポーツ選手(nak kila suang heua)を競漕祭運営委員会が特別に招待し、参加させている[Vientiane Mai 1986(2 October):1,4]。

1982年、競漕祭に設けられた小さい舟（フア・カープ）のカテゴリーは、青年のスポーツ活動活性化を目的として徐々に規模を拡大し、1984年以降、競漕祭においては丸１日が小さい舟の競漕にあてられるようになった。そして、1985年の国家スポーツ競技会において競漕が種目としておこなわれたことにより、人びとの関心も高まり、競漕祭のメイン種目ともなっていく。1986年にはさまざまな役所や工場、会社、機関、生産財団がスポーツ競漕チーム(khana kila suang heua)を結成し、小さい舟のカテゴリーに参加しており、競漕祭全体で40艘の参加があったうち、30艘は小さい舟に占められていた[Vientiane Mai 1986(20 October):1,4]。小さい舟での参加は人数を集めることにおいても、舟を製作・管理することにおいても、長い舟で参加するよりも手軽なスポーツとして、競漕祭の中で存在感を増していき、更には、競漕祭における小さい舟の競漕結果は、国家スポーツ競技会や国外のスポーツ競技会の競漕種目に出場する選手の選抜と関係し、競漕祭は選抜大会としての意味合いも含むようになっていったと思われる。

1989年には競漕種目は国家スポーツ競技会に留まらず、東南アジア競技会（Southeast Asian Games）へと開かれていき、マレーシアのクアラルンプールで開催された第15回東南アジア競技会には、8人乗りの舟競漕に男性のラオス代表選手が送られており[Vientiane Mai 1989(9 August):3]、競漕祭の中でおこなわれる小さい舟のカテゴリーは全国、さらには国外へと広がりをもつスポーツ種目とますます繋がりを深めていった。こうした流れの中、1991年の紙面においては、小さい舟のカテゴリーを表していた「フア・カープ」は、「フア・キッラー（スポーツ舟）」と同等のカテゴリーであることが示され、同時に、長い舟の意味である「フア・ニャオ heua nyao」は「フア・パペニー（伝統舟）」であることが示されている[Vientiane Mai 1991(24 October):1]。舟のカテゴリーに「スポーツ」と「伝統」という用語が現われた1991年は2000年前後に起きた伝統論争とも似たような現象を示しており、この時期、「スポーツ」として責を問われ始めたのは「フア・カープ」という小さい舟のカテゴリーであった。

しかしながら、カテゴリー名には揺らぎがみられ、長い舟は「伝統競漕舟」で安定して定着するものの、「フア・カープ」というカテゴリーは「フア・カープ」と「フア・キッラー」の間を行きつ戻りつするような現象が、1998年の競漕祭で「フア・カープ」の参加が廃止されるまで繰り返される。1991年の括弧付きカテゴリー名である「フア・キッラー」は、1992年、93年には見られず、「フア・カープ」のままであったのに対し、94年にはカテゴリー名が括弧付きではない「フア・キッラー（スポーツ舟）」となっている[Vientiane Mai 1994(4 October):6]。

1994年は、社会主義政権樹立後の1975年から、教育・宗教省下のスポーツ・体育教育・芸術教育部に所属していた国家オリンンピック委員会とスポーツ連盟が、93年5月3日の条例で国家スポーツ委員会として首相府付きの組織に生まれ変わり、各県にスポーツ局が置かれ、活動を開始し始めた年である[Vientiane Mai 1994(8 November):5]。スポーツは人材育成の重要な要素とみなされ、そのスポーツならびに関連する身体文化を促進することで、国家の発展をめざすイデオロギーを実現させる。それが国家スポーツ委員会の目的であった[Creak 2010:274]。1994年11月に数回に亘って連載された1994年の国家スポーツ委員会の活動報告において、競漕祭の競漕は「われわれラオスの不滅のアイデンティティとなったスポーツ」[Vientiane Mai 1994(10 November):5] であるといった文言がみられることから、特に国家スポーツ競技会や東南アジア競技会の種目と繋がりの深い「フア・カープ」は、1994年に「フア・キッラー」になったと考えられる。1995年のワット・チャン競漕祭におけるカテゴリー名は再び「フア・カープ」に戻っているものの、「スポーツ委員会は外国との競漕へ行かせるフア・カープを選ぶため、フア・カープの予選会を行なう」[Vientiane Mai 1995(27 September):1]と発表されていることから、同年11月8日にタイのナコーンラーチャシーマーで開催される第８回国際競漕競技会、および12月にタイのチェンマイで開催される第18回東南アジア競技会[61]に参加するための選手選抜という目的が、競漕祭の「フア・カープ」の競漕には含まれていたことが分かる。1995年以降、「フア・カープ」は「フア・キッラー」と同義であるとの考えは上記目的を見てみても定着していたようではあるものの[62]、1998年にワット・チャン競漕祭における「フア・カープ」の競漕が廃止されるまで、カテゴリー名は「フア・カープ」のまま保たれた。

６－２－３．ラオス-タイ友好競漕祭

メコン川をはさんだ隣国タイの舟は、少なくともラオス王国政府時代の1964年からワット・チャン競漕祭に参加しており、内戦激化にともなうラオスの状況を受けてタイ内務省がラオスとの国境通過禁止令を出した66年以外は、社会主義政権へ移行する75年の前年、すなわち1974年の競漕祭までほぼ毎年参加していた[63]。政権交代後、ラオスとタイの関係は主にメコン川国境の警備問題をめぐり悪化し、幾度となく国境の封鎖が命じられているが、封鎖命令の間を縫うように、1979年以降、ヴィエンチャンとタイ・ノーンカーイ県の間の友好競漕祭がおこなわれている。1979年はラオスとタイの関係は悪化していたものの、タイの首相クリエンサック・チャマナン(Kriangsak Chamanand)がラオスを訪れると共に、ラ

---

61 1995 年 12 月 9 日から 17 日に開催された東南アジア競技会において、ターパ村の女性チームが 10 人乗り 800 メートルの競漕種目にて銀メダルを獲得している。

62 1995 年の新聞には「今年のフア・カープの競漕、もしくはフア・キッラーの競漕は、昨年よりも参加数が少なかったが、新しい舟が参加し、優勝して盛り上がった」との文章が見られる[Vientiane Mai 1995(10 October):3]。

63 1970 年の競漕祭には参加していないようであるが、詳細については不明。

オスの首相であるカイソーン・プムヴィハーン(Kayson Phomvihan)がタイを正式訪問するなど、両国の協力関係を模索する動きがみられた。また、メコン川を流れるラオス側とタイ側の県の高官同士の交流ももたれていた[Iinuma 2002:66-67]。

その流れを受けるかのように、1979年9月28日、ヴィエンチャン代表団：ヴィエンチャン知事のノーン・インタヴォン(Nong Inthavong)が、ラオス＝タイ友好競漕計画についてノーンカーイ県知事と話し合いをおこなうために、ノーンカーイ県を訪ねており、その話し合いの結果、1979年10月7日にシーサッタナーク郡のチョムチェーン岸において女性と男性の舟の競漕をおこなうことが決定され、競漕における規定が細かく決められた[Vientiane Mai 1979(6 October):1,4]。ノーンカーイ県からはノーンカーイ郡とターボー郡の舟9艘[64]の参加が表明され、それらの舟の漕ぎ手としてヴィエンチャンを訪れる500人から600人の人たちの休憩場所として、チョムチェーン寺をはじめ３つの寺が提供されている。

1979年10月7日に開催されたラオス-タイ友好競漕には、ラオス側はヴィエンチャン知事兼ヴィエンチャン軍隊長パオ・ピムパチャン、通信・運輸大臣サナン・スティチャック(Sanan Suthichak)、他の大臣、国会議員、愛国戦線の委員たちが参列し、タイ側は農業・協力省の副大臣ウォン・ポンニコーン(Vong Phonnikone)、ノーンカーイ県知事クソン・サーンティタム(Kuson Santitham)のほか、在ラオス大使が参列し、午前中は女性の舟の競漕、午後は男性の舟の競漕を観戦している。競漕祭には、タイ王国の首相であるクリエンサック・チャマナン将軍から賞品が提供されており、その賞品をポンニコーンが競漕に勝利したラオスの舟に贈り、返礼として、ピムパチャンがノーンカーイ県知事のサーンティタムに賞品を贈ると共に、９艘のノーンカーイ県の舟にも友好賞品を贈っている。午前の競漕終了後に結束を強めるための食事会をヴィエンチャン市が主催し、友好競漕祭に参加した人たちをもてなしたり、閉会式の際にピムパチャンが友好競漕祭に参加してくれたタイ側の人びと１人１人に最大限の感謝を示したりと、競漕祭はラオス-タイ間の情勢が不安定だったこの時期において、「友好」「結束」を最大限に重視した内容となっていた。タイ側を代表するポンニコーンは祭りの最後に「ラオスとタイの国民の結束に対して、この度の競漕は重要であり、この競漕祭は平和に慈しみ合い、協力し合おうという両国国民の決意である」と述べている[Vientiane Mai 1979(8 October):1,3-4]。

こうした友好競漕祭は、1980年、1981年に再びメコン川でラオスとタイの軍事衝突や発砲事件が起き、タイ側が国境を閉鎖した時期にも開催しようとしていたようである。1980年7月3日にタイ側国境が封鎖されたあとの10月にも、ヴィエンチャン知事ピムパチャンとノーンカーイ県知事サーンティタムの間で友好関係改善のための競漕祭をおこなう交渉が

---

64 タイ側の参加村は、ヴィエンクック(Viengkhuk)、タートカム(Thatkham)、コークパニャーン(Khokpanyang)、ムアンミー(Muangmii)、ヒーンガーム(Hinngam)、ポーンサー(Phonsaa)2艘、ターマークフアン(Thamakfeuang)、ケオウィチット(Keovichit)であった。一方のラオス側の村は、ハートサイフォン郡からティントム、ターケーク、ターパ、タドゥア、シーターン・ヌア、シーコッタボン郡からシーカイ、ヴィエンチャン県からバーンクーン、トゥラコム郡からハートスワンが参加している[Vientiane Mai 1979(8 October):1,3-4]。

進められていた。1980年10月27日の「ヴィエンチャンとノーンカーイは友好競漕祭について交渉する場をもうけた」と題する記事においてその様子が報告されると共に、「昨年の合意に基づいて今年はノーンカーイ県が主催者となっておこなう」との一文が見られることから[Vientiane Mai 1981(27 October):1,2]、1980年の新聞記事においては確認できないものの、ヴィエンチャンとノーンカーイ県の友好競漕祭は1979年以降、ラオスとタイの関係が不安定な時期においても継続していた可能性がみられる。しかしながら、1980年に競漕祭が実際おこなわれたか否かについては友好競漕祭の記事を見つけられなかったため、定かではない。また、1983年においても、読者からの投稿で「ラオスとノーンカーイの代表がラオス-タイ友好競漕の開催について話し合いをし、その結果、競漕祭が行なわれると聞きましたが、本当に行なわれるのでしょうか？行なわれるとしたら、どこでいつですか？」という質問に対し、「今年は開催する予定があり、開催場所は昨年ノーンカーイ県だったので、今年はヴィエンチャンです。ですが、日程についての詳細はまだ分かっていないので、分かったらまたお知らせします」[Vientiane Mai 1983(15 October):2]との回答がなされているにもかかわらず、競漕祭が実施されたという記事は見当たらないのである。1980年以降、86年までの間は、ヴィエンチャンとノーンカーイ県の友好競漕祭の話題は上がるものの、競漕祭の様子を伝える記事は一切見る事ができない不思議な状態がつづく。現実的には、1980年以降ラオスとタイの関係は断続的に悪化しており、状況が悪化するたびにタイは交易を制限し、ラオス経済を圧迫する。ラオス難民の脱出や密輸船の横行はラオス＝タイの双方を刺激することとなり、夜間にメコン川を両国の巡視艇が行き交い、銃撃戦が発生することもあった[名越 1978(1991):32]。1984年6月にはタイがラオスのサイニャブリ県パークラーイ郡の３村へ侵入し[ヴォーラペット 2010:298]、領有権を主張したことにより、ラオスとタイの緊張関係はピークを迎え、国境紛争へと発展することとなる。タイは「ベトナムの傀儡」とラオスを非難し、ラオスは「汎タイ主義」であるとタイを非難する双方の主張が衝突し合い、関係は冷えきっていった[名越 1978(1991):32]。だが、1984年10月にはタイ軍がパークラーイ郡の３村から撤退を発表し、1985年7月にはラオス-タイ国境紛争の協議が再開された。にもかかわらず、関係は安定せず、1986年2月には再びメコン川での発砲事件が発生し、タイ側はメコン川国境を全面封鎖している[ウォンウィチット 2010:271]。

ラオスとタイの関係は1980年代を通じて安定しない状況にあったため、ヴィエンチャンとノーンカーイ県との友好競漕祭もその影響を受け、毎年の開催は困難であったと思われるが、両国の関係が安定に入り始める1988年より以前の1986年には再び友好競漕祭がおこなわれている。1986年10月18日に掲載された友好競漕祭の予告記事には「親族が慈しみ合いの気持ちを持ち、結束を高めるのと同じように、ラオスとタイ（ヴィエンチャンとノーンカーイ）も友好を深める競漕をおこなう」との文言が記され、10月18日にハートサイフォン郡タードゥア村の対岸にあるノーンカーイ県で開催されることが告知され[Vientiane Mai 1986(18 October):1]、10月20日の紙面においてその様子が報告されている[Vientiane

Mai 1986(20 October):1,4]。翌1987年にもラオスとタイの国境沿いで新たな紛争が発生していたものの、友好競漕祭はおこなわれている。同年にはノーンカーイ県との友好競漕祭に出場する権利をかけた予選がチョムチェーン村で事前に開催され、ターパ村、タードゥア村、建設会社の舟が出場権を得ている[Vientiane Mai 1987(29 September):1,4]。10月4日のハートサイフォン郡タードゥアで開催された友好競漕祭を伝える記事には、伝統的な舟による競漕がおこなわれたことが報告されており[Vientiane Mai 1987(5 October):1,4]、その競漕祭の目的は、村や家が近いラオス国民とタイ国民、特にヴィエンチャンとノーンカーイ県の間のメコン沿岸に土地を持つ人びとが良好な関係を築き、両国の理解を深めることであることが述べられている[Vientiane Mai 1987(1 October):1]。

1988年に国境紛争が落ち着き、国際情勢が変化し始めると、ラオスとタイ両国は正常な関係を模索し始めた[Iinuma 2002:68]。そうした状況下の中、ヴィエンチャンとノーンカーイ県との友好競漕祭だけでなく、ヴィエンチャンのシーコッタボン郡と対岸のノーンカーイ県シーチェンマイ郡との友好競漕祭や、ハートサイフォン郡と対岸ターボー郡との友好競漕祭など、古くからメコン川を挟んで親戚同士のような付き合いをしてきた地域の友好競漕祭が盛んにおこなわれている。そして、シーコッタボンとシーチェンマイの友好競漕祭の記事においては、シーコッタボン郡に属するクンター村の村人が意見を寄せており、自分にとってシーチェンマイの人は「アーイ（兄）」であり、自分は「ノーン（弟）」であると述べ、その理由に、シーコッタボン郡に属するクンター、ウップムン、シーカイ、ワット・タイ村の人たちはシーチェンマイの人と婚姻関係にある人もいるからだと述べている[Vientiane Mai 1988(26 September):1,4]。また、同じような意見はハートサイフォン郡とターボー郡の関係においても見られ、競漕祭の内容を伝える記事には、「ハートサイフォンの人びととターボーの人びとはアーイ・ノーン（兄弟）の関係である」との文章が見られる[Vientiane Mai 1988(31 October):1,4]。

しかしながら、ラオス人とタイ人の関係は複雑であり、メコン川が国境となることで属する国が異なることになっただけと考える、ハートサイフォン郡とターボー郡の人たちの「アーイ・ノーン」関係や、シーコッタボン郡とシーチェンマイ郡の人たちの「アーイ・ノーン」関係とは異なり、一般的には対岸に住む同じラオ族の「東北タイ人」に対して「アーイ・ノーン」という感情を抱いていないことが多い。これは、長い歴史の中での関係性もあるが、社会主義政権樹立後にタイとの関係が長い間悪化していたことも影響していると思われる。カム・ヴォーラペットはラオスとタイの関係について以下のように述べる。

> ラオスとタイとの政治関係は、文化、言語、宗教、習慣を共有することから、良好で友好的であると思う人も多いであろう。しかし、現実はまったく違う。そこには常に不信感があり、またタイ人はラオス人に対して優越感を抱いている。
>
> ［ヴォーラペット 2010:199］

タイ人は、自らを常にラオス人の「従兄」であると考えるが、これはラオス人にとっては受入れがたい恩着せがましい態度である。タイ人は、ラオス人に対して常にいくばくかの軽蔑を持って接し、彼らに対する思いやりの気持ちなどほとんど持ち合わせていない。

[ibid.200]

また、東北タイで調査をおこなっていた林行夫は、タイとラオスの関係はしばしば「愛憎関係に結ばれたキョウダイ」に喩えられると述べており[林 2003(2006):79]、ラオスと東北タイに住む同じ民族であるラオ人たちの意識の違いに驚かされた自身の体験を以下のように語っている。

（ラオス帰りの林は東北タイのウボンの１村で）「むこう」のラオ語で話しかけてみる。ところがなぜか会話はぎくしゃくする。どうやらラオスで慣れた調子がここでは訛って聞こえるのかなと思いあがった筆者は、「もうラオ語は忘れちまったのかい」と言ったのだった。驚いたのはその返事である。「何？ラオ語だって。みんな、聞いたかい。ラオ語だってさ。ここの言葉はイサーン（東北タイ）語よ」。

[林 2003:527]（　）内筆者加筆

1990年に調査でラオスへ正式に入国した時、別のショックを経験した。（中略）81年以来、東北タイのラオ人集落が自分の仕事場となっていたので、いよいよ彼らの「故郷」に踏み込むのだと言う気持ちで昂揚していた。ところがそれが手前勝手な思い入れでしかないことを、ラオス側のラオ人官僚に一蹴される。こういうのだ。＜彼らはイサーンである。ラオ語ではなく東北タイ語を話す人々である。彼らにラオの伝統文化は継承されていない。タイに依存してきた、自分の国を持たない人々である。ともにもち米を食べるが、生食の習慣はイサーンのものであってラオのものではない＞。（中略）(政治的ヘゲモニーを掌握している)ラオ人エリートにすれば、東北タイのラオ人は民族としての誇りや魂を売り渡した烏合の衆でしかない。

[ibid.528]（　）内筆者加筆

対岸のイサーンの人びとと直接関わることのないラオス人にとっては、同じラオ族であっても、「タイ」に属する人びとであることに変わりはなく、ラオス国内でラオス人たちが友人や仲の良い人に「アーイ・ノーン」と使うのと同じ意味合い、同じ温度でイサーンの人たちを「アーイ・ノーン」と呼ぶことには幾ばくかの抵抗を感じる人が少なくない。しかし、対岸との交流が昔から盛んであったハートサイフォン地域のような場所において

は、やはり対岸のイサーンの人びとは親戚のような関係にあり、「アーイ・ノーン」と呼べるべき相手であった。なぜなら、ハートサイフォン地域の人びとは、社会主義へと体制が移行する1975年以前はメコン川を自由に横断することができたため、対岸の親戚や仏教寺院を尋ねたり、消耗品を購入しに行ったりと、彼らの生活の一部として対岸と交流をもっていたからである。1999年にハートサイフォン地域で調査をおこなった飯沼建子は、この地域のラオス人たちが対岸のタイとの関係に関して以下のように語っていたことを記録している。

> 今日にいたっても、1975年以前はラオス人もタイ人も一方では魚を食べ、他方で米を自由に食べられたものだ、と思い出す。ラオス側の地域では「もしタイとラオスが繋がっていたら、サイフォン地域は繁栄し、女性の精霊に助けられてノーン・カムセーン(Nong Khamseng:1994に開通した友好橋の近くの地域)のような場所になっていただろう」と長く信じられている。[Iinuma 2002:65-66]

少なくともハートサイフォン地域においては、「メコン川を挟んだ両岸のタイ人とラオス人は同じ文化、同じ精神をもっており、１つのグループとして「メコンの人びと」であるというイメージを強くもっていると役人も人びとも同じく表現していた 」[ibid.66]というように、対岸のタイ人は遠くの隣人ではなく、近くの親戚といったイメージを持っていたことが分かる。

競漕祭においても、メコン川を共有する祭りであるがゆえの特徴もあり、国と国の関係が悪化した状況下においても、政府の方針と歩調は合わせつつ、できうる限り開催することを目指していた様子が窺える。

1988年11月にタイのチャートチャイ・チュンハワン(Chartchai Chunhavan)首相がヴィエンチャンを訪れて以降、両国の関係は正常化へと向かい、1990年、初めてタイの王族であるシリントーン(Sirindhorn)王女がラオスを訪問するという歴史的な局面を迎えると、情勢は更に安定し、友好競漕祭も1988年以降は毎年開催されるようになった。

ヴィエンチャンとノーンカーイ県の友好競漕祭は通常、ヴィエンチャン市とノーンカーイ県が交互に主催し、会場も交互に移動させており、ヴィエンチャン市で開催される際には、ワット・チャン競漕祭の時期と近い日にちでハートサイフォン郡かシーサッタナーク郡において開催されていた。ただ、友好競漕祭の記事は、ラオスが東南アジア諸国連合(ASEAN)に加盟した1997年以降から見られなくなる。2007年の調査時にハートサイフォン郡の役所に務めるスポーツ担当者が語ってくれたことによると、1997年にラオスの首都であるヴィエンチャンとタイの一地方都市であるノーンカーイとで友好競漕祭を開催するのは釣り合わないということになり、ハートサイフォンとノーンカーイの友好競漕祭に変更になった、とのことであった[調査2007年2月21日]。1997年以降も継続してハートサイフォンとノーンカーイの友好競漕祭は実施されていたようで、シームマノー村のネオホーム(村の

相談役)の老人（男性、60代）は「2006年までターパ村がノーンカーイ県との友好競漕を主催していたが、2006年からハートサイフォン郡が運営を統轄するようになった」と話してくれた[調査2007年2月22日]。

６－２－４．競漕祭における「伝統」

前述したように、1975年以降、社会主義へ移行した新政府は、「無駄な」祭りを事実上禁止にしたものの、「水上の団体スポーツ」である競漕は「団結力」の促進に役立つと共に、生産力向上につながるとして、農具を優勝賞品とし、続行させることを決定した。こうして「団結力」を高める目的をもたされた競漕は、スポーツを通した新しい人材作りといった意味合いももたされ、「スポーツ」の側面を強くしていったが、政府は同時に、競漕祭は「ラオス人が祖先から受け継いできた美しい伝統」であるといった見解も繰り返し示していた。本章の２節１項で引用した1977年10月29日の「競漕祭を開催する意味」と題する紙面にも「本物の伝統にそった内容の祭り」にし、「私たちラオス人の本物の文化をみせる」ことが目的であると述べられている。

では、ここで述べられた競漕祭の「本物の伝統」そして「本物の文化」とは何を示していたのであろうか。その答えは、1977年の競漕祭で贈られた「美しい踊り、美しいお囃子、美しい装飾」に対しての賞に現われていると言える[Vientiane Mai 1977(1 November):1-2]。新体制下の競漕祭で繰り返し禁止されたのは、旧体制下と同じく、「個人を中傷するようなお囃子を歌うこと」「性器を表すようなものを祭りにおいて作ること」であり、「発展した国や国民のことを歌うようなお囃子」にするよう指導が入っていることから[Vientiane Mai 1978(10 October):4]、まずは旧体制下でも散々禁止された誰かを中傷するようなお囃子と性器を表すようなものによる表現を排除し、「美しい」競漕祭に戻そうとしていたことが窺える。また、1981年の競漕祭計画においては、お囃子で人や機関を皮肉るようなものは避けるようにとの指導に加え、「娯楽、踊り、お囃子は生産性向上を鼓舞するような内容の美しいものにすること」、「着衣は国の特徴となる美しいものを着用すること」、「装飾は見た目に美しいものとすること」が指導されていることに鑑みると[Vientiane Mai 1981(7 October):1,4]、新政府においての競漕祭の「本物の伝統」「本物の文化」は、やはり1977年に設けられた賞の対象である「美しい踊り、美しいお囃子、美しい装飾」に集約できると言える。

しかしながら、競漕祭における最大の眼目は、「毎年同じ時期に伝統的慣習に従っておこなうこと」であり、その競漕祭を伝える紙面には、ほぼ必ず「伝統的な祭り」「伝統的慣習」といった文言が並び、その文言に付随して「競漕はラオス人に好まれ、広くおこなわれているスポーツの１つである」といった表現もまた 1975 年以降 1980 年代を通して同じように繰り返されてきた。だが、その文言に変化が現われ、「スポーツ」の語が全面に押し出されなくなったのは 1990 年以降のことである。1990 年は先のラオスとタイの関係に

おいて触れた通り、ラオスとタイの関係が安定し、タイの王族シリントーン王女が初めてラオスを訪れた年でもあり、また、ラオスが諸外国との関係改善をはかり始めた時期でもある。

1990 年に情報宣伝文化局文化執行委員会副局長から出された「ヴィエンチャン市内における伝統行事、それに付随するイベントへの参加に関する告知」には、「出安居そして競漕祭を開催するにあたり、楽しい雰囲気のもとに芸術文化をしっかりと守り、国家の素晴らしい伝統を全民族、国民の団結をもっておこなう」ことが方針として示されている[Vientiane Mai 1990(28 September):1]。また、翌 1991 年には、「文化遺産であり、古来より伝わるわれわれラオスの美しい伝統を活性発展させ、楽しいものとするため」ヴィエンチャン市のネオ・ラオ・サンサートが競漕祭の運営を任されたことが告知されており[Vientiane Mai 1991(3 October):1]、競漕祭は「伝統競漕祭(bun paphenii suang heua)」もしくは「伝統行事(bun paphenii)」であることが、1991 年の紙面で幾度となく繰り返されている[Vientiane Mai 1991(23 &25 October):1]。1991 年は 98 年 10 月より外国からの観光客を受入れ始めたラオスの観光産業が劇的に伸び、観光がラオスの主要輸出産業となった年でもある[Yamauchi and Lee 1999:1]。観光資源としてのラオスの伝統が重視されはじめ、このように競漕祭の「伝統」が強調される中でおこなわれた競漕祭のカテゴリー名に本章２節２項で述べたような変化が起きたのは当然のことだったと言えるかもしれない。それまで小さい舟を示す「フア・カープ」と長い舟を示す「フア・ニャオ」で分けられていただけの名称が「フア・キッラー」と「フア・パペニー」に変更されたのは、2000 年前後に起きた伝統論争の時と同じく、何が競漕祭にとっての伝統なのか、という目線が入り始めたことを示している。

1993 年 10 月 21 日の紙面には競漕祭に対する意見として「イー・ホン・メー・ニャーがイー・ホン・ファオ・ターになってしまった」と題する記事が掲載されている。

> 競漕(kan kheng khan suang heua)はラオスそして外国の人たちが関心をよせるスポーツのひとつである。このスポーツ種目である競漕は、先祖から継承されてきた伝統的な年中行事である。しかし現在、このスポーツ種目は発展し、郡のレベルから国際スポーツ、「シーゲーム（東南アジア競技会）」のようなスポーツ大会での競技種目に拡大してしまった。競漕がスポーツとして発展拡大してしまったことにより、わたしはずっと昔の舟を思い起こす。昔は自分の村や郡を応援するだけでなく、近隣の村同士の友好関係を深めるために、参加する多くの舟を代表して応援する舟への表彰もあった。ヴィエンチャンの人たちにとって特別なのは、素晴らしい勝利を収めてきた「イー・ホン・メー・ニャー」である。シーコッタボン郡の人なら子供から大人まで、特にシーカイ村の人たちは、他のどの村やどの郡よりも、この舟がどのぐらいの勝利を収め、観る人の感動を誘い、期待を裏切らなかったかよく知っているだろう。特に最後のティー・サーン・ナム・

ノーンでは常に勝利を収めていた。しかし、舟自体が年をとってしまった。もしくは漕ぎ手の質が悪いのだろうか？それとも漕ぎ手の練習を指導する者の熱意がないのだろうか？かつて名声を馳せた舟は、昨年から今年にかけて、負けることが多くなった。かつてはラオス−タイの友好試合において、ラオスの勝利に貢献した舟も、イー・ホン・ファオ・ター（岸を守るイー・ホン）になってしまった。

[Vientiane Mai 1993(21 October):2]

この意見には、スポーツとして発展してきた競漕に対する複雑な気持ちが表れている。「イー・ホン・メー・ニャー」というのは、シーコッタボン郡シーカイ村の舟で、1980年代に常勝を誇った舟である。意見の全体としては、競漕において常勝を誇っていた「イー・ホン・メー・ニャー」が弱くなったことに対する悲哀を表しており、競漕がスポーツへと発展してきたことに批判的な目を向けているわけではないが、スポーツ種目として発展してきた競漕祭が昔とは形を変えていることに対し、少なからず郷愁を覚えている様子が窺える。

一方、上記意見の5日後にあたる10月26日に掲載された「スワン・フアもしくはケーン・ルア…フ…ル…どれが正しいのか？」という記事は、競漕祭に対する言葉の使い方についてタイ語の影響を指摘し、批判的な意見を展開している。

父母の時代には、舟を水面に下ろして速さを競い合うことを「スワン・フア suang heua」と呼んでいた。スワンは、ゴールとなる勝利地点があって、他よりもリードすることをさす。彼らは「ケーン・カン kheng khan」とは１度も言わなかった。しかし今日では、なぜか「ケーン・カン・スワン・フア kheng khan suang heua」とよく言う。「ケーン・カン」というのは、賭け事との関係が深いため、右岸の親戚たち（暗にタイのイサーンを指している）は「ケーン・カン・フア・ニャオ kheng khan heua nyao」と言うのだろう。下弦１日目の競漕の前には、上弦15日の夜に「ドラム競争 seng kong」がある。ドラムを叩いて競い合うのである。これも「コーン・セン kong seng」と呼ぶのであって、ほかのドラムの単語は使わない。競漕(kan suang heua)は、漕ぎ手の力強さを競うものであり、また舟の繊細な飾り付けの美しさを競うものであり、お囃子を競い、踊りを競うものでもある。また、ドラムの音、応援の声を競い、そしてさらには舟大工の腕前を競うものでもある。本当のことを言えば、「フア・スワン heua suang」であり、「カーン・スワン・フア kan suang heua」であって、地域の村々の祖先からの芸術を結集したものなのである。なぜなら、工芸、装飾、ルールの中で競う肉体の技や、頭を使ってアイディアを駆使した踊りやお囃子などを生み出す技が結集されているからである。文化省の考古・博物部門は発掘保存して、博物の舟として何艘かを展示したら良いだろう。なぜなら、このさき「フア・スワン」はなくな

り、「フア・ケーン」しか残らなくなってしまう。競漕の重要性を信じる筆者は、彼らがそうしてくれることを願うばかりである！

競漕用の舟を作る大工は、１本の木を刳り貫いてつくる。最初は舟の形にするため大勢で助け合って切り出す。舟の形になったところで、１人の大工が全ての作業を受け持つ。舟大工は木の儀式をおこなわなければならない。舟大工は集中してどこで止めて、どこまで切り出すのかを毎回考えなければらならない。なぜなら、水上における競漕の結果にすべてが繋がるからである。かれらが堅く信じていることは、競漕用の舟に切り出される木には、ものごとを司り守っている神、もしくは「ナーンマイ」と呼ぶ神がいるということである。そのため、木を切り出す際には、競漕用のそれぞれの舟は例えば「イー・ホン・メー・ニャー」や「ケオ・ニョート・ファー」といった名前がついている。舟を水面に下ろす前には、仏教的な供物を捧げる儀礼がおこなわれる。競漕の際には、舳先に座る人が合掌しお辞儀をしながら祈りを捧げ、競漕が終わったら、繁栄を願うお囃子をしなければならない。軽蔑したり、名誉を皮肉ったりするようなことは絶対にしてはならない。仏陀に対する神聖な気持ちを守るため、高級官僚の話には気をつけ、触れてはならない。しかし近年、私たちは（時代に）流され、呼び名を大切にしない。伝統的慣習を放り投げ、悲しいかな「スワン・フア」を未だに「ケーン・フア」と呼びたがる。「フア・スワン」も「フア・ケーン」と呼ぶ始末である。こんなことでは、競漕祭はたのしく、神聖ではあるが、タイのように「ガーン・ケーン・フア　ngan kheng heua」だけになって、ラオス人もそのうち「ガーン・ケーン・ルア」と言うようになる。

[Vientiane Mai 1993(26 October):2]

この意見にみられるのは、タイ語の影響に対する批判だが、それとは別にもう１つ読みとれるのは、タイの影響を受けて舟の形状が変化しつつあったのではないかということである。1993年時点は小さい舟も参加しているため、どの舟に対する意見であるのかは不明であるが、長い舟の代表格である「イー・ホン・メー・ニャー」や「ケオ・ニョート・ファー」を例に挙げていることや、文化省の考古・博物部門に対して博物の舟として何艘か保存展示することを意見していることを考えると、長い舟すなわちフア・ニャオのことを指しているものと思われる。そして、保存展示を提案する理由について「なぜなら、このさき「フア・スワン」はなくなり、「フア・ケーン」しか残らなくなってしまう」と述べていることから、1993年時点ですでに長い舟の形状にも何かしらの変化が現われていたものと思われる。上記記事の筆者と同じような意見は、2007年にヴィエンチャン市情報文化局のカウンターパートと調査に回っていた時にも聞かれ、カウンターパートのK氏（男性、40代）もラオス王国時代の王室の舟が残っていればそれを保存するのがよいだろうとの話

も出ていたくらいである。同じような意見が出ていることを考えると、1993年の時点で長い舟にタイからの影響が何かしら及んでいた可能性は非常に高い。

1993年10月30日、31日におこなわれた競漕祭においては、1993年10月21日の意見の影響か美しい応援をした舟も表彰され、その表彰は翌年1994年にも継続されている[Vientiane Mai 1993(1 November):1, 1994(4 October):6]。

1994年はふたつの点において特徴的な年である。１つは国家スポーツ委員会が本格的に活動を開始した年であり、もう１つはラオス＝タイ友好橋が開通したことにより、外国からの観光客が更に増加したことである。伝統行事としての競漕祭は、ヴィエンチャン市スポーツ局が運営管理に関与し始めたことで競漕のルールが詳細に決められていき[65]、「スポーツ」競技としての体裁を整え始める一方、外からの観光客が流入することによって、伝統行事としての「伝統」にも再び目が向けられて行く。1995年には競漕祭の「伝統」としてたびたび議論にあがる「ティー・サーン・ナム・ノーン」がおこなわれていないことに対する批判的な意見があがっており[Vientiane Mai 1995(18 October):2]、また、翌1996年には更に「伝統行事である競漕祭への無理解」といった以下の内容で批判的な記事が掲載されている。

> 競漕祭に行く、もしくは競漕祭を見に行く多くの人たちは、どの舟がゴール地点に早く入り、勝つのかだけを褒め讃える。このような見方をするのは、ひとつには、国の文化を表現する伝統的な祭りである競漕祭の目的を理解していないことが問題にある。無理解の理由は、広告の問題でもある。もしくは広告・宣伝をする人が競漕祭はただの水上のスポーツであると言ったりするように、発信側が理解していないことも原因である。本当はスポーツとは別の意味がたくさんある。祭りは伝統的慣習であると同時に、文化なのである。民衆への広告宣伝は、人々が伝統文化を理解できるように説明するものであるべきだ。競漕祭の伝統は、団結、水に対する信仰、罪や幸福に対する信仰の伝統であって、芸術文化を競い合うことが伝統で、漕ぎ手たちの力強さを競うだけのものではない。村や地域の代表として出場する各舟の漕ぎ手たちは、団結力を見せることが伝統である。漕ぎ手たちが息をそろえて櫂を漕がなければ、勝利することはない。私たちラオス人が長く信仰してきた伝統とは、水は母であるから「メーナム」と呼ぶことである。水は平穏をもたらし、水は畑や水田を作り、米は食事となりお腹を満たしてくれ

---

65 かつてよりある程度のルールは存在していたが、全体的なルールが詳細に提示され始めたのは1994年のヴィエンチャンーノーンカーイ友好競漕祭においてであった[巻末資料ルール規定１を参照]。ワット・チャン競漕祭においては、1994年のルールが何かしら関係あると思われるが、1995年から1994年に似た形式のルールが掲載されている[巻末資料ルール規定２を参照]。1995年の競漕祭に関する感想の中には「今年の競漕祭はサッカーのルールのようにイエローカードやレッドカードを使って取り締まりを強化した点は喜ばしい」[Vientiane Mai 1995(9 October):2]といった意見がみられる。

る。競漕は水の流れの恩恵への感謝を表している。祭りの中にライ・フア・ファイもしくはロイ・カトーンが競漕の前にあるのは、村の年寄りたちが祈りを捧げるためである。そして、競漕の時には舳先のリーダーがそこで祈りを捧げ、プログラムの間中そこに捧げものがあるのは、舳先は神聖なるものの場所だからである。

[Vientiane Mai 1996(21 October):2]

また、10月31日の記事においても、「全国の競漕祭は、かつては競漕をおこなっていなかった場所でも競漕をおこなうように努力している。それは、国家スポーツ競技会や東南アジア競技会、アジア競技会、オリンピックにおいてスポーツ種目として競漕があるからである。しかし、祭りとしての競漕は、目的や祭りのもつ意味が同じではない」との意見がみられる[Vientiane Mai 1996(31 October):2]。1991年以降、競漕祭は伝統行事でありながらスポーツという両者のバランスをとりながら、目的に応じてどちらの表現を強調するか使い分けられてきたと言える。

1996年および1997年のワット・チャン競漕祭にはヴィエンチャン市以外にもヴィエンチャン県やルアンパバーン県からも舟が参加し、男性の長い舟の競漕には歴史上最も多い35艘が参加しているが、これは「民衆が拡大した水上スポーツに関心をもっているということ」に加え、伝統的慣習である競漕祭において自社商品の宣伝もかねて多くの企業や商店などからの支援金が増えたことによるものだと新聞は報じている[Vientiane Mai 1996(26 October):3]。上記の批判には宣伝広告の問題があげられ、発信側の無理解が競漕祭をただの水上スポーツだとみなす風潮を生んでいる、といったような内容が語られていたが、皮肉なことに、支援金が多く集まる競漕祭は「伝統競漕舟」である多くの長い舟の参加を促し、1998年の競漕祭からそれまで「フア・キッラー」と理解されていた「フア・カープ」の参加を締め出すこととなる[Vientiane Mai 1998(23 September):1,8]。さらに、長い舟においてもラオス元来の伝統的な舟、すなわち、舳先と艫にニェーム(ngeam：水牛の角のような形状)がある舟であることが規定で決められ、舳先の形状が尖っていて、艫の形状が弓のようにそり上がっている舟は競漕に参加できないことが明記された[Vientiane Mai 1998(23 September):1]。また、舟にはラオスの色彩で模様を描くこと、艫には外国の舟のように座って舵取りをする人ではなく、立って舵取りをおこなう人が２人以上いること、舳先の長さ1.5メートルから3.5メートル、幅は35センチであること、舳先や艫にはラオスの伝統的慣習に従った装飾がなされていること、との細かい規定も追加指令として出されている[66]。

こうした伝統を重視した競漕祭の方向性には、「今年の競漕祭で本当のラオスの特徴をもった舟が見られるのは嬉しいことだ。国の伝統的な芸術、文化、慣習を大切に守ることで、子供や孫たちにも分かってもらうことができるし、外国の人たちにも見せることがで

[66] 1998年9月28日付けヴィエンチャン・スポーツ局の書類番号127より

きる」といった好意的な意見が寄せられている[Vientiane Mai 1998(1 October):2]。伝統に回帰していくようなこの流れは、1999年から2000年がラオス観光年に定められていたことと関係していたと言え、上述の好意的な意見を寄せた著者ティットパオ(Thitpao)は、更なる意見として以下のように続けている。

> 本当に伝統を保存し継続するのならば、舟の元来の名前、例えばイー・ホン・メー・ニャーやイー・ホン・カム・セーンといった名前をこの伝統的な祭りと共に保持するべきである。ビジネス的なものが協賛に入ると、これまでの競漕祭のように舟の名前がビア・ラオ１や通信省とかITLなどとなってしまう。これは筆者の意見にすぎないが、考えてみるべきことだと思う。なぜならば、来年はラオスの観光年になるのだから、伝統的な祭りは守り、保持するのが良いのではないだろうか。１番伝統的な側面を世界の人たちに見て貰う方が良いのではないだろうか。[Vientiane Mai 1998(1 October):2]

1999年に観光年を迎えると、ティットパオの意見がきっかけかどうかは分からないが、競漕祭において舟の名前に企業名やスポンサー名を使用することが禁止された。そして、観光年に合わせてラオス国家観光局によって1999年4月に創刊された雑誌、《ラオスを訪れて (Visiting Muong Lao)》第5号(November-December)には、出安居祭と競漕祭の特集記事がラオ語と英語で10頁に亘って組まれたが、その特集には1998年に禁止された形状の舟の写真は１枚もなく、掲載された12枚の舟の写真は全て伝統的な舟になくてはならないとされるニェームに装飾が施されたものであった。[Visiting Muong Lao 1999　no.5(Nov.-Dec.):30-39]。

６－２－４－１．ティー・サーン・ナム・ノーン

ティー・サーン・ナム・ノーンについてアルシャンボーはチャムパーサックにおける競漕祭の終了儀礼の１つとして記述しており、それによると、ティー・サーン・ナム・ノーンとは、「象を叩いて、水を膨らませる」という意味であり、「舟が一列に並び、大砲の合図と共に、突然ものすごい勢いで漕ぎ出す」行為のことである[Archaimbault 1972:78]。

この儀礼的な行為がヴィエンチャンのワット・チャン競漕祭に見られるようになったのは、５章３節で触れた通り、ラオス王国政府時代にルアンパバーン王族のヴォンサヴァン皇太子夫妻が競漕祭に初めて参列した1968年である。王国時代は主には皇太子夫妻が参列していた1972年や74年に行なわれていたことが分かっているが、社会主義政権移行後も毎年行なわれていたわけではないにせよ、ワット・チャン競漕祭以外のヴィエンチャンの競漕祭も含めれば断続的に行なわれていたことが分かっている[67]。ティー・サーン・ナム・ノ

[67] 1976年ワット・チャン競漕祭[Vientiane Mai 1976(11 October):3]、1979年ラオス―タイラ

ーンがワット・チャン競漕祭の伝統か？と問われれば、歴史的経緯を考えると疑問が残るものの、ヴィエンチャン競漕祭におけるティー・サーン・ナム・ノーンの伝統説は消滅の危機、もしくは伝統の消失を憂う際に必ず持ち上がるのである。1995年には、ティー・サーン・ナム・ノーンこそが競漕祭の伝統であるといった論調で、以下のような記事が掲載れている。

ティー・サーン・ナム・ノーンはメコン川では終了してしまったの？

村や郡における競漕はスポーツとなってしまい、日にちを選ばなくなっているものの、私の村ではまだ伝統的な祭りとしておこなっている。しかし、残念なのは、今年の競漕祭ではティー・サーン・ナム・ノーンが行なわれなかったことである。村、郡、遠い郡、違う郡、川のある場所では今日、年中競漕をよくおこなっており、競漕は国際的なスポーツとなってしまった。村や郡での競漕は、スポーツ競技の１つであって、勝利や賞品やメダルばかりを目的としている。どの川沿いのどの村に行ってもそのような様子しか見られない。しかし、メコン川のワット・チャン岸で行なわれる競漕は先祖から受け継がれた伝統に則って行なわれ、他の場所ではやらない、他と同じではないもの、すなわち、多くの舟が集まり、１つになって競漕をする「ティー・サーン・ナム・ノーン」がある。以前は毎年、一斉に漕ぎ下る競漕を行なっていた。しかし現在は、ティー・サーン・ナム・ノーンの競漕はなくなり、多くの人は忘れてしまう…新しく生まれた人たちが大きくなっても「ティー・サーン・ナム・ノーン」が何かを知らなくなるだろう。

競漕をみてみると、新しい時代の言葉では「長い舟の競漕 kan kheng khan heua nyao」と呼ぶことが好まれる。地域レベルや世界レベルでのスポーツ競技に「競漕 kan kheng heua」が入ってきてから、村や郡がしょっちゅう競漕を開催するようになったためである。しかし、「ティー・サーン・ナム・ノーン」は、もう他の場所では見ることができない。スポーツ競技は勝利やメダル、賞品（賞金）を目的として、様々な川沿いで長い舟の競漕という表現が広まっている。かつてティー・サーン・ナム・ノーンはワット・チャン競漕祭でしか見る事ができなかった。しかし、最近はワット・チャン岸でのティー・サーン・ナム・ノーンもメコン川から消えつつある。なぜなら、ワット・チャン岸の競漕は徐々に長い舟の競漕になりつつあるからである。ティー・サーン・ナム・ノーンが私たちラオス人の美しい文化・慣習としての伝統的競漕の特徴だとすれば、言うだけにとどまらず、伝統的競漕と伝統的祭りをスポーツの試合にしてしまっている長い舟の競漕

オスータイ友好競漕祭[Vientiane Mai 1979(8 October):3,4]、1981年ハートサイフォン地区の青年中央同盟競漕祭[Vientiane Mai 1981(6 October):1]、1993年ワット・チャン競漕祭[Vientiane Mai 1993(1 November):1]で実施。1994年と1995年ワット・チャン競漕祭の予定には入っているが、実施されたかは不明[Vientiane Mai 1994(4 October):6, 1995(27 September):8]。

との違いや意味深さを見せ、伝えるべきである。もしティー・サーン・ナム・ノーンがなければ、10艘、20艘という多くの舟が同時に漕ぐ姿をどこで見る事ができるのだろうか？もしそのように多くの舟が同時に漕ぐことがあれば、どれだけ美しさや意味深さが表されることだろう。ティー・サーン・ナム・ノーンを行なうことは難しくなってきているのだろうか？このような機会に美しい伝統的慣習を保持していくことは難しくなってきているのだろうか？伝統的競漕祭をおこなった後に、スポーツのための長い舟の競漕をおこなうことは難しいことなのだろうか？長い舟の競漕がティー・サーン・ナム・ノーンがある競漕のハイライトとなった時には、絶滅してしまうのだろうか？　[Vientian Mai 1995(18 October):2]

1995年以降、ヴィエンチャンの競漕祭におけるティー・サーン・ナム・ノーンは消失したと言ってよい。競漕祭に出場する舟が増え、実施する時間がなくなったことが最大の理由と言える。再びティー・サーン・ナム・ノーンに関する意見が新聞に掲載されたのは2002年であった。前年の2001年、すなわちラオス観光年である1999年−2000年が開けた翌年、ワット・チャン競漕祭にティー・サーン・ナム・ノーンが復活し、参加したブンパオ村が表彰されているが、実際にティー・サーン・ナム・ノーンに参加した舟は2艘のみであった[Vientiane Mai 2001(4 October):1, (5 October):2]。こうした状況を受けて、以下のような意見があがったものと思われる。付け加えれば、2002年は、次章で述べるが、競漕祭から新しい舟が排除され、再度全て伝統的な舟で競漕がおこなわれた年である。

ティー・サーン・ナム・ノーンはイベントの最後に必ずやるもので、忘れてはならない。なぜなら、ラオスの本当の伝統的慣習の祭りである競漕祭の姿であるからだ。ティー・サーン・ナム・ノーンは漕ぎ手や舳先に乗る人、舟の美しさを競うもので、その競漕には賞品が用意される。委員会は全ての舟を上流に向かわせ、岸の方から沖の方へと舟を揃えさせる。その時、それぞれの舟は伝統的な楽器を持つ。例えば、笛やラオスの弦楽器（ソー）、フルート、太鼓、ケーン、木琴、ドラムそしてシンバルなど、村や郡によって楽器は異なる。その人の村や郡によって楽器は異なるが、盛大に演奏しあう。委員会の大きな笛の音がすると、（委員会は）各舟の人たちに対し、その美しさを褒め、「（舟の）美しさもしくはナーン・フア（舟にのる女性）に対する今年の優勝はどこどこの村の舟である」と述べ、美しい舟に対する特別な賞を贈呈する。その後、各舟は楽器の音やお囃子を歌いながら、さらに騒がしく漕ぎ下る。笛の音、ケーンや木琴、太鼓、ドラムの音、そして歌声や前後に揺れる踊りが水面を彩る。（中略）

ティー・サーン・ナム・ノーンで放たれた各舟が漕ぎ下った後、艫の漕ぎ手は足を踏み込み、舟を沈め、舟の動きをゆっくりにさせる。その動きがまるで女の

子が木の棹の両側に水桶をかつぎ、拍子や歌に合わせて上下する動きのようである。2、3艘が列をなして競漕しているときは、各舟の漕ぎ手のシャツの色が混ざり合い、入り乱れ、言い表せないほどの美しさがさらに増す。このようにすることが、祭りの日を更に盛り上げ、楽しく幸せな時を終了させるのに必要であり、老いも若きも、どの人もお囃子の音と共に楽しさに酔いしれる。この行事は、祭りの最後を飾るものであり、まとめるものであるため、年寄りや多くの人が言うには、このような楽しいイベントである「ティー・サーン・ナム・ノーン」を見なかった人は、「競漕祭」そのものを見なかったに等しいと言う。しかし現在は残念ながら、このような良い行事を行なわず、競漕が終わった後に表彰式だけをおこなうところが多くある。もうかつてのようにティー・サーン・ナム・ノーンを見ずして競漕祭を見たとは言わないというように考えないのだろうか？それとも、昔からやっていないのだろうか？（中略）

どこの場所でも競漕祭をおこなう場所では、ティー・サーン・ナム・ノーンをやらなければならない。ティー・サーン・ナム・ノーンを外してはならないのだ。（中略）中部と南部はまったく異なるけれども、どちらの土地でも同じで、多くの場所で（ボートレースのことを）競漕祭（ブン・スワン・フア）と呼ぶし、競漕用の舟が長いことも同じである。漕ぎ手や艫の漕ぎ手も同じである。敬う慣習も同じである。しかし、筆者が分からないのは、なぜヴィエンチャンではチャムパーサックと同じようなティー・サーン・ナム・ノーンの慣習がないのだろうか、ということである。

[Vientiane Mai 2002(17 October):2]

この投稿者は南部チャムパーサック出身の人だと思われるが、彼の意見からも、アルシャンボーの記述からも分かる通り、ティー・サーン・ナム・ノーンはもともと南部の風習であったと思われる。首都ヴィエンチャンにおいてティー・サーン・ナム・ノーンが定着しないのは、ヴィエンチャンの人たちの「伝統」とは言えないからではないだろうか。筆者が調査を行なっていた2006および2007年時点も、競漕祭の事前会議においてワット・チャンが所属しているチャンタブリー郡の郡長がティー・サーン・ナム・ノーンについて言及し、実施することを宣言していたにも関わらず、ほとんどの舟は敗退した時点で帰路についていた。翌年2008年の会議においても、2009年にラオスが初めて国際スポーツ大会である東南アジア競技会を主催するにあたり、団結を促すために同じくティー・サーン・ナム・ノーンの実施が告げられ、ティー・サーン・ナム・ノーンに参加しなかった舟は参加賞を授与する資格を失うと共に、2009年の競漕祭への参加を禁じると宣言されたものの、やはり大方の舟は最後のティー・サーン・ナム・ノーンまで残らなかった。また、ワット・チャン競漕祭を生中継しているラオス国営テレビ[68]番組においても、2008年のティー・サー

68 ラオス国営テレビは 1983 年に創設されている。競漕祭の生中継がいつ頃から開始されたのか

ン・ナム・ノーンに触れることはなく、決勝が終わった時点で放送は即座に終了した。以上のことを考えると、ティー・サーン・ナム・ノーンという儀礼的行為はヴィエンチャンの伝統として人びとの心には根付いていないことが判るのである。

６－２－５．考察：社会主義政権樹立後の競漕祭における「伝統」と「スポーツ」

社会主義政権であるラオス人民民主共和国が建国されて以降、新体制下の競漕祭は「団結」を深めるための「水上団体スポーツ」としての価値を強める一方で、祖先より連綿と受け継がれてきた「伝統行事」であることが繰り返し述べられ、ラオスの文化、ラオスの伝統としての地位を不動のものとしていった。こうした「スポーツ」であり「伝統」である競漕祭は1990年まではどちらかといえば、「スポーツ」の側面を強くしていったと言える。その理由の１つは、政府方針を遂行するための団結力動員と青年の競技力向上を目的としてフア・カープという小さい舟を競漕祭に導入し、より多くの民衆の参加を促したことである。1984年にはフア・カープのカテゴリーのみで丸１日競漕がおこわれるほどの人気を集め、民衆の間に競漕祭のいちカテゴリーとしてのフア・カープを定着させていく。1985年、そのフア・カープと同等の競漕種目が第１回国家スポーツ競技会に取り込まれると、フア・カープは「スポーツ」との繋がりを色濃くし、競漕祭に「スポーツ」という視線を明確に持ち込むこととなる。そしてその結果、フア・カープのカテゴリー名を「フア・キッラー（スポーツ舟）」とする現象が現われ始める。

一方、競漕祭の「伝統」は新体制下においても重要視されてはいたものの、当初、その対象は、美しいお囃子、美しい装飾、美しい踊りに集約されていた。しかし、フア・カープがスポーツ舟との解釈が与えられると同時に、古くから競漕祭の競漕におけるメインの舟であった長い舟は「伝統」を意味するラオ語のパペニーという語が付された「フア・パペニー」として認識されるようになっていく。

ラオスと諸外国との関係が安定したことによって国外の観光客を受入れ始め、観光による国の収益が増すと、観光資源としての伝統文化に目が向けられるようになり、ティー・サーン・ナム・ノーンのような儀礼の消失を憂う言説がみられるが、伝統一辺倒に競漕祭が向かっていったわけではない。1994年に国家スポーツ委員会が首相府付きの組織として格上げされると、競漕祭運営に市のスポーツ局が関係するようになり、ルールがスポーツ大会のように細かなものとなっていった。1975年以降、観光年を迎えた1999年までの競漕祭を振り返れば、競漕祭は「ラオス人が祖先から受け継いできた伝統行事」であると同時に、祭りで繰り広げられる競漕はラオスが誇る祖先から受け継いできた「スポーツ」の１

は不明であるが、1999 年に JICA 専門家としてラオス国営テレビ局に赴任された渡辺和夫氏によれば、ヴィエンチャンに中継車が入ったのは 1996 年か 1997 年頃だという。また、王国政府時代に青年海外協力隊としてラジオ局に派遣されおり、現在もラオスの放送事情に詳しい圓山修吾氏によれば、ワット・チャン競漕祭が生中継で海外でも視聴できるようになったのは 2003 年頃とのこと。

つであり、東南アジア競技会など、国際舞台における競技種目でもあるという両側面が認識の中に定着していった時期といえる。時と場に応じて両者のバランスを使い分ける態度もまた、この時期に形成されたと言えるのではないだろうか。

第７章

21世紀のワット・チャン競漕祭：伝統論争とそのゆくえ

1999年から2000年にかけて展開されたラオス観光年を迎えるにあたり、その数年前より競漕祭における「伝統」を問う声が上がり始めていたことは前章の流れから明らかであるが、「伝統」をめぐる議論の中心となったのは、競漕自体に深く関わる舟の形状についてであった。1993年の記事に見られたように、1993年頃にはタイの舟の影響が少なからず出ており、ラオス従来の舟である「フア・スワン」は、タイの影響を受けた「フア・ケーン」に将来とって変わられるのではないかという不安が生じていた。1997年にハートサイフォン地区で開催された競漕祭の競漕規定には、ラオスの伝統的な形状である「ニェーム（水牛の角のような形状）」が舳先と艫にない舟の出場を禁じる項目が現れる[71]。そして、それを踏襲するように、1998年のワット・チャン競漕祭における競漕規定においても、具体的に「舳先の形状が尖っていて、艫の形状が弓のようにそり上がっている舟」の出場を禁じ、「ニェーム」をもつ舟の出場だけを認めている。しかしながら、ラオスにおいては規定で決定された事項が必ずしも守られるとは限らない。規定で決められていたとしても、厳格な舟の調査を実行委員会がすることはほぼ無いと言える。更には、規定違反をしたとしても、厳罰を与えられるわけでも罰金をとられるわけでもないことがままあるのである。1998年の競漕祭に出場した全ての舟の形状がいかなるものであったのか明確には分からないが、1999年以降も同じように舟の形状に関する議論が繰り返されていることを考えると、規定書の規則が厳格に守られていたわけではない実情が浮かび上がる。2007年の調査時に見られたのは、舳先と艫の形状だけを舟体に合わせて作り替え、簡単に付け替えることができる「簡易版ニェーム」の存在であった。1998年の時点でもこうした「簡易版ニェーム」を警戒していたと思われ、舳先と艫の長さおよび幅の規定も明記はされていたが、厳格に守られなかったことにより、参加者の不満は募り、観光年に際した伝統回帰の流れも受け、2000年の競漕祭における競漕はカテゴリー分化へと進むこととなる。

７－１．2000年のカテゴリー分化に関する伝統論争

どの村が最初にタイの影響を受けた舟を導入したかについては諸説あるが、メコン沿いの村で対岸のタイの町との友好競漕祭を行なっていた村であったことは想像に難くない。2007年の調査時に訪問した30村のうちの多くの村で聞かれたのは、1999年以降常勝を誇っていたターパ村がその最初の村であるという話であった[72]。真偽のほどはわからないが、ターパ村が1996年のワット・チャン競漕祭で優勝した際には以下の報道からわかるように、その結果は驚きをもって迎えられた。

---

[71] 巻末資料ルール規定３を参照。当時のヴィエンチャン市スポーツ局副局長より規定書のコピーをさせてもらったもの。

[72] ターパ村の村長は、新しい舟の形状を最初に導入したのは「ボリカムサイ県のターボック村が初めてで、その次にシェンクアン村、タードゥア村、ターパ村の順で舟を導入した」と話してくれた（2008 年追加調査時）。タードゥア村は 1997 年の競漕祭における男性の長い舟で優勝、ボリカムサイ県のターボック村は 1998 年に同じカテゴリーで優勝している。

今年は多くの人の期待、もしくは予想を裏切って、フア・ビアラオやフア・首相府が勝利した。フア・ビアラオの舟と漕ぎ手はターパ村の人たちである。1995年は準決勝前に敗退したが、今年は多くの人の予想に反して水上スポーツに新しい歴史を作った。 [Vientiane Mai 1996(30 October):2]

２艘の新しく作られた舟がヴィエンチャンの競漕祭を見に来ていた幾百のお客さんを驚かせた。従来は、年季の入った舟が伝統的にすべての賞をさらっていたが、今年は優勝、準優勝とも新しい舟が昨年のチャンピョンから王座を奪った。優勝した舟はヴィエンチャンの南、ハートサイフォン地区のターパ村の舟である。舟はビア・ラオ(Beer Lao)会社の支援を受けており、初めてメコン川に登場したのは1993年である。この村の女性の漕ぎ手は昨年タイのチェンマイでおこなわれた第18回シーゲームで銀メダルを獲得したことで有名である。

[Vientiane Times Weekly 1996(1-7 November):1,20]

上記《ヴィエンチャン・タイムズ》紙の記事の見出しは「ヴィエンチャンの年中行事競漕祭：新しい舟が大きな驚きをもたらした」となっており、新しい舟が勝利するということに対して大きな驚きを持っていたことが読み取れる。1998年に優勝したボリカムサイ県ターボック村の舟もまた、新しく作った舟であった。ターボック村の村長シーヌアン・スワンブンマー（Sinoun Suanbounma）は《ヴィエンチャン・タイムズ》紙のインタビューに対し、以下のように語っている。

「1996年と97年は小さい舟（フア・カープ）を作り、ワット・チャンでレースに参加していました。幸運にも優勝と３位を獲得しました。今年、われわれは２千万キップを投資し、新しいフア・ニャオ（長い舟）を作りました。このフア・ニャオを作る以前、我々はボリカムサイ県でおこなわれたレースでタイの舟と競漕をしました。１回目は勝てませんでしたが、２回目のパークカー(Pakkhat)地域でのレースでは少し進歩して２位になることができました」２つの経験の後、ターボック村は今年のフア・ニャオのレースに出場することを決断した。「フア・ニャオのレースに出場したのはこれが初めてです。祭りの前にわれわれは団結力をもって練習しました。そして２ヶ月前にわれわれはマルボロから支援を受けられたのです。今年は全てのチームがとても強そうに見えました。特にヤーヤーとターンピァオヌアは。しかし、我々のチームはとても屈強な漕ぎ手と素晴らしいチームワークがあるので、怖くはありませんでした。舟体がまだ装飾されておらず、我々の舟は完璧ではなかったけれども、勝ちました。」

[Vientiane Times 1998(9-12 October):1,14]

1997年に優勝をしたタードゥア村の舟が、上記ターボック村の村長のインタビューに出てきた「ヤーヤー」という名前の舟を持つ村であること、そして、調査においてインタビューに応じてくれたターパ村の村人ならびに、ハートサイフォン地区の数村の村人が、新しい形状の舟を初めて導入したのは、タードゥア村であると記憶していることを合わせて考えると、新しい舟は1993年頃より導入され、1996年以降は１位を独占する事態となっていたと考えられる。1999年はターパ村が競漕距離1.2キロを3分20秒で漕ぎくだり優勝したと報道されている[Vientiane Times 1999(29 October - 1 November):1]。競漕にかかる時間の計測結果が報道されたのは1999年が初であることから、いかに今までの競漕とは異なる風景が新しい形状の舟によってもたらされていたのかが推測できる。ターパ村の村長（男性、40代）がインタビュー時に教えてくれたのは「新調した舟は最初の１、２年は速く走らず、３年目からよく走るようになる」ということであった。1993年頃から導入された新しい舟が優勝を独占するようになったのが1996年であるのは驚くことではなく、必然だったと言えるかもしれない。

こうした流れの中で迎えたラオス観光年の２年目である2000年には、新しい形状の舟と従来のラオスの舟とで競漕することに対する不満がピークに達し、カテゴリーの分化へと至る。2000年の競漕祭における規定はヴィエンチャン市スポーツ局局長の名のもと、以下のような内容で《ヴィエンチャン・マイ》紙に掲載された。

> フア・ニャオ（男子-女子）で参加する舟はラオス元来の伝統的舟であること。舳先と艫にニェームがあり、舟の形状が外国の舟（フア・スード heua sud）のように改造されていないもので、奇麗に飾り付けがなされており、ラオスの伝統的慣習に則った色や模様があること。
>
> 注意点：
> -フア・スードとは、舟の形が改造されている舟のことで、その舟の舳先と艫にニェームをつけているものは参加を禁じる。
> -競漕にはラオス元来の伝統的な舟を保持する
> -競漕舟の名前は、村の名前を使用すること（省庁などの名前の使用は禁止）
>
> [Vientiane Mai 2000(5 October):1]

上記決定により、新しい形状の舟は「フア・スード」(スードはフォーミュラの意)という名が付されることになったが、この呼び名に対し、初年度の2000年は以下の反論が上がっている。

伝統スポーツであるがゆえに、呼び名の問題は揺れ動いている。特に（スードの）競漕舟をもつ村人たちは、フア・スードと呼びたくないのである。なぜなら、フア・ダッペーン（heua datpeng 変更する、変える）の意味を「外国からきた舟」と理解する人がいるからである。彼らは発展した伝統の舟もしくはフア・パペニーから発展した舟、何と呼んでも良いけれども、彼らの舟は外国からきた舟（外国の影響を受けて変えた舟）ではなく、ラオスの伝統の舟が何年にもわたって発展してきた舟で、国際的な競漕に参加したりする時には、この舟がお目見えする。彼らは将来、フア・スードとだけ呼ばれることに危機感をもっている。また、他国の人および我々ラオス人が彼らの舟をみて（形状を）変更した舟だというようなことを噂することにも危機感を持っている。よって、我々の形として（認識できるような呼び名で）呼ばなければならないし、我々の特許であることを述べなければならない。

[Vientiane Mai 2000(25 October):2]（　）内筆者加筆

しかし、こうした反論もむなしく、今現在まで特に変更されることなく、「フア・スード」というカテゴリー名は定着している。2007年時、ヴィエンチャン市スポーツ局の副局長であったV氏（男性、40代）は、この名称がタイの名称であることを教えてくれ、そして近々カテゴリー名を「フア・キッラー」に変更する予定だと話してくれたが、その予定が実行に移されることはなかった。

2000年の競漕祭における舟の伝統を問う動きは当初、新しい形状の舟の名称問題になる以前に、伝統にそぐわない新しい舟を競漕祭から排除しようとする動きがあった。競漕祭運営委員会は、2000年の競漕祭においては「伝統的慣習を大切にし、保存するため、伝統的な舟の競漕が条件であることを発表し、ラオスの文化とは言えないフア・スード（フア・ダッペン）を排除することで文化遺産である競漕舟の保持と奨励を強調した」[Vientiane Mai 2000(24 October):2]。しかしながら、そうした競漕祭運営委員会の態度に対し、フア・スードを保持する村々やそれらの村に資金を提供していた企業から当然のことながら反論が起きる。

これまで、我々は何年もかけて進化したフア・スードで競漕をしてきた。ある村、あるチームは国際的な競漕に参加し、勝利も持ち帰ってきた。今年だけ出場をやめればそれでいいのか、それともそうではないのか？現在、たくさんの村が何ヶ月も練習をして、多くの予算を使ってきている。こうした状況を考慮し、今年は競漕に参加する舟を２つにわけ、１つは伝統を守り、観光年を盛り上げるため、委員会が出した規定にそった舟、もう１つは発展したレベルを保ち、国際的な競漕で成果をあげるための我々のフア・スードで競漕することを提案する。もしも今年の競漕祭に１種類だけで、我々のフア・スードを参加させないのだったら、期限を推算すべきだ。委員会が１年とか半年とか前に告知をすれば、（舟を）直したり、舟を探してもってくること

ができるが、（急に告知されても無理である）。今年の競漕祭をうまく行いたければ、２種類の競漕をおこなうべきだ。なぜなら、競漕祭は伝統でもあり、スポーツでもある。われわれの先祖たちが行なってきた競漕祭の目的は、伝統と同時にスポーツでもあるのだから。こうした側面を無視することはできない。今年の競漕祭を美しいものとするために、（委員会は）きちんと仲裁し、中立的な立場をとるべきであって、伝統でもあり、スポーツでもあるという解決策を見出すべきである。
[Vientiane Mai 2000(10 October):2]

1975年以降の競漕祭の扱われ方を見れば、伝統工芸の技術を生かして舟を速く走らせるための工夫を凝らすよう要求していたり、団結を深めるために団体スポーツとしての競漕を推奨したりしていた政府の要求を受けて、「スポーツ」としての競漕を強化し、勝利を目指すための舟である「フア・スード」が出現したのは何ら不思議ではない。彼らの反論ももっともな言い分に聞こえるのである。そのためだけではないにせよ、競漕祭運営委員会は結局、「排除が本当になると、最初は勢いが良かったものの、終わりはふるわなくなり」[Vientiane Mai 2000(24 October):2]フア・スードを排除することなく、参加させることを決定した。しかし、フア・スードの参加を快く思わないコーヒー協会からは再び反論が上がったことを《ヴィエンチャン・マイ》の紙面では以下のように紹介し、解決策を模索するよう競漕祭運営委員に意見を持ちかけている。

コーヒー協会の意見：

競漕祭運営委員会が伝統舟とフア・スードを競漕させるのは、間違っている。伝統舟とフア・スードを競漕させるのは不公平であることが良く判っているため、競漕の種類を分けてフア・スードを競漕に参加させるわけだが、なぜ２種類に分けるだけなのだろうか？

たとえば、伝統舟の競漕とフア・カープ（フア・キッラー）の競漕がかつてあったが、現在フア・カープは削られた。なぜ我々はこの事例にならい、競漕を分け、フア・スードのための優勝賞金をもうけないのだろうか。伝統舟はその美しさ故にフア・スードよりも重要性が高く扱われるべきである。名前にしても、伝統競漕祭という名前が本当なのだから、フア・スードの優勝と伝統舟の優勝は、伝統的な舟がなくならないように分けるべきである。なぜなら、決勝戦を観る人はだれでもこれまで決勝戦にあがってきた伝統舟が１度もフア・スードに勝ったことがないので結果が判ってしまう。もしも、フア・スードの参加が確定、もしくは明確に分けることが承認されたら、２つのレースに２つの賞品・賞金を贈ることが良い。実行委員会の人がこっそり教えてくれたことには、本年、フア・スードの参加を許可したのは、祭りとフア・スードを支援している大きなスポンサーの１つである、ある人がフア・スードは外国における多くの名声を打ち立ててきた、と記者が「コラム」に書いたように声を上げたこと

が関係している。これはお門違いである。なぜなら、記憶違いでなければ、シーカイ村のイー・ホン・メー・ニャーの時代には、この舟は外国で名声を馳せ、ホン・メー・ニャーの漕ぎ手たちはラオスの代表として選抜され、タイが主催するメコン川の国際競漕試合に出場し、３位となり、主催者側の国を驚かせた。周囲の友好関係のある国は伝統的な舟ではなかったであろうに。（中略）スポンサーを満足させるための遠慮によってもたらされる優勝は満足のいくものではないだろう。

本当に問題を解決するには、コーヒー協会が言っているように２つに分ける選択がよいのだろう。１つは、フア・スードの形状をした舟は様々な郡でおこなっている競漕祭で競漕することが許可される。例えば、シーサッタナーク、ハートサイフォン、もしくはシーコッタボン等。　ヴィエンチャンの競漕では制限されるか、すでに述べたように、２つに競漕を分け、伝統舟が主役となり、フア・スードはフア・キッラー（スポーツ舟）として参加するかである。このようにすれば、がっかりすることなく、スポーツであり、伝統であり、団結することができる。コーヒー協会の言葉をヴィエンチャン競漕祭実行委員会に預けるので、考えて欲しい。

[Vientiane Mai 2000(24 October):2]

2000年は以上のような伝統保持に関する議論が持ち上がりはしたものの、根本的な問題解決は持ち越される形で、競漕は２つのカテゴリー、すなわち「伝統舟」と「フア・スード」に分けられて行なわれた。しかし、競漕祭の最後に「伝統舟」の優勝者と「フア・スード」の優勝者とでレースをおこなった結果が、伝統舟の危機をはっきりと示していた。一般的には強い流れが助けとなると信じられている岸からは離れたレーンで伝統舟の優勝者であるタートルアン村の舟が競漕したにも関わらず、フア・スードを漕ぐターパ村の強さは圧倒的で、伝統舟を大きく引き離してゴール地点へ到達したのである。２位同士のレースにおいても結果は同じであった。この競漕結果を受けた人びとの反応を交えて、《ヴィエンチャン・タイムズ》紙は以下のように伝えている。

フア・スードが伝統的な競漕に破壊の危機をもたらす

今年のワット・チャン岸の競漕祭では、フア・スード（hue sod: Thai formula boats）がフア・パペニー（heau papheni: Lao traditional boats）とどれだけスピードが異なるのかを証明した。フア・スードがフア・パペニーを大きく引き離したのである。タートルアンのフア・パペニーが一般的には強い流れが助けとなると信じられている岸からは離れたレーンで競漕したにもかかわらず、フア・スードは圧倒的だった。

（中略）

フア・スードとは、レースを目的としたデザインで、多くの漕ぎ手を乗せることができる。ヴィエンチャンで今年おこなわれた全ての伝統的な競漕で勝利を収めている。

この現実はなるべく伝統を保持したいと願っている人たちに大きなショックをもたらした。フア・スード（タイ起源）の圧倒的な速さを認識した後、何が何でも勝利したいと願う人びとは、フア・スードのデザインへと導かれ、典型的な舟の形を手放してしまうのではないかという恐怖感を抱いている。運営委員会ではこのことに関する真剣な議論が展開され、伝統的な競漕祭にはフア・スードの参加を許可しないよう要請している。

「私たちはフア・スードが速いことを知っているけれど、あれは我々独自の伝統的な舟ではない。あれはタイの舟だ」と伝統的な舟をもつタートルアン村の人は言う。不満は運営委員会も認識している。しかし、運営委員会はレースへの最大の資金提供者がフア・スードの後ろについているので、そうした要請を受けられない現状がある。フア・スードのデザインは人々がその成功を認識するにつれ、ここ数年人気が高まってきた。舟はただ大きいだけではなく、船体のデザインが薄くなっており、漕ぎ手を分ける竹の中央部分がない。フア・スードの形は漕ぎ手の構成も異なり、艫に立ち漕ぎをする人がいない。

競漕は出安居を飾るとても人気のあるイベントであるが、競漕を楽しむ人数が減ってきていると言われている。それにはいくつかの原因がある。いくつかの原因の１つにはイベントを観戦しにくる人数がとても多いので、その人たちがたてるホコリである。また、別の理由としては、競漕を観戦できる良い場所が非常に限られている点である。ゴール地点近くはお偉いさんに占められており、その他は売り子で占められている。他の人が言うには、遠くから眺めるより家でテレビを見る方が快適だと言う。

フア・スードと伝統舟の競漕が不公平であるというのも、競漕への関心をそいでいる。この２つの舟のスピードの差は歴然としているので、競漕がおもしろくないのである。いずれの理由が慣習を減らしているにせよ、伝統を脅かしている１つの理由が原因であることは明白な事実である。ホコリがこの批判を上回るわけではない。将来、すばらしい競漕にするには解決策が必要である。

[Vientiane Times 2000(16-18 October):1,16]

(英字新聞のため、ローマ字表記は原文ママ)

2001年には前年の批判的な意見を踏まえ、フア・スードと伝統舟にカテゴリーを分化し、賞金・賞品もそれぞれに用意され、競漕がおこなわれている[Vientiane Mai 2001(20 September):1]。しかし、明確にカテゴリーが分化され、議論が落ち着くかと思った2002年には、再び現状への反発が見られ、競漕祭運営委員会はフア・スードでの参加を禁じたわけではなかったが[Vientiane Mai 2002(18 October)1,10]、フア・スードでの参加希望を提出した村がターパ村だけであったため、必然的に2002年は参加した全ての舟が伝統舟で競漕することとなった。その様子を《ヴィエンチャン・タイムズ》紙は以下のように伝えている。

2001年の競漕祭で優勝した男性チームのターパ村は、最近の競漕にまつわる会議で、伝統的な舟で参加する他のチームに彼らのフア・スード；改造された舟で参加することを拒否されたという。もし、改造された舟を使用することを許可すれば、レースにならないことが理由である。ターパ村のチームは1994年からの２年間をのぞき、毎年優勝している。昨年のみ、競漕のルールが変更となり、伝統的な舟のカテゴリーと改造舟のカテゴリーに分けられた。今年は、改造舟のカテゴリーに参加を希望した唯一の村がターパ村であった。競技者（racers）たちは、ターパ村が勝つのはフア・スードを使用しているからだという。ターパ村のひとたち自身、キャプテンであるホンカム・ピララライセーン(Hongkham Philalayseng)は、漕ぎ手たちの強い団結と（スポンサー企業である）ビア・ラオとの強い結びつきがあるから勝てるのだという。
「今年はフア・スードを使えないけれども、我々の伝統的な舟を使ったとしても99.99%勝つ自身がある」と彼は加えた。

今年の競漕は伝統的競漕のみでフア・スードは排除された。競漕運営委委員会は今年も改造舟のカテゴリーを設けたが、フア・スードの登録がなかったため、彼らは伝統的な舟の競漕に参加することを決めた。今年の競漕祭委員会の委員であるウェオマニー・ヴィラヴォン(Veomany Vilavong)によれば、「我々はフア・スードの参加を拒否した訳ではない。我々は毎年フア・スードの競漕もおこなっているが、だれも競漕に参加したがらなかったのだ。」「他の舟がターパ村のような強い舟を恐れたことだけが理由ではない。委員たちが今年の競漕祭を本当に伝統的なものにする必要があったからだ。伝統というのは、すべての舟がフア・パペニー、すなわちラオス語で”伝統的”である必要があったのだ」と彼は説明した。

「我々は伝統的な舟で出場したとしても負けない。なぜなら、強靭な漕ぎ手と大きなスポンサーがついているからだ。勝利は舟によるわけではない。勝利は漕ぎ手とスポンサーによるものだ」とホンカム・ピララライセーンは言う。

今年、彼らは最近おこなわれたチョムチェーン村の競漕祭において伝統的な舟を使用して勝利し、強さを見せている。ターパ村は優勝者の地位を守るため競漕の１ヶ月前から練習をしているが、他のチームもターパが優勝してきたのはひとえに彼らの改造した舟のおかげだということを証明するため、激しい練習をしている。

[Vientiane Times 2002(22-24 October):1]

結果から言えば、伝統的な舟で出場したターパ村は変わらず強く、初戦から最終戦まで全てのチームをくだし、優勝を果たした。そして３年連続して優勝しないと与えられないラオ・トヨタ提供の特別なトロフィーを受け取っている[Vientiane Times 2002(25-28 October):1][73]。「フア・スードで出場しているからターパ村は優勝できる」として、ター

[73] ヴィエンチャン市スポーツ局の資料には競漕時間の計測が行なわれた結果が書き込まれてい

パ村がフア・スードで出場することを拒否した村々の批判は、2002年の決着を受けて収束し、2003年以降は舟の規定を細かくすることで、「伝統舟」と「フア・スード」両者のカテゴリーを定着させていく。

７－２．競漕祭における舟の規定：舟に集約される「伝統」の形

2000年には当初伝統舟だけの出場を認めていたため、カテゴリー分化に際しても舟に関する規定は非常に短いものであった。伝統舟とは、

（１）ラオス元来の伝統的舟であること。すなわち舳先と艫にニェーム[74]があり、
　　フア・スードではないもの。

（２）奇麗に飾り付けがなされており、ラオスの伝統的慣習に則った色や模様があること。

の２点が示されていただけであったが、翌2001年には２項目増え、

（３）艫で舟の操作をする人は２人以上であること

（４）舳先と艫の大きさは、長さが3.5メートル以上ではないこと。
　　幅が35センチ以上あること。とされている。

2002年のターパ村優勝を受けて再度カテゴリー分化が決定した2003年には、、フア・スードとの差を明確にするため、2001年までの規定を踏襲するものの、規定の表現も少々変化し、以下の８項目が示されている。

伝統舟(フア・パペニー)

１．舳先と艫にニェームもしくは縁に立つことができるほど大きな舳先と大きな艫があること

２．競漕の際、艫に立って艫の舵をとる人が2人以上いること

３．舳先と艫の長さは、3.50メートルを超さないこと、また横幅は35センチ以上であること

４．舟の座席は竹を使用して固定すること

５．舟の両側の縁には縁木を使用すること

６．伝統的慣習にのっとって、艫と舳先にはソイサー(soysa ビーズのような飾り)で

た。それによると、男性：1位ターパ村(3分30秒)、２位ターケーク村（3分50秒)、3位ートルアン（ノイ・インティーリット4分06秒)、4位ブンパオ村（4分20秒)。女性：１位ターパ村（４分35秒)、2位ポーンホーン村（4分60秒)、3位シェンクワン村（4分70秒)、4位ポーンコー村（4分90秒)

[74] 1978年にタイ王国においてラオ族の舟を調査した寒川によれば、タイ王国ムクダハンのシーモンコンターイ寺には､牛の角を思わせる鉄製の飾りが舳と艫に固着されたレース舟が保管されており、その形状について人びとの語るところでは､「この飾りは舟のスピードを増す為に後に改造されたもので、それ以前は大きく、重いナーガの頭尾を取り付けていた」という[寒川1981:479]。しかしながら、1950年代にアルシャンボーが実施した調査の写真において、すでに牛の角状の舳と艫が確認できる。

装飾をすること。

7．舟の縁に水よけがないこと

8．舟の形が大きくて厚みがあること

一方のフア・スードの規定は、

フア・スード

1．ラオス伝統舟の元来の形から改造した（発展した）長い舟であること

2．舟の中央に補強材が既に組込まれ、舟底には竜骨が組込まれているもの

3．舟の座席が留金で固定され、舟の両縁に水よけがあるもの

4．舳先と舳先の大きさや長さは舟を所有している人の好み、舟大工の趣向に合わせて構わない。艫については、短くてそり上がっている、もしくは長くて小さくまっすぐなものでも、特に制限は設けない

5．舟はラオス様式であれば、舟の装飾（絵や色）は好きにしてよい

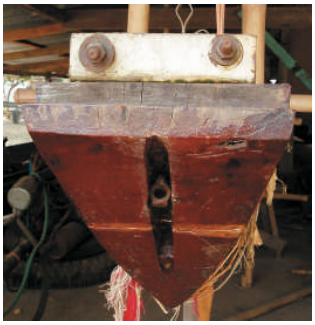
6．舟の形状は（伝統舟よりも）小さく、薄い作りであること

[Vientiane Mai 2003(17 October):3][75]

[写真7-1:伝統舟 舟体]

[写真7-2:伝統舟組木型]

[写真7-3:伝統舟のニェーム]



[写真7-4:フア・スード舟体] [写真7-5:フア・スード接合型] [写真7-6:フア・スード舳先]

[75] 2004年の規定は2003年とほぼ同じであるが、伝統舟の項目3は舳先と艫の長さの基準は「ニェームの付け根からニェームの先まで」が追加されている。また、項目4は「舟の真中に最初から中木が組み込まれていないこと」、項目7には「舟の両側面に水よけがないこと」、項目8には「パンマン村の舟が基準」と更なる詳細が追加されている[Vientiane Mai 2004(29 October):19]。

［写真7-7:伝統舟舳先］［写真7-8:フア・スード舳先］　［写真7-9:舟の装飾ソイサー］

2000年の観光年を前に競漕祭の伝統について議論が交わされ、一時は競漕祭から伝統的とは思われない「フア・スード」の排除を検討していた競漕祭運営委員会であったが、参加する村々の反発が2002年の競漕をきっかけとして収束に向かうと、舟の規定を詳細にしていくことでカテゴリー分化による棲み分けを明確にし、いずれの舟も競漕祭に残す方向で運営をしていった。これは2000年に話題に上っていたスポンサーの問題が大きかったようである。2004年にヴィエンチャン市スポーツ局で話を聞いた際、当時の副局長であるC氏（男性、40代）は、競漕祭などのイベントには国の予算が最初から当てられていることはなく、協賛金でまかなっていると話してくれた。また、通常、競漕祭のルール変更は参加者の村人たちの意見によって起こるものであって、スポーツ局が一方的に導入することはあまりないとも教えてくれた。そうした状況にある競漕祭の運営に際して、スポンサーの意向を完全に無視することができない委員会は、実際に参加する村びとたちの意見も不満の出ないように集約しながら、極端な方向へ向かい、競漕祭が破綻しないように慎重にコントロールしてきたことが窺える。

伝統行事である競漕祭は「伝統的」であるべきだとの想いは、最終的には競漕の要となるレースの公平性を求める村人たちの意見によって、舟の規定に「伝統」が集約され、伝統行事を継続させるという意味においての「伝統」を守るために、協賛金を出資するスポンサーの意向を取り入れ、「フア・スード」を残す結果となった。しかし、こうした舟の「伝統保持」を求める動きも、観光年を迎えるにあたり、外の目を意識したことが伝統を見直す起因となったことも事実であろうが、実際には、「スポーツ」としての勝利を追い求めるがゆえに導入されたとする「フア・スード」を批判しつつも、伝統舟を保持している村々が競漕における公平性を追求することで加熱した議論であるとも言える。競漕の公平性を追求している点においては、「伝統保持」を主張する村にとっても競漕祭がすでに多分にスポーツであることを表している。そのことは、舟の規定が2000年以降、徐々に詳

細なものとなり、舟を厳密に分化させていくことに議論が集中していく様子にも表れている。競漕祭の伝統を保持することだけが目的だとすれば、このように舟の規定が厳格化される必要はなかったのではないだろうか。競漕祭において、フア・スードが圧勝しようとも伝統舟を保持しようとする村々は伝統舟を使用して競漕することを貫きさえすれば、伝統はある程度保持される。また、2002年のようにワット・チャン競漕祭においては、「伝統舟」のみとすることも不可能ではなかったと思われる。協賛金を出資する企業や団体なども、ラオスの伝統的な文化を破壊することを望んではいたわけではない。実際、2000年にフア・スード排除の動きがあった際にも、１度は競漕祭運営委員会の伝統に戻すとの意向にフア・スードを保持する村々も、それらの村に資金提供をしていた企業も賛成している[Vientiane Mai 2000(2 October):2]。反論の際に上がった問題点の１つは、競漕祭運営委員会がそうした意向を告知するのが遅すぎた点にあった。規定に「伝統舟」のみの参加とあらかじめ、十分な期間をもって事前に告知すれば、対応できないことではなかったのである。しかしながら2003年以降、結果としてカテゴリーを分化し、規定を詳細化していく方向性をとったことは、舟の伝統保持を重視した結果であると共に、競漕祭が競漕を楽しむだけの祭りではなく、勝敗にこだわる競技、スポーツと不可分な祭りであることが確認された結果とも言える。

【表7ー1:参加村数の推移】

年号	男性		女子	短舟kab	合計
	伝統paphenii	スポーツ sud			
1990	13		4	19	36
1991	12		4	16	32
1992	19		5	14	38
1993	19		5	16	40
1994	23		9	20	52
1995	28		10	17	55
1996	35		14	13	62
1997	34		16	10	60
1998	27		11		38
1999	26		10		36
2000	18	8	6		32
2001	14	6	7		27
2002	20	0	7		27
2003	13	10	6		29
2004	8	12	4		24
2005	11	9	4		24
2006	10	12	8		30
2007	11	9	7		27
2008	11	9	8		28
2009	14	6	6		26
2010	14	6	8		28
2011	15	6	7		28

【表7−2：ルール規定の推移】

年号	場所	舟の種類		内容
1994	ヴィエンチャン−ノーンカーイ			スタート地点：ニェームがそろったらスタート／ゴール地点：ニェームがゴールに届いたら勝利
1995	ワット・チャン			友好試合のルールに則ったルール規定が発表され、ニェームがそろったらスタート、ニェームがゴールに届いたら勝利
1997	ヴィエンチャン市 ハートサイフォン郡			ワット・チャンの競漕祭では、スタート地点でニェームをそろえるとの指摘のみ。ハートサイフォンでは、舟の舳先と艫には必ずラオス国独自の文化を表象するニェームを使用すること、舳先が競り出るようなものを足してはならないとルールに明記。すでにノックアウト式トーナメントではなく、チーム分けをして決勝戦へという方式を採用。
1998	ワット・チャン			競漕に参加する舟は、ラオスの昔から伝わる伝統の舟を統一するため、舟は舳先と艫にニェームがなければならない。尖った舳先、そり上がった艫の長い舟は参加を禁じる。
2000	ワット・チャン	伝統 paphenii	1	舳先と艫がニェームであること（舳先・艫の端に人が乗って漕げる大きさであること）
			2	舟が外国の舟（スード）のような形に改造されていないこと
			3	伝統的慣習に則り、舟に色を塗り、模様を描き、美しく装飾すること
		スード sud	1	ラオスの伝統舟と新しい舟を混合させた舟または改良（発展）させた長い舟のことをさす。ニェームを使用してはならない。
			2	競漕はラオスに古くから伝わる伝統に則っておこなわれる。
			3	舟の名前は村の名前であること（省庁などの名前を用いてはならない）
2001	ワット・チャン	伝統	4	舟の後方で舵取りをする漕ぎ手が2人以上立ち漕ぎであること
			5	舳先と艫の縦の長さが共に3.5メートルを超えないこと、そして横幅が35センチ以上であること
		スード	4	後ろの漕ぎ手は立って漕いではならない。
2003	ワット・チャン	伝統	6	舟の両側には、舟の縁木を使用していること
			7	舟の補強材（舟の中央に通す木）は竹を使用すること（すでに舟の中央に木材が入っていないこと）
			8	舟の両側に水よけがないこと
			9	舟の前方が大きな形をしていること（パンマン村の舟を見本とする）
		スード	5	座席を固定する肋骨があること
			6	舳先と艫の大きさや長さは舟を所有している人の好み、舟大工の趣向に合わせて構わない。特に制限は設けない。
			7	舟はラオス様式であれば、舟の装飾（絵や色）は好きにしてよい。
			8	舟の形状は（伝統舟よりも）小さく、薄い作りであること
			9	舟に補強材として後から竹を括り付けるのではなく、舟の中心を通す木が最初から固定されており、舟底に背骨（竜骨）が設計されていること
	2004年は2003年と内容同じ。2005年不明。2006年からはルール規定書に舟の詳細は掲載されなくなった。			
2006	ワット・チャン			ティー・サーン・ナム・ノーンに参加しなかった舟は参加賞を授与する資格を失う。また、翌年の競漕祭への参加を禁じる。

【表7−3：主な舟の寸法】

村名	実績	舟の名前	建造年/購入年	漕ぎ手の人数	舟の寸法(m)									舳先(m)			艫(m)			座席	舟の模様
					長さ	幅	深さ	縁	水よけ	中木/幅	中木/高さ	背骨	肋骨/幅	長さ	付け根の幅	角の幅	長さ	付け根の幅	角の幅	数	
シーターン・タイ Sithantai	ヴィエンチャン周辺地域で一番古い舟を保管	N.Kham Luang	1830	32人	14.92	1.10	0.8	0.07						2.92	0.37		2.82	0.30	0.61	18	舟体が黄色で模様はなし
パンマン Phanman	90,91年に上位、03年まで断続的に参加するも上位にはならず。03年ルール規定書に「伝統舟」のモデルに指定された。	N.Buakeua khampiau	1970	51人	21.70	1.12	0.57	0.09						2.65	0.46	0.62	2.40	0.46	0.60	25	黄色い仏教モチーフの花／舟体は水色
ボーンホーン Phonhong	男子03年優勝、その後常に3位以内、女子02年以降は常に3位以内	Theb Hongthong	1998	47～55人	24.70	1.17	0.5	0.06						3.50	0.33		3.40	0.35		30	hong（白鳥）に黄色い仏教モチーフの花／舟体は赤
ハートキアン Hadkiang	男子05年より3年連続伝統舟部門で優勝,女子は2回2位	Nawa Xaysana	2005	男子:50～51人 女子:46～55人	25.00	1.15	0.49	0.08						3.53			3.50	0.355			hong（白鳥）に黄色い仏教モチーフの花／舟体は赤
ターパ Thapha	96年を皮切りに2008年まで9回優勝	N.Kedsurin	1996(2008 renewal)	53人	29.45	1.10	0.4	0.06	0.11	0.04	0.07	0.1	0.06	7.17	0.25		2.75	0.28		33	特になし

７－３．伝統舟とフア・スード（スポーツ舟）の分布

伝統舟を所有している村とフア・スードを所有している村の分布をみてみると、メコン川流域とナムグム川流域[76]で非常に奇麗に分布が分かれていることが調査から明らかにっている（図７－１ならびに巻末資料表２を参照)。また、2003年の《ヴィエンチャン・マイ》紙にも既述の舟に関する規定が引用された後、以下のような文章が続いており、舟の形態によって流域が異なることが示されている。

> 現在、フア・スードはメコン川沿いの多くの地域や村で普及している。なぜなら、フア・スードは近隣地域の人びとの舟を参考に改造したものであるからだ。今年のワット・チャン競漕祭においても、フア・スードのカテゴリーに参加するだろう多くの舟はメコン川からの舟である。例えば、ターケーク村の舟、タームワン、ティンピア、ターパ、タードゥアなどである。一方で、伝統舟のカテゴリーに参加をするのは、ナムグム川からの舟である。例えば、ターンピアオ村の舟、ナークン、ブンパオ、ポーンホーン、カーン・ムアン、チェムパーンなどである。メコン川の舟で１度も改造していない舟は唯一、シーカイ村のホン・メー・ニャーだけである。
>
> [Vientiane Mai 2003(17 October):3]

そして、上記の記事を書いた記者は、「我々がしっかりと注意をして、伝統の長い舟（フア・ニャオ・パペニー）をもっと増やし、人びとが大切に守るよう奨励しなければならない。そうしなければ、10年に届かずして従来の伝統的な長い舟は見られなくなるだろう。そしてそうしなければ、書類番号462に記載されている「中央政府は文化遺産、芸術、文芸、そして民族と国の伝統的な祭りの開催を大切に守り、拡大していくことに力を注ぐ」という政府方針と全く逆のことが起こるだろう」と述べている[Vientiane Mai 2003(17 October):3]。

競漕祭における伝統舟の保持は、主にナムグム川沿いの村々の主張であるのだが、メコン川沿いの村々も伝統舟の保持は大切なことだと考えていた。特に「ニェーム」に関しては、「舳先と艫のニェームは伝統として保持すべき」との声がフア・スードを所有する村が多いメコン川沿いのハートサイフォン郡6村において聞かれ、さらに以下のような語りが複数村で聞かれた。

> 「フア・スードはタイの舟で、ラオスの伝統的な舟ではない。」
>
> 「昔はどの舟もみんなニェームをつけた舟を使っていた。ニェームはラオスの伝統で、先祖代々から使用してきたものだ。」

---

76 ラオ語でナムは川を表すことから、本来はグム川とすべきであるが、「ナムグム」は一般的な固有名詞として定着しているため、本稿ではナムグム川と表記する。

「やっぱりニェームをつけた舟の方がきれいだよ。」
「本当はニェームをつけて競漕したいけど、運営委員会からの達しがない限りは今の流れを変えられない。」

ハートサイフォン郡の村人たちは伝統舟を手放してフア・スードで競漕祭に参加していることに対し、若干心地悪そうな態度で筆者に話す。上記の語りは、村人たちが伝統行事であるワット・チャン競漕祭においては伝統を重視したニェームを舳先や艫に装着し、伝統に則った競漕を行ないたいという願望の現れのようであった。しかしながら、フア・スードを所有する村々が語る競漕祭の伝統は、舳先と艫の形状に集約される傾向があり、舟の構造そのものを伝統に戻そうという意識はどの村においてもみられなかった。舟の構造は現在使用しているフア・スードのままで、それに伝統的なニェームを装着させ、さらに舟の装飾を伝統的なものへと戻せばよいと考えている様子が聞き取り調査の回答から窺える。伝統舟はフア・スードに比べ、舟体が重く、スピードを出すにはフア・スードを漕ぐよりも数倍の体力が必要であると参加村の間で広く認識されているため、わざわざ構造をも伝統舟に戻して伝統舟とするにはためらいがあるようであった。こうした状況からか、筆者の質問の仕方に問題はあるものの、「伝統舟は保持すべきものだと思いますか？」という問いに対し、ハートサイフォン郡の４村から「フア・スードはスポーツ舟にしてしまえばいい」といった回答があった。伝統的な競漕祭におけるフア・スードのカテゴリーを「フア・キッラー（スポーツ舟）」と明確にし、伝統と明確に区別をすれば、フア・スードでありながらニェームを装着するといったちぐはぐな行為を望むことはなくなるといった意味であったようだ。しかし、舟をとりまく状況は簡単ではない。TN村の村人（男性、50代）は「フア・スードより伝統舟が良いかというのはもう言えない状況になってきてしまっている。すでに競漕祭はスポーツになってしまっている。伝統舟といってもすでに色々と混ざっているので本当に伝統舟と呼べるのかは疑わしい」と述べ、競漕祭に参加する舟の何がスポーツで何が伝統かはすでに曖昧になっている状況を語ってくれた。

「フア・スードはタイの舟である」との語りにおいても、複雑な状況がみえてくる。フア・スードの形状が初めてヴィエンチャン近郊に出現したのは、1994年頃のノーンカーイとヴィエンチャンの友好競漕祭においてであったとNK村とOP村の村人が話してくれており、タイの舟とはいえ、そのタイはメコン川を挟んだ昔から関係の深い「東北タイ」ノーンカーイ県なのである。「タイはタイでもイサーンなんだけどね」というハートサイフォン郡の村人たちの発言には、ハートサイフォン郡とノーンカーイ県との関係が６章２節３項で見てきたように、もともと親戚のようなものであったことが現われている。

さらに東北タイは「タイ」と言い切れるのかという問題がもう１つある。舟大工の出身地の問題である。2004年に「伝統舟」のモデルとして競漕祭運営委員会に認定されたシーサッタナーク郡パンマン村の舟はタイのノーンカーイ県ブンカーン郡[77]のチャンパンとい

[77] ブンカーン郡は2011年3月23日にノーンカーイ県の8つの郡を引き受け、ブンカーン県に

う舟大工が1970年に製作した舟であり、更には、伝統的な舟として有名なシーカイ村のイー・ホン・メー・ニャーも東北タイ出身のカムという舟大工が1974年に製作している。また、他の７艘の伝統舟の舟大工も東北タイ人であることがわかっている。ラオス人舟大工によって製作されたことが明確に判っている伝統舟は６艘であった。

しかし、フア・スードを所有する村の内、８村がタイの南部チュムポーン県出身のパンニャーという舟大工に依頼し、伝統舟からフア・スードへ改造、もしくはフア・スードを製作してもらっていたことが、「フア・スードはタイの舟だ」との語りを強めたようである。こうした流れを受け、2004年から2006年にかけて新しく製作された舟に関しては、舟大工が誰であるかに関心が集まった。2004年、シーターン・タイ村が新調したフア・スードに関して、《カオ・キッラー Khao Kila (スポーツニュース)》紙[78]は以下のように伝えている。

> 10月22日に、ハートサイフォン郡シーターン・タイ村の新しい「混血 heua luk khung」舟：メー・ブン・カム・マライトーンの儀式に参加した。53人乗りの舟は、「混血」もしくは「祖先が入り交じった子供 luk sod」である。なぜなら、ラオス100%のスード型の伝統的競漕舟だからである。丸みのある舟は伝統的な舟の型で、舳先と艫だけ時代の流行に合ったスードの形をしている。よって、伝統的競漕舟スード・ラオ(heua suang paphenii sud lao)と呼ぶことにする。儀式は伝統的なもので、シーターン・タイ村の村人とアメリカから訪ねてきている人たちとで儀式が行なわれた。（中略）
>
> 村人たちは協力しあい貯蓄したお金と、村出身の海外で暮らす人たちのお金を合わせて新しい舟を製作した。舟を水に下ろすまでにかかったお金は、約35万バーツ（タイの通貨単位）[79]。舟が出来上がったのは、2004年6月24日であった。舟は「マイ・ケーンフア（ラワン）」でできており、木は2003年11月にボリカムサイ県パーカディン郡ソード村から切り出されたものである。舟大工はサワンナケート県の大工で、コーンマー・スーワンナラート(Khonma Suvannalat)氏である。ラオスの伝統＋スードの舟を作り始めたのが、2004年5月5日で、完成したのは2004年6月24日。所用日数は51日だった！完成した舟は本物の伝統的競漕舟スード・ラオである。
>
> [Khao Kila 2004(25 October):2,5]

この記事は、舟大工のことが中心に語られているわけではないが、全ての要素を合体させたような「伝統的競漕舟スード・ラオ」との名称でシーターン・タイ村の新しい舟を評した理由は、それまでハートサイフォン地区のフア・スードがほぼ全てパンニャーか東北タイ人の舟大工によって手がけられていたのとは異なり、ラオ人大工がラオスの伝統的技

変更されている。

[78] 1999年１月１日創刊。30.5cm×42.5cmの大きさで、12ページ綴り。毎月1000部発行。

[79] 表７－４を参照。2008年時点で１バーツが2.56円であるため、35万バーツは日本円で896,000円

法を駆使して作った舟であるという点が重要だったのだと言える。コーンマー氏（男性、40代）は、2006年にもメコン川沿いで唯一伝統舟を保っているシーカイ村の新しい伝統舟を作っている。彼はベトナムで4年間、木工技術を学び、ラオスに戻ってからは7年間家具作りをしていたが、ラオ人の舟大工に舟の作り方を学び、2002年から舟を作っていた。2007年8月、彼は筆者に「かつてラオスはタイ人の舟大工が作る舟ばかりであったが、現在サワンナケートとカムアンの舟はラオス人舟大工によるものだ。ラオ人の弟子も育てながら、タイ人が舟大工として入っている地域に積極的に出向き、ラオ人の舟大工が作る舟のみにしていくよう努力している。３年先にはタイ人の舟はヴィエンチャンからもなくなるだろう」と語ってくれた。こうしたコーンマー氏がシーカイ村の伝統舟をサイニャブリー県パークラーイ郡で2006年の競漕祭に間に合うよう製作していたのと同じ時期に、シーコッタボン郡のチョムチェーン村はフア・スードを新調していた様子が《ヴィエンチャン・タイムズ》紙や《カオ・キッラー》紙、《ワッタナタム》紙などで取り上げられているのだが、舟大工に関してひとつ面白い現象が見られた。

2006年9月5日の《カオ・キッラー》紙[Khao Kila 2006(5 September):2]および9月13日の《ヴィエンチャン・タイムズ》紙[Vientiane Times 2006(13 September):3]には、チョムチェーン村の新しい舟の舟大工がパンニャーと紹介されているものの、2006年9月21日の《カオ・キッラー》紙[Khao Kila 2006(21 September):2]ならびに9月22日の《パテート・ラオ Pathet Lao(ラオス国)》紙[Pathet Lao 2006(22 Septe):11]には、シーカイ村の舟がサワンナケートの腕の良い大工によって作られ、川に進水したことが報じられている。と同時に、《ヴィエンチャン・タイムズ》紙には、チョムチェーン村の舟大工の特集記事が組まれ、ハートサイフォン郡に住むというラオ人舟大工ケオヴィエンコーン・ヴォンカムスック（Keoviengkong Vongkhamsuk）が紹介されている[Vientiane Times 2006(22 September):10]。不思議なことに、2007年6月に調査をおこなった際もやはりチョムチェーン村の舟大工はパンニャーとチョムチェーン村のネオホーム（相談役）から教えられ、ハートサイフォンからの舟大工という説明は一切受けなかった。更には、競漕が盛んなハートサイフォン地区の調査においても、舟大工として彼の名前が聞かれることは１度もなかった。このことが何を示すのか、明確にはわからないが、「フア・スードはタイの舟である」という批判がある中、もともと伝統舟で有名なシーカイ村がラオ人大工による伝統舟を新調し話題になったことで、タイ人舟大工の作る舟であることをラオ人の舟大工の話題で覆い隠そうとした意図が少なからずあったものと思われる。

【図7-1:伝統舟とスポーツ舟の分布】

７－４．競漕祭に付随する儀礼

ラオス王国時代にアルシャンボーが記述したような、ヴィエンチャンを守護するナーガに対する儀礼は、政権交代後、特に精霊に関する儀礼が迷信的行為であるとして禁じられたことにより消失したまま、現在も競漕祭前に大々的に行なわれることはない。しかしながら、マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーによれば、2004年のワット・チャン競漕祭の3日前に、おそらくは1975年以来初めて、精霊が住む場所に対して敬意を払う昔の儀礼が地元当局によって復活され、演じられたという[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:63]。これは、2004年のワット・チャン競漕祭前に開催されていたヴィエンチャン県の様々な村やヴィエンチャン市内の地域において舟の漕ぎ手が溺れる事故が相次いだからだと思われ、2004年の競漕祭においてそのような悲劇が起こるのを防ぐため、競漕祭の開催を精霊に報告し、なだめ、きたる祭りに参加してくれるよう招待することを目的として、ナーガに敬意を払う儀礼が執り行われたのだともいう[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:63][80]。マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーは2004年の儀礼を取り仕切ったマハー・ブアリー・ヴィリヴォン(Maha Buali Virivong)に聞取りを行なっているが、その調査において、マハー・ブアリーは1975年以降もこうした儀礼は常に行なわれており、最初はワット・チャン村の村長であるタオ・シー(Thao Si)、それか

[80] 2004 年は友好橋近くの民族文化公園で開催された競漕祭においてティンピア村の女性の舟が転覆し、女性 15 名と男性 1 名が溺れて亡くなっている。16 人の内、2 名は遺体を回収することもできなかった。一番若い人で 18 歳、最年長で 53 歳の方がなくなっており、現在は村にある寺の境内に慰霊碑が立てられている。こうした事故に対し、ハートサイフォンの HT 村の村人は「競漕祭の前の手順で何か間違えを冒したために蛇に食べられたのだ」と語った。

らチャンタブリー郡の国家啓蒙戦線の長であるプアン(Phouang)氏によって、そして1980年からはマハー・ブアリーによって継続されてきたと強く主張していると述べている[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:64]。しかしながら、マハー・ブアリーはアルシャンボーの調査時に最も重要と思われたドン・チャン砂州に何の精霊がいるかを知らなかっただけでなく、儀礼の実演の仕方においても1970年代もしくはそれより少し以前に行なわれたやり方とは順番、方向がまったく反対であったという[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:64]。マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーは2007年に競漕祭前の儀礼を追跡調査しているが、精霊に捧げる供え物もそろっておらず、実際におこなわれた儀礼は彼らを満足させるものではなかったため、「我々はナーガ王たちへの神聖な儀礼が2007年の競漕祭で義務の１つとして官吏が執り行ったような簡素なものではなくて、将来、霊媒師たちや本当に信じている人たちによって、もう少し心から、高揚するようなやり方で執り行われることを願っている」との感想をもらしている[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:65]。

既に述べたように、マヨリーとプイパン・ガオスリヴァッタナーは国際的にも認められる歴史学者であり、ラオスにおける知識人である。2004 年の儀礼は事故が起こらないよう競漕祭の関係者が自発的に行なったものと思われるが、2007 年の儀礼は、ガオスリヴァッタナーのような知識人が調査をおこなうことで、復活を余儀なくされたとも言えるのではないだろうか。彼らが 2007 年に調査をした報告には、儀礼をとりしきった関係者たちのあやふやな行動、そして精霊に対する一般的儀礼のやり方さえ理解していない様子が描かれている[Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh 2009:64-65]。４章でアルシャンボーの記録した儀礼について疑問を呈した通り、ヴィエンチャン市を守護するナーガ全てに対する儀礼は、そもそもごく限られた一部の知識人に伝わっていただけのものであると同時に、ヴィエンチャンにおける歴史的かつ、伝統的な儀礼ではないために、時代の趨勢に応じて簡単に消滅してしまうのではないかと考えられる。ラオス王国からラオス人民民主共和国へ変化した後も、なおも変わらずルアンパバーンの競漕祭におけるナーガ信仰が参加村全体にしっかり共有されている状況と比較しても[Hashimoto 2008]、ヴィエンチャンを守護するナーガ全体に対する儀礼信仰はもともと脆弱であったと言える。一方で、地域住民にしっかりと根付いているものは、政権が交代し、状況が変わってもそう簡単に消失するものではなかった様子が村の儀礼に窺える。

７－４－１．シーカイ村の儀礼

アルシャンボーの調査においても「非常に恐れられている守護蛇精がいるいくつかの村では、とても興味深い儀礼が行われなければならなかった。例えば、4 キロ上流に位置するシーカイ村である」としてシーカイ村の儀礼が紹介されている。アルシャンボーが記録している儀礼は競漕祭の当日に行なわれ、ナーン・ティアム（nang tiam 霊媒師）である女性

が村の守護蛇精である精霊を身体に憑依させ、村にとって重要な場のいくつかに儀礼を司るチャムと共に祈りを捧げるものであった。しかし、2007 年の調査においては、シーカイ村が主催する競漕祭が開始される前にフアナー・ピー(huana phi 精霊に対する儀礼をおこなう人)である 70 代の男性２人によって精霊に対する儀礼がおこなわれた。アルシャンボーが記述したような精霊の憑依といった儀式はなかったものの、村人が大切にしているいくつかの場所：村の守護霊ダーン・カムの祠(Ho Ban Dan Kham)、シーカイ村周辺地域を守護する精霊の住むメコン川の中州ドン・シエンスー(Don Siengsu)、村の北の境界にあるカンパー・ピー・ノーイの祠（アルシャンボーの調査時はチャオ・ダンという精霊であった)、舟の精霊ホン・メー・ニャーを祀る祠、舟を停泊させる岸、メコン川の早瀬、パサック河口については、同じようにバナナの葉で作られた三角錐の供えものと線香、アルコール、タバコが捧げられ、競漕祭の時期が来たことを告げ、競漕祭が無事におこなえるようお守りくださいとの祈りを捧げていた。アルシャンボーの記録と全く同じものではなかったが、少なくとも競漕祭に関係する官吏が執り行ったようなあやふやな儀礼でなかったことは確かであった。

７－４－２．シーターン・タイ村の儀礼

筆者が調査をおこなったいずれの村も競漕に参加する直前に、村のモー・チャムが守護霊にゆでた鳥やもち米、お菓子、果物、飲み物などを供物として捧げ、競漕の勝利と安全を祈願すると語ってくれた。村によっては、守護霊を楽しませるために守護霊を銀のカップに招きいれ、カップを舳先や艫に括りつけて一緒に競漕祭を楽しんでもらうという。

その中でも興味深い儀礼を行なっていたハートサイフォン郡シーターン・タイ村の様子を記すこととする。シーターン・タイ村は、７章３節で話題にあげた「伝統的競漕舟スード・ラオ」を保持する村である。シーターン・タイ村にはプー・カンハー(pu kanha)とプー・サリー(pu sali)、そしてニャー・ポー・シーサムット(nya pho sisamut)と呼ばれる村の祖先霊が守護霊として、祀られている。祖先霊は特定の誰かの祖先というわけではなく、その出自は明らかではない。守護霊は、競漕祭前にあらかじめナーン・テーン（nang teng 霊媒師）によってホー・ピー・バーン（ho phi ban 村の守護霊の祠）から競漕場所に近い家の祭壇に移され、競漕祭当日の朝には村の漕ぎ手が列をなして太鼓やケーン[81]を演奏しながら、守護霊の祭壇へモー・チャムとナーン・テーン、ナーン・フア(nang heua)と共に赴く。ナーン・フアとは村の若い女性がラオスの伝統衣装を纏い、舟の精霊および守護霊を喜ばすために競漕祭に登場する存在で、特に規定はないようだが、多くの場合においては 10 代の純真な女性を選ぶとの話である。祭壇前に到着した一行は、守護霊が祀られた祭壇に向かって競漕祭の報告をし、競漕祭に参加してくれるよう守護霊に願い入れる。祭壇に供えられたのは、刀 2 本 2 セット、キンマ、石灰、小さいな葉、タバコ、三角錐の葉でつ

[81] ラオスの伝統的な楽器で、日本の笙に似ている。

くられた供え物、果物、ジュース、ろうそく、白い花、仏教の飾りであった。儀礼が終わると、ナーン・フアが守護霊を喜ばせるためにラムヴォン(Lam vong)というラオスの踊りを祭壇前で数分踊る。その後、再び一行はナーン・テーンやナーン・フアを先頭に舟へと向かい、モー・チャムが舟への供物を捧げてカップを舳先に結びつけてから漕ぎ手とナーン・テーン、ナーン・フア、ケーンを吹く人が舟へと乗り込む。ナーン・テーンらが舟へ乗り込むのは、守護霊を無事に舟に移し、舟の精霊をも喜ばせる役目を担うためだと説明される。漕ぎ手は舟に乗り込む前に舟の縁で手を合わせお辞儀してから乗り込む。そして、舟を漕ぎ出す際にも漕ぎ手は一斉に舟の精霊や守護霊に対してお辞儀し、礼をつくすのである。ナーン・テーンやナーン・フアを乗せた舟は１度上流から下流へと漕ぎ下ったのちに舟を降り、その役目を終える。

舟に乗る漕ぎ手には競漕規定書に記されない村独自のタブーが存在する。舟の底を櫂で叩いたり突いたりしてはいけない、土足で舟に乗ってはいけない、舟に乗るときはおしりから乗る、舟の縁に立たない、舟の中で排便しないなど、舟の精霊に対する敬意を払うことが要求されるのである。

［写真 7-10］
村の守護霊であるプー・カンハーとプー・サリーの祭壇にモー・チャムとナーン・テーンが競漕祭の開催を報告する。

［写真 7-11］
その後、ナーン・フアの女性やナーン・テーンが祭壇の前で踊り、村の守護霊を楽しませる。

［写真 7-12］
祭司であるモー・チャムの男性が守護霊を招きいれた銀のカップを舟の舳先に括りつける。

［写真 7-13］
舟には夢で精霊のお告げを聞き、精霊が要求するものを準備するナーン・テーンの女性と、精霊を喜ばせるナーン・フア、そしてケーン吹きの男性が乗り込み、舟を上流から下流へ漕ぎ下らせる。その後、彼らは舟を降り、漕ぎ手たちは競漕に備える。

７－４－３．水を開く儀式：プート・ナム(peut nam)

ワット・チャン競漕祭の伝統が語られる際にたびたび登場してきたティー・サーン・ナム・ノーンは、６章２節４項１で検討したとおり、ヴィエンチャンの伝統というよりは、ラオス南部の伝統と言えるが、水を開くという意味の「プート・ナム」という儀礼的行為は、ヴィエンチャン周辺でおこなわれるワット・チャン以外の競漕祭では、ほぼ全ての水上で観察された(図７－２を参照)。水を開くこの儀礼については、アルシャンボーも南部チャンパサックの例を記録している。彼は「プート・ナム peut nam」ではなく、「パット・ナム pat nam」と表記しているが、その意味を「水を切るもしくは水を開く」としていることから、同じものであると思われる[Archaimbault 1972:34]。アルシャンボーによれば、プート・ナムは「競漕ルートを浄めて競漕区域を平和な状態にしてから、競漕を行うことを目的としている」という[Archaimbault 1972:62]。ヴィエンチャン周辺地域でみられる「プート・ナム」は、競漕祭を始める前に参加するすべての舟がゴール地点に集まり、美しく舟を横並びにそろえ、一斉にスタート地点の方向へと漕ぎ上がる行為で、アルシャンボーが示した民間信仰と同じく、競漕ルートを清める儀礼的行為であると言える。

アルシャンボーは 1953 年に観察したワット・チャン競漕祭儀礼の記録の中で、スカンタナーガの祭司を乗せた舟がパサック河口からワット・チャンへ戻る間、急に猛スピードで舟を走らせ、漕ぎ下った行為を「プート・ナム」と解釈しており、その行為によって、雨季の間内陸に留まっていたナーガや蛇たちをメコン川へ帰らせる通路が作られ、排水が促

されると結論づけているが[Archaimbault 1972:34]、2007 年に観察された儀礼的行為は、どちらかといえば、上述した通り、これから競漕をおこなう水路を清めるといった意味合いであった。

【図 7-2:2007 年開催の競漕祭分布】

［写真 7-14］プート・ナム直前の様子

７－５．考察：21 世紀の競漕祭における「伝統」と「スポーツ」

1990 年代中頃から徐々にみられた競漕に参加する舟の形状の変化は、競漕における不公平を生んでいるとの不満から、観光年を迎えた 1999 年から 2000 年にかけて「伝統」の見直しも手伝ってカテゴリーが分化されるに至った。分化された舟を所有する舟の分布をみてみると、「伝統」と「フア・スード（以下、考察においては「スポーツ舟」と記す)」かは、ナムグム川流域とメコン川流域にほぼ符合している。ワット・チャン競漕祭の歴史を振り返ってみると、ナムグム川沿いの村が本格的にワット・チャン競漕祭に参加し出したのは、ラオスが諸外国からの観光客を受け入れ始めたことにより観光産業が拡大し、1994 年の友好橋開通が後押しするかたちで経済的にも変化が見られるようになった 96 年からであった[82]。それ以前にも、バーン・クーン村などは王国政府時代より参加していたことがわかっているが､他の村々は競漕祭における長い舟の参加数がもっとも多くなった 96 年以降、参加が定着したと言える。「伝統舟」ではないと批判される舟を所有するメコン川流域の村々が、ワット・チャン競漕祭の存在が確認出来る 1940 年代より参加していることを考え

[82] 経済成長率は 1986 年から 1990 年には年 4.4%、1991 年から 1995 年には年 6.4%、1996 年から 2000 年には年 6.2%［ヴォーラペット 2010:117-118]。国内総生産(GDP)は米ドルで 91 年 225、92 年 270、93 年 297、94 年 336、95 年 379、96 年 394［ヴォーラペット 2010:124]。

ると、ナムグム川沿いの舟の参加はごく最近の新しい現象である。ナムグム川沿いから長い舟をワット・チャンまで水上移動させるためには大きなモーターの付いた舟で 1 泊 2 日かかるため、かつては簡単に参加できる競漕祭ではなかったことが１つの原因である。

伝統に関する論争についていえば、舟の形状が変化し始めた頃とナムグム川流域の舟が参加し始めた時期が丁度重なることから、ナムグム川流域がワット・チャン競漕祭に参加していなければ、競漕祭は今のようにカテゴリーの分化に至らなかった可能性が高い。それはすなわち、ラオスの伝統的な舟が何かを議論する機会もなく、競漕祭は伝統的に出安居の翌日に開催される年中行事としての伝統が保たれるのみで、舟に伝統の形が集約されることはなかったことになる。しかし、ラオスの伝統的な舟にこだわるナムグム川流域の人たちがただ純粋に競漕祭の伝統を保とうとして声を上げただけなのかは２つの点で疑問も残る。１つは既に述べた通り、競漕における勝敗へのこだわりから、舟に関する規定の詳細化を求めた点においては、「競漕祭はブン・スワン・フア・パペニー（伝統的な競漕の祭り）であってスポーツ大会ではない」との立場をとっていたとしても、多分にスポーツ的要素の中に取り込まれていたと言える。伝統的な競漕祭がかつては

「競漕するだけで、点数化するようなことはなかった」
（ハートサイフォン郡 TM 村の村人、男性、70 代）
「小さい舟も大きい舟もくじ引きをして一緒に競漕をしていた」
（ハートサイフォン郡 CP 村の村人、男性、70 代）
「王国時代は集って舟を漕ぐことに意味があった」
（ハートサイフォン郡 NH 村の村人、男性、70 代）
「舟が集まればそのまま対戦していた」　（パーク・グム村村長、男性、40 代）

というものであったのだとすれば、勝敗は二の次であったことが判るのである。しかし、伝統舟を保持する村が求めたのは、競漕における公平性の担保であり、その延長上に伝統舟の保持の主張があったように思われる。そうした意味では、伝統舟を保持する村々もスポーツの要素を強くする競漕祭そのものに抵抗を示したわけではないと言える。２つ目は、舟の製作にかかる経済的な問題である。伝統舟を所有する PK 村の村人（男性、60 代）は、「フア・スードは経済的な意味を持ちすぎたスポーツ舟であり、伝統的な舟ではない」と語ってくれたのだが、実際、舟の改修、製作にかかっている費用が伝統舟とスポーツ舟では大きく異なることが以下の表７−４からわかる。仮に伝統舟からスポーツ舟に変えようとするならば、それなりに大きな金額の負担が村人にかかることとなる。スポーツ舟である「フア・スード」のみの競漕になってしまったとすれば、資金の負担が増すことは必至である。こうした経済的な負担が「フア・スード」を排除したいと願うもう１つの理由であると思われる。

また、ひとつ興味深いことは、ナムグム川流域の人たちとメコン川対岸に住むノーンカ

ーイ県の人たちとの交流が深いメコン川流域の人たちとでは、国を同じくするラオスのラオ人ではあるものの、歴史的背景、地域的環境からタイに対する認識の差がみられる点である。ラオス人の間では、シェンクアン県から移住してきたシェンクアン方言のラオ語を話すナムグム川流域の人たちのことを「タイ・トン thai thong」と呼ぶ[83]。タイ・トンとは民族を示す言葉ではなく通称であるのだが、民族としてはタイ・プアン族の人とほぼ同義の意味をもつ。タイ・プアン族とは、かつてラオス北部のシェンクアン侯国に住んでいたタイ・カダイ語を話す低地民族で、数世紀前にヴィエンチャン周辺やルアンパバーン周辺に移住してきた民族である[Lebar ほか 1964:228]。彼らにとっての「タイ」は「タイ王国」全体を指し、「タイ人」は「タイ王国」に国籍をもつタイ人全般である。しかしながら、タイ王国の東北地方イサーンに住むラオ族であるタイ人と同じ方言を話すメコン川流域の人びとにとって、「タイ」そして「タイ人」は一様ではなく、「タイ」と「東北タイ」、「タイ人」と「東北タイ人、コン・イサーン(Khon isan)」は全てが同じではないのである。こうした流域ごとの意識の違いも競漕祭の伝統論争に影響を及ぼしていると言える。

最後に、競漕祭を構成するもう１つの要素である儀礼の伝統について考察をしてみると、アルシャンボーの記録した知識人に伝わる儀礼の伝統は継承されていないと言ってよいのではないだろうか。既述した通り、儀礼の伝承そのものが脆弱だったと言っても過言ではない。一方、精霊信仰が社会主義政権下において禁止されたにも関わらず、競漕祭にまつわる精霊信仰は村ごとに伝承され、スポーツ舟を保有する村であったとしても守られていることがわかる。ではなぜ、このような精霊信仰の伝統は競漕祭における伝統として表立って扱われることがないのであろうか。その１つの要因は、政府が少数民族の精霊信仰は認めつつも、ラオ人の精霊信仰を全面的には認めていないことが上げられる。しかしながら、それ以上に競漕祭をとりまく村の儀礼が各村の伝統や慣習に則っておこなわれているため、村に閉じられており、他の村と共有するような儀礼ではないことが大きい要因であるように思われる。筆者は 2007 年に舟を進水させる儀礼を 4 カ所、守護霊を舟に招き入れる儀礼を２カ所で観察したが、いずれの村においても他の村の人をもてなし、共に儀礼を行なう様子はなく、村に閉じられ、村人のみに共有される儀礼であったといえる。精霊祭祀の際に村が空間を閉じ、外からの侵入を遮断するという報告が多くなされていることからも、精霊祭祀と空間を閉じる行為はさして珍しいことではない［例えば岩田 1963、林 2003]。競漕祭をとりまく各村の儀礼は、筆者のような部外者の目からすれば、十分に伝統的であるように思えるのであるが、それが各村々の伝統であったとしても、村を超えて共有されるものではないことから、競漕祭における伝統のあり方が論争になった際にも論争は競漕そのものに集約され、儀礼の伝統が語られ、主張されることはなかった。結局のところ、こうした精霊祭祀をおこなう地域全体を統合する意図をもって創られたヴィエンチャン地域を守護するナーガたちへの儀礼祭祀は、競漕祭を支える参加村の人びとにとって

83 ラオス国立大学文学部のシェンクアン県出身であるブアポーン先生、ならびに同じくラオス国立大学経済学部のシティサイ先生のご教示による。

の伝統にはなり得なかったため、継承もされなかったと言えるのではないだろうか。

【表7−4：舟の費用】

調査村番号	村名	地区	舟の種類	購入年	手段	舟の値段	通貨単位	
4	ターパ1	ハートサイフォン	スード	1997	改造	50万	Bhat	
4	ターパ2		スード	2008	改造	30万	Bhat	
5	シェンクアン		スード	1997	製造?	40万	Bhat	
8	タームワン		スード	2000	製造?	40万	Bhat	
11	シータン・タイ		スード	2003	製造	35万	Bhat	
13	コークサイ		スード	2003	製造	43万	Bhat	
14	サイフォン・ヌア		スード	2003	改造	27万	Bhat	
15	ティンピア		スード	2005	改造	13万	Bhat	
16	ターケーク		スード	1998	改造	35万	Bhat	
17	ホーム・タイ		スード	2003	製造	40万	Bhat	
18	チェムパーン		スード	2005	修理	8万	Bhat	
19	ポーンホーン	サイタニー	伝統	1998	製造	6万	Bhat	
20	ハートキアン		伝統	2005	製造	6〜7万	Bhat	
21	ナークン		伝統	1978	購入	80万	Kip	
22	ポーンコー		伝統	1994	購入	6万	Bhat	
24	チョムチェーン	シーサッタナーク	スード	2006	製造	50万	Bhat	
25	パンマン		伝統	1970	製造	300万	Kip	王国時代
27	シーカイ1	シーコッタボン	伝統	1975	製造	10万	Bhat	
27	シーカイ2		伝統	2006	製造	48万	Bhat	

※　通貨単位：Bhatはタイ王国、Kipはラオス人民民主共和国
2008年2月12日現在：1Bhat＝2.56円
2008年1月30日時点：1万 Kip＝106.3円

※　舟の製作費（舟大工の話）
50人以上乗る舟：2800万〜3500万Kip
10人用の舟：500万Kip

※　ボートレース祭参加にかかる費用（50人乗り）
（例）シーカイ村がハートサイフォン郡のボートレース祭に参加 →約560万Kip
この時の賞金：1位400万Kip、2位300万Kip、3位200万Kip、4位150万Kip、参加賞100万Kip
シーカイ村のスポンサー：メコン委員会から約1000ドル（1シーズンに対して）

※　2007年のGDP $701
（出典：*Statistical year book 2007*, Ministry of Planning and Investment:Vientiane, 2008）

調査村の位置、基本情報については、巻末の地図２および巻末資料表１を参照。

おわりに

本稿「はじめに」の問題意識で述べた現在の競漕祭を理解するためのキーワードである「伝統」、「タイ」、「スポーツ」は、それぞれの歴史的な背景が複雑に絡まり合い、現状を作っている。最後に、時代の流れを総括し、本稿のテーマである「伝統」と「スポーツ」の関係、およびワット・チャン競漕祭における「タイ」の関係性について考察していきたい。

ワット・チャン競漕祭は、3章で見てきた通り、フランス人入植後、約40年を経て展開されたラオ・ニャイ運動期に創られた可能性の高いことが判明した。この時期の競漕祭はヴィシー政権の「伝統の復興」と「青年・スポーツ運動」の影響を受けた活動が展開されたが、競漕祭において「スポーツ」が鼓舞された様子はなく、むしろ、文化的な祭りとしてラオス人のアイデンティティを喚起する伝統復興の一部であったと思われる。そしてその伝統復興によって蓄積されていった知識が構成され、アルシャンボーが1953年に観察した競漕祭の儀礼へと繋がっていったと言える。1953 年の儀礼の中で述べられたヴィエンチャン地域を守護するナーガたちを召喚する句は、おそらく1940年代後半に創られ、1974年まで競漕祭の儀礼として繰り返される中で、儀礼は「学識ある伝統」ならびに「学識者内で伝わる伝統」として、ワット・チャン競漕祭の「伝統的」側面を形づくっていった。また、さらに 1960 年代後半から 1970 年代前半にかけてルアンパバーンから皇太子夫妻が参列すると、競漕祭の伝統が権威付けされていくこととなる。

競漕祭における競漕をスポーツとみなす視点は、少なくとも1960年代半ばより確認される。1965 年にスポーツを表す「キッラー」と競漕を表す「スワン・フア」を合わせた「キッラー・スワン・フア」という造語が出現し、1971 年には「キッラー・スワン・フア」は「キッラー・パペニー」すなわち「伝統スポーツ」であると述べられるようになっていく。こうした「スポーツ」と競漕祭の接合は、王国政府時代においては、歓迎されこそ忌避される存在ではなかったと考えられる。なぜなら、1960 年代にヴィエンチャンに増加していた外国人の目を気にして禁止されたのは、伝統でありながら、恥ずべき風習とされた卑猥なお囃子であり、そうしたお囃子は「ラオス人が仏教の教えに基づいた高度な文化を持っている」と外国人に理解させることを害しているとみなされた一方で、「スポーツ」という概念は、伝統的な行事に管理という近代的な合理性をもたらすと共に、外国人の目にもラオスの伝統的文化の中に外国と同様の「高度な文化」があると示す側面を持っていたからである。ラオ族の伝統的な行事・慣習を伝える『12の慣習14の規律』と題する本を1974年に著したチャンニニャヴォンが、「競漕は、見に来た人を心から楽しませる昔からの伝統であり、スポーツの1つである」と明記していることからも、1970 年代前半に競漕をスポーツとみる見方に矛盾はなかったことが窺える。しかし、王国政府時代を通して、こうした競漕をスポーツとみる視線は政府によって喚起されたものではなかった。

一方、1975 年に王制が廃止され、社会主義政権が誕生すると、団結を鼓舞する新政権によって、競漕祭は「水上の団体スポーツである」と繰り返し主張されるようになり、競漕祭における競漕は「スポーツ」の色を深めると共に、拡大の道をたどっていく。競漕祭の

拡大に伴って登場した小さい舟（フア・カープ）の競漕は、1985 年の第 1 回国家スポーツ競技会の一種目となったことを皮切りに、東南アジア競技会の種目とも結びつき、競漕祭が伝統的な年中行事である一方、競漕という形態においては、国際的なスポーツ大会の種目と同一であるため、伝統とスポーツの境界が曖昧になっていく。小さい舟は管理・維持ならびに人数を集めるという面において、人びとが参加しやすいものであったため、競漕祭に参加する村が増え、伝統行事を盛り上げる役目を担ったが、その一方で、これまで競漕祭を主催する側が参加する村に対して食事を振る舞うなどの歓待を伴うものであったのに対し、参加する村に参加費を払わせるという「スポーツ大会」の法則を持ち込み、村と村の交流の場であった競漕祭は参加費を払って参加する「スポーツ大会」としての要素を併せ持つようになる。こうした小さい舟は当初、舟の形から総称して「フア・カープ」と呼ばれていただけであったが、徐々にスポーツ用の舟として認識されることとなり、1991 年頃より「スポーツ舟」みなされ、ラオス観光年を迎え、伝統を見直す機運の広がった 1998 年に競漕祭から締め出される結果となった。

しかしながら、「スポーツ舟」と区別され、ラオスの伝統的な舟として残された長い舟の競漕にも 1990 年代を通して舟の形状に変化が見られ、競漕の公平性に問題があるとの理由から伝統的な舟とは何であるのかについて議論が交わされるようになる。観光年の後半にあたる 2000 年には、本来の「伝統」に戻すという運営委員会の方針のもと、伝統的な舟のみの参加が告知されたものの、1940 年代より競漕祭に参加していたメコン川沿いの村々は、すでに伝統舟を改造した「フア・スード」の舟で競漕祭に数年参加しており、急な方針には対応できないとして、村や競漕祭を支援するスポンサーと共に反論したため、運営委員会は伝統舟を保有する村の意見も取り入れ、競漕におけるカテゴリーを分化させる形で決着を図ることとなった。しかし、その後も「伝統舟」と「フア・スード」の対立は、「競漕祭は伝統的な年中行事であるのだから、伝統を重視すべきだ」という意見を軸に繰り返され、「伝統舟」に関する舟の規定を詳細に決定していくことで、「フア・スード」を伝統的な舟の枠組みから切り離していった。

以上がワット・チャン競漕祭の大きな流れである。こうした歴史的背景の先にある現在の競漕祭は、厳格な規定のもとに競漕がおこなわれ、更に競技的性質を深めていくかのように思われたが、実際、一方向的には進んでいかなかった。というのも、2006 年および 2007 年の競漕祭運営委員会が配布した競漕祭の規定書には、舟に関する規定が一切みられなくなったのである。もともと、規定書に舟の詳細が明記されていたとしても、競漕祭の前日もしくは当日に競漕祭運営委員会の関係者が、参加する各舟の規定をチェックする行為はみられないため、規定書に記されたことが確実に履行されるわけではない、という曖昧さがある。規定書はあくまでも目安を示すものとして存在しており、参加者から抗議が上がったときの対応策として存在している。そのため、2003 年以降、舟の規定が議論されることによって、ある程度舟の規定が詳細化され、その規定が定着し、抗議の声が減ると、規定書から消滅するという現象が起こった。これは、舟の規定が参加村の間で定着した競漕

祭において、文書に書き記された舟の規定が繰り返し人々の目に触れることは、無用な争いの種をまき、新たな論争を誘発しかねないと運営委員会側が考慮した結果の措置であったとも考えられる。

この「伝統舟」と「スポーツ舟」とみなされる「フア・スード」を巡る論争は、一見、観光年という節目を迎え、外の目を意識したことにより、競漕祭の伝統とは「伝統舟を使用して競漕することである」という伝統回帰の現れのように見える。しかし、その実、それは外の目を意識した伝統回帰というよりも、勝敗にこだわるスポーツ的要素がワット・チャン競漕祭の内部で強まったため、起きた論争であったと言える。そして、この議論はワット・チャン競漕祭においてのみ重視されることも注目に値する。「伝統舟」と「フア・スード」を所有する村はナムグム川流域とメコン川流域で分かれるのであるが、この両者が自分たちの村の舟を運び共に競漕を行なうのは、出安居祭の翌日に行なわれるワット・チャン競漕祭だけである。ワット・チャン競漕祭には政府の高官や諸外国の大使など、貴賓たちが参列すると共に、ラオス国営テレビの生中継が入るヴィエンチャン最大の競漕祭である。そのため、いずれの舟を所有しようとも、勝利することは村に最大級の名誉をもたらすこととなる。そうしたワット・チャン競漕祭の勝敗が不公平な競漕で決することは、参加村にとって許されるものでなかったため、伝統論争が加熱していったという背景も見えてくる。出安居祭の時期は、メコン川沿いでもナムグム川沿いでも多くの競漕祭が開催されるが、いずれの競漕祭においても「フア・スード」を締め出す傾向はなく、カテゴリーも分けずに伝統舟とフア・スードは競漕を行なっている[84]。更には、ワット・チャン競漕祭で意見の対立をみせる村同士であっても、ワット・チャン以外のナムグム川流域の競漕祭においては、ナムグム川沿いの村がメコン川沿いの「フア・スード」を所有する村の漕ぎ手を雇い、自分たちの村の舟を勝利させるといったことも起きている[85]。

こうしたワット・チャン競漕祭以外の状況も含めてみると、この競漕祭の特異性が浮かび上がる。ワット・チャン競漕祭は多くの人の注目を集めるラオスの首都ヴィエンチャン最大の競漕祭であるため、地域や流域を超えた人々、村々が参加することとなり、参加する地域、流域ごとの伝統が持ち込まれる。その結果、いわば必然的にワット・チャン競漕祭の伝統をめぐる議論へと発展し、競漕祭は更に「伝統行事」として構成されていくこととなる。

しかし、こうした伝統を重視する傾向のあるワット・チャン競漕祭において、「フア・スード」はなぜカテゴリーが分化されたまま、競漕祭の一競漕として残り続けるのであろうか。ワット・チャンにおいては、伝統舟の競漕カテゴリーにて３年連続で優勝したチー

---

84 2000 年に開始されたサイタニー郡のタゴーン村において開催される競漕祭のみ「伝統舟」での参加が義務づけられているが、舟の舳先と艫をニェームに付け替えれば参加できるというゆるい規定となっている。

85 2007 年のヴィエンチャン県トゥラコム郡バーンクーンで開催された競漕祭の規定書には他郡、他県から漕ぎ手を雇った場合には通常参加費 3 万キップのところ、10 万キップ払うようにとの内容が明記されている。

ムのみが受けとる権利を有する特別なトロフィーも用意されている。それにも関わらず、「フア・スード」で参加する村は残り続けている。

その理由の一つは、対岸タイとの友好競漕祭の影響が大きいと思われる。ノーンカーイ県との繋がりが歴史的に深いメコン川流域のハートサイフォン地区は、ノーンカーイ県との競漕も視野に入れた舟を保有しているため、ワット・チャン競漕祭のためだけに伝統舟に戻すことが難しい状況にある。ノーンカーイ県との友好競漕祭で実績をあげ、名声を高めると、タイの他地域で開催される競漕祭にハートサイフォン郡の漕ぎ手たちが雇われて行くという話も聞かれた。ハートサイフォン郡の「フア・スード」を保有する村人たちは、ワット・チャン競漕祭だけに焦点を当てて競漕をおこなっていないことが窺えるのである。また、こうした状況を理解しているワット・チャン競漕祭の運営を担うヴィエンチャン市スポーツ局副局長の V 氏の話によれば、競漕祭の「フア・スード」で優勝したチームを国家スポーツ競技会のヴィエンチャン代表として、または、東南アジア競技会の代表ならびに、諸外国との間で競われるアジア競漕大会（Asian Boat Racing competition）などの国際大会のラオス代表として選出している。そのため、ワット・チャン競漕祭が伝統を重視する行事であることは承知しつつも、同様の競漕種目で争われる国際大会への代表選手選抜を兼ねている「フア・スード」を排除し、伝統舟だけに固執することは、運営側であるスポーツ局にとっても、長い舟での競漕がメコン川の水位が上昇する出安居時期に限られていることを含めても、不都合が生じるのだという。

「フア・スード」で参加し、常勝を誇るターパ村は、ワット・チャン競漕祭においては伝統舟で参加しないことに多少の批判を浴びつつも、ワット・チャン競漕祭とは別の文脈で賞賛されることを選択している。2007 年 11 月にカンボジア王国のプノンペンで開催されたアジア競漕大会に、ターパ村の選手を選出した観光局の観光・マーケティング促進部の部局長であるサリー・ピムピニット(Saly Phimphinith)は、その理由を「彼らはヴィエンチャンで一番良く知られているチームで、先月の競漕祭でも勝利し、年間を通して多くの競漕祭で勝利しているからである」[Vietiane Times 2007(19 November):3]と述べている。大会の結果は惜しくも決勝で開催国カンボジアの舟に敗退し、２位となったが、帰国後はヴィエンチャン市のシンボルの１つであるパトゥーサイ(Patu sai 勝利の扉)の前を漕ぎ手たちがメダルを掲げ行進している様子が報道されている[Vientiane Times 2007(30 November):31]。

こうした「伝統」と「スポーツ」の両面をもつ競漕祭は、2006 年に出版された『ラオスの文化：12 の慣習と 14 の規律に倣った生活について(Vadthanathamlao kiaokap kan damlongsivid tam heed 12 khong 14)』において、以下のように記されている。

競漕の伝統（パペニー・カーン・スワン・フア Paphenii kan suang heua）

出安居祭りに合わせてもう１つ続くのは長い舟の競漕(kan suwang heua nyao)である。昔は川沿いの村か寺には競漕用の舟が一艘ずつあり、出安居の日が来ると自分た

ちの舟の準備にかかり、祭りを実施する村は招待状を（各村に）出し、競漕の日がくると美しく飾られた舟が集った。各艘の漕ぎ手は自分たちの長い舟(heua nyao)を楽しませるお囃子を歌った。

最近では、いくつかの地域や県では政府がこの伝統を正確に実施するために主催者となり、どこの村の舟が優れていて、例えば銀のカップのような価値ある賞品、ならびに賞金を受取ったかといったことを見せびらかすのが伝統かのように振舞っている。

競漕は現在、水上スポーツ(kila na nam)の１つとなってしまった。友好的な関係や集団としての団結を示すような親戚間のような心情が全てにおいて徐々に失われている。　[Phonkaseumsuk 2006:81]（　）内日本語筆者加筆

1974 年に出版された同じタイトルの『12 の慣習と 14 の規律』において、「われわれラオスの競漕は、見に来た人を心から楽しませる昔からの伝統であり、スポーツの１つである」と記述された競漕は、約 30 年を経て「競漕は現在、水上スポーツの１つとなってしまった」という伝統を阻害するものがスポーツであるかのような記述へと変化していった。

しかしながら、2009 年にラオスが初めて主催した国際スポーツ大会である第 25 回東南アジア競技会の閉会式においては、以下のようなアナウンスと共に競漕祭を模したパフォーマーたちが会場に現われた。

雨季が明けると、米が実り始め、人々は喜びをもって収穫期を迎える。競漕は収穫期を祝うためにおこなわれる。競漕祭はラオス人社会の古い伝統である。そして競漕はラオスの人気ある水上スポーツでもある　[2009年12月18日]

現在、競漕祭はまさに「伝統」でもあり、「スポーツ」でもある状況に置かれている。懐古主義的な立場からすれば、「本来の伝統」ではなくなったとしても、スポーツと交わることで「伝統」の見直しが図られ、「伝統」が再生産されてきたことも確かである。特にヴィエンチャンのワット・チャン競漕祭に限っていえば、そもそもの「伝統」とは何であるのか、という疑問も残る。フランス人入植後に創られたのだとすれば、その伝統はフランス人もしくは首都ヴィエンチャンに移住してきた他地域のラオ人たちよって徐々に構成されていったものであると言える。そして、各地からヴィエンチャンに集まってきたラオ人たちによってワット・チャン競漕祭の「伝統」が創られていく様子は、今においても継続されていると言えるのかもしれない。競漕祭はヴィエンチャンが首都であるという立地も影響し、常に外の目を意識した展開を見せる。競漕祭は時として「伝統」であり「スポーツ」でもあるため、時代に応じた彼らの主張は揺らぎをみせるが、両方の側面を持つ行事であるからこそ、常にラオス人の関心を集めてきた。そして、時として「スポーツ」が対立軸にあることで、「伝統行事」としての意味合いを深めていき、一方で、国際的な

スポーツ競技会の場においては、「伝統」と「スポーツ」は対立しない形でラオスの伝統的なスポーツとされ、対外的にアピールされていくこととなる。

以上、ラオス・ヴィエンチャンの競漕祭事例を通して、「伝統」と「スポーツ」の関係性を詳細に分析し、「伝統スポーツ」の多様性や個別性をある程度明らかにすることができた。しかしながら、本研究がスポーツ研究、文化人類学研究においてどのような貢献をしうるのかという点においては、明確な答えを導き出すことができなかった。残された大きな課題に今後も真摯に向き合い、研究を深めていきたい。

引用・参考文献

＜邦語文献＞

飯島明子. 1996. 「歴史的背景」. 綾部恒雄、石井米雄編. 『もっと知りたいラオス』. 弘文堂, pp. 10-26.

———. 1999(2008). 「植民地下の「ラオス」」. 石井米雄、桜井由躬雄編.『東南アジアⅠ大陸部』. 山川出版社, pp. 347-363.

岩田慶治. 1971. 『東南アジアの少数民族』. 日本放送出版協会.

ヴォーラペット, カム. 藤村和広、石川真唯子訳. 平田豊訳. 2010. 『現代ラオスの政治と経済 1975～2006』. めこん.

ヴォンヴィチット, プーミー. 2010. 『激動のラオス現代史を生きて　回想のわが生涯』. めこん.

宇佐美隆憲編. 2004. 『スポーツ人類学』. 明和出版.

海野清. 1980. 「船競漕の民俗-事例を中心に-」. 『民俗学評論　第 18・19 号併号』. 大塚民俗学会, pp. 45-84.

黄麗雲. 1982. 「龍船競漕の比較研序説ー中国を中心にしてー」.『待兼山論叢　日本学篇』第 16 号. 大阪大学文学部, pp. 25-42.

———. 2002. 「ドラゴンボートレースの現状と観光開発の一考察ー台湾龍船競漕・沖縄爬龍船・長崎ペーロンを事例としてー」.『研究報告 No. 11』(「研究報告」編集委員会). 旅の文化研究所, pp. 19-27.

菊池陽子. 1996 「歴史的背景」『もっと知りたいラオス』綾部恒雄、石井米雄編、弘文堂、pp. 26-40.

———. 1997. 「フランス植民地期、ラオス語正書法の確定-ラオス・ナショナリズムの一底流」. 『史滴』19, 早稲田大学東洋史懇話会, pp. 78-91.

———. 2003. 「現代の歴史」. ラオス文化研究所編. 『ラオス概説』. めこん, pp. 149-170.

君島久子. 1977. 「竜神（竜女）説話と竜舟祭(１)」. 『国立民族学博物館研究報告』2 巻 1 号, pp. 34-62.

熊野晃三. 1998. 「長崎のペーロン～競技と伝統の間～」.『体育の科学』48-11, pp. 876-883.

高津勝. 2003. 「「和船競漕」考-社会史的アプローチ-」. 『一橋大学スポーツ研究』 22, pp. 35-45.

———. 2006. 「和船競漕の社会史-玉江浦の「おしくらごう」-」. 『一橋大学研究年報社会学研究』44, pp. 99-230.

———. 2008. 『スポーツ社会学の可能性-歴史・身体・社会を探る-』. 創文企画.

清水純. 1983. 「東アジア・東南アジアにおける競舟儀礼について」.『季刊人類学』 14-4, pp. 198-255.

鈴木正崇. 2010. 「祭祀と世界観の変容ー中国貴州省苗族の龍船節をめぐってー」. 『法學研究ー法律・政治・社会　第 83 巻第 2 号　霜野壽亮教授退職記念号』. 慶應義塾大

学法学部内法学研究会，pp.181-254.
寒川恒夫．1981．『稲作民伝承遊戯の文化史的考察ー東アジア、東南アジアを中心にしてー』．筑波大学博士論文.
———．2004．「スポーツ人類学のパースペクティブ」．寒川恒夫編．『教養としてのスポーツ人類学』．大修館書店，pp.2-13.
———．2010．「スポーツ人類学の現状と可能性」．寒川恒夫、仇軍主編．『体育・人類・文化』．北京体育大学出版社，pp.200-212.
ターナー,ヴィクター.W．冨倉光雄訳．1967．『儀礼の過程』．思索社
富山力道．2003．「伝統的モンゴル相撲の近代的再生をめぐって」．『スポーツ人類学研究』第5号，pp.19-40.
名越健郎．1987(1991)．『メコンのほとりで』．中公新書846.
中田友子．2004．『南ラオス村落社会の民族誌：民族混住状況下の『連帯』と闘争』．明石書店.
永原慶二．1978．『歴史学叙説』．東京大学出版会.
難波ちづる．1998．「ヴィシー期・フランスのインドシナ統治-インドシナのフランス人と対インドシナ認識」．『現代史研究』44号，pp.52-67.
西山哲郎．2006．『近代スポーツ文化とはなにか』．世界思想社.
波照間永子．1998．「糸満のハーレー ～伝統漕法の伝承と変容」．『体育の科学』 48-11，pp.871-875.
林行夫．2000．『ラオ人社会の宗教と文化変容：東北タイの地域・宗教社会誌』．京都大学学術出版会.
———．2003．「宗教」．ラオス文化研究所編．『ラオス概説』．めこん，pp.207-240.
———．2003．「東北タイとラオス」．ラオス文化研究所編．『ラオス概説』．めこん，pp.521-548.
———．2003(2006)．「タイとラオス-国家間関係と地域間関係-」．綾部恒雄、林行夫編．『タイを知るための60章』．明石書店，pp.79-84.
ハンドラー,リチャード．Jリネキン．岩竹美加子訳．1996.「本物の伝統、偽物の伝統」.『民俗学の政治性』．未来社，pp.125-156．（著者の英語標記．原書の出版年．原書のタイトル．出版社．）
ブランチャード,ケンドール．1995.「21 世紀の伝統スポーツ、国際関係、および世界秩序について」．寒川恒夫監修．伝統スポーツ国際会議実行委員会編．『21 世紀の伝統スポーツ』．大修館書店，pp.1-19
星野龍夫．1998.「遺跡と年中行事/年中行事」．綾部恒雄、石井米雄編．『もっと知りたいラオス』．弘文堂，pp.243-264.
ホブズボウム,エリック、T.レンジャー．前川啓治、梶原景昭ほか訳．2001．『創られた伝統』．紀伊國屋書店.

増原善之. 2011. 『地域史からみたラオス・ランサン王国の成立と分裂−「内陸交易国家」から「半港市国家」へ−』. 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士学位論文.
松沼美穂. 2004. 『ヴィシー政権下フランスにおける帝国プロパガンダと国民統合』. 東京大学博士学位論文.
———. 2007. 『帝国とプロパガンダ：ヴィシー政権期フランスと植民地』. 山川出版社.
松本信広ほか. 1959.「東南アジア稲作民族文化綜合調査座談会」. 『民族学研究 23 巻 1〜2 号』. 日本民族学会, pp.118-130.
松本信広. 1978(1954). 「古代伝承に表れた車と船」. 『日本民族文化の起源』2. 講談社.
安井清子. 2003. 「民族」. ラオス文化研究所編. 『ラオス概説』. めこん, pp.171-205.
リーチ,エドマンド. 青木保ほか訳. 1983. 『文化とコミュニケーション』. 紀伊国屋書店.
矢野順子. 2013. 『国民語の形成と国家建設：内戦期ラオスの言語ナショナリズム』. 風響社.
山田紀彦編. 2011. 『ラオスにおける国民国家建設：理想と現実』. アジア経済研究所.
山田紀彦. 2002. 「ラオス人民革命党第7回大会 ― 残された課題 ― 」. 石田暁恵編. 『2001年党大会後のヴィエトナム・ラオス ― 新たな課題への挑戦』. アジア経済研究所, pp.121-151.
山本達郎. 1976. 「*La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel.* の書評」. 東南アジア史学会編.『東南アジア−歴史と文化』6 号. 東南アジア史学会, pp.147-150.

＜辞典、辞書＞

財団法人鈴木学術財団. 1979. 『梵和大辞典』. 講談社.
雲井昭善. 1997. 『Dictionary of PALI BUDDHISM』. 山喜房佛書林.
Kerr, Allen D. 1972(1992). “Lao-English Dictionary”, Bangkok: White Lotus.

＜英・仏語文献＞

Aijmer,Goran. 1964. *The dragon boat festival on the Hupeh-Hunan Plain, central China;a study in the ceremonialism of the transplantation of rice.* The Ethnographical Museum of Sweden, Stockholm: Monograph Series Publication. No.9.
Alain Y, Dessaint. 1975. “Review: La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel”. *American Anthropologist, New Series,* Vol.77, No.4. Washington: American Anthropology Association, pp.942-943.

American Embassy, USAID and USIS. 1964. *Post report*. Vientiane.

Archaimbault, Charles. 1972. *La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel*. Ascona:Artibus Asiae,

Asmussen, Fleur Brofos. 1997. *Lao Roots: Fragments of a Nordic-Lao Family Saga*. Bangkok: White Orchid Press.

Askew.Marc., W.S. Logan and C. Long. 2007. *Vientiane: Transformations of a Lao landscape*. London and New York: Routledge.

Aymonier, Etienne. 1895. *Voyage dans le Laos, Vol.1*. Paris: E. Leroux.

Brownell, Susan.1995. *Training the body for China: Sports in the Moral Order of the People's Republic*. The University of Chicago Press.

Chalong Soontravanich. 2003. "Silaviravong's Phongsawadan Lao: A Reappraisal". Christoper E. Goscha and Soren Ivarsson eds. *Contesting Visions of The Lao Past*. Copenhagen: Nordic Institute of Asian Studies, Studies in Asian Topics Series, No.32, pp.111-128.

Chevallier, Joseph. 1995. *Lettres du Tonkin et du Laos (1901-1903)*. Paris: Editions L'Harmattan.

Christie, Clive J. 2001. *Ideology and revolution in Southeast Asia, 1900-1980 : political ideas of the anti-colonial era*. Richmond: Curzon Press, pp.152-156.

Condominas,Georges et Goudineau,Yves. 2001. "Charles Archaimbault ; l'érudition et l'imaginaire du Laos(1921-2001)". *Lettre de l'afrase no53*. Paris:Association française pour la recherche sur l'Asie du Sud-Est, pp.3-10.

Creak, Simon R. 2010. *'Body Work' A History of Sport and Physical Culture in Colonial and Postcolonial Laos*. PhD Thesis,The Australian University, Canberra.

Davies, Richard. 1975. "Review: La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel". *Modern Asian Studies*, Vol.9, No.1. London: Cambridge University Press, pp.138-144.

————————. 1984. *Muang Metaphysics: A Study of Northern Thai Myth and Ritual*. Bangkok: Pandora.

Delaporte, Louis and F.Garnier. 1998. *A pictorial journey on the old Mekong Cambodia, Laos and Yunnan: The Mekong Exploration Commission Report(1866-1868) volume 3* (translated and composed by Walter E.J. Tips). Bangkok: White Lotus Press.

De Reinach, Lucien. 1901. *Le Laos, Tome I*. Paris: A.Charles, Libraire-éditeur.

Eberhard, Wolfram 1968(1969). *"The local cultures of south and east China"*. Leiden: E.J.Brill.

Eutrope, Eugène. 1937. "Avant-Props". *Bulletin des Amis du Laos no. 1.* Hanoi, pp. ix-xi.

Evans, Grant. 1998. *The Politics of Ritual and Remembrance : Laos since 1975.* Chiang Mai: Silkworm Books.

————. 1990 *Lao Peasants under socialism.* New Haven and London: Yale University Press.

———. 2002. *A short history of Laos.* Chiang Mai: Silkworm books.

———. 2009. *The Last Century of Lao Royalty: A documentary History.* Chiang Mai: Silkworm Books.

Faure, Marie-Daniel. 1937. "Trois fêtes Laotiennes a Vientiane". *Bulletin des amis du Laos.* 1re année No1, pp. 21-43.

Franck, Harry A. 1926. *East of Siam: Ramblings in the five divisions of French Indo-China.* New York & London: The Century Co.

Halpern, Joel M. 1990. "Laos Profiles". Laos Paper No. 18. University of Mass. Amherst, Mass. Reprint: Christiansburg, VA: Dalley Book Service.

————————. 1964. *Government, Politics, and Social Structure in Laos : A study of Tradition and Innovation*, New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University.

Hashimoto, Sayaka. 2008. Spirit cults and Buddhism in Luang Prabang, Laos: Analyses of rituals in the boat race festivals. *International Journal of Sport and Health Science*, 6: pp. 219-229.

Iinuma, Takeko. 2002. *A Peripheral State Encounters Globalization: Laos and The Mekong River Friendship Bridge.* Ph. D Dissertation, Cornell University.

————————--. 2005. "The meaning of the Mekong River Friendship Bridge for the Laotian Integration into the regional Politico-economy". *Genbunken*, Senshu Daigaku Gendaibunka Kenkyukai.

Ivarsson, Soren. 2008. *Creating Laos: The making of a Lao space beterrn Indochina and Siam, 1860-1945.* Copenhagen: NIAS Press.

Ivarsson, Soren and C. E., Goscha, 2007. "Prince Phetsarath (1890-1959): Nationalism and Royalty in the Making of Modern Laos". *Journal of Southeast Asian Studies, 38 (1).* The National University of Singapore, pp 55-81.

Izikowitz, Karl Gustav. 1975, "Review: La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel". *Man, New Series*, Vol. 10, No. 1. London: Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, pp. 154-155.

Jennings, Eric. 2004. Conservative Confluences, "'Nativist' Synergy: Reinscribing Vichy's National Revolution in Indochina, 1940-1945". *French Historical Studies* 27, no. 3, pp. 602-635.

Lebar, Frank. M, G. C. Hichkey and J. K. Musgrave, 1964. *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. New Heaven: Human Relations Area Files.

Lemoine, Jacques. 2001. "Hommage;L' oeuvre de Charles Archaimbault(1921-2001)", *Aséanie Numéro 7- juin* 2001. Bangkok: Sirindhorn Anthropology Centre, pp. 169-184.

Lent, John A. 1974. *Mass Media in Laos*. GazetteA:International Journal for mass Communication Studies vol. 20.

Koret, Peter. 1999. "Books of Search: The invention of traditional Lao literature as a subhect of study". Grant Evans ed. *Laos Culture and Society*, pp. 226-257.

Meeker, Oden. 1959. The Little World of Laos: With a picture essay by Homer Page. New York: Charles Scribner' s Son.

Ministry of Planning and Investment. 2009. *Statistical Yearbook 2008*. Vientiane : Ministry of Planning and Investment, Department of Statistics.

Ngaosyvathn, Mayoury and Pheuiphanh. 1989. "Lao Historiography and Historians: Case Study of the War Between Bangkok and the Lao in 1827". *Journal of Southeast Asian Studies* vol. XX, no. 1 (March 1989), pp. 55-69.

Ngaosrivathana, Mayoury and Pheuiphanh. 2009. *The enduring sacred Landscape of the Naga*. Chiang Mai: Mekong Press.

Porée-Maspero, Éveline. 1974. "Bibliographie; Charles Archaimbault, La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel. ". *T' oung Pao Vol. LX*. Leiden: E. J. Brill, pp. 202-205.

Raquez, Alfred. 1902(2000). *Pages Laotiennes*. Vientiane : Institut de recherche sur la culture (Laos) & Cercle de culture et de recherches Laotiennes (France).

Sayarath, Chayphet. 2005. *Vientiane, portrait d'une ville en mutation*. Paris: Editions Recherches.

Schliesinger, Joachim. 2003. *Ethnic Group of Laos: Volume 1. Introduction and Overview.* Bangkok: White Lotus Co., Ltd.

Stuart-Fox, Martin. 1997. *History of Lao*. Cambridge: Cambridge University Press.
: The Scarecrow Press, Inc.

———————. 1998. *The Lao Kingdom of Lan Xang: Rise and Decline*. Bangkok: White Lotus Co., Ltd.

Toye, Hugh. 1968. *Laos: Buffer state or battleground*. L: The Scarecrow Press, Inc.

Toye, Hugh. 1968. *Laos: Buffer state or battleground*. London: Oxford University Press.

Vickery, Michael. 2003. "Two historical records of the kingdom of Vientiane". Christopher E. Goscha and I. Soren eds. *Contesting Visions of the Lao Past*.

Copenhagen: Nordic Institute of Asian Studies, Studies in Asian Topics Series, No.32, pp.3-35.

Viravongs, Maha Sila. 2004. *My Life:Auto biography -Buddhist Prediction and Poems from the '40s* (translated by David Wharton). Vientiane: Maha Sila Viravongs Library.

Woodward. Jr.,Hiram. W. 1975. "Review: La course de pirogues au Laos: Un complexe culturel". *The Journal of Asian Studies* Vol.34, No.4. Ann Arbor, Mich: Association for Asian Studies, pp.1079-1080.

Yamauchi,Saya and D. Lee. 1999. *DESA Discussion Paper No.9: Tourism development in the Lao People's Democratic Republic*. New York: United Nation.

"3349". 1978. "Iron man of Laos Prince Phetsarath Ratanavongsa" (translated by John B. Murdoch). *Data paper: Number110*. Ithaca, New York: Southeast Asia Program Department of Asian Studies, Cornell University.

＜ラオ語文献＞

Bouasisawat,Samrit. 2001. *Hiit khong paphenii lao vol.1* (『ラオスの伝統的慣習』) Vientiane: Sisavatkanphim.

Canninyavong, Khambang. 1974 *Khanopthamniamlao:Heedsipsong le khongsipsi* (ラオスの風俗習慣:12の慣習と14の規律). Vientiane: Rasabanditsapalao.

Phonkaseumsuk, Kideang. 2006 *Vadthanathamlao kiaokap kan damlongsivid tam heed 12 khong 14* (ラオスの文化：12の慣習と14の規律に倣った生活について). Vientiane:Ho samud heangsad

Hongphim heang sat (国家印刷局). 1982. *Ekasan khong Kongpasum nyai khanthi 3 khong phakpasasonpativatlao* (『ラオス人民革命党の第３回党大会文書』).

Kasuang Thalengkhao le Vathanatham. 2000. *Pavasatlao (Deukdamban-pachuban)* (『ラオスの歴史(太古から現在)』). Vientiane:Kasuang Thalengkhao le Vathanatham

Kasuwang Thalengkhao lea wattanatam (ラオス情報文化省). 1975-1995. 20 pii Satalanalat Pasathipatai Pasason Lao 1975-1995 (『ラオス人民民主共和国20周年 1975年から1995年』). Vientiane.

＜新聞＞

Lao Nhay (ラオ・ニャイ)

Lao Press

Xat Lao (サート・ラオ)

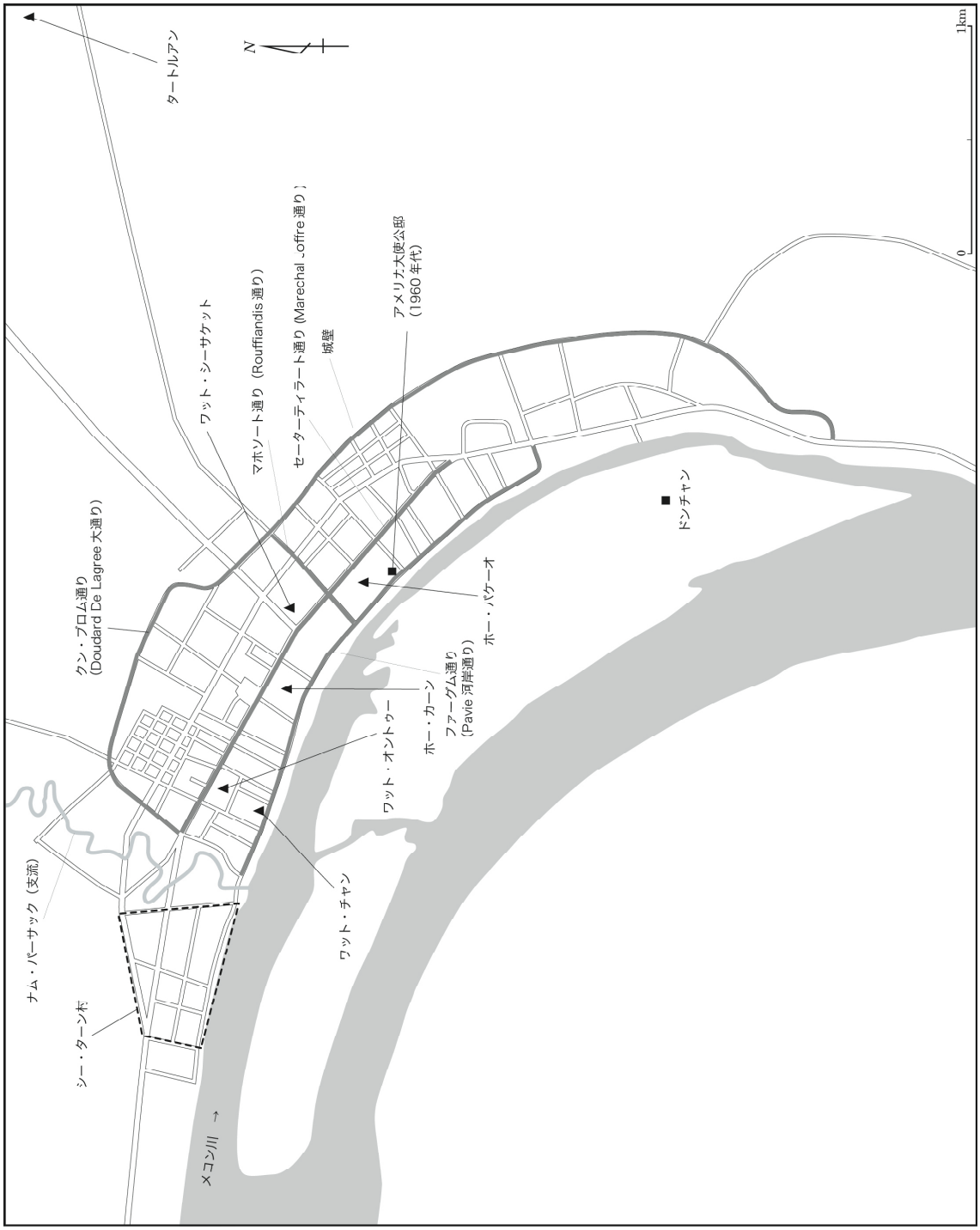
Vientiane Mai（ヴィエンチャン・マイ）
Vientiane Times
Khao Kila（カオ・キッラー）
Pathet Lao（パテート・ラオ）
Pasason（パサソン）

＜雑誌＞

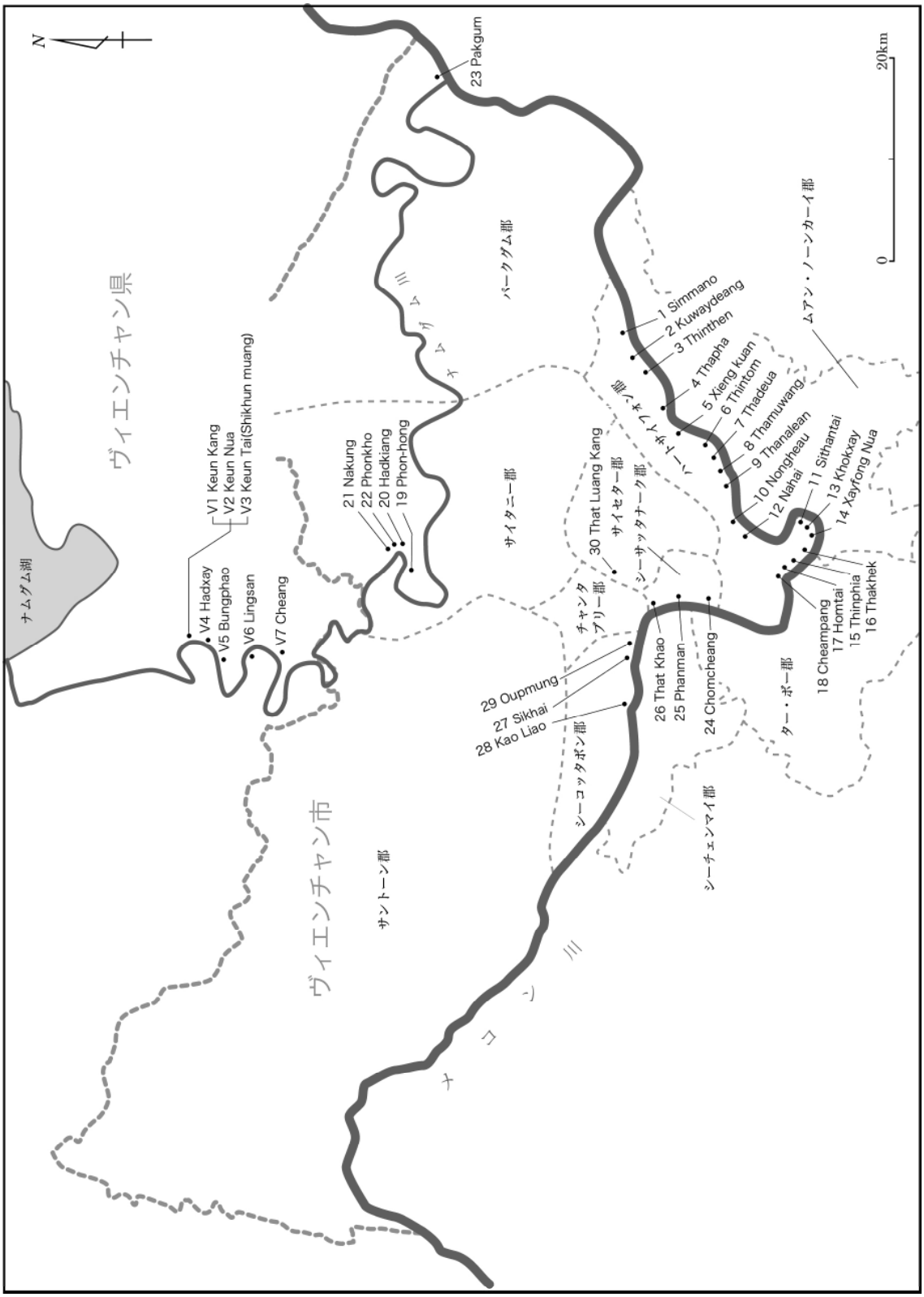
Sports-Jeunesse d’Indochine
Mittaphap/Friendship（ミッタパープ）
Vatthanatham（ワッタナタム）

巻末地図

【巻末地図１：ヴィエンチャン市内】



【巻末地図２：調査村の位置】



巻末資料

【巻末資料 表１：調査村落の基本情報】

調査番号	村落名	郡名	調査日	人口(女性)	家屋数	家族数	主な職業	宗教
Vientiane Municipality ヴィエンチャン市								
1	Simmano シムマノー	Hadxayfong	2007.2.22	1,166(554)			農業	仏教100%
2	Kuwaydeang クワイデーン	Hadxayfong	2007.2.23	1,861(962)			農業99%	仏教100%
3	Thinthen ティンテン	Hadxayfong	2007.2.23	1,120(360)	155	189	農業	仏教100%
4	Thapha ターパ	Hadxayfong	2007.2.27	1,503(735)	36?(1947年には7家族)		農業90%	仏教100%
5	Xieng kuan シェンクアン	Hadxayfong	2007.2.28	不明	不明	不明	不明	不明
6	Thintom ティントム	Hadxayfong	2007.2.28	1,600以上(800以上)	339	337	農業(野菜、稲)90%	仏教100%
7	Thadeua タードゥア	Hadxayfong	2007.3.1	1,800	380	406	農業(野菜、稲)50%、労働者50%	仏教100%
8	Thamuwang タームワン	Hadxayfong	2007.3.1	1,756(880)	367	354	稲作 30%, 畑 30%	仏教100%
9	Thanalean ターナーレーン	Hadxayfong	2007.3.13	1,355(712)	313	335	農業 80% (労働者?)	仏教98%
10	Nongheau ノーンヘオ	Hadxayfong	2007.3.13	2,488(1,258)	478	468	農業 70%	仏教100%
11	Sithantai シーターン・タイ	Hadxayfong	2007.3.14	1,592(818)	350	360	農業(野菜、稲)	仏教100%
12	Nahai ナーハイ	Hadxayfong	2007.3.14	1,713(763)	277	258	農業(野菜、稲)	仏教100%
13	Khokxay コークサイ	Hadxayfong	2007.3.15	1,411(700)	327	300以上	農業(野菜、稲)80%	仏教99%
14	Xayfong Nua サイフォン・ヌア	Hadxayfong	2007.3.15	1,002(518)	243	229	農業(野菜、稲)	仏教100%
15	Thinphia ティンピア	Hadxayfong	2007.3.20	1,557(500)	327	531	農業(稲)	仏教99%
16	Thakhek ターケーク	Hadxayfong	2007.3.20	1,530(574)	208	210	薬草園、農業(稲)	仏教100%
17	Homtai ホーム・タイ	Hadxayfong	2007.3.22	1,079(725)	262	260	農業(野菜、稲)70%	仏教100%
18	Cheampang チェムパーン	Hadxayfong	2007.3.22	1,906	230	230	農業(野菜、稲)	仏教100%
19	Phonhong ポーンホーン	Xaytani	2007.5.15	1,550(850)	243	248	農業75%、小売り	仏教100%
20	Hadkiang ハートキアン	Xaytani	2007.5.16	1,049(548)	182	122	農業	仏教90%、精霊信仰10%
21	Nakung ナークン	Xaytani	2007.5.18	1,247(612)	231	258	農業(野菜、稲)95%	仏教99%(モン族がいる)
22	Phonkho ポーンコー	Xaytani	2007.5.18	1,066	224		農業95%	仏教98%
23	Pakgum パーク・グム	Pakgum	2007.5.25	900	189	172	農業100%	仏教99%、カトリック1軒
24	Chomcheang チョムチェーン	Sisadtanak	2007.6.20			176	手工業、小売り、公務員	仏教98%、カトリック3軒
25	Phanman パンマン	Sisadtanak	2007.6.21	692(366)	151	143	小売り、会社員or役人	仏教98%
26	That Khao タート・カオ	Sisadtanak	2007.6.22					
27	Sikhai シーカイ	Sikhodtabong	2007.6.27	1,581(721)	273	236	小売り、会社員、公務員	仏教100%
28	Kao Liao カオリャオ	Sikhodtabong	2007.6.29	1,051(574)	198	202	農業(野菜)、会社員、公務員	仏教95%
29	Oupmung ウップムン	Sikhodtabong	2007.6.29	1,538(810)	395	306	公務員、自営業、農業(野菜、米少し)	仏教99%、カトリック1軒
30	That Luang Kang タートルアン・カーン	Saysetha	2007.8.7	2,273(1,172)	345	425	自営、小売り	仏教98%
Vientiane Province ヴィエンチャン県								
V1	Keun Kang クーン・カーン	Thulakhom	2007.10.29	2,040(1,020)	360	358	農業(野菜、稲)	仏教100%
V2	Keun Nua クーン・ヌア	Thulakhom	2007.10.29	1,648(832)	271	305	農業(野菜、稲)	仏教100%
V3	Keun Tai(Shikhun muang) クーン・タイ	Thulakhom	2007.10.29	2,560(1,713)	494	477	農業(野菜、稲)	仏教100%
V4	Hadxay ハートサイ	Thulakhom	2007.10.29				農業(野菜、稲)	仏教100%
V5	Bungphao ブンパオ	Thulakhom	2007.10.30	1,489(734)	329	337	農業(野菜、稲)	仏教100%
V6	Lingsan リンサン	Thulakhom	2007.10.30	1,549(778)	303	319	農業(野菜、稲),畜産	仏教100%
V7	Cheang チェーン	Thulakhom	2007.10.30	2,301(1,117)	468	537	畜産	仏教100%

【巻末資料　表２：調査村落が保有する舟】

ハートサイフォン郡

村 no	村　名	調査日	フア・スード（スポーツ舟）	伝統舟	練習用舟	注記
1	シームマノー	22/02/07	0	0	0	ナーン・ケオカムライ
2	クアイデーン	23/02/07	0	1	0	
3	ティンテーン	23/02/07	0	1	0	
4	ターパ	27/02/07	1	1	1	練習用の舟は伝統舟
5	シェンクアン	28/02/07	1	1	0	伝統舟はかつてシーサケット（王宮）舟だった
6	ティントム	28/02/07	0	0	0	ナーン・キアオノーイ、タオ・カムボッ
7	タードゥア	01/03/07	1	0	0	
8	タームワン	01/03/07	1	0	1	練習用舟は伝統舟
9	ターナーレーン	13/03/07	1	0	0	
10	ノーンヘオ	13/03/07	1	1	0	スポーツ舟はかつてホーパケオ（王宮）の舟だった
11	シーターン・タイ	14/03/07	2	1	1	伝統舟のうち一艘は130年以上前のもの
12	ナーハイ	14/03/07	0	0	0	ナーン・キアオカム
13	コークサイ	15/03/07	2	0	1	
14	サイフォン・ヌア	15/03/07	1	1	1	練習用舟は伝統舟
15	ティンピア	20/03/07	1	0	1	
16	ターケーク	20/03/07	1	0	1	練習用の舟は伝統舟
17	ホーム・タイ	22/03/07	1	1	1	
18	チェムパーン	22/03/07	1	1	0	伝統舟はかつてホーパケオ（王宮）の舟だった
		合計	15	9	8	32

2. 舟名：ナーン・カムスワン

3. 舟名：ナーン・バンオーン

4. 舟名：ナーン・カムパーン　　ナーン・ゲートスリン　　ナーン・イールートナーワー

5. 舟名：（伝統舟）ナーン・シーサゲートナーワー（左）
（スポーツ舟）ナーン・ニュッタジャックナーワー（右）

7. 舟名：不明

8. 舟名：（スポーツ舟）ナーン・ラッタナミーサイ（左）
（伝統舟）ナーン・ケオカムライ（右）

9. 舟名：ナーン・ハンカム

10.　舟名：ナーン・バーンノーンヘオ

11. 舟名：(伝統舟）ナーン・カムルアン

（スポーツ舟１）ナーン・テープ・ボートーン

（スポーツ舟 2）ナーン・チャオ・メー・ブンカム

13.　舟名：ナーン・ルワンパナーク

14. 舟名；(伝統舟）ナーン・カム・ヨーン

（伝統舟）　ナーン・ラーオカム　　（スポーツ舟）ナーン・ホントーン

15. 舟名：ナーン・ルワンパナーク

16. 舟名：ナーン・テープサーイロム、警察舟（フア・PKS）

17. 舟名：ナーン・カム・ヨーン

舟名：（スポーツ舟）ターオ・クンアート

18. 舟名：チャオメー・ナーン・ポンパカーシット

かつてはホーパケオ（王宮）の舟

ヴィエンチャン市サイタニー郡

村 no	村　名	調査日	フア・スード（スポーツ舟）	伝統舟	練習用舟	注記
19	ポーンホーン	15/05/07	0	1	1	
20	ハート・キアン	16/05/07	0	1	1	
21	ナークン	18/05/07	0	1	0	
22	ポーンコー	18/05/07	0	1	1	スポーツ舟１艘
		合計	0	4	3	7 ＋ スポーツ舟１

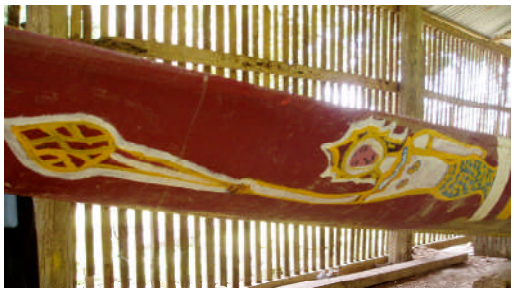
19 舟名：ナーン・テープ・ホントーン

舟名：ナーン・ワーンイェン（練習用）

20. 舟名：ナーワー・サイサナ

舟名：ハート・キアン村（練習用）

21. 舟名：ナーン・カム・ヨーン



22. 舟名：ナーン・カムパーン・ラオトーン

名前なし（練習用：現在は使用不能）

スポーツ舟　名前なし

ヴィエンチャン市パーク・グム郡

村 no	村　名	調査日	フア・スード（スポーツ舟）	伝統舟	練習用舟	注記
23	パーク・グム	25/05/07	4	0	0	スポーツ舟／小さい舟

2002 年までは伝統舟を持っていた。舟名はパナナークパーク・グム

2003 年までは伝統舟を持っていた。舟名はナーン・ラーオカム

23. 舟名：ナーン・セーンナパー

舟名：チャオ・メー・カヌントーン

舟名：ナーン・セーンドン

舟名：テープ・ムンクンサイ

シーサッタナーク郡

村 no	村　名	調査日	フア・スード（スポーツ舟）	伝統舟	練習用舟	注記
24	チョムチェーン	20/06/07	1 昨年舟を スードに改造	1	1 小型の舟	- 伝統舟は古いので使用できない。 - スポーツ舟 1 艘
25	パンマン	21/06/07	0	1	0	（スポーツ舟は）38 年目のもの。
26	タートカーオ	21/06/07	0	0	0	かつては小さい舟の競漕祭があった。
		合計	1	2	1	4＋スポーツ舟 1 艘

24. 舟名：ナーン・ニョートパーンカム

スポーツ舟（名前はなし）

25. 舟名：ナーン・ブアクアカムピウ

シーコッタボン郡

村 no	村　名	調査日	フア・スード（スポーツ舟）	伝統舟	練習用舟	注記
27	シーカイ	27/06/07	0	2	0	
28	カオリャオ	29/06/07	4	0	0	かつては小さい舟の競漕祭があった。
29	ウップムン	29/06/07	0	1	2	
		合計	4	3	2	9

27. 舟名：ナーン・ホン・メー・ニャー（手前）
　舟名：ナーン・ラム・トーン（ホン・メー・ニャー2）（奥）

29.　舟名：ナーク・ノーイ

ヴィエンチャン市サイセター郡

村 no	村　名	調査日	フア・スード（スポーツ舟）	伝統舟	練習用舟	注記
30	タートルアン・カーン	07/08/07	1	1	1	

舟名：ナーン・ノイ・インティーリット

舟名：パンラーン・ナーワー

この舟は以前、伝統舟だった

舟名：タオ・ルワン・パサイ

2 年前に改造してフア・スード（スポーツ舟）へ

スポーツ舟　名前なし

ヴィエンチャン県トゥラコム郡

村 no	村　名	調査日	スード舟（スポーツ舟）	伝統舟	練習用舟	注記
V1	クーン・カーン	29/10/07	0	2	0	
V2	クーン・ヌア	29/10/07	2	0	1	
V3	クーン・タイ	29/10/07	0	1	0	
V4	ハートサイ	29/10/07	0	1	1	
V5	ブンパオ	30/10/07	0	2	0	
V6	リンサン	30/10/07	0	1	1	
V7	チェーン	30/10/07	0	1	0	
		合計	2	8	3	

V1　舟名：チャオ・メー・カーンムアン

V2.　舟名：テープ・ホンカム

V3.　舟名：テープ・プラクットナーワー

V4.　舟名：ナーン・ケオファーヤート

V5. 南　舟名：ナーン・ケーオファーヤート

V5.北　舟名：ルワンプーカムデーン

V6. 舟名：ナーン・ケオ・ホントーン

V7.　舟名：ナーン・ウォンウェーン

【巻末資料　表３－１：1941年～1974年までのワット・チャン競漕祭参加村】

地区	調査村番号	村名／テーム名	1941	1942	1943	1944	1953	1960	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974
シーサッタナーク	24	チョムチェーン Chomcheang	●1	●2	●1	●1		●4	○2	●		●	●×3、○▲	▲2	○4	●×2	●	●	●
シーサッタナーク		スエイ・モン Suei Mon					●												
シーサッタナーク		シーサッタナーク Sisatanak										●					●		
シーサッタナーク	25	パンマン Phanman														●4	●3	●	●
シーサッタナーク		サイサターン Saisathan																●	
シーサッタナーク		ピア寺 Phia Wat	●	●															
シーサッタナーク		シームアン Simuang									○2								
シーコッタボン	27	シーカイ Sikhai		●				●3		●	○1	●メア、タイ	●×3（メア、タイ＋区別なし）	●1（シーカイ兵士のイーホン舟）	●1○3	●×3？、●3（イーホン・カーン・サーン）	●×2、●（イーホン）4	●×3（ムアンワー、メーニャー、イーホン・タハーン・サーン）	●1メーニャー4イーホン・タハーン・サーン5ムアンワー
サイフォン	11	シーターン・タイ Sithan tai	●2	●1					○3	●		●	●（メア・タイ区別なし）▲			●	○2	●×2	●×2○5
サイフォン		シーターン・ヌア Sithan neua	●4	●	●2	●3				●4	●1	●		●2○3	●3	●×2	●×2	●	●●6
サイフォン		ホーム・ヌア Hom neua	●3	●		●4		●6		●		●	●○女性はメア・タイの区別なし			●	●	●	●
サイフォン	17	ホーム・タイ Hom tai		●				●5		●		●	▲			×		●	●
サイフォン	5	シェンクアン Xieng kuan		●															
サイフォン		サイフォーン Xayfong				●2				●		●	○▲			×	●	●	
サイフォン	14	サイフォーン・ヌア Xayfong neua ／女性はinternational team																	
サイフォン		ターナー Thana						●特別賞		●2		●	●					●	
サイフォン		ボーオー Bo O					●		●1、フアガーム2	●						●	●		
サイフォン	16	ターケーク Thakhek							○1、●2、フアガーム3	●3		●×2	○	○1（水軍）			●		●○1
サイフォン		ケーン・ニャン Keng Grang						●1											
サイフォン	15	ティンピア Thinpia								●									
サイフォン	8	ティントム Thintom											○▲		○2タイ	●	●		●7○3
サイフォン	13	コークサイ Khukkay											▲	○2	○5	●	●		
サイフォン	4	ターパ Thapha													●4	●	●○1	●×2	●
サイフォン	12	ナーハイ Nahai														●	●		●○2
サイフォン	7	タードゥア Thadeua														●		●	●
サイフォン	10	ノーンヘオ Nonghieau														●	●×2	●	●○4
サイフォン	2	クアイテーン Khuaydeng														●			
サイフォン		ナーローン Nalong															●		
サイフォン	3	ティンテーン Thinthen																	●
ヴィエンチャン県	V1	バーン・クーン／トゥラコム Ban keun thulakhom		●															
タイ・ノーンカーイ県		ターボー Thabo								●1		●	●			×	●		
タイ・ノーンカーイ県		シーチェンマイ Sisiengmai							●			●	●			●×2		●	
タイ・ノーンカーイ県		コーン・ナーン Keingnang							●3	●		●	▲			×			
タイ・ノーンカーイ県		ナムモーン・ヌア Nammong neua								●		●	▲			●ヌア、タイの区別なし		●	
タイ・ノーンカーイ県		ナムモーン・タイ Nammong tai								●		●	●						
タイ・ノーンカーイ県		フアサーイ・ムアン・ミー Heuasai Muang Mii								●		●	●			×			
タイ・ノーンカーイ県		パニー・ヴィエン・クック Phakho Vieng Khuk										●	▲			●×3	●×3	●×3	●5、●×2
タイ・ノーンカーイ県		ノーンカーイ Nongkhai												●▲1					
外国人混合		ラオ・イギリス										●							
外国人混合		ラオ・アメリカ										●							●×2
外国人混合		ラオ・オーストラリア Samakhomlao Australia										●				●			
		カンボジア大使館																●	
		日本大使館																	●
		ラオス水軍 Kongthap Lao											●						
		国防省 Kasuwang Pongkanthet ／Pongkansat													○1	●			
		ホー・フラケオ Ho Pakeo													●2	●2	●1	●	●3
		イーホンケオバー（王室の舟）														●1	●2	●	●2
		シーサケット・ナーワー Sisaketnawaa														●	●	●	●
		公務員 Khalasakaan															●		
		国軍 Thahan Khalasakaan ／ 国民軍 Kongthab pasasonlao															●		
		水道局 Nampapaa															●	●	
									フアガーム1位 Botha Group										
不明		チョムトーン Chomthong									●2								
		サーヤオ Sayiao											▲			×			
		パニー Phakho											▲			●×			
		ノーン・ナークダー Nongthieweda											▲			●			●
		クワン・ワン Kuanwan											●					●	
		ポーン・サイ Phonsai														●	●		
		サハブーニン Sahaphunin														●			
		ムアン・ミー・ノーイ Muangminoi														●		●ニャイ	
		チョムマニー Chommani														●	●		
		ルーク・ナーウィー Luknawi														●			
		ヴェトナム・タイ Vietnam tai														●			
		ワン・ナー・トーン Wannathong														●			
		ドン・ナー・トーン寺 Wat Dongwathong															●		
		ターマーク・プアン Thamakpuang																	●
		参加した舟の数	不明	9	11	11		20	22	16	21	男性24（タイ7、外国3、ラオス14）、女性12	全体数は不明 小さい舟：12 長い舟： 男性15 女性5	28（女性船以外の内訳不明）	男性の舟：30（ラオス23、タイ15）	39（男女の区別不明）	男性32 女性10	48（予告時点では歴史上参加数が最多に）	32
													ヴォンサワン夫妻観戦＆小さい舟のカテゴリーが追加 ティーサーンナムノーン有		皇太子の舟参戦（ผู้ติดตามพระราชวังรำ）を創るとの予告 漕ぎ手は王を警護する軍人（กองทหารรักษาพระองค์）予定		皇太子＋ブン・ウム ティーサーンナムノーン有？	カンボジアの舟参加 鉄道祭の結果を掲載した紙面を見つけれず、予告時点での参加状況（10：10）	

●男性長舟（フア・パペニー）、○女性長舟、▲小さい舟（フア・カープ）、△青年の舟、ティーサーンナムノーン■男性、□女性、●男性スポーツ舟（フア・スード）、（●：Viromanyさん情報、

【巻末資料　表３－２：1975年～1985年までのワット・チャン競漕祭参加村】

地区	調査村番号	村名／チーム名	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985
シーサッタナーク	24	チョムチェーン Chomcheang	■1□1		●	●(県公共事業)		●○4	△1	▲5	●▲小(青年)	
シーサッタナーク	25	パンマン Phanman		○3	●○	●○4		●		●2	▲小(青年)×2	
シーサッタナーク		サイサターン Saisathan			●○	●○		●		▲3	▲小(青年)	
シーサッタナーク		ピア寺 Phia Wat								▲4	▲大	▲
シーサッタナーク	26	タートカオ That khao							▲1、3	▲1	▲大▲小(青年)	
シーサッタナーク		ブンカニョン Bungkhanyong								▲2、5	▲大▲小(青年)	
シーコッタボン	27	シーカイ Sikhai		●1(イーホン・カーン・サーン:国防省の青年)	●1(イーホン・カーン・サーン)、●イーホン・メーニャー	●1(イーホン・メーニャー:農業灌漑省)	●1(イーホン・メーニャー:農業灌漑省)	●1●4	●2(建設省)	●1イーホン・メーニャー(建設省)	●2	●1
サイフォン	11	シーターン・タイ Sithan tai			●○4	●2○			○3		●○3	
サイフォン		シーターン・ヌア Sithan neua	■2□3		●	●						
サイフォン		ホーム・ヌア Hom neua			●	●ヌア、タイの区別なし						
サイフォン	17	ホーム・タイ Hom tai			●							
サイフォン	5	シェンクアン Xieng kuan	○4		●○							
サイフォン		サイフォーン Xayfong		●2		●○		○2		○2		○2
サイフォン	14	サイフォーン・ヌア Xayfong neua /女性はinternational team			●○2						●	
サイフォン		ターナー Thana			●○					▲5		
サイフォン		ボーオー Bo O	□2			●○煉瓦工場			▲2			
サイフォン	16	ターケーク Thakhek	○1:内務省	●3○1:内務省	●2(内務省)、●○1	●4○1内務省	○3	●3○3	●3		○(内務省)	○3(内務省)
サイフォン	6	ティントム Thintom		団結賞1	●	●○3	○2	●○6	○2	○3	●3	●3▲
サイフォン	4	ターパ Thapha	○2	○2	●3○		●3○1	●○1	○1		●○1▲大	○1(ヴィエンチャン女性同盟)
サイフォン	12	ナーハイ Nahai			●○							
サイフォン	7	タードゥア Thadeua			●4	●3	●4	●	●1		●	●4
サイフォン	10	ノーンヘオ Nongheau			●○							
サイフォン	2	クアイデーン Khuwaydeng									●	
サイフォン		ナーローン Nalong									●	
サイフォン	3	ティンテーン Thinthen	○3		●○3						●○2	
		カンボジア大使館			●ワット・チャンがカンボジアの舟を使用		●カンボジアの舟					
		国防省 Kasuwang Pongkanthet / Pongkansat									●	
		ホー・プラケオ Ho Pakeo			●	●○チャンタブリー郡	●					
		イーホンケオバー(王室の舟)	●1	団結賞2 シーコッタボン郡の青年	●(シーカイ)	●(公共事業省)						
		シーサケット・ナーワー Sisaketnawaa			●○	●(ワット・チャン)	○4					
		国軍 Thahan Khalasakaan / 国民軍 Kongthab pasasonlao									●	
		内務省	●2、3							●3○1	●	
		ヴィエンチャン公共事業省 Nyota kamphengnakhon	●4		○							
		イーホントーン Ihongthong (Nongkhamseen)				●○						
		ラオ・トーン Laothong				●	●2	●				
		イーホン・コーン・タップ Ihongkongthap				●(革命軍)		●2				
		運輸協会 Sahakonkhonsong				●3○2						
		教育省 Kasuwan Suksa				●					▲小(青年)	
		ノーン・クーン Nongkeun				●(県公共事業)						
		インタラナーリー Inthalanalii						●○5(チャンタブリー郡)				
		労働省 Kammakon						●				
		農業省						●				
		体育学校 Honghiankanyasuksa							△2			
		教師養成大学ドンドーク Mahawithanyalai sangkhudongdok							△3			
		ヴィエンチャン青年同盟 Saonum kamphengnakhon vientiane								●4	●1	
		橋道建設会社ヴィエンチャン Bolisat kosangkhuathangkampheng vientiane									●	●2
不明		ノーン・テーワダー Nongthewada				●						
		パサイ Phasai								▲5	▲大▲小(青年)	
		参加した舟の数	男性24 女性8	男性17 女性8	男性21 女性11 (女性は実質11だったが、予舎と結果を合わせると13。男性も実質21、予舎では23。)	男性22 女性10	男性17 女性6	男性15 女性6	小さい舟:10 青年の舟:7 長い舟:14 (男女含わせて)	男性11 女性11 (長い舟3、小さい舟8)	小さい舟: 大11 小23 長い舟: 男性15 女性4	小さい舟(19人以下):32 長い舟: 男性12 女性6
						ラオスータイ友好競漕祭の開催			四部門に競漕のカテゴリーが分けれる		2日間(1日目:小さい舟、2日目:長い舟)	

●男性長舟(フア・パペニー)、○女性長舟、▲小さい舟(フア・カープ)、△青年の舟、ティーサーンナムノーン■男性、□女性、●男性スポーツ舟(フア・スード)、(●)Veomanyさん情報、数字は順位

【巻末資料　表３－３：1986年～1995年までのワット・チャン競漕祭参加村】

村名／チーム名	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995
チョムチェーン Chomcheang		●○			●		●		●	
バンマン Phanman		●			●		●		●	●
タートカオ That khao				▲4						
シーカイ Sikhai	●1（イーホン・メーニャー）	●2	●1（イーホン・メーニャー）	●1（イーホン・メーニャー）	●（イーホン・メーニャー）	●1（イーホン・メーニャー）	●4（イーホン・メーニャー）		●(ホンメーニャー)	
ダーンカム Dankham									●	
タートルアン Thatluang								●4		
ハートキアン Hatkiang									●	
ボーグアコークサアート Bokeuakhoksaaat									●	●
ハートキアオ Hatkiao										●
ポーンコー Phonkho										●
シーターン・タイ Sithan tai		●○（ノーンカムセーン）			●		●	○4（カルスバーグ）	●○	●
シーターン・ヌア Sithan neua		●								
シェンクアン Xieng kuan			○3			○2	●○	○3（タイガー）	●○	●
サイフォーン Xayfong	○2	●							●×3.2 ○	
サイフォーン・ヌア Xayfong neua ／女性はinternational team									●	●
ターケーク Thakhek	○3	●○2				●3	●3（テープバヴォン）	●1（テープバヴォン）	●1（テープバヴォン）	●
ケーン・ニャン Keng Gnang										
ティンピア Thinpia										
ティントム Thintom		●4○					○		●○	●
コークサイ Khokxay									●	●
ターパ Thapha	○1	●○1（女性同盟）	○1（女性同盟）	○2		○3	●○		●×2○	●(ビアラオ)
タードゥア Thadeua	●2	●3	●3	●1（同着）	●		●	■1		
ノーンヘオ Nongheau										●
クアイデーン Khuwaydeng		●○3			●		●2（通信省）●、○	●2○1	●×2○	
ナーローン Nalong		●○				●2（ネオラオサンサート）	●	■2	●	
ティンテーン Thinthen							●○	○2	●	●
タームワン Thamuwang							●1（国防省2）	●3（国防省）	●	●1（サーンターナーレーン）
ターナーレーン Thanaleng									●	●
シムマノー Simmano									●	
外国人チーム Tanpathet										●
国防省 Kasuwang Pongkanthet ／ Pongkansat		●					●			●
内務省		●○					●×2			●
建設省 Kasuwan kosang	●3(運輸、通信、土木省)	●1	●2	●2（同着）○1	●	○1	●（通信省）		●（シーコッタボン）	●(通信省)
ネオラオサンサート・ヴィエンチャン				●2（同着）○3						
民族公園 Suwan Wathanatham										●
マルボロ Malboro										●
タイガー Tiger										●×2
オックシー Oxsi										●
ルアンパバサイ Luangphasai										●
参加した舟の数	小さい舟：30、長い舟：10 全体の中で女性6	長い舟：男性17 女性8	小さい舟（16人～18人）：14 長い舟 男性18 女性6	小さい舟（16人～20人）：25 長い舟：男性15 女性5	小さい舟：19 長い舟：女性13 男性はノーンカーイとの試合	小さい舟：16 長い舟：男性12？ 女性4	長い舟：男性17 女性5	小さい舟：（18人～22人）16、長い舟（男性19、女性5）	小さい舟：スポーツ舟20 長い舟 男性25 女性10	小さい舟：スポーツ舟17 長い舟 男性30 女性13
								ティーサーンナムノーン有		

○女性長舟、▲小さい舟（フア・カープ）、△青年の舟、ティーサーンナムノーン■男性、□女性、● 男性スポーツ舟（フア・スード）、（●）Veomanyさん情報、数字は順位

【巻末資料　表３−４：1996年〜2008年までのワット・チャン競漕祭参加村】

地区	設置村番号	村名／チーム名	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
シーサッタナーク	24	チョムチェーン Chomcheang					●	●			(●)	(●)	●	●	
シーサッタナーク		シーサッタナーク Sisatanak	○												
シーサッタナーク	25	パンマン Phanman			●	●	●	●		●					
シーサッタナーク		サイサターン Saisathan		▲2											
シーコッタボン	27	シーカイ Sikhai		(Adeng 1)●	●	●	●			●	●		(MRC)●●	(MRC)● (Nissan)●	(MRC)●(WIG) ●
シーコッタボン	29	ウップムン Oupmung											●4	●3	
サイセター	30	タートルアン Thatluang		Noy Inthilit○ ●2	Thongsi (Malbro1)○●	B.That Luang ●2	Noy Inthilit○ 2●2	Noy Inthilit○ 2●1	Noy Inthilit● 3	Noy Inthilit● 3	Noy Inthilit● 1	Noy Inthilit● 1	Noy Inthilit●2 ●(Phanlan)	Noy Inthilit● ●	Noy Inthilit●3
サイタニー	20	ハートキアン Hatkiang				○●						○3	○●1	○2●1	○2●1
サイタニー		ボーグアコークサアート Bokeuakhoksaaat		▲3											
サイタニー	22	ポーンコー Phonkho		●3○3	●○(Lao American Co.) 1	●(Lao American)○3 (Edwood)		○					●○3	●○	●○
サイタニー		サイタニー Saithanii	○4												
サイタニー	21	ナークン Nakung		●						○●					
サイタニー	19	ポーンホーン Phonhong			○3●	○●			○2	○2●1	○2●2	○2●3	○1●3	○3●2	○3●2
サイフォン	11	シーターン・タイ Sithan tai		●(tiger1)●○ (Mixay restaurant)	(maxell)●	●	●	●○4		●	●	● 2	●	●	●
サイフォン		シーターン・ヌア Sithan neua					●								
サイフォン	17	ホーム・タイ Hom tai								●	(●)	(●)	●	●4	●
サイフォン	5	シェンクアン Xieng kuan		●○	●○2	●○		○3●4	○3		○3	(●)	●○4	●○4	●
サイフォン		サイフォーン Xayfong				●タイ									
サイフォン	14	サイフォーン・ヌア Xayfong neua ／女性はinternational team		○●	○●	○●	○●	○●	○	●2	○4(●)	○4(●)	○●4	○●	○●
サイフォン	16	ターケーク Thakhek		●	(Adeng 2)●	●	●	●3	●2	(Prime minister office)●3	●		●3	●2	●
サイフォン		ケーン・ニャン Keng Gniang													
サイフォン	15	ティンピア Thinpia			●	●	●	●		(Lao-China Hotel)● ○3	(●)	●4	●	●	●3
サイフォン	13	コークサイ Khokxay		●○							●	●1	●1	●3	●2
サイフォン	4	ターパ Thapha	●1○1、2(ビアラオ)	(Beer lao)○ 1、2●4	(Beer lao)○4 ●4	○1●1	○1●1	○1●1	○1●1	○1●1● (Lamnoy)	○1●1	○1●3	○2●2	○1●1	○1●1
サイフォン	12	ナーハイ Nahai	○	●○	●○										
サイフォン	7	タードゥア Thadeua		●●(Hong leuay)1	●●(Hong leuay)2	●	●	●●(Hong leuay)4		●	(●)				
サイフォン	10	ノーンヘオ Nongheau		●		●	●○4								
サイフォン	2	クアイデーン Khuwaydeng		○	○●	○4●	○3●			○4					○●
サイフォン	3	ティンテーン Thinthen	○							●					
サイフォン	8	タームワン Thamuwang		▲			●3	●2		●4			●		
サイフォン	9	ターナーレーン Thanaleng	○	●×2○	●○	●○	●○	●			(●)	(●)			
サイフォン	18	チェムパーン Cheamphan								●●	●(●)		●		
パーク・グム	23	パーク・グム Pak ngum		●▲	●	●	●								
ヴィエンチャン県		カーン・ムアン/トゥラコム Kangmuang tulakhom		●						(E,T,L)●4	●				
ヴィエンチャン県	V5	ブンパオ Bungphao		●×2	●	●	●ヌア4	●ヌア、タイ ○ヌア	●4	●	●3			●タイ	●
ヴィエンチャン県		ターンピアオ・タイ Tanpiao tai		○●	○●	○2●							○●	○	○●
ヴィエンチャン県		ターンピアオ・ヌア Tanpiao neua		●	●3	●	●			●2	●4		●	●	
ヴィエンチャン県	V6	リンサン Lingsan			●	●4	●	●3			●	●4		●4	●
ヴィエンチャン県		ハートシアオ Hatsiao				●	●								
ボリカムサイ県		ターボック Thabok		▲1	●1	○●	●								
ルアンパバーン県		ナーワーホンカム Nawa Hongkham			●										
		日本大使館		▲Lao Japan											
		外国人チーム Tanpathet	○												
		水道局 Nampapaa		▲											
		ノーン・クーン Nongkeun		●											
		建設省 Kasuwan kosang	○(通信省)												
		マルボロ Malboro	●3	▲											
		オックシー Oxsi		●×2											
		ルアンパサイ Luangphasai		●	Panamanlengt hong●			●2							
		ラオ・エドウッド Lao Edwood	○3	○											
		首相府 Prime Minister's office (Samnakgannanyok|atthamontii)	○●2	●×2○	●					●○、 (B,Nongno)●					
		ルアンパバーン県 Kueng Luangprabang	●4												
		参加した舟の数	小さい舟：13 長い舟： 男性35 女性14	小さい舟：10 長い舟： 男性34 女性16	長い舟： 男性17 女性11	長い舟 男性26 女性10	伝統舟： 男性18 女性6 スポーツ舟： 男性8	伝統舟： 男性14 女性7 スポーツ舟： 男性6	伝統舟： 男性20 女性7	伝統舟： 男性13 女性6 スポーツ舟： 男性10	伝統舟： 男性8 女性4 スポーツ舟： 男性12	伝統舟 男性11 女性4 スポーツ舟： 男性9	伝統舟： 男性10 女性8 スポーツ舟： 男性12	伝統舟： 男性11 女性7 スポーツ舟： 男性9	伝統舟： 男性11 女性8 スポーツ舟： 男性9 (スポーツ局がスポーツ舟で参加)

●男性長舟（フア・パヘニー）、○女性長舟、▲小さい舟（フア・カーブ）、△青年の舟、ティーサーンナムノーン■男性、□女性、●男性スポーツ舟（フア・スード）、(●)Veomanyさん情報、数字は順位

【巻末資料　ルール規定】

【１】 1994年ヴィエンチャン-ノーンカーイ　友好競漕に関する規定

[Vientiane Mai 1994(11 October):1,8]

１．目的

1-1. 平和と友好の心を継続して促進し、隣接するヴィエンチャン市とノーンカーイ県が更に栄えるようにする。

1-2. ヴィエンチャンとノーンカーイ両岸の人びとが経済、スポーツ、美しい文化を交換しあうことを推奨し、更に交流が深まるようにする。

２．規約（省略）

３．ルール

１．両者ともに競漕舟を６艘ずつ出す（男性３艘、女性３艘）

１－１．男性の舟の漕ぎ手は４５－５５人

１－２．女性の舟の漕ぎ手は３５－４５人（男性の漕ぎ手が６人以上にならないこと、男性の漕ぎ手は女性の漕ぎ手と違う色のTシャツを着用すること、男性もしくはおかまが女性の装いをすることは禁じる）

１－３．舟一艘につき、漕ぎ手は１チームとする。１チームにつき、漕ぎ手の交替は３人までで、ハートサイフォン郡ターナーレーンの港で交替すること）

１－４．委員会がこのルールに従って検証したのち、各舟はスタート地点にいくことができる。

２．両者の委員

２－１．舟に関する委員８人（両者４人ずつ）

２－２．スタートに関する委員４人（両者２人ずつ）

２－３．審判委員４人（両者２人ずつ）ビデオ撮影チームはヴィエンチャン

２－４．医療用の舟は２艘　委員会の舟付き

２艘は競漕舟から後ろ５０m以上離れて走らせる。競漕舟を牽引する舟は舟の危険に備えておくこと。

３．競漕距離は１２００mで、２００mおきに６つの浮きを置く。

３－１．スタート地点はハートサイフォン郡ターナーレーンの港

３－２．２００mまでの地点で舟に問題が起きた時は、2回までスタートのやり直しができる。

３－３．ゴール地点は観覧席の正面に設置し、各舟はゴール地点まで漕ぐこと

４．審判と点数

４−１．第一試合：１３時スタート、チームヴィエンチャンは岸側、チームノーンカーイは沖側。

第二試合：１４時３０分スタート、チームヴィエンチャンは沖側、チームノーンカーイは岸側。

４−２．合図：笛の音でスタートする。赤旗は反則、緑旗は問題なし

４−３．浮きを横切ったり、漕ぎ手が強くなるのを助けるための道具を使用したりした場合は反則となる。

４−４．すべての組の舟が静止し、舟のニェームがそろったらスタートできる。スタートする前は、全ての漕ぎ手が櫂を上げておくこと（ナイターイ:艫に乗る人は除く）

４−５．舟のニェームがゴール地点に届いた舟が勝ちとする。舟がひっくり返っても、ニェームがゴール地点に先に届けば勝ちとする。

４−６．勝った舟は２点、同着は１点、負けた舟は０点

４−７．６艘すべての点を足して、点数の多い方が勝ちとなり、銀カップを受取る。

５．歌を歌ったり、民謡を歌ったり、踊ったり、お囃子をしたりする場合は、友好と団結を示すためにおこなうこととし、楽しく美しい雰囲気にするものにすること。お互いをけなしあうようなものは禁止する。

ヴィエンチャン、1994年9月23日

スポーツ競漕委員会　会長インホーム・ピニット(Inhom Phinit)

ヴィエンチャン市スポーツ委員会　会長プートーン・セーンアーコム(Phuthong Sengakhom)

【２】 1995年のフア・カープおよび伝統舟の競漕ルール （ワット・チャン競漕祭）

［Vientiane Mai 1995(4 October):3］

１．フア・カープ男子の漕ぎ手の人数は18人から22人。
フア・ニャオ・パペニー（女性）は漕ぎ手が35人以上、男性の漕ぎ手は6人まで。
フア・ニャオ・パペニー（男性）は漕ぎ手が45人以上。
漕ぎ手は１チームにしか所属できない。

２．フア・カープの競漕距離は８００mから１０００m
フア・パペニーは男女とも１０００mから１２００m
浮きは２００mおきにおく。

３．各チームがわかるようにするため、各舟の漕ぎ手はチームのスポーツ着（ユニフォーム）を着ること。フア・ニャオの選手交代は10人まで。フア・カープは5人まで。

４．朝は９時に競漕をスタート。午後は12時半から。

５．競漕はくじ引きで決まった組、沖か陸側かのコースに沿って行なう。くじ引きは実際の競漕の６時間前に行なう。（初戦は３艘ずつで競漕し、それ以降は２艘ずつ）

６．各舟の練習および修理は競漕の１時間前に終了すること。

７．競漕に参加する各舟は競漕時間に間に合うようにするため、牽引する舟を用意すること。
スタート地点に競漕20分前に来られなかった場合、競漕することはできない。
牽引舟は舟の近くにいること。

８．どちらの舟も舟の動きを鎮めて停止させ、ニェームを揃えるために紐を掴むこと。
ニェームが揃ったら、委員会はスタートの合図が出せる。スタート前、全ての漕ぎ手は櫂を持ち上げ、水面より櫂が上にあるようにする。（艫の人は除外）

９．ピストルもしくは笛によるスタートの合図は、スタート地点から200メートルまでの間に舟に問題が合った場合、もう一度競漕をやり直すために一時的に競漕をやめる。
しかし、2回はない。

10．舟の舳先（ニェーム）が先にゴール地点についた舟が勝ち。もしも、舟がゴール地点でちょうどひっくり返ったとしても、ニェームがゴール地点に先についていれば、その舟が勝利する。すべての漕ぎ手はゴール地点まで舟を漕がなければならない。
トーナメント方式である。

11．委員会が緑の旗をあげた舟は正しく、赤い旗を挙げられた場合はルール違反である。

12．救護用の舟と委員会の舟は後方を走り、競漕舟より50メートル以上離れる。

13．浮きを横切ったり、漕ぎ手を強くして助けるようなものを使ったらルール違反となる。

14．運営委員会に二度レッドカードを出された場合、そのチームは1996年の競漕祭に出場する権利を剥奪される。

15．団結力を大切にするため、漕ぎ手が歌を歌ったり、お囃子をしたり、踊ったりする際にお互いを侮蔑するような内容にはしないこと。 （管轄名はなし）

【３】 1997 年ハートサイフォン区民族文化公園における競漕祭規定書

［ヴィエンチャン市スポーツ局にて複写したもの］

その１：漕ぎ手について

１−１．漕ぎ手はラオス国民であること。

１−２．女性の舟の漕ぎ手は 35 人〜45 人(偽女性は含まない)までとする。この内、男性の漕ぎ手は上限 6 人までとする。

１−３．男性の舟の漕ぎ手は 37 人〜55 人までとする。

１−４．点検作業を円滑にするため、漕ぎ手はチームで同じシャツを着用すること（古いシャツは禁止する)。舟一艘につき漕ぎ手の交代は上限 10 人までとする。漕ぎ手の交代はスタート地点でおこない、責任者である委員に従うこと。

その２：競漕舟について

２−１．各舟は救出舟を一艘用意すること。競漕の際におこる不慮の事故に備え、人員を救出できるよう競漕舟の後ろから救出舟をはしらせること。

２−２．各舟は練習および修理を競漕の 1 時間前に終えておくこと。修理や休憩はスタート地点から 100 メートル離れたところでおこなうこと。

２−３．スタート地点に 10 分前までに来ない舟は、次のレースの参加を認めない。もしくは敗戦とする。(そのままレースを続行させる)

２−４．他地域、他県からの競漕参加希望があれば、参加を認める。

２−５．女性の漕ぎ手と男性の漕ぎ手が各カテゴリーの競漕に参加する際、一艘の舟を共用してもよい。

２−６．競漕舟の舳先と艫には必ずラオス国独自の文化を表象するニェームを使用すること。舳先が競り出るようなものを付足してはならない。

その３：競漕距離について

３−１．競漕距離は女性−男性のカテゴリーともに 1500 メートルとする。

３−２．競漕コースには 3 カ所目印を設ける。目印と目印の間は約 500 メートルとし、仮に最初の目印までの間でいずれかの舟に問題が起きた場合には、レースを中断して再レースをおこなう。しかし、再レースは上限 1 回のみ。途中の目印とゴール用の目印は転覆しないように保護すること（沿岸の舟は岸より離れてはならない)。

３−３.後続の舟は、競漕をおこなう舟の後ろ 100 メートル強はなれて競漕の準備をすること。

その４：競漕日時について

４−１．競漕参加の受付は 1997 年 8 月 19 日〜25 日とする。

参加費は女性の舟で 20,000 キップ、男性の舟で 25,000 キップ。

４−２．競漕コースと競漕相手を決定するためのくじ引きをおこなうため、男性および女性の舟の代表者は 1997 年 8 月 19 日の会議に出席すること。

４−３．1997 年 8 月 31 日の 8:30〜12:00 に女性の舟、12:30〜15:30 に男性の舟の競漕を行う

その５：競漕について

５−１．競漕はチームを絞るためにグループ分けをする。1 回戦は以前と異なりコースを変えて行なう。全体で舟は 13 艘、ɲは 6 艘、ƣは 7 艘。1 回戦では 5 艘が勝ち進み、2 回戦では 4 艘、3 回戦では 2 艘、4 回戦でも 2 艘。

５−２．競漕をおこなう組は舟が動かないようにロープにつかまること。競漕開始の際には舳先のニェームを同じ位置にそろえること。

５−３．競漕開始の合図として、運営委員が緑旗をあげる。運営委員が赤旗をあげた際はスタートしてはならない。

５−４．運営委員が緑の旗をあげた時は問題ないが、赤い旗をあげた時は反則を意味する。

５−５．途中の目印を横切ったまま次のセクションへ進んだ舟は負けとする。漕ぎ手を補強するようなものを使用した場合は負けとする。レースの途中で勝負がついたと見極めた場合にも必ずゴール地点までいき、スポーツ精神をみせること。

その６：勝敗について

６−１．競漕舟の舳先のニェームがゴール地点に先に届いた方が勝ちとする（舳先のニェームに備え付けられた布旗やカントゥン<竹のマークベンのようなもの>がゴール地点に届いても勝ちとは見なさない)。勝敗の行方や僅差の勝負を再生するためにテレビカメラを一台使用する。ゴール地点において何か問題があった場合、問題を解決後に結果を報告する。審判員が報告した勝敗の結果のみが有効性をもつものとする。

６−２．仮にゴール近くまできて舟が転覆した場合、舳先のニェームがゴール地点に先に届いていたら、その舟の勝ちとする。

その７：統制について

７−１．審判に対して納得がいかないチームがあった場合、苦情を受けつける。審判がくだったレース後 20 分以内に各チームの代表者 1 名が競漕祭運営委員会に対して苦情内容をあげること。

７−２．各舟の指導者および漕ぎ手が運営委員会から黄色カードの警告を一度受けたにも関わらず、規則に違反し続けた場合には、赤カードを受けると同時に本年度の競漕祭における出場を即座に停止する。競漕を最後まで終えられなかった舟は賞品（金）を受ける権利を有さない。

７−３．競漕舟のオーナーで審判員にならなかった人および競漕に直接関わる全ての人は泥酔してはならない。万が一、委員がルールを犯すようなことをした場合、本年と来年の委員からは除籍する。競漕する組において問題があれば、審判員や舟に関する委員と話し合いをし、勝敗を決定すること。

その８：マナーについて

８−１．漕ぎ手は国の連帯、伝統、良き文化を大切にするため歌、ラム、お囃子、踊りをする際には競漕相手を中傷してはならない。賭け事、泥酔、暴挙、口論は禁止する。

８−２.各チームの行動は過度になりすぎない程度に強靭さや楽しさを表現し､安全に行う事。

サイン　ハートサイフォン区大衆スポーツ運営委員会　プンミー・シーニョハー

【４】　ワット・チャンにおいて開催される舟競漕の手順書

［ヴィエンチャン市スポーツ局にて複写したもの］

2001 年 10 月 3 日

I. 申し込み用紙提出日などについて

2001 年 9 月 20 日から 9 月 28 日までに申し込み用紙を提出のこと。

2001 年 9 月 28 日朝 9 時から委員会会議

1. 賞金：3 年連続して優勝した場合は、そのカップを継続して保持してよい

伝統舟とフア・スード（男子―女子）

1 位　銀カップ（1.500.000 キップ分）　+ 現金 600.000 キップ

2 位　銀カップ（1.200.000 キップ分）　+ 現金 400.000 キップ

3 位　銀カップ（800.000 キップ分）　+ 現金 300.000 キップ

4 位　現金 200.000 キップ

参加賞　現金 100.000 キップ

一斉スタートのレース　1 位　銀カップ

2. レース参加料金　100.000 キップ

3. 舟の種類

伝統舟　女子：40－50 人乗り（最大 6 名の男性が乗ることが許される）

伝統舟　男子：45－55 人乗り

フア・スード：45－55 人乗り

4. 基準

伝統舟であること（男子―女子）

舟の舳先、艫にニェーム（角形状のもの）があること

舟の後方に立ち漕ぎする人が 2 人いること

船首と船尾の長さが 3.5 メートルよりも短いこと

舳先と艫のニェームの直径が 35 センチであること

フア・スードの基準

伝統舟を改修してフア・スードを製作してもよい

後ろの漕ぎ手は立っては漕いではならない

5. 開催場所と日時

2001 年 10 月 3 日　午前 8:00 から午後 16:30

（女子　朝から夕方　レース 1ー2、男子　朝から夕方）

一斉スタートの時間　午後 16:45 から 17:00

6. レース

レースの距離は 1 キロで、2 隻ずつ競漕する。

200 メートルおきに旗（ラオ語で munglo）を配置する。

ゴール地点には国旗を配置する。

各舟は村の名前もしくはサポーターの名前をつけること

7. 漕手の参加資格

健康で屈強の人

長時間泳ぐことができる人

ラオス籍の人もしくは外国籍でもラオスで働いている人

男子各チーム、登録できる人数は最大で 65 名。実際にレースに参加できるのは 55 名。

女子各チーム、登録できる人数は最大で 60 名。実際にレースに参加できるのは 50 名。

各レースにおいて勝利した舟は、確認のため委員会設置場所に来ること。その後スタート地点に戻る。

各人は 1 チームにしか漕手として所属できない。

歌を歌うときは、風紀を乱す歌ではなく、礼儀正しい歌を歌うこと。

レース参加時にはＴシャツを着用すること。Ｔシャツ着用なしには参加できない。

8. レース回数

出場チームが 30 チーム以上ある場合は、各チームは 1 回レースを行う。

出場チームが 30 チーム以下の場合は、各チームは 2 回レースを行う。

9. 各チームはモーターの付いた舟を持参すること。

アナウンスが流れたら、10 分後にはスタート地点に来ていること。

レース中、事故発生時以外においては舟を漕ぎ続けること。

10. 進行

競漕祭委員会がスタート地点に舟を派遣する。

レースのコース取りはくじによって取り決める。

委員が銃を鳴らしたらスタートする。

仮にどちらかの舟が早くスタートし、ファウルの時は 2ー3 回銃を鳴らす。

同じチームがファウルを2回した場合、敗退となる。(委員会がアナウンスする)

11. 勝敗の決定基準

舟の舳先がゴール地点に先に到着した方を勝ちとする。

同時にゴールした場合は、もう一度レースを行う。

12. 不満のある場合

レース結果などに不満がある場合は、レース終了後10分経過してから、チーム長のみが委員会にもちかけることができる。その際、50.000キップを支払うこと。

勝敗の審査結果、判定が変わらない場合は委員会が50.000キップを受け取るが、判定がひっくり返った場合はお金をチームに返金する。

13. レース基準に違反した場合

1回目は警告する。

2回目は出場者リストからチームを外す。

3回目は翌年のレース出場権を剥奪する。

全てのレース終了後、各舟はスタート地点に集まり、一斉スタートを行う。もし、参加しないチームがいた場合、そのチームは参加賞金を剥奪され、翌年のレースの出場資格も与えない。

14. その他

委員会は事故が起きた場合の責任は負わないものとする。

委員会は救助用の舟を1隻保持している。

(1998年版の相異点)

レース距離:女子1000メートル　男子1200メートル

(1997年版の相異点)

フア・カープの存在:18ー22人乗り(補欠要員5人まで)

フア・カープの距離:女子800メートル　男子1000メートル

伝統舟の距離:女子1000メートル　男子1200メートル

1隻の舟は、1チームに所属することしかできない。

【５】 ワット・チャンにおいて開催される舟競漕の手順書

［ヴィエンチャン市スポーツ局にて複写したもの］

2003 年 10 月 11 日

I. 申し込み用紙提出日などについて

2003 年 10 月 1 日から 10 月 7 日までに申し込み用紙を提出のこと。

2003 年 10 月 8 日朝 9 時から委員会会議

1. 賞金：3 年連続して優勝した場合は、そのカップを継続して保持してよい

伝統舟とフア・スード（男子―女子）

1 位　銀カップ 1 キロと現金 3.000.000 キップ

2 位　銀カップ 1 キロと現金 1.500.000 キップ

3 位　現金 2.500.000 キップ

4 位　現金 1.500.000 キップ

参加賞　　現金 1.000.000 キップ

2. レース参加料金　100.000 キップ

3. 舟の種類

伝統舟　女子：40－50 人乗り（最大 6 名の男性が乗ることが許される）

伝統舟　男子：45－55 人乗り

4. 基準

伝統舟であること（男子―女子）

舟の舳先、艫にニェーム（角形状のもの）があること

舟の後方に立ち漕ぎする人が 2 人いること

船首と船尾の長さが 3.5 メートルよりも短いこと

舳先と艫のニェームの直径が 35 センチであること

フア・スード（改良）男子の基準

伝統舟を改修してフア・スードを作成してもよい

後ろの漕ぎ手は立っては漕いではならない

5. 開催場所と日時

2003 年 10 月 11 日　午前 8:00 から午後 16:00

女性伝統舟

男子フア・スード

男子伝統舟

6. レース

レースの距離は 1 キロで、2 隻ずつ競漕する。

200 メートルおきに旗（ラオ語で munglo）を配置する。

ゴール地点には国旗を配置する。

各舟は村の名前もしくはサポーターの名前をつけること

7. 漕手の参加資格

健康で屈強の人

長時間泳ぐことができる人

ラオス籍の人もしくは外国籍でもラオスで働いている人

男子各チーム、登録できる人数は最大で 65 名。実際にレースに参加できるのは 55 名。

女子各チーム、登録できる人数は最大で 60 名。実際にレースに参加できるのは 50 名。

各人は 1 チームにしか漕手として所属できない。

歌を歌うときは、風紀を乱す歌ではなく、礼儀正しい歌を歌うこと。

レース参加時にはＴシャツを着用すること。Ｔシャツ着用なしには参加できない。

8. レース回数

各チームは、レーンを交換して 2 回レースを行うことができる。

2 回敗退した場合は、チームは参加終了。1 勝 1 敗の場合は、もう 1 回レースあり。

9. 各チームはモーターをつけた舟を持参すること。

アナウンスが流れたら、10 分後にはスタート地点に来ていること。

レース中、事故発生時以外においては舟を漕ぎ続けること。

10. 進行

競漕祭委員会がスタート地点に舟を派遣する。

レースのコース取りはくじによって取り決める。

委員が銃を鳴らしたらスタートする。

仮にどちらかの舟が早くスタートし、ファウルの時は 2ー3 回銃を鳴らす。

同じチームがファウルを 2 回した場合、敗退となる。（委員会がアナウンスする）

11. 勝敗の決定基準

舟の舳先がゴール地点に先に到着した方を勝ちとする。

同時にゴールした場合は、もう一度レースを行う。

12. 不満のある場合

レース結果などに不満がある場合は、レース終了後 10 分経過してから、チーム長のみが委員会にもちかけることができる。その際、50.000 キップを支払うこと。

勝敗の審査結果、判定が変わらない場合は委員会が 50.000 キップを受け取るが、判定がひっくり返った場合はお金をチームに返金する。

13. レース基準に違反した場合

1 回目は警告する。

2 回目は出場者リストからチームを外す。

3 回目は翌年のレース出場権を剥奪する。

全てのレース終了後、各舟はスタート地点に集まり、一斉スタートを行う。もし、参加しないチームがいた場合、そのチームは参加賞金を剥奪され、翌年のレースの出場資格も与えない。

14. その他

委員会は事故が起きた場合の責任は負わないものとする。

委員会は救助用の舟を 1 隻保持している。

【６】　2006 年ヴィエンチャン市チャンタブリー郡ワット・チャンの競漕祭における
競漕規定書　　［ヴィエンチャン市スポーツ局にて複写したもの］

2006 年 10 月 8 日

※2006 年の男子-女子-フア・スード男子の競漕祭が良い結果をもたらすように、競漕祭実行委員会は競漕祭に関する会議を 2006 年 10 月 3 日に開催し、競漕についてのルール規準書を以下のごとく決定した次第である。

I. 申し込みについて

2006 年 9 月 25 日から 10 月 3 日までに申し込み用紙を提出のこと。
2006 年 10 月 3 日朝 9 時よりヴィエンチャン市役所の会議室において、競漕に関するくじ引きをおこなう。そこで競漕の規定や問題などについて報告をおこなう。

その１：賞金賞品の種類について：男子伝統舟には銀カップ 3 キロがトヨタ自動車株式会社より贈られる。

◇伝統舟およびフア・スード（男子―女子）
1 位　銀カップ 1 キロ　+ 現金 600.000 キップ
2 位　銀カップ 1 キロ　+ 現金 400.000 キップ
3 位　現金 400.000 キップ
4 位　現金 300.000 キップ
◇ 参加賞　　現金 200.000 キップ

その２：参加料金　一艘につき 150.000 キップ（競漕参加の応募用紙を一緒に提出）

その３：競漕の種類

女子：40－50 人（男性の漕ぎ手は上限 6 名まで）
男子：45－55 人

その４：開催場所と日時

2006 年 10 月 8 日　8:00am から 16:00pm にかけて競漕を実施する。
競漕スケジュールに則って競漕を執り行う。

その５：競漕場所

競漕距離は約 1000 メートル
競漕は｀2 コース（岸、沖）に分け、スタートからゴールまでの間 200 メートルおきに目印の旗を配置する。目印は水面から保護される。
ゴール地点には国旗を配置する。
各舟は村の名前をつけること
各舟は舟が転覆したり、問題をおこしたりした時のために救護舟を用意すること。

その６：漕ぎ手の参加資格

健康で屈強の人

長時間泳ぐことができる人

ラオス籍の人もしくは外国籍でもラオスで働いている人（パスポートを持っていること）

男子各チーム、登録できる人数は最大で 65 名。実際にレースに参加できるのは 55 名。

女子各チーム、登録できる人数は最大で 60 名。実際にレースに参加できるのは 50 名。

（漕ぎ手を交代する場合は、スタート地点で委員に交代があることをはっきりさせておくこと。）

各レースにおいて勝利した舟は、確認のため委員会設置場所に来ること。その後スタート地点に戻る。

各人は漕ぎ手として参加する際、複数のチームを掛けもつことはできない。

スポーツ選手としての礼儀を守ること。お囃子を歌う際には、連帯保つためにお互いのチームを中傷するような内容を歌ってはならない。

レース参加時にはＴシャツを着用すること。Ｔシャツ着用なしには参加できない。

競漕時や舟に乗る時に安全管理を怠らないこと。

その７：競漕方法

各グループ内で総当たり戦をおこない、書くグループ内の 1 位と 2 位のチームは 2 回戦へと進出する。2 回戦から決勝戦まではトーナメント戦で競漕を実施する。

１回戦における点数の配分は勝利が 3 点、同着が 1 点、敗退 0 点とする。点数が同点の場合は、2 回戦の進出をかけたくじ引きをおこなう。

その８：舟の義務

競漕を今までのようにスムーズに進めるために、各舟はスタート地点のすぐ近くの舟休息場所に舟を留めておくこと。委員会からのアナウンスが流れたら、10 分以内にはスタート地点に来られるように準備をしておくこと。時間を過ぎた場合、その競漕においては負けとみなされる。委員は舟一艘だけでスタートさせる。

競漕中、事故発生や舟が故障した時以外においては競漕を通常通り続けること。

各舟は牽引する舟を用意すること。

その９：競漕の進行

くじ引きで決めた競漕コース（ฝั่ง　อัง）に従い、運営委員がスタート地点に各舟の組を誘導を指示する。

2 艘の舟が同じ位置に揃ったところで委員が「ละอัง!（注目！）」とかけ声をかける。その後、銃を 1 発鳴らしたら競漕を開始する。

仮にどちらかの舟が早くスタートした場合には、競漕をやり直すために委員が 2-3 発銃を鳴らす。

同じチームがファウルを 2 度した場合、その競漕においては敗退となる。

いずれかの競漕において故意に押したり、ぶつかったりしたチームはその競漕において

敗退とする。（委員会の事実確認にもとづいて判断する。）

その１０：審判基準

舟の舳先（ニェーム）がゴール地点に先に到着した方を勝ちとする。

同時にゴールした場合においては、再度競漕を行う（コースを変えておこなう）。

その１１：不満のある場合

競漕結果などに不満がある場合は、チーム長のみが委員会に不満をもちかけることができる。その際、100.000 キップを支払うこと。

不満を委員会にあげる場合には、競漕結果出た後 10 分以内におこなうこと。

勝敗の審査結果、判定が変わらない場合は委員会が 100.000 キップをそのまま保有するが、判定がひっくり返った場合は事前に支払われたお金をチームに返金する。

その１２：罰則

1 回目は警告する。

2 回目は競漕からチームを外す。

3 回目は当該年と翌年の出場権を剥奪する。

3 つのカテゴリーの決勝戦終了後、各舟はスタート地点に集まり、一斉スタート（ティー・サーン・ナム・ノーン）を行う。仮にティー・サーン・ナム・ノーンに参加しないチームがいた場合、そのチームは本年の賞品賞金を剥奪されると共に、翌年（2007 年）の競漕参加権を失う。

その１３：その他

委員会は事故や舟および漕ぎ手の故障、消失盗難に関する責任は負わないものとする（委員会は救助用の舟を 1 隻保持している）。

今回の競漕規準書内において指示されていない項目に関しては、審判を下す運営委員会の責任とする。

サイン　出安吾祭り実行委員長　ソムワンディー・ナーターウォン

ヴィエンチャン市スポーツ局長（2006 年競漕祭実行委員会）カムマン・クムポン

【巻末資料　表４：競漕関連年表】

【ヴィエンチャン・競漕祭 関連年表（1975年以降）】

1975	社会主義政権樹立。国境の管理、ボートレース祭の管理が厳しくなる。
1978	ニェームが舳先にある舟同士の競漕が規定との文言があり
1981	スタートの際には舳先のニェームを合わせること。ゴール地点においてはニェームが勝者を決定する
1984	ボートレース祭のカテゴリー／フア・カープ（小さい舟）の大・小、フア・ニャオ（長い舟）
1990	ボートレース祭のカテゴリー／小さい舟、長い舟 ノーンカーイとの友好試合
1993	タイの影響で舟の形状に変化が出たような意見がヴィエンチャン・マイ新聞にみられる
1994	ティー・サーン・ナム・ノーン消失 ／ ラオ・トヨタ優勝トロフィーの登場（3年連続優勝したら保持できる）
1995	フア・カープ（18-22）、長い舟（女35-,男45-）共に漕ぎ手の人数に規制が加えられる
1996	参加費の徴収、コース替え導入。新しい舟が参入し、1・2位を占める
1997	ハートサイフォンのレースでは、ニェームの無い舟は参加禁止 ※2月1、2日に友好橋近くの民族文化公園にて第1回全国競漕大会が開催される 　出場は40人から45人乗りの長い舟のみ、15艘がヴィエンチャン、ボリカムサイ、サワンナケートから参加
1998	フア・カープの参加廃止。祭りは2日から1日へ縮小。ニェームのない舟の出場禁止
1999	舟に企業名を付すのを禁止
2000	長い舟のカテゴリー分け（スードsud/伝統paphenii）開始
2002	全て伝統舟で参加。試合形式がノックアウトトーナメントから総当たり、決勝戦へと変化
2003	カテゴリー別の舟の規定が細かくなる タゴーン（サイタニー郡）で伝統舟のみのボートレース祭が開始される
2004	94年以降、ターパ村に継続してスポンサー契約を結んでいたBeer Laoが特定の村の 協賛を廃止し、大会自体のスポンサーとなる
2006	女性の舟に関しても、カテゴリー分けを要求。参加数が少ないため、伝統舟のみに出場を限定。
2007	女性のInternational teamからスポーツ舟での出場嘆願あり。運営母体のスポーツ局は 国際交流の意味もあるので参加を認可する姿勢をみせたが、他の参加村は全て拒否。 運営委員会がティーサーンナムノーンの復活を指示
2008	ティーサーンナムノーンに参加しない村は2009年の参加を禁止 （ティー・サーン・ナム・ノーンに関する規定自体は2006年からあったが実行力を伴なっていなかった）

謝　辞

本稿をまとめるにあたり、多くの方々のご協力を頂いた。学部時代から博士課程まで長きにわたり指導してくださった寒川恒夫先生、そして、このたび博士論文を提出するにあたり、主査を引き受けてくださった蔵持不三也先生には大変にお世話になった。また、ラオスでの調査許可を取得する際には、西村正雄先生にご尽力を頂いた。

ラオスの調査にあたっては、ラオス情報文化省のパーカンサイ・シーカンサイ氏ならびにポーンパーン・シーチャントーンティープ氏には煩雑な書類手続きや、ラオ語の調査票を作成する際のご協力を頂いた。カウンターパートとして村落調査に同行してくれたヴィエンチャン情報文化局のコーチョーン・ケオマニヴォン氏、ルアンパバーン情報文化局のコンワンディー・ミッティニャポーン氏には特にお世話になった。筆者の拙いラオ語能力にも関わらず、両者は辛抱強く調査に付き合い、惜しみなく協力をしてくださった。彼らなしに調査は成り立たなかっただろう。筆者を温かく迎え、多くの時間を割いて調査に協力をしてくださった村落の方々、そして、ラオス滞在時に資料の提供や遠方への移動など、様々な面で協力をしてくださった国際航業株式会社の小日置晴展氏、坂戸謙介氏にも心から感謝したい。

この他にも、ここにすべての方のお名前を書くことができないほど、多くの人に支えられ、博士論文を完成させることができた。お世話になった皆様に改めて心より御礼を申し上げたい。そして最後に、遅々として進まない研究を辛抱強く、長きにわたり応援してくれた両親と姉、叔母に心からの感謝を贈りたい。

付　記

本稿の研究をおこなうにあたり、ヤマハ発動機スポーツ振興財団（スポーツチャレンジ研究助成）の支援を受けた。ここに記して謝意を表したい。